
放課後 倶楽部

零・ZA・音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

放課後 倶楽部

【Nコード】

N0689E

【作者名】

零・ZA・音

【あらすじ】

色んな人達が集まれば、そこに個性が存在する。個性が存在するから楽しいのである。この学園にも個性が色々があるけれど、その個性はどんな風に絡み合って交わるのか……それは誰にも分からない。さあ、その一步を踏み出して目撃してみよ。その目に映るは真実か、幻か、それはあなただけにしか分からない。……って、誰だよ？こんなところに意味不明な小説を置いたのは。まあ、そんな感じで意味不明でグダグダ感がたつぷりのお話です。グダグダなので、決してオチを求めてはいけません。

第一話：とりあえず、こんな人達です。

毎日退屈だけど、俺は結構気に入っている。

赤く染まった夕刻の空に別れの挨拶をして教室を飛び出し、颯爽と廊下を駆けていく。その先には自由への門が開き、欲望渦巻く夜の町への入り口が待っているのだ。

「意味が分からない小説だな、これ」

ため息混じりに呟いて本をテーブルに戻し、背伸びを一つ。凝り固まった筋肉が悲鳴を上げているが、これが結構気持ちよかったりする。

……それにしても、誰も来ない。

入り口の方へ目をやったが廊下には人通りはなく、静かで寂しさが身にしみてくる。最初来たときは誰も来てないと思ったがそのうち来るだろうと待っていたが誰一人として来る気配もなく、仕方なくテーブルの上にあった本に手を伸ばしたのだが……これが失敗。頭が痛くなってしまった。

開け放たれた窓から差し込む午後の日差しは六月にしては夏の陽気をたつぷりと含んでおり、吹き込んでくる風は壊れたエアコンのように凶暴な熱気で俺を茹で上げようとしているようだった。

蒸し風呂だね……ここは。

しかも、こんなところで待ちぼうけと言うのは少々……いや、かなり酷いと思うがあの人等にそれを今更それを言っても仕方ないか。俺が今いるのは第三校舎と言う三棟並んだ校舎の一番奥にある部屋棟である。

一番奥と言うのは無論、校門からと言う意味で、校門に入って見えるのが第一校舎、そのうしろに第二校舎がある。そして、その更

にうしろ　校舎の一番奥にあるのが、今俺がいる『文化部活動棟』という運動部系以外の部活ばかりが集められた校舎だ。

ちなみに四階にある部室なので遮るものが何もなく、西日が容赦なく当たって夏は暑くて息苦しくて冬は霜焼けが出来て凍えるほど寒い。

できれば逆だと嬉しいのだが、プレパブ造りの内装（風ではなく、実際に鉄筋剥き出しである）がとても目に痛いこの部屋に、気密性を求めても仕方ないだろう。これが我が家の部屋だとしたら親に懇願してエアコンでもなんでも付けてもらうところだが。

それにしても……今日も活動すると言うのでやってきたのに、誰も来ないとはどういう見だろうか？

……はあ、暇だ。

盛大にため息を吐いて立ち上がり、珈琲でも入れようかと思った矢先

「ボンジョルノ、ともちゃん」

気色悪い声が聞こえ、背中を悪寒が走り抜けた。

「……遅いですよ、部長」

「いやあ、ごめんね。ちよつとそこで素敵な女子生徒に道を尋ねられたから、案内して来たら遅れたんだよ」

「……………そうですか。それで、どこまで案内したんですか？」

「駅前のケーキ屋さんだよ」

この学園　七曜学園ななようがくえんから徒歩一〇分だな。放課後になってすでに二時間、俺が待ちぼうけを受けた時間は一時間と五十分……往復二〇分しか掛からない場所でこれほどまでに時間が掛かったのは大体想像ついてしまう自分が嫌だ。

「一緒にケーキを食べましたね。ついで、あわよくば女の子も一緒に食べようとか考えていたでしょ？　この変態送り狼が」

「わあ、すごい。さすがともちゃんだね……まさしくその通りだよ」

棒読み気味に感情を押し殺して言った俺にまったく感心も示さず、

能天気拍手などしている変態男。少しは自粛しようって気がないのかね、この人は。

この変態丸出し（いや、実際に変態だが）の男　名を海藤翔とかいどうしょう言い、三年の先輩で一応は俺の入っているクラブの部長をしている偉い人なのだが、人望は限りなく……いや、まったくない。

サラサラの黒髪に切れ長の瞳、すらっとした男前な鼻に同じく男前な唇。パーフェクトに甘いルックスに巧みな話術で女子には絶大な人気があるのだが、一つだけ困った癖がある。

「でもね……僕が胸を触ったら、『あんっ』とか言いながらも思いつきりビンタしたんだよ。しかも往復ビンタだよ？　酷いと思わない？　ねえ、ねえ」

「自業自得です」

この天然年中発情オープンスケベな性格のせいで、今まで特定の彼女が出来た事がないのだ。

変態部長の困った癖　それは女子に触つてないと暴れ出してしまふというものだった。まあ、一日くらいなら平気なのだが、二日目になると徐々に目付きが危なくなり、三日目には逝ってしまう。色んな意味で逝ってしまうから、それを止めるのも大変だったりするわけだ。しかも、その役目が何故かいつも俺に廻ってくるので迷惑な事極まりない。しかし、どうしていつも俺なのだろうか、と毎回考えているが答えが出てこない難問である。

「そんなわけで僕を慰めてよお、ともちゅあーん」

「俺にそんな趣味はないです」

「その可愛いキョートな笑顔で僕を癒してえ」

唇を尖らせ、目に涙を浮かべて、如何にも惨めな男を演じて俺に駆けてくる変態男をヒラリと交わし、弁慶の泣き所に渾身の一撃とばかりに足払いを一つ。

「へぶしっ」

「俺は男です。こんな顔ですが、男に抱きつかれる趣味はありません」

床に顔面からダイナミックにダイブした部長はもんどり打っていたが、痛みに耐えながら丸まって同情を誘うように俺を見上げていた。しかし、同情する気がまったく起きないのは日頃の行いが悪いせいだろう。

多分、一番の被害者は俺だろう……。

こんなわけの分からないクラブに何も知らない純真無垢（自分で言って気持ち悪いが）な一年生だった俺を引き込んで、何をするわけでもなく一年以上も青春を無駄に過ごさせたのだからとんでもない人だよ。俺の顔が好きだった子に似ているとか、わけの分からない口説き文句（？）を言ったあの頃の部長は今よりは人間味溢れる素敵な人だったのに、一年でこうも変態っぷりが上がるとは予想外だった。

「男じゃなければいいのか？ 智樹」

「まあ、そうですねけど……………それでも、節度つてものがありますよ」

突如背後から聞こえてきた声と肩に掛かる重み。

決して背後霊の類ではないのだが、肩に掛かる柔らかいものは重量感バツチリである。

「ほれ、お前の大好きな巨乳ちゃんだぞ」

楽しそうに声を上げ、俺の頬に膨らみを押し付けてくるが、女としての恥じらいって言うのではないのだろうか？

「別に好きでも嫌いでもありませんよ。それより、重いので退けてくれませんか？」

「相変わらず面白い反応をするヤツだな、智樹は」

ケラケラと笑いながら俺の前に回りこんで来た女の子。

いや、女の子なのは外見だけで中身は俺より男らしいから、膨らみを押し付けても恥じらいがないのだろう。

「遅刻ですよ、副部長」

「いや、すまん。ちよっとそこで女の子に掴まって道案内を」

「それ、部長も言っていました」

と、床でぐずっている変態を指差す。

「ちっ……こいつと一緒っていうのは嫌だな。って、何覗いてんだっ！」

「真っ白レースのセクシーパン　ぐふっ」

見事な足蹴が顔面にクリーンヒット。

床と熱烈なキスをした後頭部が鈍い音を立て、そのまま天に召されていく部長に十字を切って冥福を祈った。

「ったく、油断も何もあつたもんじゃない」

「少し落ち着いてください、副部長」

荒い息を吐いて何度も部長を足蹴にする副部長。

この男勝りな巨乳娘　名を桜井和音さくらい かずねと言い、クラブの副部長を務めている三年の先輩である。かなり長めの黒髪は腰を通り越して

お尻の辺りまであるがそれを一つに纏め、切れ上がった目尻には力強い『男』を感じるが唇はグロスを塗っているようで『女』を感じ、このミスマツチな色気が人気の秘密だと俺は分析している。

「このクラブにもう少しまとな男がいりや……ね」

「それはすいません」

この人にも部長に負けなくらいの変なところがあるので、色々対処が大変なのだ。

「それよりも、なんで私の周りには女の子しか寄ってこないだろうか……なあ、智樹」

それを聞かれた俺はどう答えればいいんだろうか？　このクラブには難問をぶつけてくれる人が多い事だ。

……まあ、副部長の周りに女の子しかいないのは分かりきった事だが。

サバサバした竹を鉋でスパッと割ったような性格でハッキリと物を言う姿勢は男子にも女子にも人気があるが、ルックスが美男子に近いのにどちらかと言えば女子に軍配が上がっている。女子のファンクラブもあるし、熱烈なおっかけもいるくらいだから。

「智樹は私の事が好きか？」

「……………え、ええ」

「なんだ、そのたつぷりと空いた間は」

別に深い意味はないですよ、別に……………ね。

「副部長はいい人だと思いますよ。あれさえなければ……………ね」

「何か言ったか？」

「いえ、何も」

小さく囁いただけのつもりだったのに、しっかりと副部長の耳に届いていたようで俺は首を横に振って言葉を濁した。

副部長の変な癖は部長に比べれば可愛いものだ。しかし、その被害は新たな人災を招く事があって、そっちの処理は部長より大変だったりする。

「それより、律子はどうした？」

「律子ちゃんなら、先生に呼ばれたので遅れますと言っていました。そろそろくる頃だとは思いますが」

「そっか。折角、遊んでやろうと思ったに」

と、胸を誇示するように寄せていく副部長。

見事なまでに胸元がオープンされている制服から覗く二つのメロンはとてもおいしそうに見える。一応は俺も男なので女の子には欲情するし、身体も反応する。

「智樹……………ほれ、欲しいか？」

そんな俺の視線を感じ取ったのか、楽しそうに俺の目の前に胸を迫らせて”むにょん”と揺らしている副部長。

「……………いえ、遠慮します」

ただ、こつも露骨に迫られると引いてしまうよな。男の本能も複雑怪奇なものだ……………。

「はあ、はあ……………遅れてすいませ きゃうっ」

そんな思考を巡らしていると勢いよくドアが開き、雪崩れ込んできた人影がこれまた見事に何もないうところで躓^{つまず}き、俺の前にヘッド

スライディングばりに滑り込んできた。

「セーフ。いや、大丈夫かい？ 律子ちゃん」

「は、はい……いたたっ、大丈夫ですっ」

足元でお尻が喋っているように聞こえるが、見事に満開に咲いた花畑が見える。

「律子、毎度ながらパンツが丸見えだぞ」

「へ？ きゃあっ」

副部長が「ニシシッ」っと笑いながら律子ちゃんのお尻を突付き、それに反応したかの如く”しゅぱ”っと身体を起こして正座をしている律子ちゃん。なんで正座？ と思ったが、俺を見上げる真っ赤に染まった顔は「見ましたね？ 見ましたよね？ 絶対に見ましたよね？」と書いてあったので、分かり易く大きく首を縦に振って頷いてやった。

「はうっ 伏峰先輩に見られたあつ」

このパンツ丸見え少女は梅津律子、このクラブ唯一の一年生である。

セミショートの髪に丸く子犬のような円らな瞳、小さく可愛らしい唇、と小柄で守ってあげなくなるオーラを醸し出しているが、意外と立派な二つの膨らみを持ち、加えてお尻は見事な安産型である。それと、「ドジっ子スキルを標準装備している」と部長が太鼓判を押した猛者で本当に何もなかったところでよく転ぶ。そして、その度にスカートを全開にするものだから、男子生徒からの人気も高い。まあ、どっち方面で人気があるのかは俺の口からは言えないけど。「まあ……いつも見られてるわけだし、気にしない、気にしない」「そ、そんな事ないですよっ！ 毎日、パンツは変えていたって恥ずかしいものは恥ずかしいですっ」

「なら、勝負パンツを穿いて智樹を誘ってみるってどうだい？」

「そ、そんな事は」

全力で副部長に挑んでいく律子ちゃん。このやり取りも毎日見ているので別に止める気はないけど、その辺でやめてくれないと俺も

会話に参加し難いのですけど。

「りっちゃんの花柄パンツ」

「お前は黙ってるっ」

「ふげしっ」

復活一秒にして、瞬殺。

哀れなり……部長。なんて微塵も思わない俺も結構酷いやツかも。

「それじゃ、みんな揃ったので始めましょうか」

「そうね。こんなヤツはほっというて」

問答無用に部長のお腹に蹴りを入れて椅子に座る副部長。まあ、いつもの光景だから気にもしないけど、よく生きていられるよな、あの人も。

「こほんっ　それでは」

咳払いを一つして俺と律子ちゃんを交互に見た副部長は

「電腦革命クラブ、本日の活動を開始します」

高らかに宣言していた。

一年間在籍しているけど、このクラブって一体何をするんだろうな……謎だ。

第一話：とりあえず、こんな人達です。（後書き）

どうも、お久しぶりです。

W〱ダブル〱を放置して随分と経ちますが、未だに修正のメドが立たず、完全にこちらを放置しておりました。

色々とあったのですが、とりあえずリハビリで書いた微妙な話を連載していきます。

では、これからもよろしく願います。

第二話：さて、事件です。

電腦革命クラブ。

私立七曜学園で活動内容はとにかく地味で目立たないのに、名前だけは学園一有名な問題が大ありの部活である。まあ、名前はとも立派で科学者や権力者など著名な人達が集まって今のご時世に不平不満を言って危なげな事をやっていそな雰囲気がブンブンとしているけど、現実はずただの暇人の集まりなのは部員の俺が一番よく知っている。

だって、今まで一回も活動らしいものをした事ないので……。

「それで、今日は何をするんですか？」

「……特にはないよ。はあ、何か面白い事ないかなあ」

また、それですか。

呑気にファッション雑誌を読みながら「これは変だな」とか、「ファッションセンスがない」とか、有名ファッションモデルが着ている服にケチをつけている副部長。ヒラヒラしたフリルが付いたスカートやピンクや赤のジャケットなど、おそらく自分では絶対に着ないだろうと思われる服に、そこまで鋭い眼光を向けるのは怖いので止めて欲しいです。

「それじゃ、私はお茶を淹れて来ますね」

和音さんがいつものようなら、こちらもいつもの調子で席を立った律子ちゃんが給湯器の前に歩いていく。

六畳一間のボロアパート風の部屋でも一応は『ガス温水給湯器』なる近代文明品が付いているのでお湯を沸かすくらいの芸当は出来る。まあ、お茶を淹れるか、カップラーメンの湯を沸かすか、そのどちらかにしか使わない宝の持ち腐れの代物であるが、本来の給湯器はそれが仕事であるから問題はない。

「あつ 私、珈琲コーヒーお願いね」

副部長はすかざず注文を入れているが、律子ちゃんは当たり前のように「分かりました」とだけ告げ、笑みを浮かべていた。

「伏峰先輩は何を飲みますか？」

「そうだね……俺も珈琲でいいよ」

「はい。えっと、砂糖とミルクもですよね？」

俺が小さく頷くと「分かりました」とさっきと同じように笑みを浮かべ、手馴れた手つきで珈琲の用意をしていた。

別に豆から挽いてサイフォンに　ってわけではなく、普通のインスタント珈琲である。しかし、律子ちゃんが淹れるとインスタント珈琲が豆から挽いたような新鮮な香りとコクがあるように感じるだから不思議である。ドジっ子スキル以外にもお茶汲みスキルまで持っているとは……どれほどのスキルを保有しているのか、一度確認したいものだ。

「ところで、智樹」

「なんですか？ 副部長」

「その『副部長』っていうのは止めてくれないか？ 前は『かずちゃん、ともちゃん』と呼ぶ仲だったではないか」

「……………呼んだ事も呼ばれた事ありませんよ、一度も」

「恥ずかしそうに顔を赤く染めていた副部長だったが、小さく「ちっ」と舌打ちをして

「副部長って面白くないんだよねえ。せめて和音って呼んで欲しいな、智樹ちゃん」

拗ねたような声を出して俺の頬を突付けていた。

「気色悪い声を出さないでください。では、千歩譲って……『和音さん』と呼びましょう」

「千歩、ね……。ほんと、智樹っておかしな性格してるよね」

「これは性分ですから、ほっといってください」

「楽しげに俺の頬を突付けている副部長　和音さん。」

確かに一年前は俺は新生で和音さんは二年生だった。そのときは『桜井先輩』と呼んでいたが、進級して副部長に昇進したのでそ

れを期に呼び方を変えたまでの話だ。ちなみに部長は『変態先輩』と呼んでいたが、嬉々として喜んでいたので問題はないだろう。今ではその変態っぷりに拍車が掛かっている気がするけど、気にしない事にしている。

「お待たせしました」

ちょうど話が一段落ついたところで律子ちゃんが珈琲カップが載ったトレイを持ってやって来た。

「ありがとうございます」

「いえ、熱いですから気をつけてくださいね、桜井先輩」

テーブルに珈琲カップを置いて一礼して和音さんの方へ歩いていく律子ちゃん。その優雅に歩いていく後ろ姿から滲み出ているのはメイド長もびつくりの凄腕メイドオーラだった。いや、別に俺もメイドには詳しくないけど、なんかそんな感じがしたので思ってみても、律子ちゃんがメイドになったらさぞかし大変だろう……ご主人様は。

「おっ、いい匂いだな。さすがは律子の淹れる珈琲は香りからして違うね」

嬉しそうに珈琲カップを受け取ると冷ますのも面倒臭そうに一口啜っていた。

「熱っ　でも、おいしい」

「ありがとうございます」

本当に嬉しそうな笑みを浮かべ、和音さんと話している律子ちゃん。

なんともほのぼのした時間が流れているが

「いやあ　りっちゃんの淹れた珈琲はおいしいね」

この人はなんで普通に珈琲なんぞ飲んでいるのだろうか。

「ありがとうございます」

しかも、普通に会話している律子ちゃんもすごい。

「それよりも、諸君　むっ？」

更に普通に会話に加わろうとしている変態部長の目が光った。

「なに？ 早く話しなさいよ」

「……いや、ちょっと待つて。何か………来るっ」

和音さんの言葉を遮り、俺や律子ちゃんにも”動くな”とジェスチャーをしている部長。

不満そうに唇を尖らせて部長を睨んでいる和音さんは俺に『何？ こいつ』と目で合図を送ってくるので、『いつもの事じゃないですか』と送り返した。

「は、はうっ……ううっ」

ただ、律儀に動くのを止めて待つている律子ちゃんは歩き出そうとしたところだったようで、片足を上げたまま右へ左へと揺れていた。相変わらず真面目というか、素直というか。そこが律子ちゃんのいいところなんだろうけど、将来は悪徳業者とかに騙されるタイプだろうな、やっぱり。

「海藤翔はいるかつ！ 御用改めであるっ」

ちよつとだけ律子ちゃんの将来を心配して安全な将来設計をしてやろうかなと考えていると、部室の壁を揺らすほどの大声を出しながら妙なテンションの変な男が乱入してきた。

「おおっ、告白して玉碎された回数一三〇回で七曜学園フラレ男記録を絶賛更新中である風紀委員長の中川君ではないか！」

説明口調でありがとうと言いたいところだが、火に油を注いでどるするのか、荒い息を吐きながら部室内を見渡すその目は血走っていて野獣のような大男が部長の前に歩み寄っていた。

「あつ……ご、ごめんね？ 気に障ったなら謝るよ、うん、うん」

一人スキューバーをしているかのような鼻息で部長を見下ろす大男は声は出さずに鋭い眼光で部長を威嚇していた。

この人は七曜学園風紀委員会委員長の中川卓郎先輩。
なががわたくろう

ドアが小さく見えるほどの巨体で身長は一九〇を超え、高校生には見えない風貌をしている。その理由は全身が茶色に輝く剛毛に覆われているので、よく熊に間違われてしまう奇特な人なのだ。街中でも目を惹くのだが、一年の頃に林間学校で山を登っていたら地元

の人に熊と間違われて警察に通報され、猟友会は出てきたらしいのだが、それで終われば笑い話だったのに、「熊ではなくてエイリアンだ」って話に発展して自衛隊まで駆けつけてくる始末で、危うく撃ち殺されそうになった逸話を持っている人だ。

「うるさいっ まだ、一二九回だっ」

「あつ、今日告白した子が『中川先輩に断って欲しいんですけど』って僕に言いに来たから一三〇回で間違いないよ。それに可愛い子だったので、一緒にケーキを食べに行って色々と話も聞いてきたし……あれ、名前なんだっけ？」

余計な一言でこの場の空気をドンドンと悪い方向へ導いているのがこの変態部長には分かっていないようだ。眉間に青筋が一つ、二つ……これ以上浮かんだら危ないのでは思っただけど、中川先輩は顔を真っ赤にして部長を見下ろしていた。

「き、貴様っ……由美ちゃんにも手を出したのかっ」

「そうそう、由美ちゃん。でも、手を出したというか、出されたというか」

確か、往復ビンタ喰らったって言ってたからね。

「貴様は本当にどうしようもないヤツだな。小学校からの付き合いだから少しはお前の事を知っていると思っていたが、これは見損なったぞ！」

いきなり意味不明な事を叫び始めた中川先輩に、今まで黙っていた和音さん、いつの間かにこけていた律子ちゃんは立ち上がってスカートを直しながら顔を見合わせて首を捻っていた。

「翔、貴様 女子更衣室を覗いただろっ」

「……へ？ 何の事だよ、たくちゃん」

暴走機関車、中川先輩の一言に部室内は静まり返っていた。

「僕、そんな事してないよ。ねえ、僕そんな事しないよね？ ねっ、ねっ」

身に覚えのないらしい部長は一生懸命こちらに話を振って来るが、思い浮かぶのは更衣室を覗くスケベな部長の顔だけでそれ以外の姿

は浮かんでこなかった。それは和音さんも律子ちゃんも同じようで俺達は顔を見合わせて首を横に振っていた。

「ノーっ！ 僕は覗きなんてしてないよ。どうして皆信じてくれないんだよっ」

いや、いつもの行動から察するに信用ゼロだと思うのですが。

男前のくせに自制心が効かないからいつかはと思っただけで、やっぱりやってしまったんだな……この人は。

「覗きとは最低だな、海藤……一辺死んで、ワンと鳴け」

「ワン、ワンっ じゃなくて！ 僕は覗きなんてしてないぞっ、和音」

「呼び捨てにするな、気色悪いっ」

掛け合い漫才を繰り広げる部長と和音さんの息はピッタリである。この二人って意外とお似合いなんだけど、何で付き合わないのだろうかね。

と、話が逸れたから元に戻して……。

「中川先輩、それはいつ起こったんですか？」

「ん？ それは企業秘密だ」

これまた、意味が分かりませんが……。

「と、言うのは冗談だ、はははっ。実はな 昨日、二年三組が三時限目の体育が終わって着替えているところを覗いた不届き者がいるんだ」

そう言いながら部長を睨む中川先輩。その顔で睨むと子供はおるか、大人ですら失神しそうだ。

「だから、僕は知らないって。僕がそんな事をしないのはたくちゃんを知ってるでしょ？」

「だが、現にこうして証拠があるんだぞ？ それに、お前がその更衣室の近くから走り去るのを見たヤツがいるんだっ」

「だから、僕はそんなところに行っていないって」

肩を落として明らかに落胆している部長はしゃがみ込むと、いじけた様子で床に”の”の字を書き始めていた。惨めな事極まりなく

普段なら気に留めないが、さすがに今回の事はかわいそうになってきた。

「本当に部長なのか……見間違いという事は考えられないのですか？」

「俺が見たわけではないから何とも言えないが、『海藤翔が女子更衣室前から走り去るのを見た』と言う証言があるからこうして本人に確認をしているわけだ」

力いっぱい肯定している中川先輩の目は嘘を吐いてはいなかった。しかし、ここまで落ち込んでいる部長を見る限り、本当に知らないだろう。そうなるとその証言をした人物に聞いてみるのが一番早そうだ。

「それで、その証言をした人って言うのは誰なんですか？」

「知らん」

「……はい？」

「だから知らないと言っているのだ。この証言は風紀委員会に密告メールで届いたもので　そうだ、これがその証拠だ」

と、制服のポケットから何やら取り出してテーブルの上に叩き付けるように置いていた。

「これは……写真？」

「ああ、メールに添付されていた画像をプリントアウトしたもので、翔が覗きをしている証拠写真だ」

テーブルに置かれた写真を手に取ると、律子ちゃんと和音さんもそれを見ようと覗き込んできたが、両端から甘い香りが漂ってきて、しかも両肩に柔らかい感触が触れている。普通の男ならここで狼にでも変身して襲っているところだろうけど、俺はそんな弱い精神はしてない。別に俺が性的不能者というわけでも女性に興味がないわけでもなく、事後を考えれば考えるほど色々と面倒になるような事は避けているだけである。決してヘタレではない……それだけは断言しておこう。

「確かに海藤だな。とうとう、ここまで落ちぶれてしまったか……」

この変態男は」

「あわわっ。海藤先輩が……海藤先輩が覗きをしていますっ」

和音さんと律子ちゃんの写真を見ながらまったく違う反応を見せていたが、その横から更に部長まで写真を覗き込んで呆然としていた。

「う……嘘だっ。僕は昨日はこんなところに行っていないし、本当に知らないんだよっ」

叫びながら床を叩いている部長の姿は競馬で大負けした親父のようでかける言葉すらなく、惨めな限りだった。俺は誰にも聞こえないように小さくため息を吐いて写真を見つめていたが、その写真の中に違和感を覚えた。

「まあ、確かに部長が覗いているように見えますけど、これ……合成写真ですよ」

俺の一言で部室内は一気に静かになっていたが

「この写真、誰が作ったのか分かりませんが、かなり間抜けな作りですね。素人もいいところだ」

構わず写真を見ながら続いていた。

「どうしてこれが合成写真だって分かるんだよ？ 智樹」

「それはこの写真をよく見てください」

写真を指差すとみんなが顔を寄せて来たので、とても暑苦しい事になっていた。和音さんと律子ちゃんだけならまだいいが、部長と中川先輩は余計だ。暑苦しいだけでなく汗臭いし、男臭いし、何より中川先輩の息がとても臭かった。昼に餃子でも食べたのかニンニクとニラの独特の匂いが鼻を奥を刺激してくる。勘弁して欲しいな……この先輩は。

「どこも変なところはないけど……？」

「和音さん 普通、光が当たった場合、影はどういう風に出来ま
すか？」

「……影？」

再度、写真に目を落とす和音さんにつられて皆も写真に目を移し

ていた。

写真には更衣室の窓から中を覗き込む部長が激写されたかのように撮られているが、その構図には不自然さが滲み出ていた。

「この写真、更衣室に日が当たって壁の一部に影が出来ますよね？
そして、この更衣室のうしろには体育館が映っていますので、この更衣室が体育館横にある女子更衣室と言う事が分かります」

「そう言われてみれば……そうだが、そのどこが変なんだ？」

不思議そうに首を傾げる和音さんは分からない様子で俺を見ていたので、ヒントを出す事にした。

「この更衣室は男子、女子、と並んでありますが体育館が隣接してあって、午前中は日が当たらない事で有名なはずです」

「……あつ、そっか。あの更衣室か」

やっと俺の言わんとした事が分かったらしく、和音さんは写真を手に取ってじっくりと見つめていたが「そっか、そっか」と納得していた。

「この更衣室に日が射すのは午後からです。写真の影の具合から見るに……昼休み頃に撮られたものではないでしょうか？　ほぼ真上から日が当たっているようで影があまり伸びていませんからね。それに部長の影がどこにもありませんし、制服や顔に出来ている影の具合は明らかに背景と違います。それらの事柄から判断出来る事象は合成されたものだと言う事です」

「あつ、本当ですね」

和音さんが持っている写真を覗きこんでいた律子ちゃんも納得したように頷くと和音さんも一緒に「そうだな」と再度頷いていた。

この学園には校舎内と体育館に隣接して建っている更衣室があり、写真に映っている更衣室は体育館に隣接する更衣室で午前中は日差しが入ってこない。そんな環境にある更衣室なので薄暗くてジメジメして、梅雨の時期などはカビなどが繁殖して置き忘れの体操服が大変な事になったりする場所である。

しかし、この写真では更衣室には日が当たり、足元に少しだけ影

を落としている。影の具合から判断するにほぼ真上から日が当たっている計算になるので昼休み頃に写真”だけ”が撮られたのではないかと推理出来るわけだ。

まあ、これだけ不自然な写真を本物だと言われても信憑性がないが、中川先輩みたいな人なら簡単に騙せるかも知れない。

「いまいち意味が分からないが、これが偽物だつて事だな？」

現に理解出来ない様子で和音さんから写真を受け取り、穴が開くのではと思うほど見つめている中川先輩だったが

「よし、分かったっ！　とりあえず後の事はこちらでやるので失礼する」

制服のポケットに仕舞い、来たときのように慌しく去って行った。その姿を呆れた顔で見つめている和音さんは珈琲を一口啜って「うん、おいしい」とご満悦な表情を浮かべ、律子ちゃんはトレイを持ったままオロオロとして俺と和音さんを交互に見つめていた。

何だか面倒事に巻き込まれそうな嫌な予感がするのだが、回避するのは難しそうだな。

「うわーん、僕は無実だっ」

突然、泣きながら立ち上がった部長はどこから出したのか『冤罪って何？』と書かれた紙を持って部室の中を駆け回り、そのまま飛び出していった。泣き喚く姿は学園一の色男が台無しの風貌で、見ているこっちが情けないやら、恥ずかしいやら、そんな気持ちでいっぱいだった。

さて、どうするのか考えないといけない……ようだ。

第三話：変態の行動は理解不能である。

さて、『変態部長女子更衣室覗き誤解事件（未解決）』から一夜明けて。

今日も何事もなく平和に過ぎ、あれよと言う間に放課後となっていた。しかし、放課後は面倒な事が待っているので少し頭が痛い。

「部長はどこに……？」

「さっきまでいましたけど、『可愛い子ちゃあーん』って叫びながらどっか行きましたけど」

部長のモノマネ（？）を身振り手振りを交えてやっている律子ちゃんだが、俺がじっと見ているのが恥ずかしかったのか顔を真っ赤にして俯いてしまった。

……微妙なモノマネをありがとう、律子ちゃん。

しかし、誰のために苦労しているのか、まったく分かってないよ
うだな……あの人は。

「まあ、いなくてもいいヤツはほっとけ。それより、智樹」

「なんですか？」

返事をして顔を上げたところにいきなり何かが飛んできて、条件反射に手を差し出して受け取ってしまった。

これが柔らかくて匂いがきつい絶対に素手では触れてはいけない頭文字に『う』が付く三文字の”もの”だったら、俺は泣きながら手を洗い、ついでに和音さんを殺^やつてただろうな……いや、危ない、危ない。まあ、手に載っている”もの”は俺の想像とは違う硬くて四角くてそれなりに重いものなので、その心配はなさそうだ。

「それと、律子 ほれっ」

「わ、とつと……や、ひゃわっ」

俺と同じように投げられたものを受け取った律子ちゃんだが、お手玉のように手の上で躍らせ、怪しげな腰つきで踊り、そして
「へうつ」

転んでいた。

見事なまでの転びっぷりに惚れ惚れしたが、受け取ったものは落とさずにしっかりと抱えていた。が、相変わらずのパンツ丸見え状態には感動すら覚える。今日はライトブルーの水玉ですか……いや、可愛らしいですな。

「それが昨日話していた電腦革命クラブの秘密兵器だ」

「……ノートパソコンですね」

「もう少し感動して欲しいなあ、智樹」

誇らしげに腰に手を当てて胸を逸らす和音さんの動きに合わせて揺れる二つのメロンは迫力満点でおいしそうだった。

「で、智樹はどこを見ているのだ？」

「いえ……立派に熟れたマスクメロンは食べ頃だな、と思ひまして」
何やら上からちよつと引きつった声が聞こえてくるが、別段気にする必要もないだろう。それにしても、かなり開いた胸元からみえるレースの下着がセクシーで、メロンはメロンでもレースの下着が相まって『マスクメロン』みたいに見えていた。うん、俺ってうまい事言うね。

「……………智樹って、堂々と見るよな」

「和音さんが堂々と見せているのに隠れて見ても一緒ですからね。それより、このパソコンで何をするのですか？」

大胆な服装とは裏腹に恥ずかしそうに頬を染めて胸を隠そうとしている和音さんは、「相変わらず調子狂うね」と呆れたような、それでいて照れ隠しをするように咳払いを一つして

「では、今から秘密兵器の使い方を伝授する」

パソコンの説明を始めた。

俺達が受け取ったのは小型のノートパソコンで、某メーカーが「世界で一番小さいパソコン」とか言っていた数年前のモデルにそっくりなパクリもの。でも、性能^{スペック}を聞いている限りでは明らかに現行モデルを上回っているのには驚いた。

「これ、もしかしたらママツキ さんが作った自作ですか？」

「おっ……よく分かったな」

「こんなもの作るのには、この学園には一人くらいしかいませんから」
苦笑いを浮かべて「まあ、そうだけどな」と続けて頬を掻いている和音さん。

「あ、あの……マツキさんって誰ですか？」

「ん？ ああ、律子ちゃんは見ただ事ないだったね。それと『マツキ

』ではなく、『ママツキ』だから間違えないように」

「そ……そうなんですか」

「では、ママツキさんについて説明しよう」

ママツキさんとは正式には東山麻貴ひがしやまきと言い、一応は二年の女子である。見た目をまったく気にしないので髪はキューティクルの欠片もないほどで、おまけに今時ガリ勉でも掛けない瓶底眼鏡をしている変わり者。しかも、言動に統一性がないので話しているところらが疲れてくる特技を持っている不思議な人でもある。

これで白衣を着ていたら間違いなくマッドサイエンティストだと思うが、その資質は十分持っていると言っても過言ではない。

しかも、こういうタイプはゲームにしろ、漫画にしろ、眼鏡を外せば美少女と言う法則を持っていると思うが、それすらも打ち破った人だ。別にママツキさんが美人じゃないって言っているわけではなく、素材はいいのだが化粧もしないのでそれが生かされてないような気がして　って、なんで俺は必死に弁明しているのだろうか？

「で、機械製作のエキスパートとしてこのクラブに在籍しているが、ほとんど顔を出さないで今は大型機械工作部で宇宙に行くロケットを作ると意気込んでいる変人なんだよ。言っておくけど、変人ぶりなら部長より格段に上を行くと思うから」

「は、はあ……そうなんですか」

「あと、出会っても関わり合いになつては駄目だよ。見た目は無口そうに見えるけど、喋りだすと平気で半日以上は機械について喋り続ける機械馬鹿だから」

「は、はい……分かりました」

別に脅しているわけではないが、すっかり怯えた様子の律子ちゃんは見つめて涙目になっていた。

「まあ、律子いじりはそれくらいにして……このパソコンの使い方を説明しよう」

「よろしく願います」

何事もなかったかのように話を続ける和音さんに俺も続いたが、律子ちゃんは説明を聞いている間、ずっと怯えていた。

少し遊び過ぎたかな……。

数十分後。

和音さんのパソコン教室を聞き終えて、俺と律子ちゃんは校舎内を歩いていた。

「さて……部長の居場所はどこでしょう」

「この点滅している赤い点が部長ですよ」

「そうだね。しかし、部長もまさか自分に発信機が付いているなんて知らないだろうね」

パソコンの画面を覗き込んでいる律子ちゃんは赤い点を指で追っているが、その姿は本当に小動物のようで可愛かった。

「ど、どうかしましたか？」

「いや、律子ちゃんは可愛いなと思ってね」

「え？ え、ふへええっ」

驚いて目を見開いている律子ちゃんを残し、俺は移動している部長を追って歩き出したが数メートル進んだところで振り返ると壊れたロボットのようになまっている律子ちゃんは身動き一つしてなかった。

顔は完熟トマトのように真っ赤で面白いが、このままでは先に進まないでこちらの世界に帰って来てもらおうとしますか。

「置いていきますよ」

「あ、はいっ ひにやつ」

一瞬、辺りを見た律子ちゃんだったが、俺が離れた場所にいるのに気づき、小走りに近寄ってきた。だが、さすがはドジっ子と言うべきか、天然というか、足を滑らせて「へわわっ」と奇妙な声を上げ、前転をしながら俺の横を通り過ぎていった。

「きゃあああつ」

「すごいな……律子ちゃん。新しい技を編み出したようだ」

転がっていく律子ちゃんを見送り、パソコン画面に視線を落とし、赤い点は動いていなかった。

先ほど和音さんに説明を受けたので、このノートパソコンの使い方は一応は分かった。画面はタッチパネル式で一八〇度回転させて手書きモード(?)に出来るので文字を書くのは便利だが、俺にはあまり必要のない機能かも知れない。それにこのパソコンを使いこなせるのはママッキくらいだろう。幾重にも掛けられたプロテクトのおかげで全ての機能を使う事も出来ないので宝の持ち腐れだと思う。

さて、今はパソコンよりもこっちの方が大変かも知れない。

「律子ちゃん、大丈夫?」

「は、はい……だ、大丈夫、れす」

廊下を転がって先を行っていた律子ちゃんが足取りも危なげに帰ってきた。

……見事に無傷だな。

ドジっ子の特殊スキルで何があっても怪我をしないっていうのは本当のようだ。あれほど派手に転がっていき、廊下の向こうからは何やら爆発音が聞こえていたのに……恐ろしや、律子ちゃん。

「なら、部長を探るか」

まあ、気にしても仕方ないので先を急ぐとしますか。

本日の電腦革命クラブの活動内容は『部長の確保』である。

先ほど和音さんからパソコンの使用説明を受けたあとに「今日は

あの馬鹿を捕まえてきて」と言われた。部長にはママッキさんが作った試作品である高性能発信機なるものが和音さんの手によってこっそりと付けられているので、秘密兵器パソコンの使い方に慣れるのも兼ねて生け捕り（捕獲）する事となつたわけだ。

「それにしても、どこでも行く人だ」

「本当ですね」

パソコンの画面を移動する赤い点は現在三階の廊下を曲がって突き当たりにある音楽室に向かっているようだった。それにしても学園の地図データなんてどこで手に入れたのだろうか？ 校舎内の教室やトイレの位置が記されているのは分かるが、教室の部分をタッチすると、画面の一部にそのクラスに在籍する生徒の名前から担任まで表示される仕組みになっていた。これを普通に作るにしても膨大な時間が掛かる代物だと思うが、ママッキさんが作ったわけではないだろう。あの人は機械製作には長けているがこう言うデータ収集にはまったく向かない人だから、他にこれを作るのを手伝った人物がいる事になる。

しかし、大変よく出来ていると関心してしまうな……これは。

……。

……。

それから探し求める事、数十分　目標である部長を発見した。パソコンの画面では音楽室からの足取りがいきなり途絶えたので探すのに苦労してしまった。

……が、一体何があつたのだろうか？

全身ずぶ濡れで尚且つ埃まみれ、加えて頭にはコントのような蜘蛛の巣が付いていた。「水も滴るいい男」なんて言ったら部長の事だから絶対に調子にのると思うし、何をするか分からないので余計な事は言わないでおこう。

「どこに行つてたんですか？ 部長」

「ちよつと秘境に冒険しに……つくしゅ」

くしゃみをしてだらしなく鼻水を垂らしている部長は、こう言っ

ては悪いけど男前のオーラはゼロだった。

……ブサイクだな、この顔。

「真面目に答えてください」

「ともちゃん、怒っちゃやだあ。僕だつて一人で覗き魔を探しに行つてただけど、犯人の気持ちを理解しようと思つて……」

「更衣室を覗いたんですね？」

「……………はい」

睨む俺の顔を見て引きつった笑みを浮かべ、胸の前で指を突き合わせている部長は必死に弁明をしてるが、律子ちゃんも苦笑いを浮かべて何と言つていいのか分からない様子で部長を見て同情的な瞳を向けていた。

「それでどうして濡れているんですか？」

「これは室内プールで女の子達に捕まっちゃつてね。『一緒に泳ぎましようよ』つて皆して抱きついてくるから、仕方なく……ね」

「馬鹿、ですね。それも救いようもないくらいに馬鹿です、大馬鹿です、宇宙一の馬鹿キングです」

「ともちゃん、そんなに馬鹿、馬鹿、言わないでよお」

もう、なんて言葉にしているのか分からなくなってきた。

この人の奇行は今に始まった事ではないが、今日のは飛び抜けてすごい。普通、服を着たままプールに飛び込む馬鹿はいないだろう。濡れれば身体に纏わりつき下手をすれば溺れてしまう危険性があるのに、それすら省みずかえりにすると本物の馬鹿としか言いようがない。「馬鹿につける薬はないと言いますが本当ですね。馬鹿でもアホでもなんでもいいですから、これ以上面倒事を増やさないでください」

「はい……………すいません」

「分かればよろしいです。では、部長は着替えてきてください」

とりあえず、廊下をこれ以上水浸しにするのは気が引けるので着替えてきてもらおう。目の前でくしゃみ連発されて、あまつさえ風邪でも引かれでもしたら、たまつたものではない。

「うつ……………ともちゃんも一緒に行こうよ。濡れてるから着替えるの

手伝って欲しいなあ」

「棺桶と更衣室、どっちに入りたいですか？」

拳を握りしめ、部長の前でちらつかせると「更衣室です」と敬礼をして一目散に走って行ってしまった。

「それじゃ、俺達は部屋に戻るとしますか……」って、律子ちゃん？」

今のやり取りを呆然と見ていた律子ちゃんも、何故か俺に敬礼して涙目で震えながら「私も更衣室がいいれす」と震えていた。

第四話：華麗なる変身、関わりたくない変態。

覗きをする人は性的に興奮したのか、それとも満たされない欲望を満たしているのか、どちらにしてもいい事ではない。

やっている事はまともではないので変なのも当たり前なのだが、俺達が追っている部長を陥れようとした人物はどんな意図があるのだろうか。

そんな素性の分からないヤツの素性を推理するのが今日のクラブ活動だつたりする。

「……部長、この際自分が犯人でいいじゃないですか。潔く罪を認めて楽になりましょう」

「ええっ、そんな事言わないでよ」

「ぶっっちゃけ、探すのが面倒になつてきました」

これ、正直な俺の感想です。

「ぶっっちゃけ過ぎだよ、ともちゃん」

「ですが、探しても誰も該当者がいませんし、女子生徒に聞けば『海藤先輩なら、覗かれてもいいです』なんて呑気な事言ってますし」

「本当につ？ よし、今から行つて ひぐっ」

颯爽と席を立つて部室を出て行こう（脱走とも言うが）とした部長をヘッドロックしてテーブルに叩き付ける。このとき、手加減など一切なく完膚なきまでに叩き潰すくらいの勢いでやると、気持ちがいいのでお勧めです。

「どちらに行こうとしてますか？ 今はあなたのために集まって会議をしているんですよ」

「い、いや……僕は知的好奇心に導かれ あだだっ、ギブ、ギブっ。ギブです、ともちゃんっ」

「部長の場合は性的欲求です」

テーブルに叩き付けた部長の頭を少し浮かせて一気に落とす。このときは如何に全体重を掛けるかがポイントであり、息の根を止め

るくらいの勢いでやると、快感が二倍増しになるのでお勧めである。
「本当に懲りないヤツだね……毎回、智樹のお仕置きフルコースを喰らつてのに」

呆れた声を上げながら律子ちゃんの淹れた珈琲をおいしそうに飲んでいる和音さんはお皿に載ったクッキーを食べていた。

「おっ……これ、おいしい。この口の中で解けるような食感の中々のものだな」

「それは私が焼いたんですよ。でも、クッキーなんて焼くのは久しぶりでうまく出来ている心配だったんですけど」

「ほう、律子は何でも出来るんだな。これなら智樹と結婚出来るなあ」

「え？ え、え……あ、あの」

真面目に受け取った律子ちゃんが慌てふためく姿を見ていた和音さんだったが、とうとう我慢出来なくなったように声を上げて笑い出していた。

「和音さん、あまり律子ちゃんをからかって遊ばないくださいよ」

「おやおや、優しい事で」

「和音さんもフルコース食べますか？ 今なら特別にデザートも付けますよ」

手を振って遠慮する和音さんに気絶寸前の部長を差し出して忠告を入れたが、苦笑いを浮かべて「さすがにやり過ぎじゃないか？」と指摘を受けてしまった。しかし、部長の顔を見ると血が騒ぐというか、踊るというか……つい、力が入ってしまうので仕方ないと思うのだが。

「あだだっ……うつつ。ともちゃん、ちょっとは手加減してよ」

顔を擦って痛そうに眉をしかめる部長は俺に抗議の視線を遠慮なく向けているが、俺はそれを軽く受け流して無視をする。

「ライオンはウサギを狩るのにも全力でいきますので、俺も部長を肅清するときは全力で殺ります」

「なんか、物騒な響きのする言葉が聞こえたけど、僕は死にたくない

いよー」

喚き散らかし部室の中を暴れ始めた部長だったが、今度は和音さんに捕まっていた。

出た……必殺、ピンクボム。

敵の背後に音もなく忍び寄って立ち、一気に首を締め上げる和音さんの必殺技の一つだ。しかし、この技は男子には絶大な人気を誇っている。まあ、理由は至極簡単で、密着すると首に和音さんの立派なマスクメロンが当たって『柔らかくて甘くい匂いがするマシユマロに包まれて天国にいるようだ』と、評判なのだが……俺から言わせてもらえば、天国よりも地獄だと思う。だって、あの人……この前も柔道部の部長と乱取りして保健室に送った猛者だから、俺は謹んでご辞退を申し上げる。

「おらっ、静かにしろ」

「ぐおおっ……し、死ぬ。かずちゃん、死んじゃうよお」

「かずちゃんって呼ぶなっ」

更に首を締め上げる和音さんの腕をタップしてギブアップの意思表示をしているが、和音さんはお構いなしに首を締め上げていた。和音さんも手加減を知らない気がするんだけど……本気で抹殺しようとしてるようにしか見えないし。

でも、この和音さんが唯一勝てないのがこの部長だったりもするのが学校の七不思議かも知れない。

「和音さん、部長が信号機になってますよ」

「んっ？ お……本当だ」

さすがに人殺しをクラブ内（倫理的にどこでもまずいのだが）から出すわけにはいかないので、ここらで止めるとしますか。

「今は黄色信号ですから、注意しなければいけませんね」

「あ、あの……海藤先輩、生きてますか？」

「問題ないよ。この人はこれくらいでは死なないはずだから」

今まで静かだった律子ちゃんが部長の肩を揺すっているが、まったく返事はなかった。

部長の顔は見事に真っ赤になったあと、青ざめていき、最後は土のような黄色になっていた。見事な信号機の出来上がりだが、普通なら死んでいると思う。それでも生きているのは部長の生命力が生半端なものではない証拠だろう。

台所に出てくる黒い悪魔並の生命力だ。

「まあ、そんな人はほつといて今日はどうするんですか？」

「そうだな……聞き込みしても誰も知らないって言うし、ここは奥の手を使うか」

「……………奥の手？」

その言葉と鋭く光る和音さんの瞳に、そこはかたく嫌な予感があったのでここは逃げるべきだろう。

「おっと、智樹……どこに行くんだ」

「いえ、ちょっとした野暮用を思い出したので……俺はいなかった事にして話を続けてください」

立ち上がって部室をあとにしようとした俺の首（制服の襟ではなく、本当に首である）を掴んで悪魔のような笑みを浮かべている和音さん。この顔をするときは何かよからぬ事を思いついたに違いない。

「ちょっと智樹に協力してもらおう必要があるんだよ。まあ、律子と一緒に頑張ってくれ」

そう言っただけ俺の肩をこれでもかという力で掴んで有無を言わせない迫力で迫ってくる和音さんに渋々首を縦に振ると嬉しそうに何やら用意をし始めた。

あの和音さんに逆らうとあとで何をされるか分からないからな……

……触らぬ神にんとやら、だ。

「あ、あの……何をするんですか？」

「今はその事については聞かないで欲しいな」

いきなり自分の名前を呼ばれてオロオロしている律子ちゃんは俺に聞いたそうな何をするのか聞いたそうな顔をしているが、俺は心の底からため息を吐いて椅子に座ると律子ちゃんは心配そうに俺を

見つめてどうしていいかわからない様子で更にオロオロしていた。
俺ってやっぱり不幸だよな……はあ。

数十分後。

準備が出来た俺は律子ちゃんと共に女子更衣室の前にやってきていた。

「……あ、あの」

「何かな？ 律子ちゃん」

少し頬を赤くして俺を見つめる律子ちゃんは慌てた様子で何故か謝ってきたが、俺は静かにため息を吐いていた。

……さっきから何度目だろうか？

そう思いながらガラスに映る自分の姿を見たがどこにも違和感はなく、更にため息を吐きたい気分になった。この格好も回数を重ねるごとに身体に馴染んでいくのが怖いな。

現在の俺は女子の制服を着て胸にはパットを入れ（形から入るの下着も女性ものを着用）、ウィッグと薄く化粧（和音さんが喜んでしてくれた）をしている。声に関しては声変わりをしても女性のような声なので、見た目が完璧ならバレる心配はなく、決して二ユ－ハーフには見えないから俺としては複雑なんだよね。そして、その辺にいる女の子には敵わないほどの色気を醸し出しているのも複雑で微妙なだけだ。

母上よ、何故もつと男前に産んでくれなかったのですか？ 俺に女形でもしろと言うのですか。

「ほ、本当に……伏峰先輩、ですか？」

「そうよ。確認させる事は出来ないけど、本物だからね」

不思議そうに俺の顔を見つめる律子ちゃんにとびつきの笑顔で応え、顔を真っ赤にして俯いてしまった。中々面白い反応だがここで遊んでいても仕方ない。

「律子ちゃん、私がこの格好のときは『^{ともみ}智美』って呼んでね。くれ

ぐれも苗字は呼んじゃ駄目よ？ 呼んだら……分かってるわね」

「え、あ……ひゃああっ」

手をかざして空を切るように横に動かすと、驚いて数歩後退おとすった律子ちゃんは、そのままバク転でもするかのような勢いで尻餅をついていた。何をそんなに驚く必要があるのかは知らないけど、さすがは律子ちゃん……中々面白い反応をしてくれるね。

「大丈夫？ 律子ちゃん」

「は、はい」

「大丈夫よ。誰も食べたりはしないから」

俺が手を差し出すと律子ちゃんは戸惑ったような顔をして俺の手を掴んできたが、俺の言葉に驚いて手を掴んだまま固まってしまった。

見事に丸見えのパンツをどうするべきか考えたが、それよりも面白い事を思いついたので試してみよう。

「あら……本当に食べちゃうわよ。り、つ、こ、ちゃん」

「きゃああっ、ごめんなさいです！ 私は食べてもおいしくないですつ、まずいです、ベリーベリーまずいですつ」

俺は律子ちゃんの耳元で妖しく囁いてみた。

このとき、限りなく欲望を声に乗せて、情欲を誘うように囁けるのが肝なのだが……ちよつとした禁断の世界を覗かせてあげようと思ったけど、律子ちゃんには少し早かったようだ。俺にお尻を向けて怯えきつたうさぎのように身体を丸めてしまった。無論、スカートは捲れて更に丸見えになっているのだが、これは本人の名誉のために黙っておこう。

「冗談だから本気にしないの。それより、中へ入るわよ」

俺は律子ちゃんの頭を一度撫でて、更衣室の中へと入っていった。

中は誰もいないので静かなものだった。

「……うむ」

とりあえず女子更衣室など滅多に……いや、普通は入る事などな

いので新鮮である。壁に人気アイドルグループのポスターが貼ってあったり、カーテンがカラフルだったりする以外は中の構造は男子更衣室とまったく変わりのはないのだが、ちょっとだけ空気が違うような気がする。

……あっちは汗臭いからな。

男臭い更衣室を思い出し、ちょっと眉間にシワが寄ってしまったが女子更衣室の匂いというのは何とも甘酸っぱいものだ。

おっと、こんなところで匂いを嗅いでいたらただの変態だな、こりゃ。

「おーいつ、ともちゃん。僕を無視しないで……ねえ、僕が見えるでしょ？ ほら、ほら」

「……幻聴が聞こえてくるわ。どうやら熱でもあるみたいね」

「違うつて！ 僕だよーっ」

幻聴が聞こえるなんて、俺もかなり疲れているようだな。

「あ、あの……智美先輩」

「何かしら？ 律子ちゃん」

隣で前をじっと見つめていた律子ちゃんが”どうしたらいいのか私には分かりません”って顔を向け、俺の制服を強く握りしめてガングン引っ張っていた。

……伸びてしまうですけど。

身体が制服を引っ張られる方向に勢いよく傾き、律子ちゃんの何ともパワフルな一面を垣間見ているが

「律子ちゃん、そんなものを見ては目が腐るから私の顔を見なさい」
落ち着くように頭を撫でていた。

案の定、俺の顔を見た律子ちゃんは顔を真っ赤にして俯いたので執拗に頭を撫でていると、下の方で小さく唸っている声が聞こえ始めた。これはまた、新しい反応だね……ちょっと面白いかも。

「そんなものって酷いよ！ 僕を見捨てないでよーっ」

「黙らないと息の根を完全に止めますよ？ 変態きんぱく緊縛部長」

「うぐっ……ともちゃんが怖いよお」

俺の睨みに泣き出してしまった部長。

女子更衣室の真ん中で、天井から吊るされて亀甲縛りをされている変態部長。

…… 妙に似合ってるよな。

それにしても完璧なまでに計算された縛り方をしているが、こればかりの熟練した者の仕業とみた。そう言えば、この学園にはかなりの部活動が認可されていて、『縛り倶楽部』『サドマゾ同好会』『縄大好き子倶楽部』など変わった部活も数多くあったな。そんな連中の中に女子がいても不思議はないのだが、何故部長を縛り上げる必要があるのかが分からない。

それに部室で和音さんのピンクボムを喰らって倒れていたはずの部長が、どうして先回りして女子更衣室にいるのか？ まったくもってミステリーであるが、この人に常識は通用しないから無視する事にしよう。

「で…… 今回は何をしていますのですか？」

「いや、ちよつと電話があつたから来てみたら、女の子達に囲まれて…… 気付いたら、ご覧の通りさ」

まったく自分の立場を分かっていないね、この人は。

「いいですか、変態。いや、ド変態」

「…… もう、部長でも何でもなかったただの変態なんだね、ぐすん」

「それじゃ、馬鹿。いいですか…… 今の馬鹿には覗きの容疑がかけられているのですよ？ それをノコノコと女子更衣室に入って緊縛変態プレイをしているは、まったくもって疑いの余地がない完璧な証拠を作り上げているのも同じ事です」

すっぱり言い切つてやると変態部長は項垂れて身体を震わせていた。少し言い過ぎたかなと思い、声を掛けようとしたが

「ともちゃん、もつと言つてーっ。僕、新しい快感に目覚めちゃったかもっ」

目をキラキラと輝かせて俺を見つめていた。

生け捕りにされた魚のように暴れ回る部長に律子ちゃんはドン引

き。さすがの俺も言葉を失ってしばし呆然と見つめている事しか出来なかった。

「律子ちゃん、帰ろう」

「え、あ……い、いいんですか？」

「ここでは何も見ていない。ここでは誰にも会っていない。それと……ここで見た事は一〇秒以内で忘れないと地獄を見るよ、律子ちゃん」

「ひゃ、ひゃいっ」

俺は威嚇するように鋭い目を律子ちゃんに向け、怯えて震える律子ちゃんの手を掴んで更衣室の出口へと向かっていた。

「ともちゃん、待ってよーっ。もっと僕をいじめておくれよお」

うしろで幻聴が聞こえているのだけど、振り返っては駄目だ。そうすれば俺は駄目になる……あの変態部長に新しい変態パワーを与えてパワーアップさせた馬鹿に一泡吹かせた心境なのだが、どこの誰だか分からないし。

今日は帰りにゲーセンにでも寄って、このモヤモヤするストレスをパンチングマシンで発散しよう。

「とーもーちゃあーんっ」

聞こえてくる変態の叫びを聞きながら、俺に腕を掴まれて「もう忘れましたからっ」と必死で訴えて泣いている律子ちゃんを連れ、俺は女子更衣室から出て鍵を掛けた。

地獄に行けば、縄でも針でもよりどりみどりですよ……部長。

第五話：色々再認識

変態部長の覗き疑惑は一向に解決しないまま、数日が過ぎていった。

別にあの部長のために頑張っても俺には何も見返りがない事に今更ながら気付き、張り切るのが馬鹿馬鹿しくなってきた。そんなわけで今日は部室でこれからの方針を決めるべく会議をする事になったのだが、そこはいつもの面々が揃っても何も進展しないどころか、話し合いにすらならないまま時間だけが無駄に過ぎていた。

で、目の前でうつうつしい顔が「ともちゃん」と、自称『爽やかスマイル』という変態スマイルを振りまいて勘弁して欲しい状況になっているわけ。

「部長……とてもウザイです。今すぐこの世から消えてください、介錯はしますので」

「ウザイって言わないでよ、ともちゃん。僕の事、嫌いになったの？」

目の前には瞳に涙を溜めて潤ませた部長の顔。

距離にして数センチ……男前の顔だが近過ぎるし、俺には男色の気はない。

「元々好きではありません。寧ろ、生理的に受け付けなくらいに大嫌いです」

「それは裏を返せば、大好きって事だよね？ うわあ……嬉しいな、ともちゃんと相思相愛だあ」

お花畑を歩く乙女のような笑顔を振り撒いて部室内を駆け回る部長。

……何故、そこでそうなる？

この超ポジティブ変態部長の頭を一回開けて中身を漂白剤で滅菌洗浄したい。その際に記憶なども一緒に洗浄出来れば幸いだが、ベったりとこびり付いた便器の黒ずみ並に難しそうな気がする。まあ、

俺の脳内にもこの人の記憶があるので俺も洗淨する必要があるわけだが……深層心理まで侵食されているから難しいな。

「なあ、智子」

「……誰ですか、智子って」

そんな騒ぎにまったく動じる事もなく、気だるそうに俺を手招きする和音さん。テーブルの上には制服から溢れそうになったマスクメロンが少し形を変えてボヨンと瑞々しく揺れていた。

「智樹、私の胸を好きなだけ見ていいから、御飯作ってよー」

俺の視線に気付いたのか、誘うように動く和音さんに合わせて、右へぶるんぶるん、左へぶるるん。

……うむ、ゼリーみたいだ。

「俺は和音さんの家政婦ではありません。ついでにメイドでも執事でもありませんので、あしからず」

「そんな事言わずに智樹の手料理が食べたいんだよ。料理得意だろ？ 朝から何も食べてないから力が出ないんだよね。ほら、作ってよお」

何故、俺の手料理が食べたいのかはさておいて、いつもながら唐突な話をする人だ。

時刻は放課後を一時間ほど廻り、程よく小腹も空いてきた午後四時。

「無理ですって……大体、ここは部室で料理の材料なんてどこにあるんですか？ それに調理道具もどうやって……ん？」

朝から何も食べていないとなると、胃の中は空っぽで胃酸が出過ぎて気持ち悪い事になっているだろう。と、そんな事はどうでもいいか。色々と間違いを正そうとしたが、そこに俺の想像を超えた間違いだらけの人が入っていた。

「お、お待たせしま……わ、ととつ　へにやつ」

ビタンつと豪快な音をさせて床に前のめりに倒れこんだ女の子は、相変わらずのパンツ丸見え状態からすぐに律子ちゃんだと判断がとれるわけだが……床に散乱した白菜、ナス、キュウリ、糸こんにゃ

くなど等、この物体達は何だろうか？

「あ、ああっ……鍋の具材が」

「……はい？」

「律子、一辺に持つてくるからだぞ。多かつたら電話しろつてあれ
ほと言ったのに」

俺の事など無視して床に倒れている律子ちゃんを起こしにかかった和音さん。床に散らかっている物体を拾うフリをしながらも、しっかりと律子ちゃんの胸やお尻を擦りながら「ちようちんブルマ」と叫んで遊んでいる辺り、それほど心配しているようには見えないがとんでもない事を言つたよな？

「うう……早く持つて来いって言つたの先輩じゃないですか」

「それより、智樹。早くお鍋作つて」

律子ちゃんは頬を膨らませて文句を言っているのだが、和音さんはまったく無視して俺を見ている。ちょっと律子ちゃんに同情してしまうな、色んな意味でだけど。

しかし、お鍋つて”アレ”ですか？ 食卓を囲んで家族団らんでワイワイと賑やかに食べる我が国では定番である冬の料理。それを今、この季節に作れと？ それとキュウリはお鍋には入らないと思うのですが？

「あの、和音さん……一つ聞いてもいいですか？」

「なんだよお、お腹空いてるんだから手短にしてよねえ」

「この暑い夕焼けに染まる空の下、汗水流して俺に熱々のお鍋を作れと言いますか、あなたは」

「……いや、こっちのお鍋を作つて欲しいなつて思つてね」

と、和音さんが指差した先には、床の上で粉々に砕けた土鍋だった欠片。

……そつちかい！

心の中で熱い裏拳ツッコミを入れ、顔は冷静に和音さんに抗議の意を込めて冷たく睨む。まったく、ここの人達は相変わらずわけ分からん行動をする。

「無理です。俺は陶芸家ではありませんから」

「智樹なら出来る！ 己を信じる」

あなたは俺の何を知っているんですか？

「無理なものは無理です。土鍋が欲しければ、日曜大工部に行ってくればいいじゃないですか」

「えーっ、作った方が早いよ」

だから、絶対に無理ですって。と言うか、借りた方が早いはずですよ、絶対に。

和音さんはお腹が空き過ぎて完璧に思考回路が混線しているようだ。この状況で放置すれば変態部長より被害が大きいので、ここは被害者になる前にどうにか対処しないとイケない。

「律子ちゃん、パンツ丸見えのところ悪いけど」

「え？ あ……きゃあ、きゃあっ」

和音さんに弄ばれて放心状態だった律子ちゃんを揺すって起こし、この状況を打破させようとしたのだが逆効果だったようだ。まあ、和音さんがスカートを全てパンツの中に押し込んで「ちようちんブルマ」って叫んでいたので俺もバッチリ見ていたわけだが、止める気はまったくなかった。これも男の性というやつでしょうな。

「伏峰先輩に見られたーっ」

まあ、いつもの事だよ。

「今日のは勝負パンツじゃ いえ、別に勝負をするつもりはっ
誰と何を勝負するのでしょうか？」

「伏峰先輩のばかりっ」

何故、俺が馬鹿なのでしょうね？

泣き喚きながら部室を飛び出した律子ちゃん。その手には近所のスーパーで買ったらしき買い物袋を持ったままで

「ああっ、私の鶏肉が……私の鶏肉が走っていくっ」

それを見て泣き崩れる和音さんが「カンバツク、コッコちゃんっ」と叫んでいたりするわけで。

……とり鍋だったんだ。

盛大にため息を吐きつつ、俺は床に散乱したお鍋の食材達を嫌々ながら拾い集めていた。

火の前に立つ事、かれこれ数十分　湯気が立ち上り、視界が揺らぐ。

「……暑い」

目の前にある黒光りする鉄鍋（鉄鍋愛好会から拝借してきた）からは食欲を刺激される香りが漂っているが、軽い拷問を受けているような気がするのはいのちのせいではないだろう。

「自分で作ってくださいよ、和音さん」

「えーっ、暑いからやだよ。それより　お腹空いた、早くして。お腹空いた、早くして」

俺が暑いのはいいんですか？

テーブルに顎をついて扇風機を独り占めしている和音さんは「お腹空いた、早くして」と、壊れたロボットのようには繰り返していた。「はいはい……あと少して完成ですから、ちょっと待ってください」カセットコンロの上にある鉄鍋を和音さんに投げつけたい衝動に駆られているが、ここはグツと我慢してお鍋作りに専念しようではないか。まあ、少しずつ作っているのが楽しくなっているのは秘密だが、さすがにこの時期に火の前に立っているのは自殺行為だよな。全身から汗が流れ出して脱水症状を起こして倒れそうだし、胸の奥にあるやり切れない怒りにも似た感情をどこにぶつければいいのか分からない。

……隠し味を入れるか。

少しだけ和音さんにも楽しんでもらおうと思い、俺は手近にあった赤い調味料が入った小瓶を手にとって一人笑みをこぼしていた。別に和音さんをどうしようとは微塵も思っていないが、少しくらい面白いハプニングがあった方が俺の気持ちもスッキリするので。

「はい、出来ましたよ」

でも、なんで律儀に鍋なんか作っているだろうと思いつつ、和音さんの前に湯気の立つ鉄鍋を投げるように置いた。

「おおっ、キムチ鍋だあ」

その鍋に嬉しそうに箸を伸ばす和音さんを俺は内心『リアクションに期待』と思って見ていたが、「熱っ」と言いながら平気そうに次々と食べていく様子に閉口してしまった。

……おそろしや、和音さん。

世界で一番辛いと有名な唐辛子をメインに、国内で有名な和辛子とわさび、更にはブラックペッパー、その他諸々の世界の香辛料をブレンドした『特製世界の七味唐辛子』（何故、こんなものが部屋にあるのかは謎）を丸ごと一本入れたのに、和音さんの顔色はまったく変わる事なく食べ進めている。

「はふ、はふ……ふうつつ、さすがは智樹。いい味出してるよ」

満足そうに親指を立てている和音さんに俺は苦笑いで答え、唐辛子の小瓶に目を落とした。

……この人、生きてるのか？

そこには『死人も思わず生き返る！ 痺れる脳髓直撃の辛さをとくと味わえ、コンチクショウッ』と、理解に苦しむキャッチフレーズが記されているが、目の前の光景に俺の背中には暑いのに流れ落ちていく冷たい汗が何とも言えず気持ち悪かった。

目の前で天井を見上げてお腹を擦る和音さんを見ながら、俺は微妙な味がする海外製のお茶を啜っていた。

「いやあ、智樹は相変わらず料理が上手いな」

……初めて作りましたけど？

一応、料理は得意なのは和音さんも知っている事だが、和音さんに作ったのは初めてのはず。それなのに食べた事があるような話し方に違和感を覚えてしまうが、この人に何を言っても仕方ないか。

「伏峰先輩、キムチ鍋で作ったおじや食べますか？」

「え、いや……その、ねえ」

「あつ、大丈夫ですよ。ちゃんと味は整えていますから」

言つが早く俺の前に先ほどの鉄鍋を置いた律子ちゃんは『さあ、食べる』と言わんばかりの顔をして俺を見つめていた。

……大ピンチかも。

俺の前に置かれた鉄鍋は先ほどの赤さから更に経験値（この場合は煮込み具合）がマックスまで達してレベルアップしたようで、鉄鍋の中は赤黒く地獄のような泡を噴き上げていた。

「おおつ……おいしそうだな、これ」

その匂いを嗅ぎつけたハイエナの如く、鉄鍋に顔を近づけてきた和音さん。

「いい匂いだな、これ」

「それなら好きなだけ食べてください。俺はお腹が空いてませんので、和音さんに全部あげます」

「本当につ？ やったーっ」

嬉々として小皿とレンゲを手にとった和音さんは、鉄鍋に手を伸ばした。

が

「ちよつと待ったあつ」

そこにどこからともなく声が響いてきた。

「……いたんですか？ 部長」

「ちよつ いたよーっ、ともちゃん。」

俺の背後から忍び寄って抱きついて来た変態部長が頬ずりをして甘えたような声を出していた。

料理に夢中になって存在すら忘れていたが、そう言えば視界の隅で何かが走り回っている姿がチラチラしてうつとうしいと思っていたが、あれは部長だったのか。

「りっちゃんの手料理、僕も食べたいのっ」

「食べればいいじゃないですか。それより、離れてください……暑苦しくて汗臭いです、部長」

「僕の汗はレモンの香りさ」

意味不明な事を言っている変態部長は俺から離れる気配がない。

……要するに汗臭くてすっぱいって事だろ？

先ほどまで火の前にいたので全身が汗だくで、扇風機やらお茶やらで何とか汗が引いてきたところにこの変態部長が何をしゃがるんでしょうね……部長自身も汗をかいて気持ち悪い事になっているに、それを俺にくつつけてくるなんて。

「天国に逝きますか？ 部長」

とりあえず、怒りが収まらないが暑苦しいのでアイアンクローで引き剥がす事にしよう。

「あだっ、あだだだっ……痛い、痛いよっ、ともちゃーんっ」

「遺体になって霊安室に行きますか？ 涼しくて気持ちいいと思いますよ」

「ナ、ナイスアイデアだけど、いたたっ……それは遠慮しますですっ」

俺を拝むように手を合わせた部長は今にも泣きそうな声で懇願してきたので、少しだけ力を入れてアイアンクローを解いた。まあ、離す間際に『めぎっ』って絶対に聞こえてはいけない音がしたのは内緒にしておこう。

「ああっ、桜井先輩全部食べちゃダメですよお」

「ん？ ふぐ……誰も食べないからいいじゃん」

そんな会話が近くで繰り返され、鉄鍋を抱え込んでいる和音さんは本当においしそうに食べていた。

「なんだ、智樹。やっぱり食べたかったのか？」

「いいません。どうぞ、全部食べてください」

俺の視線に気付いた和音さんは鉄鍋に目を落とし、もう一度俺を見て

「まあ、そう言わずに一口どうだ？ もうちょっと辛い方がおいしいと思うが、これはこれでおいしいぞ」

レンゲに山盛り赤黒い物体を載せて差し出して来た。

その物体は食べ物というより危険物と化しているようで、レンジの上で小さく核分裂を繰り返すようにポコポコと泡を噴き上げていた。

「いえ……謹んで遠慮します」

「そっか、おいしいのに」

それを普通に口に運んで咀嚼する和音さんを見ていたら、頭と胃がおかしくなってきた。

……化け物だ。

今日の収穫は和音さんは溶鉱炉並の『鋼鉄の胃』をしているって事だった。

第六話：色々義理ギリだと思っが

妹。

それは血縁関係のある年下の女の子。まあ、『義理』というオプシヨンが付くと更にグレードが上がるらしく、一部の人達には大好評である。

「……智樹、智樹っ。どうよ、この子達は あはははっ」

「馬鹿笑いしないでくださいよ。俺も対処に困っているんですから」
明らかに面白いものを発見した子供のように嬉々とした声を上げ、俺の肩を掴んで外さんばかりの勢いで揺さぶる和音さんを制し、俺は目の前に並ぶ変な女の子達に目を向けた。

「君達は一体……」

「よくぞ聞いてくれました、先輩っ」

シャキーンと音がしそうな動きで腕を突き上げた一番小柄な女の子。

「私達、きやはっ」

その動きのまま、俺を指差して可愛くウインクをし

「妹キヤラに、やんっ」

一番背の高い大人びた女の子がそれに次いで

「な、なりたいんです、はうっ」

眼鏡を掛けた三つ編みの女の子が恥かしそう締め括り

「だからよろしくお願いします、お兄ちゃん」

三人が口を揃えてまったく意味不明な事を言っていた。

……それ、さっきも聞いたよ。

そう思いながら、この三人組が乱入してきた数分前の事が頭を過ぎっていった。

放課後になったら特に用もないのに部室に来るのは毎日の日課で

ある。

今日もいつものように部室へと足を運び、扉を開けて中に入ると和音さんが頭を抱えてテーブルに肘を付いている姿が目に入っていた。

「……和音さん、人生に迷いましたか？」

「なんでだよ」

「いえ、珍しく考え事なんてしますから……てつきり、自分の幸先の悪い将来を悲観しているのかと」

「アホ。そうじゃなくて　これだよ、これ」

呆れたように俺を一瞥して、またテーブルへ視線を戻した和音さん。だが、すぐに吐き捨てるように言葉を紡ぎ、手に持っていた紙を丸めて俺に投げて寄越して来た。

かなりご立腹の様子だが何が書かれているのだろうか？　大変興味がありますのでちよつと拝読……。

「……………馬鹿、ですか？　これ」

「アホだろ、それ？　私達にどうしろっていうんだよ……………あいつは」

俺と和音さんは顔を見合わせてため息を吐き、紙に書かれた文章を読んで俺は頂垂れていた。

妹達がたくさん行くから、よろしくね。

何を伝えたのかまったく分からないが、最後に変態部長の名前が書いてあったのには悲しくもないのに涙が出そうになった。

「……………まったく、部長は何を考えているのか」

「まあ、考えても仕方ないから私は楽しむ事にした。暇潰しには丁度いいし、からかって遊んでやるとするかね」

楽しそうに声を上げる和音さんは立ち上がってテーブルを動かし始めていた。

……………面倒だな。

俺は手に持った紙を丸めてゴミ箱に投げ捨てたところに

「お邪魔します！　お兄ちゃん、お姉ちゃんっ」

そんな声がいきなり部室内に響き渡り、スモークが辺り一面を覆

っていた。

で、今に至るわけなのだが、この子達は俺の予想を遥かに越えるほどの予想外だった。

「なあ、智樹……」

「何ですか？」

「この子達は馬鹿を通り越して、アホすらも超越してると思うのが異論はないか？」

その言葉には激しく同意して頷き、目の前にいる変な子達に頭を抱えていた。

古来より伝わる伝統的なメイド服を見事(?)に着こなし、頭には何故かネコミミを付けている三人組。これを何と表現していいのかわからないが、妹キャラとの関連性がまったく読めなかった。

……衣装選択から間違ってるよな。

ほとんど罰ゲーム的なノリなのに本人達は至って真面目で、決めポーズを試行錯誤しているようで何やら三人で相談している。見ているこちらの方が恥かしくなってくるのは新手の拷問だろうか。

「私達のお兄様、伏峰先輩！」

「お兄ちゃんの好きな食べ物を教えてくださいっ」

「兄貴は誰が好きなのっ？」

そこへ俺達の事などまったくお構いなしで敬礼している三人組。同時に話しているので誰が何を言っているのかさっぱり分からなかった。それに疑問を持ってても疑問が解決しない内に三人組が話を進めるので、現在何を話しているのかも俺にはさっぱり分からなくなっていた。

「あの、少し落ち着いてくれるかな？」

「はっ、失礼しますた！ お兄様、きやはっ」

一番小柄な女の子が敬礼しているが、何故なまっているのだろうか？ 先ほどまで普通に話していたはずだ。それよりも何よりも、まったく会話が成り立ってないので俺は名前すら知らないのだが、

どうしたらいいのだろうかね。

「まずは自己紹介をして欲しいのだが……右から順番にどうぞ」

「別にいいんじゃないの、智樹」

と、そこへ割り込んできた和音さんがテーブルを叩いて立ち上がり、三人組の前で

「右から、ノツポ、ペッタンコ、メガネ。それ以外は認めないっ」

有無を言わせない迫力で指差して言い切った。

それはただ単に特徴を言っただけで、何も捻りがないんですけど。
「いや、それはちょっと……で、出来れば、名前で呼んで欲しいのですけど」

ペッタンコと呼ばれた一番小柄な女の子が申し訳なさそうに手を上げて和音さんに抗議しようとしたが、まったく相手にしていない和音さんの一睨みで萎縮して目を逸らしてしまった。残りの二人もペッタンコに続こうとしたが和音さんの形相に目を逸らして口笛を吹いて誤魔化していた。

「何言ってるの。そんな妹キャラを勘違いしたような格好をしたお前達を名前で呼ぶのは百年早いっ」

「は、はいっ お姉様！」

和音さんの言葉に背筋を伸ばし、きつちりと足を揃えて三人揃って敬礼していくが、俺にしたときよりも揃っているのはどうしてだろうか？

「それよりも、三人共一年なの？」

「は、はいっ。私達、同じクラスの仲良し三人組ですっ」

そうか、この子達は一年生か。そう言えば、あいつも一年だったな……入学して一度も遭ってないけど、元気になっているだろうか。まあ、あいつは誰にも負けない精神の持ち主ではあるので心配はいらないと思うけど。

「そう……ふふっ、智樹。ちょっとおいで」

少しだけ自分の世界に入っていた俺にウインクをしてついでに投げキッスという古典的な事をしている和音さんに、そこはかとなく

嫌な予感がする。

止めるべきだろうか？

それとも面白そうなので一緒になって遊ぶべきだろうか？

何をするのかはとても興味があるけど、”この”和音さんに何度も振り回されて大変な目に遭っているの、ここは我慢して止めておこう。

「はあ、はあ、遅れてすいま　きやうつ」

そんなところに息を切らせて部屋に入ってきて、いつものように何もなかったところで躓^{つまず}き、スライディングをして俺と和音さんの間に滑り込んできた一人の女の子。

「今日はライトグリーンの水玉だな、智樹」

「話を振ってくるのはください」

俺の顔を見て下を指差して「智樹もやるか？」と、悪魔のような事を言っている和音さんに驚いて一直線に壁際まで逃げていった律子ちゃん。

……素早い判断だな。

和音さん相手に悩んでいては意味がない。即時判断が命を分けるとも言われているのだ。そつと親指を立てて『懸命な判断だよ』と目で労いを送ったら嬉しそうに目を細めている律子ちゃんは『ありがとうございます、先輩』と返してきた。周りには分からないだろうが、いつも一緒にいる俺達にはこの人が暴走すると大変なのは嫌というほど分かっているので大げさな事ではないのだ。

「ちつ……Ｔバックにして遊ぼうと思ったのに」

残念そうに指を動かして持ち上げるような仕草をしている和音さんは、俺の方を振り返って拗ねた子供ののように頬を膨らませていた。「そんな事はいいいですから、変な事はしないでください。それから面倒な事を起こそうとしないでください」

「いいじゃん、別に。それより、三馬鹿　じゃなかった、三人娘。これが本当の妹だって言うのを見せてやろう」

……嫌な予感がします。

「え？ あ、ちょ さ、桜井先輩っ」

「いいか、よく見る！ これが天然妹キャラの律子二世だっ」

壁際まで逃げていた律子ちゃんの首を掴み（本当に首を掴むから恐いんだよね）、猫の如く持ち上げて三人組の前に突き出した和音さんは得意そうに笑みを浮かべていた。

……二世って何？

この突拍子もない展開についていけずに三人組は呆けた顔をしていたが、律子ちゃんは半べそ状態で俺に助けを求めている。

「和音さん……律子ちゃんて遊ぶのは止めてください」

「遊んでないぞ、智樹。私は妹が何たるかを教えてあげているのだっ」

真面目な顔をして俺を見つめる和音さんは、律子ちゃんにうしろから抱きついて制服の中に手を入れて胸を揉み、そしてスカートにも手を掛けようとしていた。

言っている事は正論だと思ふのだが、やっている事は限りなく邪道だよな。そうは思っても助けないのは男の性だろうか……もう少し見ていたいのが本音だ。

「い、妹キャラはそ、そこまでしなくていけないのですかっ」

「そうだぞ。姉に、兄に、萌え遊ばれて喜ばれ……そして、そこに愛を感じてこそ一人前の妹だ！」

ノッポの女の子が真っ赤な顔で和音さんを見つめ、それに答えるようにクワッと目を見開き、まるで悟りを開いた僧侶のように言い切った和音さん。

……全部間違ってますよ。

ツッコミをいれたかったが、ペタンコとメガネの二人はその会話を聞きながら「おおっ」と驚嘆するように声を上げてうつとりとした表情をしていた。絶対に頭がおかしいだろ……こいつ等。

「違うぞ、かずちゃん とうつ」

だが、そこへこの変な子達を送り込んで来た元凶が現れた。

「あつ、翔お兄ちゃん」

その存在にいち早く気付いたのはペツタンコ。そしてメガネ、ノツポと続き、俺達の前からいなくなっていた。

「……和音さん、そろそろ律子ちゃんを離して下さい」

「やだ。揉み心地がいいからもう少し揉んで遊びたい。それ、に……律子も気持ちいいだろ？ ほらほら」

和音さんに弄ばれて声も出せない律子ちゃんは顔を赤く染め、俯きながら首を横に振っていた。

「おーい、僕の事は無視ですか？」

三馬鹿に囲まれてだらしない顔をしている変態部長が俺達に構って欲しいようだが、まったく相手にする気もないのでスルーした。

「うわっ、本当に無視しないでよ！ 寂しいよ、ともちゃんっ」

「何をしに来たんですか？ 部長」

「……もしかして怒ってるの、ともちゃん」

「呆れているんです。どうして面倒な事ばかり持ち込んでくるんですか、あなたは」

ため息を何度吐いても収まりそうにない俺の呆れた心境を変態部長に語ってやりたいが、この人に何を言っても馬の耳につて事だろ
うな。

「翔お兄ちゃん、私達いい妹になってますか？」

「ああ、なってるとも。君達は最高の妹さっ」

窺うように上目遣いで変態部長の制服を掴んでいるメガネに、鼻息荒く肩に腕を廻した部長は「よしよし」と三人に声を掛け、『最高だよ、ともちゃん』と、言葉にしないがとてもご満悦な顔を俺に向けていた。

その顔があまりにも変態丸出しの馬鹿過ぎで、呆れを通り越して哀れな気持ち溢れてきてしまった。この人に何を言っても無駄なんだろうな……俺の話を見目目に聞いてはないだろうし、今は自分の世界に浸りきっているし。

「和音さん……あれを退治してもいいですか？ 今なら瞬殺する自信があります」

「ほつとけばいいって」

呆れた顔して律子ちゃんの胸を揉み続ける和音さん。

その下で顔を赤くしてぐったりと頂垂れている律子ちゃんが妙に色っぽくてちよつとドキドキしてしまったのは内緒にしておこう。

「和音さんも程々にしてくださいね」

「分かってるって。それじゃ、本気でいってみようかねえ……ふふふっ」

妖しく光る和音さんの目に怯えきった律子ちゃんの目が震えていた。

……ライオンとウサギだな。

何を本気でいくのか分かっているが俺の口からは何も言えない。まあ、それを止める気もない俺は最低な人間かも知れないが、ここは男の性に従って放置しよう。別に見たいわけではないが、あまり止めてばかりいては俺に同性愛疑惑が浮上してしまうからな。この女顔のせいで昔から何度も言われた事で、今更説明するのも否定するのも面倒なのだ。俺は面倒な事が大嫌いだから、何もしないのが一番楽な解決法なのだ。

目の前で深夜放送する年齢制限が掛かりそうな映画のワンシーンが繰り広げられようとしており、いつの間にか俺の横に陣取っていた変態が鼻から血を流して被り付いていた。

「あの三馬鹿妹キャラ……いや、メイドもどきを相手しなくても

」

「もう帰ったよ。『私達、今度はお姉様になる』って走っていったよ」

振り返った先には開け放たれた部室の扉と寂しく吹き込んでくる風の音が虚しく響き、投げやりに説明する変態部長の声がどこか遠くで聞こえていた。

「……なんですか、それ」

「いや、目の前でこんな素晴らしい光景を見せられて感銘を受けたらしい。『時代は妹よりセクシーお姉様よ』って叫んで行っちゃっ

たよ」

「……………馬鹿、ですね」

「そうだね。でも、素直でいい子達だよ？　きつと素晴らしいお姉様になって帰ってくるよ」

馬鹿過ぎて何を言っているのか分からないが、一言だけ言わせて欲しい。

……………すごい。

この一言で全てが片付いてしまうのだから、あの三人の存在感は半端なかったのだろうな。ほとんど話してないけど、頭の中に残っているのは……………メイド服だけ。

顔の印象は特徴無くて薄かったけど、その他には何か印象が

「……………そう言えば、名前も聞いてなかった」
残ってなかった。

とりあえず、このモヤつとした心を晴らすにはこれしかない。

目の前で艶声を上げる和音さんと律子ちゃんの怪しげなショーを凝視している変態部長の後頭部に肘鉄を入れ、床の上をもんどろろっている部長を見て少しだけ気が晴れた。

結局、和音さんは俺を呼んで何をする気だったのだろうか？　とても気になるところだが、今はその話も出来ないだろう。窓の外は赤く染まって夕刻の黄昏を醸し出し、部屋の中はピンク色に染まって妖艶な雰囲気醸し出し、その対比を見ながら俺は小さく息を吐いて帰り支度を始めていた。

第七話：マッドな科学者登場

最近、身の回りにおかしな事が立て続けに起こっている事でお悩みの皆さん。

こんにちわ、伏峰智樹と申します。

さて、今日は俺が経験した中でもかなりの驚き度を記録した珍事件をお話しよう……って、現在進行形なんだけどね。

「ともちゃん見てよ、これ。ママツキーちゃんの新発明なんだってさ。すごいよ、すごいよお」

子供のように楽しそうな声を上げて俺の肩をバシバシと叩く部長を本来であれば瞬殺するのだが、あまりの衝撃的な出来事を目の当たりにして俺は呆然としていた。

「ともちゃん、すごいよね。これ、コントローラで動くんだったよ………うほっ、すっごーいつ」

目の前を右へ左へ動いている変な物体が俺を見つめて微笑んでいるが、俺の頭は絶対に正常のはずだ。決して幻を見ているわけでもオバケを見ているわけでもない。だが、少々冷静さを欠いているのは事実だ。

「でも、よく出来てるよね……このラジコン。まるで本物みたいだよ」

「気持ち悪いだけですよ、これ」

楽しそうな部長の声とは対照的に俺の声はかなり落ち込んでいた。目の前で急ブレーキを掛けて止まったラジコンは髪をなびかせて爽やかに笑みを浮かべていたが、俺は眩暈にも似た感覚を覚えていた。

ともちゃんラジコン。

部室に來るとそう銘打たれた箱がテーブルの上に置かれていた。俺は今までの経験上、この手の代物はかなり面倒な事があとに待っているのは百も承知している。慎重に事を進めようとしていた矢先

に俺のあとから部室に入ってきた変態部長が目ざとく見つけ、真っ先に開けてしまったのだ。

そして、その箱の中に入っていたのはビックタイヤが自慢の大型ラジコンの上に、俺の顔を模したマネキンのようなものがくっ付いている奇妙なものだった。一緒に取扱説明書と某有名メーカーが一昔前に出して売れ行き不振だったのか夢のように消えて撤退したゲーム機のコントローラもどきが同梱されていた。

懐かし……いや、著作権大丈夫か、これ？

あまりの衝撃に最初は声が出なかったが、何の不思議もない様子で楽しそうに箱から取り出して走らせる部長に頭を抱えていた。

「あつ、今日はお二人共早いですね。ところで、今日は何を　きやあつ」

そんな部室にいつものように少し天然が入った声の主がやってきたが、一瞬の間があつてから部室の壁を揺らし、校舎を破壊しそうな大絶叫が響き渡っていた。

「うひょー……すごいな。り……りっちゃん、大丈夫？」

「あ、ああつ……ふ、伏峰先輩が………伏峰先輩の首があ、わああんっ」

振り返った先にいたのは間抜け面を引っ提げてオロオロとしている変態部長と、それに負けないくらいの間抜け面を引っ提げて床に座り込んでいた律子ちゃんの姿があつた。

……まあ、声で分かったけどね。

で、俺が一人で思考を巡らせている間、歯医者で誉められそうなくらいに大きな口を開けていた律子ちゃんだったが、ご近所迷惑なくらいの大きな声で泣き始めてしまった。

「律子ちゃん、落ち着いて……ねっ」

「うつつ、は、はい……つて、ふああ！」

泣き喚く律子ちゃんを宥めないと隣の部にも迷惑だと思って近寄って頭を撫でていたが、一呼吸ほど間を開けて俺の顔を真っ直ぐに見つめ

「ふ、伏峰先輩の幽霊！ オバケーっ」

器用に後転しながら壁にぶつかっていた。

……おーいつ、パンツが丸見えだぞ。

隣で律子ちゃんに駆け寄って行こうとする鼻息が荒い変態部長の襟首を掴み、足払いをして鳩尾に肘鉄を入れる。一連の動作を流れるようにこなしてこそ一人前の柔術家であるが、俺は柔術は習っていないのでテレビなどで見たものを真似ただけなのだが、思いのほかうまくいったので俺自身が驚いている。さすがにやり過ぎたかと思ったが、生きているので問題ないだろう。それよりも律子ちゃんのパカパカ丸見えショートをどうしようかと悩んでいたが、律子ちゃんは思いのほか早く復活した。聞いてみると理由は可愛いもので、俺の首が取れて一人で動いていると思ったらしい。

「生きてるから心配しないで、ねっ？　俺は大丈夫だし、これはマツキーさんの発明品だから」

「そ、そうなんですかあ……び、びっくりしましたよ」

大きく息を吸い込んで胸を撫で下ろしていく律子ちゃんは、落着きを取り戻して恥かしそうに頬を赤く染めていた。まあ、律子ちゃんらしい可愛い勘違いだと思うのだが、さすがに首が取れて走り回っていたら怪奇現象以外の何ものでもないと思う。

「でも、これは何ですか？」

「ん？　ああっ……これはさっきも言ったけど、ママツキーさんの発明品で俺の顔に似せたラジコンだよ」

「……………欲しい、です」

小さく聞いてはいけない言葉を呟く律子ちゃんを無視したい気分だったが、とりあえず聞き流して俺は律子ちゃんを立たせた。が、目を輝かせてラジコンを見つめる律子ちゃんはおもちゃを前にした子供のようには俺の顔とラジコンに乗った俺の顔（言っていてややこしい）を交互に見比べていた。

「これは売り物ではありません」

「そうなんですか……一万円くらいなら買ったのに」

買わなくていいから。

「あ、あの、私も遊んでいいですかっ？」

「いいけど、壊さないようにね」

「はいっ」

嬉しそうにテーブルの上にあった某有名メーカーが一昔前に出した以下省略のコントローラを握りしめて、恐々と操作していく律子ちゃん。俺はそれを横目に珈琲でも淹れようと立ち上がったが、うしろから車に轢かれたような悲鳴が聞こえてきたが無視をした。

……そう言えば、あのまま寝てたな。

多分床に寝転がっていた変態部長の顔面やら身体をラジコンが轢いたのだろうけど、面倒なのでそのまま放置する事にした。

現にうしろで平謝りしている律子ちゃんの声が聞こえているが

「部長……気絶したフリしてパンツは覗かない方がいいですよ」

俺はとりあえずお決まりのツツコミをいれる事を忘れなかった。

「なっ、なんで分かったの、ともちゃん　はっ」

そんな声が聞こえ、すぐに可憐な悲鳴が木霊する部室内。そして、繰り広げられる愛憎巡るサスペンス。

惨劇が渦巻く屋敷の中で家政婦が見た一つの愛と涙……おっと、俺が思考の世界で暴走してどうする。まあ、遠からず似たような光景（結構グロいので口頭での説明は勘弁）が目の前に広がってますので、静かに胸の前で手を合わせよう。

……部長、分かりますって。

だって気絶してなかったですし、女の子が近寄れば本能がエロモード全開になるがあなたの真骨頂ではありませんか。この一年ちよつとの付き合いでカーテンにしみ込んだ焼肉の匂いみたいに骨身にしみてますから。

「ご臨終です……南無」

静かに手を合わせる俺の隣で同じように手を合わせてお焼香を食べようとする一人の女性……って。

「何をしているですか、ママツキーさん」

「ん？ 何って様子を見に来た野次馬さね」

軽く俺に手を上げて無表情にテーブルの上にある箱を引き寄せるママツキーさん。

白衣を着てボサボサの纏まりのない髪。そして瓶底眼鏡を指で直し、やる気のない声は正しくママツキーさんであるが、ついにマッドサイエンティストの風貌になっている。行き着くところまで行ってしまったなっと思って感じるが、この人が着るとこれほど似合う服装はないと思う。と、言うか久しぶりにその姿を見た気がするな。

「ところでトモキン」

「……その呼び方は止めてくれと何度も言っただけですが」

トモキンの『O』が『A』になったら、ただの猥褻物ではないですか。

「気にしない、気にしない。これ、よく出来るだろ？」

まったく俺の話を聞いてないママツキーさんは律子ちゃんが動かしているラジコンを指差し、誇らしげに俺を見つめていた。その顔は誉め称えよって感じに見えたが、ここで素直に誉めると調子に乗るし、話が長くなりそうなのでどうしたらいいのだろうか。

「これはラジコンの上に……あつ、ラジコンと言ってもこのラジコンは私が作った特注品で最高時速は八〇キロで、車載カメラとGPS、あと最新鋭の技術を――」

どうやら俺の悩んでいる間に話が始まってしまったようだ。

こうなると誰にも止められないママツキーさんの独壇場が始まり、ほぼ半日コースの商品説明会が開催されてしまう。

「顔はトモキンの写真を取り込んでシリコンで立体的に再現してみた。顔の表情はあくまでイメージで、トモキンの喜怒哀楽を仮定して開発を進めたが、トモキンのにはあっていると思うか？」

「……いや、自分の笑顔など知るはずもないでしょ」

「そんな事ではダメだぞ、トモキン。科学者を志す者は己の事も理解していないくて」

いつ、俺は科学者を志すようになったのだろうか？

一人で語り続けるママツキーさんを放置して俺は床で殺人事件ばりに酷い有り様で転がっている変態部長を足蹴にして起こし、こちらの騒ぎなど関係なく夢中でラジコンで遊んでいる律子ちゃんを呼んでママツキーさんを紹介した。

「あつ、始めまして。一年の梅津律子です、よろしくお願いします」
「ども。私は東山麻貴……ほおーっ、このクラブにも一年生が入ったさね」

互いに顔を見合わせてお決まりの挨拶をしていたが、ママツキーさんの目が光ったかと思えば、律子ちゃんの身体を撫で回すようにうしろから前からじつくりと観察し始めた。

……また始まった。

初対面で自分のセンサーに反応した人物に異常な興味を持って観察するママツキーさんの癖は今に始まった事ではない。俺も同じ事をされて「よし、合格」と意味不明な事を言われた事がある。これはママツキーさんの親愛の証みたいなので、ここにいる全ての人は合格しているらしい。

律子ちゃんはママツキーさんがいない間に入部したので今まで安全だったわけだが。

「はいはい……ママツキーさん、少し落ち着こうね」

「なあ、トモキン。この子はもしかや天然ではないか？」

いきなりそんな事を言い出したママツキーさんに少し驚いてしまったが、人間観察は極めると匂いや雰囲気の内面まで分かるものなのかと思った。

だが、その考えはすぐに打ち消された。

律子ちゃんのうしろに廻り込んだママツキーさんは、白衣のポケットからサイズ的には絶対に入らないと思う大きさの鏡（ほぼ全身鏡）を取り出して鏡を指差していた。その鏡に映っていたのはお尻の部分が完全に捲れ上がってパンツが丸見えになっている律子ちゃんのうしろ姿で、当の本人はまったく気付いていない様子だった。

「まあ、天然ですかね……よく、転びますし、それもいつもの事で

す」

俺が鏡を指差すと、納得したように頷いたママツキーさんは

「そうか。では次の研究テーマは『ドジっ子の行動心理 愛と羞恥に満ちた生き様を見届けた一八〇日間のドキュメント』にしようかな」

ママツキーは新しいおもちゃを手に入れた……もとい、新しい研究テーマを手にいれたようでご満悦の表情を浮かべていた。ただ、サブタイトルと言うべきものには共感が出来ない部分が多々あったのは伏せておこう。

「あつ、そうだ。和音ママは何処いずこに？」

「和音さんなら今日は補習があるとかで来れないって」

「そっか、残念。折角、例のアレが完成したので持ってきたのに……私一人で楽しんで来るぞ」

残念だと口で言いながらも、まったく顔が残念がってないママツキーさんは白衣のポケットに鏡を入れ始めた。

……そのポケットはどこに通じてますか？

昔よく見ていたアニメに似たようなポケットがあったけどなと思いつつ見ていると、余程俺が不思議そうな顔をしていたのか

「これ……多次元宇宙に通じている奇跡の白衣『ミラクルホワイトローブ』なのさね」

誇らしげに白衣を脱いで俺に突き出していた。

意味の分からない言葉を聞いて少しだけ頭がパニックになっている俺に何やら専門用語をふんだんに使った解説をしているママツキーさん。簡単に言えば物質を粒子状に再配列して元素の構造自体を書き換えて圧縮する装置を内蔵した白衣と言う事らしいのだが、その言葉が全て右から左へ通り過ぎていくような光景が目の前に広がっているのですが、俺はどうしたらベストなのでしょう？

「とりあえず……ママツキーさん、白衣の下に服を着てください」

「おっ……これは失礼。さっきアレの実験で失敗して、バイオハザ

ードが起こったからシャワーで洗い流したまま白衣を着たのをすっかり忘れていたさね」

恥かしさを微塵も感じさせないママツキーさんは表情一つ変えず、俺の顔を一度見て普通に脱いだ白衣を眺めていた。

これでは返って俺の方が恥かしいのですが、これは新手の羞恥攻めでしょうか？

などと思っていたら「だ、だめですよっ」と律子ちゃんが一人慌ててママツキーさんの周りをハエのように飛んでいた。

…… 例えが失礼か。

せめてチヨウチヨくらいいいのかな？ 可愛いし、綺麗だし。

それにしても相変わらずのネーミングセンスだな…… 『ミラクルホワイトローブ』って、どうよ？ それに先ほどから言っている『アレの実験』というのは気になるが和音さんの名前も出ていたし、やはり事でない事を祈ろう。

「それより、ママツキーさん」

「んっ？ 何かな」

「先ほどの発言で『バイオハザード』って言ってましたけど、聞き違いではありませんよね？」

「ああ、うん」

塩ラーメンの如くあっさりと事実を認めたママツキーさん。

「佐々木研究所 あっ、佐々木研究所って言うのは『機械工学研究開発応援部』の部室の事ね。そこで未知の生命体を研究実験中にオスの生命体『ワイ』がメスの生命体『ウエイ』と接触結合して増殖し始めて、部室の中がたいへんな事になってしまったね」

「…… 大丈夫なんですか、それ？ と、言うか、分からない単語が多過ぎです」

「まあ、部室は完全封鎖して中からはアリー匹どころかダニやミジンコすら出る事は出来ないようになってるから問題なし。密閉している空間で外部に被害が少ないから、そろそろミサイルが」

と、ママツキーさんが言っている端から足元を激しく揺らす衝撃

が駆け抜けていった。

「おっ……終わったみたいだね。いやあ、アレがあそこまで繁殖してあんな事になるとは思わなかった。でも、色々といいデータが取れたから良しとするかな」

一人腕組みをして頷いているママツキーさんの足元で蹲って半べそをかいている律子ちゃんが俺を見上げていた。

……やっぱ、すごい。

この人に色んな意味で常識っていうのを教えて上げたいが、自分の常識で動いている人なので世間の常識は無理だろうな。まあ、ここにいる人は俺を退けて（含めた方がいいかな？）世間の常識から少しずつズレた人間ばかりなんだろうけど、この人に勝てるのは早々ないだろう。

「じゃあ、私は帰るよ。あつ、このラジコンは返してね」

「はい、もう二度と迷惑を持ち込まないでください。あつ……ちなみに、ミサイルって何だったんですか？」

「……お米の国の偉い人が押すのを躊躇ってしまうスイッチ」

妖しく口角を上げ、意味深な事を言って去っていったママツキーさんのうしろ姿を見ながら、俺はこの町から　いや、この国から避難する事をちよつと真剣に考えていた。

第八話：変な人は何人いるのだろうか？

人間、諦めが肝心である。

ピンチのときに使うことわざが色々と浮かんでは消えていく現状で、風前の灯となった俺の命が尽きたら誰が亡骸を拾ってくれるのだろ

うと考えてしまった。

「部長……諦めましょう」

「い、いやだっ」

まあ、この人が素直に諦めてくれるはずもないか。

「ですが、この状況は非常にまずいですよ」

「分かっているけど、僕はやってないんだよーっ」

俺の足元で駄々を捏ねる部長を見捨てて逃げたいが、しっかりとズボンの裾を捕まれているは無理だ。

……この人、俺を道連れにする気か。

現在、三階廊下隅で俺達はむさ苦しい男達に囲まれ、我が人生で生誕以来最大のピンチを迎えている。

事の発端はこの変態部長が起こした『婦女暴行拉致監禁盗撮未遂らしいと本人が言っている事件』（余計な罪名がくっ付いているが気にしない）が今頃になって全校生徒の間でジワジワと波紋を広げているらしく、放課後になって部室で部長や和音さんと律子ちゃんの淹れてくれたコーヒーを飲んでゆったりと寛いでいたところに、この大人数で大挙して押しかけてきた男子生徒達が『海藤翔を出せ』と大騒ぎ。最初は何かと思っただが、男子生徒達の胸にバラのコサージュを見つけたときに誰の差し金なのかはすぐにわかった。で、部長は我先に逃げ出したのだが、しっかりと俺まで巻き込んで逃げるものだからこんな状況になっているわけで……。

まったくもって迷惑極まりない話だが、どうしてこういう場面で

俺はいつも巻き添えを喰らうのか、一度お祓いしてもらった方がいいのか知れない。きっと部長みたいな悪霊が団体さんで憑いているに違いない。

「すいません、皆さん。俺から提案がありますので聞いてもらえますか？」

鼻息荒い男達を落ち着かせようと、俺は片手を上げては口を開いた。

「なんだ、言ってみろ」

俺を威嚇するように見据え、リーダーらしき男子生徒が話し掛けてきたので

「あなた方の用があるのは部長ですよネ？」

と、足元で子供より性質の悪いぐずり方をしている部長を指差す。

「そうだ」

「では、俺はまったくもって無関係でこの場においても仕方ない存在ですね？」

「ま、まあ……そうなるが」

少々威嚇するように語尾を強めに睨みを効かせて言い放つと、リーダー格の男子生徒は一瞬たじろいだ。

「それではこの変態は置いていきますので、煮るなり焼くなり、ご自由に調理してください」

「あつ、ちょ　ともちゃん、後生だから見捨てないでっ」

「俺には関係ありませんので、あしからず」

追いつがる女を振り払う男のようにズボンを掴んでいる部長の手を引き剥がし、俺は男子生徒達の間を通り過ぎようとした。

だが

「お待ちなさいっ、とおっ」

俺の脇を颯爽と通り過ぎていき、気合の入った声で見知らぬ少年上然とした男子生徒（多分、顔の質感から三年の先輩だと思う）に飛び蹴りをした女子生徒が一人。

……ピンクのレースでＴバックですか。

翻ったスカートから不可抗力で見えてしまった布地に少々面食らってしまったが、ここに来て面倒な人物が出てきたと言うのが正直な感想だった。

「汚らしい手で翔様に触れないでちょうだい、下僕達っ」

響き渡る女子生徒の声に恐れ慄き、一步後退した男子生徒達は一斉にその場に膝を付いて頭を下げていたが、女子生徒はそんな男子生徒達には目もくれずに変態部長の前まで歩いていき、少し頬を染めて笑みを浮かべていた。

そんな破天荒娘と対峙する部長の顔はランチタイムにぱったりとライオンに出会ったウサギのように震え、青ざめた顔で動揺していた。

……中々、レアだな。

今まで見た部長の顔でもレア度は最高に値するが、俺もこの人物は苦手なので関わり合いになりたくない。

助けを求めるように俺に無言で手を伸ばす部長に十字を切って祈りを捧げ、踵を返したが

「待ちなさい、伏峰」

バツチリと呼び止められてしまった。

「……………ちつ、何ですか？」

「あなた、今『ちつ』って舌打ちしたでしょ！　なんであなたみたいな人が翔様の付き人をしているのか……………それから、主を置いて何故逃げようとするとは何事ですかっ」

とんでもない勘違い発言をしている馬鹿娘は額に青筋を浮かべて唾を辺りに飛び散らせてご立腹の様子だが、何故に俺が怒られるのか理由がさっぱり分からなかった。

で、先ほどから『馬鹿娘』とか『破天荒娘』とか呼んでいる目の前にいる変な女子生徒は、それでもこの七曜学園の副生徒会長にして

「別に逃げてませんよ。偉大なる副生徒会長、田中花子様」

政界にも顔が広く色んなものを牛耳っているという噂が絶えない

大富豪の孫娘である。

「だーっ、人を区役所の記入例みたいな名前で呼ばないでちょうだい！ 私は田之中華子たのなかはなこですっ。た、の、な、か、は、な、こ、っ」
本人は否定しているが妙に庶民じみているところもあるので、からかって遊ぶと見事な漫才師ばりのツツコミをする一面も持ち合わせている。

「……大して変わりがないですけど」

「変わりますのよ！ 『の』がないですし、あんたのイントネーションでは絶対に漢字で書いたら『花子』って言ってるでしょ。私には分かるのよ、私の第七感がビンビン反応してるのよっ」

どこから取り出したのか分からないが、手に持ったスケッチブックに黒マジックで大きく『花子』と『華子』と書いてイントネーションと漢字の違いを力説する副生徒会長。

……さすがに馬鹿娘。

第六感すら超越した第七感をお持ちとは恐れ入った。成績は学年の中で下から数えた方が早く、先生達も苦勞しているようだが本人は超ポジティブと言うか、馬鹿でもめげない性格らしい。よく三年まで進級出来たという噂があるけど俺もそう思う。

そして、高飛車な性格で一般生徒を『下民』と呼び、「お、ほほほっ」と、高笑いをするというゲームなどに出てきそうな嫌味な金持ちキヤラを地でいく人である。まあ、この人を相手にするには自分も馬鹿にならないと無理だという判断から誰も相手にしないのだが、そんな副生徒会長も顔”だけ”は綺麗系なのでファンクラブが存在し、その会員は『下僕』と呼ばれている。つまりはここにいる男子生徒達は皆ファンクラブの会員という事になる。まあ、胸にあるバラのコサージュですぐに分かったけどね。あのバラのコサージュは副生徒会長に忠誠を誓った証で、一般生徒には別名『華の呪縛』なんて言われている呪いのアイテムみたいなものだ。

「さあ、翔様。一緒に参りましょうっ」

「え、いや……僕は、その」

「私達の愛の巢へ急ぎましょう、ダーリン」

聞いていて背中に虫唾が走って行く。

この調子からも分かるように、副生徒会長は変態部長にぞっこんラブなのだ。今時ぞっこんラブって言葉を使うのは恥かしいが、副生徒会長の盲目ぶりな愛は一途を通り越して恐怖すら感じる域に達している。

簡単に言えばストーカー。

それもかなりのマニアックストーカーで、男子トイレや更衣室にも平気で出没するはた迷惑な人だ。

「ほら、早く行きましょう」

「あ、やつ　とめちゃんヘルプミーっ」

無理やり足を掴まれて引きずられていく部長が俺に手を伸ばして助けを求めているが、ここは心を鬼にして……いや、普通に無視をしよう。

……頑張れ、部長。

もう帰ってこないかも知れない部長に線香の一本でもあげようと思ったが、お金がもったいないので止めておく事で結論が出た。

で、少しだけ時間が経ち、場所も移動して　　現在、電腦革命クラブ部室。

「……智樹、これはどういう事だ？」

「俺に聞かれましたも………和音さん、無言で徐々に首を……締めるのは、止めて、くっ」

「ひゃあっ　智樹っ、いきなり何するんだよっ」

頸動脈を的確に締め上げ、顔から血の気が引いていく俺　なんて冷静に解説をしている場合ではなかった。

ここは一つ回避行動を取らなくては思い、無我夢中で伸ばした手が和音さんのマスクメロンを掴んでしまったようで、和音さんもまさかの攻撃に乙女のように可憐な悲鳴を上げていた（俺って結構失

礼かな？」。

……上質の柔らかさ。

思わずティッシュのコマーシャルを彷彿とさせる言葉が浮かび、手に残る感触を堪能しようかと思ったがロックの外れた首を廻して無事を確かめる事にした。

まあ、生きているのだから無事なのは分かっているけど、まさかのピンクボムを喰らうとは夢にも思わなかった。

俺も油断したものだ……ああ、首が痛い。

だが、和音さんが虫の居所が悪い原因が分かっているのです、すでに対処策は発動している。そろそろ来る頃だろうと思うのだが……。

「はあ、はあ……ふーっ。ふ、伏峰先輩、これでいいんですか？」
噂をすれば何とやら、だ。

息を切らせて部屋に駆け込んできた律子ちゃんは大事そうに抱えていた箱を俺を差し出した。

「……んっ、これでいいよ。ありがとうね、律子ちゃん」

「い、いえ……えへっ」

差し出された箱を受け取ってお礼を言うと、嬉しそうに頬を綻ばせて笑っている律子ちゃん。恥かしそうに俺の顔を窺う律子ちゃんの頭を撫で、「珈琲お願いね」と告げようと思ったが律子ちゃんは分かっていたかのように「珈琲淹れますね」と言って小走りに行ってしまった。

「……何、ラブコメってんだよ」

「違いますよ。それより、これをどうぞ」

ムスッと頬を膨らませて不機嫌な顔をしている和音さんの前に箱を置いて開いた。

「お、おおっ……これは『ラベリア』のケーキっ」

目を輝かせて箱の中を見つめる和音さんは子供のように感嘆の声をもらし、ケーキを一つ一つ箱から取り出していた。『ラベリア』とは前に変態部長が女の子を送り狼しようとして往復ビンタを喰らった駅前のケーキ屋の事で、女子生徒の間では「期間限定の手作り

マロンケーキが今の一番お勧め」と評判になっていた。ただ、今は夏真っ盛りなのに秋の味覚である栗があるのか、おいしいのかは謎であるが。

そして和音さんの新事実　それは辛党で大の甘党と言う事だった。

三段重ねのチョコレートケーキを一人で完食した記録を持っているのは前から知っていたが、辛いものが好きなのはつい最近知ったばかりだ。和音さん曰く「辛いものと甘いものを一緒に食べても味は分かる」らしいけど、それは和音さんだけであって俺には真似出来ない芸当だった。

「どれから食べようかな……迷うなあ」

「好きなものから食べてください」

「どれも好きなんだよ」

さすがは甘党と言うべきか、聞けば『ラベリア』のケーキは全種類（期間限定も含めて）制覇しているらしい。和音さんのサバサバした性格から甘いものというよりは日本酒とスルメ（未成年の飲酒は法で禁じられてますから駄目ですよ）って感じだが、こういう性格の人ほど甘いものや可愛いものに目がなかったりする。

「んーっ……おいしい」

頬に手を当て、幸せに蕩けきった顔をしている和音さん。俺が回想している間に買ってきたショートケーキを半分以上食べていた。

……すごいな。

更に四つ目に手を伸ばしてへらつとだらしない顔でフィルムを剥いでいく和音さんは待ち切れないのか、フィルムをはぎ終わる前に手掴みで食べ始めた。

「……野生が目覚めた」

「ふがつ、ふははへははっ」

「まずは飲み込んで喋ってくださいよ。律子ちゃん、早めに珈琲お願いね」

口いっぱいケーキを詰め込んで何を喋っているのか分からない

が言いたい事は大体見当がつくので宿めていると、そこへ律子ちゃんが珈琲を淹れてやってきた。

「はい、どうぞ。少し温め^{ぬる}にしていますのですぐに飲め あっ」

「んぐ、んぐっ……はあーっ」

律子ちゃんの説明を聞かずに一気に珈琲を飲み干した和音さんは口を拭って

「誰が野生児だって、こら」

俺を睨みつけてきた。

想像通りの言葉を投げかけられて思わず吹き出しそうになってしまったが、すでに五つ目を手にしている和音さんには脱帽してしまう。

……見ているだけで胸焼けしそうだ。

女の人は「甘いものは別腹」と言うが、そもそも『別腹』とはどこにあるのだろうか？ 人間の身体は不思議なものだな。うん……不思議なものだ。

「おーいつ、ともちゃん」

「もう、翔様。今は夫婦水入らずの時間ですよ」

「いやーっ、いつから僕達夫婦になったのっ」

「たった今です。桜井、お茶をもってたもれ。伏峰、足が疲れたから揉んでおくれ」

嬉々とした女子の声に重なる絶望的な男の悲鳴が部室の中に木霊しているが聞かなかった事にしよう。そして、余計な言葉まで聞こえるのでそれもシャットダウンする。

いや、全て聞こえなかった事にして忘れ去るのが一番だろうな……

…うん、そうしよう。

「……すごいですね」

「そうだね。でも、あつちはほっといいていいから、律子ちゃんはこの風になったら駄目だよ」

呆れた顔で和音さんを見ている律子ちゃんのひきつった顔が何ともいえないが、俺は首を横に振って野生児を指差していた。

アホのように貪りつく和音さんは俺達の会話など聞こえてないよ
うで、もう何個目になるのか分からないケーキを食べていた。

「……ねえ、律子ちゃん」

「何ですか？」

「一体、何個ケーキ買ってきたの？」

「えっと……二〇個ですけど、少なかったですか？」

いや、十分に多いと思うよ。

でも……ね。

「ふうーっ、食べた、食べたっ」

それを全部一人で食べた人がいるんだよね、ここに。

満足した顔でお腹を擦り、まだ箱の中を見ている和音さん。目の
前には食べ終えたケーキの残骸とも言わべきフィルムやら銀色の受
け皿（？）やらが散乱し、見事な山を気付いていた。

「ねえ、僕の事を無視しないでよお」

「……そう言えば、そこにいたのを忘れてましたよ。仲良く副生徒
会長とやってください」

「いやーっ、見捨てないで！」

部室の隅　特設会場の如くライティングされた場所で部長が副
生徒会長とお茶をしているが、かなり迷惑だつて顔で俺に助けを求
めて来たが軽く受け流した。

どうしていつも賑やかなんだろうね……ここは。

第九話：見知らぬ部屋へようこそ。

ここはどこだろうか？

目が覚めたら俺は見知らぬ部屋にいた。隣には同じように眠っていた律子ちゃんがいたが、怪我をしているような風でもなく何かの薬で眠らされていたようだ。それは俺も同じなんだろうけど、それに関しては一っだけ思い当たる事がある。

……陰謀？ 策略？

一瞬、頭の悪い事が過ぎったが、そろそろ現実を見つめなくてはいけないだろう。

「ふむ……困ったな」

「困ったように見えませんよ、伏峰先輩」

泣きそうな顔をして俺を見上げるパンツ丸見えの律子ちゃん。

先ほど目が覚めたばかりなので、まだ寝ばけたような目をしていつにも増して天然っぷりが上がっているようだ。しかし、今日は可愛い猫さんプリントがされたピンクのパンツですか……これまた律子ちゃんに似合って可愛いものだ。

「ピンクのパンツが丸見えのところ悪いけど、これでも困っているんだよ」

「え？ あ、きゃあ また見られたっ」

慌ててスカートの裾を掴んで隠した律子ちゃんは、俺を見上げて口を尖らせる。別に見たくて見たわけではないが、いつもサービス精神が旺盛でいい心がけたよ、律子ちゃんは。

と、今は律子ちゃんのパンツ談義をしている場合でなく、ここがどこなのかを把握しなくていけない。

「……とりあえず、ここから出ようか」

目の前にある鉄製の扉に手を伸ばしてノブを廻してみたが鍵が掛かっており、開く気配はなかった。

……やっぱりな。

薬まで使って眠らせた俺達を素直に帰すわけもないよな。出入り口はここだけのようだし、この扉を開けない限りは外には出られないらしい。

「伏峰先輩……あ、あの、どうしたんですか？」

「どうやら閉じ込められたようだね、俺達は」

「え？ ええーっ」

ありったけの声を出して尻餅を付いた律子ちゃんは、驚きで目を見開いていた。その気持ちは分からなくもないが、この状況では一番可能性が高い事柄を考えると一つの結論に行き着く。

……誘拐。

一応は年上としての威厳というものがあるのでここは冷静に対処するべきだろうが、面白そうなので少し律子ちゃんて遊んでみるのもいいかも知れない。

「まずは落ち着こうね、律子ちゃん」

「は、はい……」

「それじゃ、どうしてこうなったのかを最初から考えよう」

コクンッと頷いて目元に溜まった涙を拭っていく律子ちゃん。さすがにこの状況は女の子には厳しいものだろうな。意味も分からずにこんな部屋に閉じ込められたら、誰だって怖いだろうし、不安にもなるだろう。

今日の事を一つずつ思い出してみよう。

俺と律子ちゃんは今日の放課後いつものように部室へ行き、いつものように変態部長と和音さんの相手をしていた。

それはいつもと変わらない日常的な光景で律子ちゃんもいつもと変わりなかったが、そこにいつもとは違うものが一つだけ存在していた。

「和音さん、それ何ですか？」

俺がテーブルの上に置かれた筒状のものを指差すと

「ん？ ああ、これは華子^{はなこ}が持ってきたんだよ。『皆さんで飲んでくださいませ、おほほほっ』って言うてな」

モノマネをしながら嫌そうに眉をしかめる和音さんが、それを手で掴んで俺に投げて寄越した。

「そう言えば この前、田乃中さんが持ってきたケーキはおいしかったねえ」

「はい、おいしかったですね。でも、あれは海藤部長がもらったものじゃないですか？」

「さすがに僕一人で食べれる量じゃなかったしね……あれは」

思い出すように話をしている律子ちゃんに苦笑いを浮かべて手を振る変態部長。

部長と律子ちゃんが話の内容は今から三日前に遡る。

変態部長と副生徒会長が仲良く（？）電腦革命クラブでお茶会をしているときに「私は翔様を信じていますわ」と、部長と固く握手をして高さ一メートルはあろうかという五段重ねのケーキを取り出したのだった。

副生徒会長は変態部長である海藤翔が大好きなのは周知の事実で、一年の頃から何度も告白しては玉碎されているのに懲りない猛者である。部長も「いい加減にして欲しいよ」と言いながらも女の子に甘いのに、唯一苗字で呼ぶほど苦手意識がある人物なのだ。

それほど副生徒会長の愛は重いと、言う事だろうね。

で、その愛の結晶とも言うべきケーキには『愛ラブ翔様』と描かれた三〇センチほどの板チョコがあり、それを和音さんは親の敵のように叩き割って食べていた。ラベリアのケーキを二〇個も食べたあとであの勢いと鬼のような形相はなんとも言えずに怖かった。もしや嫉妬か？ と思ったが、ただ単に副生徒会長が嫌いなだけで、「ちっ、おいしいじゃないの」と不満を口にしながらもケーキは半分以上一人で食べていた。

まあ、回想の回想はこれくらいにして。

「んっ、これは……紅茶？ いや、緑茶かな？」

俺が受け取ったのは小さな筒状の入れ物で、中を開けてみると緑茶の葉をすり潰したような粉が入っていた。

……なんだ？

鼻を近づけてみると、ほのかに香ってくるのは緑茶のような爽やかな香りで、頭の中をリフレッシュしてくれそうだった。

しかし、何故こんなものを副生徒会長が持つてくるのだろうか？

「まあ、華子が持つてきたけど変なものじゃないでしょ……律子、淹れてみてよ。それと確か、お菓子あったよね」

「あ、はい 分かりました。お菓子はそっちの棚に入ってますよ」
面倒臭そうに俺の手元を指差して立ち上がった和音さんは棚の方へ歩いていき、律子ちゃんは俺の手から筒状のものを取り上げて早速お茶の準備を始めていた。

「で……部長も一緒にお茶を飲んで、気付いたらここにいた。って事ですよね？」

思い出して何度も頷いている律子ちゃんに俺は一つだけ頷いて肯定した。

律子ちゃんが用意してくれたお茶を飲みながら和音さんが棚から引っぱり出してきたお菓子を食べ、変態部長も一緒になってお茶を飲んで楽しく談笑をしていた。

が、そんな中 急激に襲ってきた眠気に何事かと思っていたが、和音さんと律子ちゃんも同じようにふらついているのが目に飛び込んできた。何が起こっているのか分からずに遅い来る眠気に抗う事も出来ず、眠りに落ちていく意識の中で誰かの笑う声を聞いたような気がした。

「そうだね……律子ちゃんの淹れたお茶を飲んだよね」

「なっ、なんで私を見るんですかつ？」

「いや……律子ちゃんが睡眠薬でも入れたのになって」

「そ、そんな事しませんよっ」

ムスッと頬を膨らませて猛烈に抗議をする律子ちゃんを宥めつつ、

俺はこの状況をどう打破するかを考えていた。

……。

「暇だね……律子ちゃん」

「そうですね　　って、違いますよ！　先輩も一緒に出る方法を考えくださいよっ」

眉を吊り上げて俺を睨む律子ちゃん。最近、言動が徐々にだが和音さんに似てきたな。これはあまりいい兆候ではないぞ……早急に対策を講じなければ第二の魔王、いや第二の和音さんになってしまうだろう。

「焦っても何も解決しないって」

「でも、随分時間が経ったと思うんですけど、誰も現れる気配もありませんね」

「そうだね……ちょっとおかしいな」

律子ちゃんが俺の言葉に心配そうに耳を傾けている。

「俺達はこの部屋に軟禁、あるいは監禁されているわけだ。だが、身体は拘束されているわけではないので、逃げようと思えば簡単に逃げられる。しかし、そんな状況でも俺達をここに閉じ込めた人物は現れる気配がないのはどうしてだろうか？」

「そ、それは……忙しいからとか？」

「違う……俺達が逃げられないと確信しているからだろっな」

その言葉は律子ちゃんに衝撃を与えようで、目に溜まっていた涙を一気に溢れさせる結果となった。

俺の言った事は間違いではないと思う根拠は、この部屋には出入り口と呼べるのは扉が一つだけ。窓は一切なく、部屋の中は空調が効いているのか寒いくらいに涼しかった。

「まあ、焦らず行くしかないよ……ねっ、律子ちゃん」

律子ちゃんの頭を撫でて背中を擦ってあげると、俺の身体に腕を廻してきた。

……遊び過ぎたかな。

少し面白半分で遊び過ぎたようだ。ここまで恐がらせるつもりはなかったが、さすがにやり過ぎたようだ。

しかし、この部屋を脱出するためにどうすればいいか見渡してみたが、とりわけ目に付くものはなく困り果てていた。

六畳ほどの部屋の中　　出入り口の扉がある壁面を正面に、その扉の横には小さなシンクとガス湯沸し器があつてワンドアの冷蔵庫まで完備していた。そして右側の壁面にはこの部屋に似つかわしくない大きな二人掛けのソファが置かれ、そのソファの横には幅九〇センチ程のリビングボードの上に幅ピツタリの大きな水槽がある。かなり大型の熱帯魚でも飼育出来そうだが、水槽は空で魚は泳いでいない。

次に左側の壁面には大きな絵画が掛かつており、その下には観葉植物が五つ整然と並んでいた。観葉植物は手入れが行き届いているようで、俺達が来る前にも水をあげたのかきれいな緑色をした葉には水滴がついている。

最後にうしろは水色のカーテンが壁一面を占めており、それを開けてみると壁の変わりにガラス張りになっていた。しかも、開閉が出来ない仕組みになっているようで鍵はなく、ソファがある壁側に邪魔にならないように本棚もない簡素なデスクが一つ置かれていた。他にも小物が部屋の中には乱雑に置かれているが、テレビや時計、ラジオといった時間や情報を得るようなものはこの部屋にはない。

ただ、部屋の中央にあるテーブルの上には昔懐かしい黒電話が鎮座しているが電話線が繋がっていないので、これはオブジェか何かだろう。ついに言えば、俺と律子ちゃんの携帯もなくなっている。これは外部との連絡を取らせないためだろうが、かなり用意周到な事だ。それに俺達を運んできたのなら一人ではないはず。複数犯の可能性が濃厚だが、俺達を捕まえる事に何のメリットがあるのかがさっぱり分からない。

「伏峰先輩……」

「大丈夫だよ。すぐに出れ　　んっ？」

律子ちゃんを落ち着かせようとしていた俺の耳に、突如雑音混じりの音が飛び込んできた。

『こんばんわ、伏峰……そして、梅津さん。下民のお二人にはお似合いの部屋ですわね、お、ほほほっ』

その声はどこか感情を押し殺したように聞こえ、部屋の中へと響いていた。

……どこから聞こえているんだ？

俺は部屋の中を見渡してみたがスピーカーのようなものが一切なく、四方から響く声に出所が掴めなかった。

『探してもスピーカーなんてありませんよ、伏峰。壁の中からサラウンド効果抜群で聞こえるようになってますからねっ。これでシネーマを見たら大迫力ですよ、ほほほっ』

声は俺の名前と律子ちゃんの名前を呼び、しかも俺の行動を見ているような口ぶりである。

……シネーマって、イントネーションおかしいよな。

まあ、声の主はすぐに見当がついてしまったのでどうでもいいが、なんで俺達がこんな目にあっているのかが不思議で仕方なかった。

「副生徒会長、何をしてるんですか？ あなたもかなりの暇人のようですね」

『ごほ、ごほっ 私は副生徒会長なんて者ではありませんっ、違います！ それから、私は暇人ではありませんっ、それでも社交界とか……社交界に向けて忙しいですっ』

明らかに動揺して向こう側でむせ返っている副生徒会長。お茶でも飲んでいたのだろうか、かなりむせ返っているが大丈夫なんだろうかね？ しかも、まだ社交界デビューすらしていないようだな、この人。まあ、ちょっと抜けているところがあるから仕方ないか。

「家に帰りたいんですけど、ここから出してくれませんか？」

むせ返っている副生徒会長には悪いが、これ以上ここで茶番に付き合っているのも馬鹿馬鹿しいので、単刀直入に切り出したが『ダメです』の一言で片付けられてしまった。

『どうしても出たいですか？ どうしても、その豚小屋から出たいですか、下民達よ』

「ええ、家に帰りたいですからね。ところで今は何時ですか？」

『今は九時ですよ。あ、いえ……そうですか。では、今から言う事を実行しなさい』

声の主が提案してきた事に律子ちゃんは驚き、俺は頭を押さえて頂垂れていた。

『この部屋から出るにはパスワードが必要です』

突然そんな事を言い始めた副生徒会長に嫌な予感を覚え、聞き直したところ この部屋は田之中グループが管理するマンションの一室らしい。見事に自分が『田之中華子だ』ってバラしているのに、未だに自分の事はバレてないつもりらしい副生徒会長が哀れになってきたが、この話に付き合わないと出れそうにないので仕方なく話を聞いている最中だった。

『その部屋には翔様と一緒に考えた扉のセキュリティを解除するために必要なパスワードのヒントが散らばっているわ。それを集めて部屋を出る事が出来たら帰してあげるから覚悟しなさいっ』

もう、最後の方は何を言っているのか意味が分からなかったが、小さく機械の動くような音がして扉の横に三〇センチ四方の機械が壁の中から現れてきた。

『その機械にパスワードを打ち込むと、部屋から出る事は出来ますから汗水たらして探しなさい。そして、その部屋から出るためにあがく不様な姿を私に見せて楽しませてちょうだい、ほほほっ』

どうやら、この部屋から出るためにはパスワードを入手して、この機械に打ち込む必要があるようだ。

で、今頃になって思い出したがここには二人ほど足りなかった。部室では一緒にいたのにここで目が覚めたときはいなかったが、約一名の所在は今の副生徒会長の発言で分かった。

「部長はそこにいるんですね。では、和音さんはどこにいますか？」

『翔様は確かにこちらにいらっしやいますわ。でも、桜井さんはあの馬鹿女は今頃あなた達と同じ運命を辿っているでしょうけどね』

「はあ……そうですか」

まさか、変態部長が副生徒会長と一緒にいるとは思わなかったが

『ともちゅあん、頑張つてねえ。こっちはおいしい御飯があるよーっ、一緒に食べたいから早くおいでよっ』

その変態部長らしき声が部屋中に響き渡っていた。

向こうでは何やら副生徒会長が変態部長を止めようとして「きゃんっ」なんて乙女のような声を出しているのが聞こえていたが、その声を最後に雑音は消えて静かになっていた。しかし、変態部長はなんで苦手な副生徒会長と一緒にいるのだろうか？ まあ、女性には優しい変態部長なので、条件反射でお誘いを受けてしまった結果がこれだろう。

ただ、俺達まで巻き込むのは勘弁して欲しいんですけど……あの^{ばか}変態部長は。

「律子ちゃん、聞いての通りだ」

「……はい」

「とりあえず、この部屋を出て和音さんを探して宿めに行くよ。下手すると、このマンションを破壊してしまうかも知れないからね、あの人は」

今は部長よりも和音さんを救出するのが先だろう。あの人が暴れだしたら……考えただけで恐い。

「そ、そうですね……はあ」

頂垂れて力なく返事をする律子ちゃんはこの世の終わりみたいなため息を吐き、俺もその光景を想像して背筋に悪寒が走りぬけるのを感じていた。

……こっちまで死んでしまうな。

暴れ始めたら手が付けられない魔王が大人しくしているタイムリミットは少ないだろう。俺は気合を入れて律子ちゃんの背中を押して部屋の中を搜索し始めた。

第一〇話：部屋の中を搜索中

部屋の中は以外にも整理整頓されており、ほとんど塵など落ちてなかった。

「……何か見つかった？」

「うんしょ……え？ あっ、はにゃっ」

奇声を発して盛大な音がしたのでうしろを振り返ると、目の前にピンクのパンツがあった。

前転をしている途中でお尻を上げたまま止まったような体勢で完全に丸見えになっているのだが、何をしていたらこうなるのだろうか？ さすが律子ちゃんの天然パワーは俺の想像を遥かに越えるものだ。

今日はいつにも増してパンツを披露してくれる日だな。一般男子生徒諸君がここにいたら泣いて喜ぶのだろうけど、俺は耐性が出来てしまったようで素直には喜べなくなっていた。でも、男なので見てしまうのは仕方ないのだよ。

「律子ちゃん、大丈夫？」

「だ、大丈夫で きゃあっ、きゃーっ」

頭を押さえて目を廻していた律子ちゃんは俺を見上げて自分がどんな体勢になっているのか一瞬分からなかったようだが、自分の目に自分のパンツが飛び込んでいる事に気付いたらしく、大きな悲鳴を上げて前転をしながら壁に突っ込んでいった。

……器用だな。

壁の前で目を廻している律子ちゃんを横目に、ここに来てどれほどの時間が経ったのかを考えていた。お腹の空き具合と先ほどの部長達との会話でかなりの時間が経過しているのは判断が取れる。

「パスワードのヒントって言われても何も……………ん？」

不意に視界の隅に何かが舞うのが見えてそちらに向くと、一枚の紙が落ちていた。

それを拾い上げてみると、紙にはミミズが這ったような字で

『言葉の形を変え、文字の意味も変え、その思いを日本ではなくローマで叫び、私の耳に聞かせて欲しい』

と、意味不明な文章が書かれていた。

「はう……目がチカチカします」

そこに頭を振って律子ちゃんが帰還し、不思議そうに俺の持っている紙を見つめているので手渡すと、暫く紙と睨めっこをしたあとで顔を真っ赤にして俺の顔を見つめていた。

「ふ、伏峰先輩……こ、ここに、これって、ラブレターれすかつ？」
「……違う。多分、パスワードのヒントだと思うよ」

途端に真っ赤な顔のまま俯いて座り込んだ律子ちゃんは「そうですか」と悲しそうに一言。何を期待していた知らないが、今はそんな状況ではないだろう。

これだけではまったく意味の分からないただの文章で、これがパスワードのヒントなのかも分からない。とりあえずは他のヒントを見つければこの文章の意味も分かり、パスワードが分かるはずだ。何とかしてヒントを見つけないといけないのだが、見た限りではそれらしきものはない。

「さて、困ったな……」

ソファに腰を下ろして対面にある観葉植物を眺めていたが心は和んではこなかった。

「先輩、お茶でも淹れましょうか？」

「そうだね、お願い出来るかな」

「はい。すぐに淹れてきますね」

行き詰まりを感じた様子の律子ちゃんはこの状況を変えようとしているのか、妙に明るい声で備え付けのキッチンへと歩いて行った。六畳一間でもキッチンはある。そしてトイレもある。まあ、トイレがなければ今頃は大惨事になっているかも知れないが、それは今はいいとして俺は妙な事に気付いた。

目に入ってくる高さも種類もバラバラの観葉植物が五つ。どこか

独創的で綺麗にカットされて何かの形を表しているように見え、一つ一つに丁寧な名前が描かれたプレートが掛けられている。

……んっ？

しかし、俺が名前と思っていたがどうやら違うようだ。俺から見て左のプレートには赤い字で『いちM差M摩』と書かれている。その隣にある観葉植物に掛かったプレートには青い字で『に書J字M』、ついで黄色の字で『さん巢J寄J』、更に紫の字で『よん打M位MJ』と描かれている。一番右のプレートには『1J2F3M……11N12D』と描かれていた。

さっぱり意味の分からない文字と数字の羅列だが、パスワードのヒントだと思う。でも、頭が痛くなってきたのでとりあえずは保留にしておこう。

「お待たせしました」

「ありがとうございます」

トレイに湯呑みを二つ載せてやってきた律子ちゃんはテーブルの上に置き、床に直接座っていた。湯気の立つ熱そうなお茶だが、空調が効き過ぎて寒いくらいのこの部屋では丁度いい代物だった。

……んっ？

湯呑みを手に取って口に近づけたところで、不意に鼻の中を通り抜けたお茶の香りに嗅ぎ覚えがあった。それは忘れる事もない最近の出来事で、ここに来るきっかけになったはずのものだった。

「これ……あのお茶と同じだ」

「え？　そ、それじゃ」

驚いて湯呑みを落としそうになった律子ちゃんに頷き、俺は一口お茶を口に含んだ。

「あっ、先輩っ」

「………多分、大丈夫だろう。このお茶には何も入ってないよ」
喉を通っていくお茶の味を噛みしめながら律子ちゃんに首を横を振った。もし、あのとのお茶に睡眠薬が入っていたのであれば、それは俺達をここに運ぶために必要なものだ。なら、今こうして捕

まっている俺達を眠らせる必要つてものはまったくないわけだから、ここでは睡眠薬の出番はないと考えるのが妥当だろうな。それにあの副生徒会長が関与している……いや、首謀者と見てまず間違いない。

だが、ここで一つ疑問が残る。

あの馬鹿で有名な副生徒会長がこんな手の込んだ事をするだろうか？ 俺の予想では間違いなく裏で誰かが動いていると思う。それが誰なのかは知らないが面倒な事に巻き込んでくれたものだよ。

「さて……お茶も飲んだし、続きをしますかね」

「はい。でも、闇雲に探しても何も見つかりませんよ？ こう、何かヒントのヒントみたいなものがあればいいと思うのですけどね」
勢いをつけて立ち上がった俺に釘を刺すように忠告してきた律子ちゃんは湯呑みをトレイを載せてシンクへと歩いていった。

……確かに。

律子ちゃんの言う通りなのだが、こういう突発的な事って俺は嫌いなんだ。予定が崩れるし、大概は面倒事が降り注いでくるのがオチだし。現にこうして面倒事に巻き込まれてしまっているわけだしな。

「ふう……どうするかな」

ため息を吐き、テーブルの上にある雑誌を手にとった。それは盆栽の雑誌で他にもテーブルの上には数冊の雑誌が置かれていた。あまりにも似つかわしくない雑誌に俺は不思議なものを感じ、中を読んだみたが別段変わったところはなかった。

「副生徒会長の趣味か……？ 渋いな」

そんなわけではないだろうがここまで数があるとかかなりの盆栽好きなんだろうなと思い、雑誌をテーブルの上にきれいに並べていったが、そこで一つおかしい事に気付き、手に取ろうとしたところで

「ふ、伏峰先輩、大変ですっ」

シンクから大声を上げて律子ちゃんが駆け寄ってきた。

「どうしたの？」

「た、大変なのですよ！ こ、これを……」

かなり興奮した様子の律子ちゃんはいきなりお鍋を俺に突き出してた。その瞬間、中から何かが跳ねて水飛沫が飛び、何事か思ってお鍋の中を覗いて見ると不思議なものが窮屈そうに身を横たえていた。

「……イカ？」

「そうなんです！ イカです、ピッチピチのイカなんですよっ」

「律子ちゃんが用意したの？」

「ち、違いますっ。 お鍋を開けたら中に入っていたんですよっ」

律子ちゃんはお鍋のイカを見て「お刺身がいいかな」とか「姿焼きがいいかな」と、すでに食べる事を前提に話を進めているが、そのイカの足に小さなプレートが絡みついて何か書いてある事には気付いてないのだろうか。

「い、ど……う？ 『いどう』って書いているようだが、何の事だ？」

「さあ……これもヒントなんでしょうか？」

律子ちゃん是不思議そうに首を傾げているが、多分これはパスワードのヒントだろう。ワンドアだが冷蔵庫もあるのに、何故イカをお鍋に入れておく必要があるのか？ それにこの変なプレートは明らかにヒントのつもりだろうけど、まったく意味が分からなかった。「とりあえず、このプレートはもらっておくよ。イカは好きにしたいよ、律子ちゃん」

「分かりました。それじゃ、何か作りますね」

気持ちの良い返事をしてシンクまで戻っていく律子ちゃんは楽しそうにお尻を振っていた。

……完全に今の状況を忘れているようだな、あの娘は。

でも、お腹が空いては何も出来ないし、血糖値が下がっては思考回路もともに働かない。ここは栄養補給してリフレッシュするべきだろう。

「律子ちゃん、出来たら教えてね。それまでは探しておくから」
「はい」

これまた気持ちの良い返事をして俺に背を向けている律子ちゃん。時折「えいっ」「せいっ」と気合の入った声が聞こえているが、イカと格闘でもしているのだろうか？ 何だかイカにかなり分が悪そうなのがするけど、俺は俺の仕事をしますかね。

……。

……。

「先輩、出来ましたよーっ」

「ん？ ああ、分かった」

観葉植物を調べていたところに律子ちゃんの声が響き、搜索は一時中断された。鼻腔をくすぐっていくいい匂いに誘われて俺はうしろを振り返って固まっていた。

……ジーザス。

思わず無神論者でも神にすがりたくなる光景が広がっていたのに驚いた。

「律子ちゃん……………これは一体？」

「イカの姿焼きです。味付けは醤油と隠し味が少々シンプルなものですけど、おいしく出来てると思いますよ」

自信満々に胸を逸らし、和音さんに負けず劣らずの膨らみをプルンと揺らす律子ちゃん。和音さんのそばにいるから目立たないが、大きさは学園内でもかなり上位に入りそうなものである。

いや、今はそんなアダルティな情報は置いといて、このナイスな腰つきで踊るイカは何だろうか？ まあ、イカに腰があるのかは疑問なのだけど。

「何故、お皿の上で立っているのかな？」

「飾り付けに凝ってみました。結構、バランス取るの難しかったんですよ」

いや、立たせる必要があるのだろうか？

お皿の上には醤油がしみ込んだ黒光りするボディを惜しげもなく

晒したイカが一〇本ある足（実際は『腕』らしいけど）を器用にくねらせてポーズをとっている。その周りに色とりどりの野菜が茹でられて添えられているが、イカのインパクトが絶大でどうでもよかった。

……すごいな、こりゃ。

ある意味芸術だがこの姿焼きを食べると言われても、この妖しげなポーズを前にしては食欲が吸い取られているような気がする。まるで某ロープレゲームに出てきそうな踊りだな、これは。

「さあ、温かい内にどうぞ」

「あ、ああ……律子ちゃん、さすがにこのままでは食べれないので、切ってくれるかな？」

「え？　そ、そんなっ……イカさんを切るなんて！　そんなかわいそうな事、出来ませんよっ」

そんな事を言っているには食べれないではないか。しかも、先ほどシンクでイカ相手に格闘していたのはどこの誰だっけ話である。しっかり焼き上げてここまで料理をしたのであれば、最後まで食べてあげるのが礼儀というものだろう。

しかし、本当に嫌がっているようで目に涙まで浮かべてお皿を抱え、俺を睨んで「先輩の人でなし」と言い放ち、イカに話し掛けていた。

……壊れたな。

今の律子ちゃんを相手するにはかなりの精神力が必要になりそうなので、ここは無視してヒント探しをした方がよさそうだ。

と、その前に　完全にイカの登場で忘れていた事を今思い出した。

それは盆栽の雑誌を揃えているときに気付いたのだが、この雑誌は去年の雑誌で一月号を一番下にして順番に積み重なっていたのが途中に抜けている月がある事に気付いた。

「五月号と七月号が見当たらないな……」

テーブルの上で雑誌を確認してみたが、やはりその二ヶ月分だけ

がなかった。それがどうしたと言われたらそれまでなのだが、雑誌の程度から見てみるとかなり大切にされているようなので買い忘れという事は考え難い。そうなると意図して置いてないのか、それともまったくの偶然なのか、それは分からないが一応は頭に入れておいた方がよさそうだな。

「ところで伏峰先輩」

「ん？ 何かな」

「さっきお料理していたときに見つけたんですけど……」

お皿を大事そうに抱え、涙を拭っている律子ちゃんが俺の前に小さな紙切れを置いた。

「ん？ これはどうしたの」

「包丁を取ろうと思ってシンクの下を開けたら、包丁の柄に巻き付けられていたんです」

そう言っただけから取り出したのか右手に持った包丁を指差している律子ちゃんは、包丁を振り回して何故か上機嫌に鼻歌を歌っていた。

危ないので出来れば止めて欲しいが、今ここで万が一にも律子ちゃんの機嫌を損ねてしまつては俺の命が危ない。ここは大人しく目の前に置かれた紙に目を通すべきだろうな。

「……………アホだ」

そう思つて紙に目を通したが、まったくもって意味不明だった。

「どうしたんですか？ 先輩」

「……………律子ちゃん、包丁は元の場所に戻してこようね」

「あ、はい」

トコトコと歩いていくうしろ姿はとても可愛い律子ちゃん。

しかし、ほんの数秒前 身体を乗り出した律子ちゃんが、どういう加減かは分からないが包丁を振り下ろし、俺の右中指が第二関節から分離されるところだった。

律子ちゃんの天然ボケパワーがここまで予想外なものだったとは……始めて知つたよ。あの娘ならヒットマンにもなれるだろう。そ

れもかなりの凄腕のヒットマンに。

「先輩、これ食べますか？」

「ん？……ああ、もらっておくよ」

包丁を置いてきた律子ちゃんが俺の前に差し出してきたのはアイスだった。

お腹が空いている今に食べるのは少し違うような気がするのだが、何も食べないよりはマシだろう。ありがたく律子ちゃんから受け取ってアイスを食べ始めたが、不思議そうに俺の持っている紙を見つめている律子ちゃんに「読んでみて」と手渡した。

「……………え、えつと……………あ、あの」

「何も言わなくていいよ」

小さく乾いた笑い声を上げている律子ちゃんは、これまた小さく頷いて紙を俺に返してきたのでテーブルの上に置いた。

その紙には『10本足のうしろをピッタリとくっ付け』と書かれた下に『の答+（携帯の電波・（一年で逃亡した月））＝愛の言葉』と、もう一つ暗号らしきものがあつた。

「謎が謎を呼ぶって感じたな……………こりゃ」

「……………ですね」

頭を抱えている律子ちゃんはテーブルに置かれた紙と睨めっこをしていたが、小さく息を吐いて肩を落としていた。さて……………真面目にしないと本当に出れそうにないみたいだな、これは。

第一一話：大変な事になったもんだ。

まずはパスワードのヒントを整理しよう。

そうしないと頭が混乱したままでも何も進まないし、律子ちゃんは頭から煙が出ているような顔をしている。

「では、今まで見つけたヒントらしきものを一度整理しよう」

「は、はい。でも……どうするんですか？」

首を傾げて困り顔の律子ちゃんに「それは今から考える」とだけ伝え、テーブルの上に今まで見つけた紙を並べていった。

『言葉の形を変え、文字の意味も変え、その思いを日本ではなくローマで叫び、愛の数は数える必要はない』

これが一番最初に見つけたヒントらしきもので、次に目に付いたのが観葉植物に掛けられた謎のプレート。そして、イカに付いていた『いどう』と描かれた小さなプレートが一つ。

そして、『10本足のうしろをピタリとくっ付け』というヒントと『携帯の電波・（一年で逃亡した月）＝愛の言葉』という変な公式のようなもの。

これが今まで見つけたパスワードのヒントらしきものだ。

「……一度にこれだけ見つかると、さっぱり分かりませんね」

「一つずつ解読するしかないよ。最初はこれからいこう」

紙を覗き込んでいる律子ちゃんに指差して、俺は一枚の紙を取り上げた。

それは『言葉の形を変え、文字の意味も変え』と書かれたもので、何となく意味が分かり始めていた。

「これは言葉の形を変えろって意味だろうな」

「ですね。でも、『日本ではなくローマで叫び』って何ですか？」

「多分だけど……日本語をローマ字にしろって事じゃないかなと思う」

「……………ああっ」

納得したように手を合わせている律子ちゃん。

この手のヒントでは一見して意味が違うような文章にしても、妙に浮いて見える個所があったりするものだ。この場合は『言葉の形を変え』と『日本ではなくローマで叫び』という二つで、日本語をローマ字に変えると判断したわけなのだが多分間違いはないと思う。

「そうなると日本語……つまり、ひらがなとか漢字をローマ字にするって事ですか？」

「多分、ね。まあ、それらしいのはそこにあるんだけど」

俺の指差す先を見て「あっ」と小さく声を上げて近寄っていく律子ちゃん。俺が指差している先には高さもバラバラの観葉植物があり、それに掛けられた意味深なプレートだった。

「なんですか、これ？」

「それが分かれば苦労しないよ」

「ですね……すみません」

シュンつと頂垂れて観葉植物を見つめる律子ちゃんだが、必死になってプレートを見つめている。しかし、そのおかげで自分の事はお留守になっているようで、スカートが何とも困った事になっていた。

「先輩、これってアルファベットも混ざってますけど……これはどうしたらいいんでしょうか？」

「それはまだ分からないよ。とりあえず全部ローマ字に変換するのは手っ取り早いだろうね」

「分かりました！ やってみますっ」

一度振り返って気合の入った声でプレートに描かれている文字を声に出して読み始めた。観葉植物の方が律子ちゃんにとりあえずは任せておいて、俺はもう一つのヒントを解読する事にしよう。

「一〇本足のうしろ……くっ付いて？」

この一〇本足っていうのはこの部屋で見る限り、先ほど律子ちゃんが発見したイカくらいしかないだろう。それに一般的な一〇足の

生き物ってイカくらいしか思いつかないし。

だが、『うしろをピツタリとくっ付け』というのは意味が分からない。何がうしろをピツタリとくっ付くのか？ それらしいものなんて……。

「あつ……これか」

それはイカに付いていた『いどう』と描かれた小さなプレート。これをイカに付けるって事か？ 元々はイカに付いていたのだから、今更それはないか。それにイカはもう調理されて醤油のいい香りがするダンシングフィーバー状態になって今はシンクで出番を待っている状態だ。

「んーっ……はうっ」

「どうしたの、律子ちゃん」

頭から抜けるような声を出し、ヘナヘナと座り込んだ律子ちゃんが俺を振り返って

「意味が分かりませんよお」

と、涙をいっぱい目に溜めて一言。

そんなに簡単に分かったら意味がないって。それにただ声に出しているだけでは分からなくなるのは当然だ。

「この紙に書きながらやった方がいいよ。それと……ん、この部屋はペンがないのか？」

俺はソファから立ち上がってデスクの上にあったノートから一枚引き千切って律子ちゃんに差し出し、書くものを探したが目に付くところにはなかった。

「あつ、探します」

目元に溜まった涙を拭いながら立ち上がった律子ちゃんはデスクの引き出しを開けたが、あまりの状況に固まって俺を見上げていた。

「……す、すごいですね」

「だね。まあ、探し物が見つかったからいいじゃない」

その引き出しの中には無数のペンが入っていた。ボールペン、マジック、サインペン、羽ペン……世界中のペンがここに揃っている

のではと思うほどの品揃えでお店が出来そうだった。

「あ、あれ？ ……でも、このペンおかしいですよ」

「ん？ 見せて」

律子ちゃんが持っているボールペンを取り上げて見てみると、肝心なものがなかった。

「芯がない？ ……こつちもないみたいだ」

「これもないです。それも、これも……あつ、こつちもないです」

引出しの中にあつたボールペンの類は目^{たぐい}に付くものだけで一〇本以上、ペン芯が入ってなかった。

これはヒントなのか？ それも違うのか？

全部を確認するのはかなりの時間を要する。ここで時間を取られていては先に進む事は出来ない。

「とりあえず、このペンはおいて他のペンを」

「あつ、これ使えそうです。それにこつちも使えますよ」

と、一つのサインペンを取り上げた律子ちゃんが紙にペンを走らせていく。

確かに書けているのだが、何故に俺の名前を書くかな……しかも、赤のサインペンで。

「それじゃ、そつちは任せたよ」

「あ、はい」

俺は観葉植物の方を律子ちゃんに任せて他のヒントを解いていく事にした。

まずはイカを考えようか……。

律子ちゃんにもらった茶色のサインペンを使ってノートに『イカ』と『いどう』の文字を書いて睨めっこを始めた。

「……………イカ、いどう」

見つめてもさっぱり分からん。

「えつと…………『いちM差M摩』をローマ字になおして」

小さく声に出してペンを走らせる律子ちゃんは、順番に観葉植物のプレートに描かれた文字を書き写していた。

……真面目だね。

健気に頑張るうしろ姿を見ながら俺はノートに目を落とした。

そこには俺が書いた茶色の文字が踊っているわけだが、目を凝らしてみると光の加減で紙がデコボコしているのが見えた。

「律子ちゃん、引き出しの中に鉛筆あった？」

「え？ えっと……なかったと思いますけど」

首を傾げている律子ちゃんに「ありがとう」と声を掛けて俺はもう一度デスクを調べ始めた。ただ、先ほどの引出しにあれだけのペンがあったので他にはある可能性は低いが、あと二つ引き出しがあるからそのどちらかに鉛筆が入っている事も祈ろう。

……。

……。

しかし、俺の考えを打ち砕くように引き出しの中にあつたのはまったく予想とは違うものだった。

小学校の教科書が数冊と『鈴木』と名前が入った女子の体操服（しかも上下セット）……小学校時代にタイムスリップしたような机だな、これ。

そう言えば、小学校時代にはほぼ必ずといってどのクラスにも机の中に給食のパンを入れたままにしてカビが生えていたヤツがいたな。それを笑っていたヤツも実は同じ事をしていたって畏もあったけど。

「しかし、これは使い道が」

一番下の引き出しを閉めようとして手を掛けたところで、奥の方からコロコロと黒いものが転がってきた。

……炭？

それは五センチほどの大きさをした炭で、一つではなくて全部で四つ奥から転がってきた。この引き出しには体操服が入っていたから、もしかしたら湿気取りのためだろうか？ しかし、この部屋にあるのは何とも不思議なものばかりだ。

でも、この炭を鉛筆代わりにしてノートを擦れば何が書いてあつ

たか分かるかも知れない。

炭を掴んでノートの上を軽く擦っていくと、炭で黒くなった部分と白く残った部分がハッキリと分かるようになってきた。

「……………はあ」

だが、そのノートに書かれていたのは『ご苦労様。頑張って擦ったけど、これはハズレだよ』の文字だけだった。

変なところに手が込んでいるというか、馬鹿にしているというか、ここを出たら副生徒会長に仕返しをしないと気が済まない。そう思っ
て炭を置こうとしたが、ノートにはまだ何か書かれている跡が残っていた。

『ここまで見つけたあなたの執念はすごい。その頑張りとお執念に敬意を払ってパスワードを教えましょう。ただし、あなたに少しでもプライドがあれば、このまま見ない事を忠告しておきます』

更に炭を擦って出てきた文章には最早何も言う気力がなく、握り潰してしまい衝動に駆られた。

……………かなり挑発的だな。

『プライドがあれば』ってところが何とも挑発的で、和音さん辺りには一番効果的な言葉だな。ただ、もし和音さんのところに同じ仕掛けがあっても気付かない可能性の方が高いので、これも無駄に終わるだろうけど。

「……………プライドか」

確かに俺にもプライドはある。

これでも自尊心は強い方だと思っているので、『やられたら倍返し』と『やられる前に潰してしまえ』が俺の信条だ。少々、自尊心とは違うところの話だけど、俺はやられっ放しは好きではない。

が、しかし。

この状況でプライドうんぬんを言っている場合ではない。寧ろ、今はプライドを質屋に入れてでも家に帰りたい気持ちが勝っている。家に帰ってゆつくりと晩御飯を食べて、好きな本を読んで、昨日深夜にやっていた映画を録画したので見るのを楽しみにしていたのに、

その全てを副生徒会長と部長に邪魔されたわけだ。

「答えを見て、さつさとここを出るか」

胸の奥に渦巻くちょっぴりダークでブラッティな心を押さえ込み、最初に塗り潰したページの隣を黒く染めていく。しかし、黒くなったページを見て違う意味で俺のプライドは木っ端微塵に砕かれていった。

『こんなところまで塗り潰して暇人ですね。あなたはプライドを捨てて馬鹿正直にここを擦って、そしてこれを見て怒りを覚えてますよね？ それとも面倒な事は相変わらず嫌いですか？ 伏峰智樹さん』

そこに書かれていた内容は完全に俺を名指して馬鹿にしていた。そして、ページの最後には『あなたの恋人』と書かれていた。

……これは。

それによく見てみると、恋人の『恋』の字を『変』と書いてわざと消したようにして上に書き直している節がある。もし、この暗号を考えたのが”あいつ”なら、厄介な事になりそうだな。

「どうかしたんですか？ 先輩」

「いや……何でもないよ。それより、そっちはどうだい？」

「意味が分からないです、これ」

半ベソで俺を見つめる律子ちゃんに手に持った紙を俺に見せているが、そこにはびっしりとローマ字が書かれていた。

『ICHIMSAMMA』『NISYOLUM』……と、それ以降も頑張って書いたらしく、疲れた手を振っていた。

「ご苦労さん。少し休んでいいよ」

「は、はい……ふう」

小さく息を吐いてテーブルに突っ伏した律子ちゃんに、俺は冷蔵庫庫まで行って中から麦茶のボトルを取り出し、シンクに置かれていたコップと一緒に手渡した。

「さて、困った。ヒントを解読するには少々厄介な事になってきた」「そう、なんですか？ 私はもう疲れましたよ……これって、何の

意味があるんでしょうかね」

律子ちゃんの言うのも分かるが、この事態に”あいつ”が関与している事はほぼ確実だろう。これほど手の込んだ事を副生徒会長一人でするには無理があるし、第一あの人の頭では不可能な事だ。

「……先輩、どうしたんですか？」

「ん？ いや、何でもないよ」

「そうですか。でも、何だか難しい顔をしていますよ？ あ、あの…

…私では力にはなれないかも知れませんが」

必死になって身体を乗り出してくる律子ちゃんの迫力に圧倒されてしまった。

「ありがとう。多分、このパスワードを考えたのは……あいつだ」

「あいつって……誰ですか？」

俺が渋るのを見てただならぬ雰囲気を感じ取ったのか、息を飲む

律子ちゃんは居住まいを正して座り直していた。

「……まあ、話しても問題ないか。

俺は小さく息を吸い込み

「妹だよ」

ゆっくりと言葉として吐き出していった。

第二二話：問題児は一人でいいのだが……。

妹。

この前、変な三人組が押し寄せて嵐の如く去って行ったのは記憶に新しいが、俺の言っている『妹』は血の繋がりが半分ほどある『従妹』の事だ。

「……永井小春さん？」

「そう。俺の従妹で、学園の一年生だよ。ちなみに小春は漢字ではなく、カタカナで書くから間違えないように」

「あつ」と声を上げ

「永井さんだ」

驚いたように俺の顔を見つめていた。

「知ってるの？」

「はい、クラスメイトです。『名前にカタカナの子がいる』って入学式のとくにちよつと話題になったんですけど……」

「その先は言わなくても大体想像がつく。『明治って言うなっ』でしょ？」

俺の言葉に更に驚いたように何度も頷く律子ちゃん。

そうか、コハルは律子ちゃんと同じクラスだったのか。しかし、入学して一度も会ってないよな……あいつとは。

永井コハル　七曜学園に今年入学した一年生で、入試ではトップクラスの成績を誇った才女である。

すでに某有名国立大学入試レベルの問題集は余裕で解けるほどの知識を持っており、「高校には入学する気はサラサラない」と言っていたのに、どういう心の変化なのか知らないが願書締め切り当日を気まぐれで応募して合格したはた迷惑なヤツである。

しかし、コハルは天才的な頭脳を持っているせいなのか、難しい方ばかり考える癖がある。簡単な答えが目の前にあるのにそれを

迂回して遠回りをしてまったく違う答えを導き出してしまったり、小難しい言葉や解説をして聞いている人間を困惑させたりする事がある。

ちなみに『明治って言うなっ』とは名前の話題が出るだけで自分とは関係ないのに逆ギレをして襲い掛かるコハルの被害妄想甚だしい行動の一環だったりする。理由は「カタカナの名前が明治時代っぽいから嫌だ」と可愛いものなのだが、やる事はかなりエグイ。まあ、人の道を外れた事をしないだけマシだが。

「でも、永井さんと伏峰先輩が従兄妹同士なんて知りませんでした」「多分知っているのは先生くらいだろうね」

俺はあまり自分の事を話すのは好きではない。別に家族に何かあって離れているとか、不仲でギクシャクしているとか、そういうのではないけど家族の話を他人にして何の意味があるのか分からないからだ。それも自分の事を話しても話を聞いた人間が一〇人いれば一〇人の受け取り方があるはず。俺の言葉をしっかりと聞いてその意味を理解してくれる相手なんていないだろう。

だから、部長や和音さん、それに律子ちゃんが知っている俺という存在は見たままの『俺』であって、本当の『俺』は知らないだろうな。

「でも、永井さん頭いいから……こんなの私には解けないですよ」

「大丈夫だよ。コハルは考えるのは得意だが、その先は馬鹿だから」

「……そう、なんですか？」

不思議そうに首を傾げる律子ちゃんに俺はノートを差し出した。

そこには先ほど黒く塗り潰したページを読んでいく律子ちゃんは次第に険しい顔つきへと変わっていった。

「これを永井さんが？」

「そうだね。最後に『あなたの恋人』ってあるでしょ……それが証拠だよ」

この『あなたの恋人』という一見すると何でもない言葉だが、これにはコハルと俺にしか分からない意味がある。

それは『恋』の字を何故かコハルは『変』と書く癖があった。何度言っても「私はこっちの字が好きなの」と意味の分からない事を言って、その癖を直そうとはしなかった。

天才とは気難しいものだと思いながら、「このままラブレターでも書いたら、『恋人』ではなく『変人』だな」と、小さく呟いたのをコハルは聞き逃さなかったようで「それじゃ、トモ兄は変人だよ」と更に意味不明な事を言っていたが、それ以降は普通に書くようになった。

「そこにも書き直した跡があるでしょ？」

「あつ……そうですね」

今の話を聞きながら律子ちゃんは真つ直ぐにノートを見つめていたが、徐に顔^{おもむく}を上げ

「まるで先輩に気付いて欲しいみたいです」

少し不満そうな目を向けていた。

……気付いて欲しいか。

律子ちゃんの言う通り、コハルは寂しいのか知れない。多分、この学園でもいつも一人にいるのだろうし、自分から友達を作るようなタイプではないし。

「そうかもね……だけど、今はここを出る事を考えないといけない。律子ちゃん、書いた紙を貸して」

「はい、どうぞ」

俺は律子ちゃんが必死に書いた紙を受け取って目を通した。

……見事に意味が分かん。

しかし、これをコハルが作ったのだとしたら相当捻くれている可能性もあるだろうな。だが、逆に相当簡単に出来ている可能性もある。まずは色々な事を試してみる必要がある。

「律子ちゃん、これ全部ローマ字にしたの？」

「あ、はい」

そうなると、これは少し違ってくるのか知れない。

数字はローマ字に直す必要があるのか？ それに元々がアルファ

ベットも混ざっているわけだ。素直に漢字だけを抜き出してローマ字に変換するというのはどうだろうか？ 仮にローマ字に変換にしても、『I C H I M S A M M A』『N I S Y O J U M』では変換のしようがない。素直に『いちM差M摩』から平仮名と漢字だけを取り出してローマ字に変換すると『I C H I S A M A』となる。

……さっぱり分かん。

何だか無駄な事をしているような気もしてきたぞ。

「……先輩、一ついいですか」

「どうしたの？」

「一番右のはどんな意味があるのか考えていたんですけど」

俺が持っている紙を指差し、そして観葉植物の一番右側を指差す律子ちゃん。

確か、一番右は数字とアルファベットで『1 J 2 F 3 M……1 1 N 1 2 D』と描かれていただけ。

「あれって一月から一二月を表しているんじゃないですか？」

「……一月から一二月？」

「はい。『1 J』は『1月、J A N U A R Y』。『2 F』は『2月、F E B R U A R Y』って事だと思うんですけど」

自信がなさそうに俺を見つめる律子ちゃんは

「これだけ日本語に出来ないのどうしようかなって考えていたんですけど、ずっと見ていたらもしかしたらって思ってた……で、でも違うかも知れませんか」

怒られた子犬みたいに瞳を震わせて何故か逃げ腰になっていた。

……ああ、そうか。

確かに律子ちゃんが言っているその法則で当てはめていけば、他の数字とアルファベットも一致する。ここに描かれていない他の月も同じ法則でいけば問題ないって事だろう。

「よく分かったね。偉いぞ、律子ちゃん」

「は、はいっ」

とりあえず一つ謎が解けたのでご褒美に頭を撫でると嬉しそ

うに微笑む律子ちゃんは、尻尾があれば間違いなく千切れんばかりに振っているだろうと思えるほどのスマイルだった。

……眩しい笑顔だ。

いや、今はそんな事はいいとして、その謎が解けたおかげでもう一つの謎が解けそうだ。

「そうか……『一年で逃亡した月』と言うのは、この盆栽の雑誌か」
妙に気になっていた盆栽の雑誌。

その雑誌の背表紙には、よく見れば何月号という表記を日本語と英語の二つでしていた。これが『一年で逃亡した月』というヒントとして、律子ちゃんが発見した読み方に結びつけるのが自然な考えだろうな。

それ以外にこの部屋で一年を表すようなものはないので、とりあえずは消去法でいかないと先に進まない。

「雑誌、ですか？」

「そう。この雑誌はね、五月と七月がないんだよ」

テーブルの上にある雑誌に手を載せて叩き、抜けている月を読み上げる。

「五月は『MAY』、七月は『JULY』……つまり、『5M』と『7J』って事だ」

「……あ、本当だ」

少し遅れて納得した声を上げる律子ちゃんは掌に指で書いていた。「だが、このヒントをどこで使うのか分かればいいのだが」

「ですね。あ、そう言えば……このプレートに小さく文字が描かれているんですけど」

ポンっと思い出したように手を叩いて律子ちゃんが指差したのは、たった今問題になっている一番右のプレートだった。

……そういう事は早く言おうね、律子ちゃん。

重い腰を上げて立ち上がった俺は観葉植物の前まで歩いていき、プレートを手に取ってみた。そこには律子ちゃんの言う通り、小さく『数を抜かないと答えは育たない』と描かれていた。

「……謎掛けばかりだな、ここは」

苦笑している律子ちゃんは「疲れました」と立ち上がって冷蔵庫のドアを開けて座り込んでいた。出来れば早く律子ちゃんを家に帰してあげたいのだが、副生徒会長が言う事を聞くはずもないだろうな。

「困ったな……はあ」

小さくため息を吐いて何気なくフローリングに目を落としたが、そこに妙な傷跡を発見した。

それはフローリングの床を擦ったような傷跡で観葉植物の前だけに集中していた。よく見てみると観葉植物の鉢が乗っている受け皿（？）には動かした形跡が残っており、前後に微妙なズレが生じていた。

……そういう事か。

普通なら気にならないような事だが、ここでは全てが怪しく見える。フローリングについた傷は前に横にと擦ったような跡で、力任せに動かしたのが一目で分かるものだった。しかし、その傷跡を見ていてこの観葉植物の奇妙な並び方と形が何を意味するのかやっと分かった。

「先輩、プリン食べますか？ あと、エクレアとシュークリームもありますけど」

そこへ「少し、休憩をしよう」と言い出した律子ちゃんが冷蔵庫の前で座り込んでいた。

色々と考えていて頭が疲れてきたので甘いものでも食べるとしますかね。先ほどアイスを食べたけど、お腹は空いているので何かお腹の足しになるものが欲しい。

「そうだね。エクレアをもらおうかな」

「はい、分かりました」

冷蔵庫の中を覗き込んでいた律子ちゃんは頬を緩ませてエクレアらしきものを持ってきた。

「……何、これ？」

「エクレアですよ。えつと……『デラックスジャンボエクレアスペシャル』って名前みたいですよ。私も始めてみました」

俺は律子ちゃんの持ってきたエクレアを見て絶句していた。

……おいおい。

俺の前には長さ三〇センチほどで直径が一〇センチはありそうなエクレアだと思われる物体が入った袋が置かれている。これがエクレアだと言われても誰が食べるのだろうか？ 買うのだろうか？ こんなものが売っているとは始めて知ったよ。

「まあ、これは置いという 律子ちゃん、ちょっと手伝って欲しい事があるんだけど」

「はい、何ですか？」

律子ちゃんの手を引いて観葉植物の前に立ち、ゆっくりと肩に手を置いて

「これを俺の指示通りに動かして欲しい」

真っ直ぐに律子ちゃんの瞳を見つめていた。

「え？ あ、は……恥かしいで ええつ、私が一人でするんですかっ」

「そう。俺が指示するから律子ちゃん一人で頑張ってね」

「う、ううっ……うーっ」

ちよつとしたプリティジョークだったのに律子ちゃんは本気にしたみたいだ。半分は本気で言っているのだが、律子ちゃんもそれは肌で感じ取ったようで俺を見る目が半端なく冷たい。ついでに恐い。「冗談だつて。それより、この観葉植物を動かしてみよう」

「うーっ……でも、何で動かすんですか？」

「それは……この形がヒントそのものだからだよ」

と、観葉植物を指差す。

意味が分からない様子の律子ちゃんに俺はヒントにあつた『携帯の電波』の話をするとな納得してくれたようで、頑張つて動かし始めた。

この観葉植物は一番左側が短くて、次の観葉植物は頂点が逆三角

形に刈り取られた奇妙な形をしていた。

そして、五つの中で真ん中にある観葉植物が一番高く、その次にある観葉植物は二番目に高い。そして、一番右側の観葉植物はごく普通で特に変わった様子はない。それだけでも他の四つに比べたら違和感があるのに、これだけ動かしただけ形跡がまるでなかった。

「うわっ……これっ、お、重たいですっ」

一番左の短いのが軽いだろうと思って動かしてもらおうとしたが、どうやら見た目よりも重かったらしい。力を入れて動かそうとしているがまったくビクともしないので諦め顔で俺を見上げていた。

それを俺が動かす事にして隣にある逆三角形の奇妙な観葉植物をお願いしたのだが

「きゃあっ」

今度は予想外に軽かったようで勢い余って尻餅をついていた。

……見た目と重さがあつてないのか？

他の観葉植物も試しに持ってみたが、重さが見た目とは明らかに違っていた。これは何か意味があるのか？ それともただの力モフラージュか？ コハルの考える事を理解するのは難しいところがあるので困ってしまう。

「まあ、重さに関しては今のところは考えないようにしよう」

考えても分からない事は後回しにして、とりあえずは目に見えているものを解決していく。

何とか律子ちゃんと頑張つて観葉植物を動かし終えて見てみると、観葉植物はある形を表していた。

「これが『携帯の電波』ですか？」

並び替えられた観葉植物は携帯の電波状況を表し、見事に三本のアンテナが立っていた。

「そうだろうね。でも、これが何を表しているのかを解読しないと

」

観葉植物を眺めていた律子ちゃんが振り返り、俺もソファへと戻ろうとしたところで、突然電話のベルが鳴り響いた。

「きゃあっ……び、びつくりしたあ」

「心臓に悪いな、これ」

鳴っているのはテーブルの上に置かれた黒電話が、年配の人には懐かしく、若い人には新鮮な独特のベルを響かせている。驚いて胸を押さえている律子ちゃんと顔を見合わせ、俺は意を決して黒電話に手を伸ばした。

だが、そこで俺はおかしな事に気付いた。

「なんでこの電話が鳴っているんだ？」

「……え？」

「いや、この電話……電源も電話線も繋がっていないんだよ」

そう言っただけ黒電話を指差した俺に律子ちゃんは目を丸くして更に驚いたような顔をしていた。

さすがの俺もこの鳴り止まない黒電話には少々驚きを隠せないが、電話に出ないと先に進まないようだ。律子ちゃんは俺の腕にしがみ付いて「ゆ、幽霊さんだっ」と震えていた。

そんな律子ちゃんを落ち着かせて恐る恐る受話器を取り上げて耳に当てると

『こんばんわ、トモ兄ちゃん』

向こうから少し力の入った挑発的な声が聞こえてきた。

第一三話：疲れた……人生に（いや、そこまではないけど）

受話器の向こうから聞こえてきた声は挑発的で、明らかに俺の事を分かつている相手だった。しかし、俺も声には聞き覚えがあるし、今はこの声の主に一言文句を言いたい気分なのだ。

「コハル、どこにいる？」

『トモ兄ちゃん、そこから出たい？』

まったく俺の話を聞いてないコハル。

「どこにいるんだ、コハル」

『そこから出たくないんだ？』

こいつ、俺と会話する気がないのか？

「出たいに決まってるだろ」

『そう……なら、パスワード教えてあげる』

「何……？」

『時間掛かり過ぎだよ。私なら一〇分も掛からない』

それはお前が考えたからだろうって。

しかし、パスワードを教えるとかを考えているのだろうか？ 何か裏がありそうで素直に聞き入れる事が出来ない。あのノートにもワザと挑発的な文章を書いてほどのコハルだ。

……怪しいな。

だが、そんな事を言っている場合ではないか。

「教えてくれ。律子ちゃんもかなり疲れているようだし、俺一人ならあとで遊んでやるから」

『ふーん……やっぱ、梅津さんが大事なんだ』

「何を言っているんだ？」

受話器の向こうで小さく舌打ちのような息遣いが聞こえたかと思えば

『梅津律子っ、私と勝負しなっ』

部屋中からコハルの声が聞こえてきた。

「きゃあっ」

突然の事に驚き、俺に抱きついて来た律子ちゃんを庇って床に伏せたが、それ以上は何も起きなかった。

「な、何、抱きあつてんのよおっ」

が、静かになった部屋の中にまたしてもコハルの声が響いていた。

「な、何ですか、これっ」

「さあ、ね。でも……この部屋に隠しカメラがあるみたいだね」

「何を呑気な事を言ってるんですか、先輩っ」

俺を見上げて子犬のようキャンキャン吼えていた律子ちゃんだっただけ、今がどんな体勢になっているのかに気付いたらしく、見る間に顔を真っ赤にして「おによおっ」と奇声を発していた。

傍から見れば完全に俺が律子ちゃんに覆い被さって襲っているような格好をしているが、別にそんな感情は持っていない。あくまで緊急事態のために仕方なくこうして保護をしているわけだ。

決断していやらしい気持ちはない……本当です。

「さて、律子ちゃん……」

「な、何でしゃやるか？ ……あ、いや、何で ひゃうっ」

動揺しすぎの律子ちゃんは力いっぱい舌を噛んだようで、とても痛そうに顔をしかめていた。少しの間律子ちゃんと遊んでいた気もするのだけど、そんな暇はないので今は我慢しよう。

それにしてもコハルのヤツ、少し変わったようだな。一年前まではほとんど感情を表に出さない子だったのに、今は怒鳴って声を荒げているし、やけに感情的な子に進化……いや、成長したものだ。まあ、何にしてもこっちの方が人間味があって面白いというものが、ちょっと対処に困ってしまうな。

でも、今のコハルならこの手が通用するかも知れない。

「俺に考えがあるんだ。ちよつと耳貸して」

「オ、オプションでネコミミが出来ますけどっ」

ちよつと顔を近づけただけで途端にパニック状態になった律子ちゃんは、面白い事を口走っている。

……遊びたい。

今の律子ちゃんで遊んだらとても楽しそうなのだが我慢だ。しかし、ここまでパニックになって何を期待しているのだろうかね。

「律子ちゃん……」

「ちよつ、あ、あの……先輩、私 あっ……こ、心の準備がつ」

「いいんだよ。身体のを抜いて、リラックスして」

目の前 五センチほどにある律子ちゃんの顔。近過ぎるので少し寄り目になっている律子ちゃんが面白く、それを堪能しようかと思っていたが

「何やってんの、トモ兄ちゃんっ」

盛大な金属音を響かせ、部屋全体を揺らし、壁が壊れそうな勢いで扉が開いていた。

「何って、見て分からないのか？」

「なっ……わ、分かるわよっ」

「そうか。コハルちゃんのエッチ」

わざとらしく『ちゃん』付けて呼ぶ俺を、驚きと怒り、恥かしさで顔が真っ赤に染まっていくコハルは足を震わせていた。が、腰が抜けるようにその場に座り込んで瞳を潤ませていくコハルが真っ直ぐに俺を見据え、きゅっと唇を結んで睨みつけてきた。

少し吊り上がった瞳に気の強そうに曲がった唇。キツチリと切り揃えられた前髪に、後ろ髪は一つに纏めて肩口で揺れていた。しかし、その顔は昔のままで俺的にはかなり懐かしくてちよつと嬉しかった。

……しかし、俺の考え通りだな。

この部屋に隠しカメラがあつてどこかで見ているのなら、何かこの部屋であれば一目散に駆け寄ってくるかも知れないと思ったわけ、こんなに簡単に引っかけってくれるとは。

「久しぶりだね、コハル。元気か？」

「元気か……じゃないわよ、馬鹿！」

ムスッと頬を膨らませて視線を下げていくコハルは、眉をピクッ

と動かして徐々に不機嫌そうな面構えになっていく。何かと下を向くと、そこには目を閉じて「ど、どうぞ」と、少し震えている律子ちゃんが健気に待っていた。

……さすがは天然娘。

あの爆撃のようなコハルの登場にも動じずに目を閉じているとは、完全に聴覚を遮断して自分の世界へ入っているみたいだな。

「律子ちゃん、おい、律子ちゃん。」

「……ど、どうぞ。か、かかか、覚悟は出来てますからっ」

揺すってみたが俺の声はどこか遠くで聞こえているようで、唇を少し尖らせて明らかにキス待ちの顔をしている律子ちゃんは頬を真っ赤にして可愛らしかった。だが、それが一人の女の子を鬼へと変えたようで、フローリングを踏み割るような足音を響かせて近づいてきた。

「梅津律子っ」

「へ？ 黄色のパン……ひにゃ！」

素っ頓狂な声で目を開けた律子ちゃんはゆっくりと見上げ、鬼の顔を確認して俺の下から目にも止まらぬ速さですり抜けて壁際に張りついていた。新技を披露した律子ちゃんとは対照的に不機嫌極まりないコハルは眉を吊り上げて怒り顔。二人の様子を見ているのも楽しいけど、一触即発の状況では俺にも被害が飛び火するだろうか止めておくか。

「まあ、落ち着いて。ところで……コハル」

「何よっ」

「いつからお前はこんなくだらない事に加担する最低な人間になったんだ？」

少し怒気を含んだ俺の声に驚き、口を閉ざしたコハル。

「……そ、それは」

「コハルは頭がいいから何が悪い事かは分かっているよね」

「ば、馬鹿にしないでっ」

必死に体裁を繕おうとしているが俺の顔を見てまた口を閉ざすコ

ハルは顔を逸らして下を向いた。

「まあ、何でもいい。とりあえずここを出てから話をしよう」

「う、わ……分かったよ」

不貞腐れて俯き加減に俺を見上げるコハルは「痛くしないで」と意味不明な事を言っていたが、俺は一度もコハルに手をあげた事はないはず。まあ、それ以外の精神的攻撃なら数知れず互いに繰り広げてきてけど。

などと考えなら律子ちゃんを起こし、コハルを促して部屋を出ようとした。

「そうはいきません事よっ」

が、『そうは問屋が卸さない』という言葉をこの身で味わう事になろうとは。

出た……迷惑な馬鹿娘。

どこから走ってきたのか知らないが息を切らせて駆け込んできた馬鹿娘は、扉を引き千切らんばかりの勢いで開け放ち、部屋中が揺れていていたがお構いなしに上がりこんできた。

そんな馬鹿娘　副生徒会長を呆氣に取られて見つめる律子ちゃんを一瞥して

「まったく、役に立ちませんわね……」

鼻息荒くコハルに近づいて見下ろしていた。

しかし

「ふん。頭が悪くて出来なかったあんたよりはマシだけど」

逆に言い返してきたコハルに顔が赤くなつていく副生徒会長。

「出来なかったんじゃないくて、しなかったんですっ」

「……やっぱり馬鹿じゃん」

「なっ」

それは思っただけでも口に出して言うては駄目だぞ、コハル。

「コハル、それくらいにしておけ。馬鹿には馬鹿なりの生き様ってものがあるんだ」

「だけど馬鹿に馬鹿って言うて何が悪いのよ。それに、まだ話が済

んだわけじゃないだからね、トモ兄ちゃんっ」

俺を指差して不満を爆発させるコハルだが、俺の視界には段々と豹変していく馬鹿娘の顔が入っていた。

「馬鹿、馬鹿って……誰が馬鹿ですって、天才娘っ」

「……あんだ」

「むきーっ、天才娘に言われたくないですわっ」

けなしているのか、誉めているのか、どっちなのか分からない副生徒会長に悲しそうな瞳で首を振るコハル。

コハルの気持ちは分かるがこの馬鹿娘を今更どうこうするのは無理な話である。筋金入りで国宝級の馬鹿だから何を言っても無駄だろうけど、よく考えてみれば扉は壊されてもう無いし、このままほったらかしにして帰ろう。

何やら言い争いを続けるコハルと馬鹿娘を置いて俺は部屋の外へと出ようと一歩を踏み出した。

「こおら！ 華子っ」

だが、それは敵わなかった。

部屋から出る唯一の出入り口を塞ぐように仁王立ちになっている一人の鬼が、全身からどす黒いオーラのようユラユラと殺気を放ち、一歩一歩ゆっくりとした足取りでこちらへ歩いてくる。

……オーマイゴット。

確実に人を殺りますって顔で近づいてくる鬼 和音さんに今近づくのはかなり危険なのは誰の目にも明らかだろう。

ここは誰かに犠牲になってもらうのが一番だが、ターゲットは副生徒会長だからそのままでもいいか。

「せ、先輩っ 桜井先輩が犯罪者にっ」

「まだなつてないから」

混乱した様子の律子ちゃんが俺に抱きついて来たが、目ざとくコハルがそれを見つけるとギラッと睨みを効かせてきた。そんな俺達の会話などまったく聞こえてない様子の和音さんは、副生徒会長の前で腰に手を当てて鼻息を大きく振り撒いていた。

まずいな……このままでは本当に犯罪者を作ってしまうかも知れない。

馬鹿娘から遅れる事数秒、呑気に手を振りながら入ってきたこの人を犠牲にして事なきを得たいところだが、果たして役に立つのかはかなり微妙なところである。

「部長、出番です」

「あつ……やつと僕の存在に気付いてくれたんだね、ともちゃ

え、あ……あのーっ」

「和音さん、サンドバックです」

何か言っていた部長の頭を掴み、そのまま持ち上げて和音さんに向かって投げた。

「チエスト！ 来るな、うっとうしいっ」

「はがっ」

まあ、予想通りというか正拳一発で沈んでいく部長が俺の横を吹っ飛んでガラスにぶつかる音が聞こえた。

……所詮こんなものか。

大魔王の怒りを静めるために生贄となってもらったのだが、まったく役に立たずに消えていった勇者見習い寸前。

「ああ……あなたは翔様になんて事をするんですかつ」

「別にいいじゃない。それより、なんで私をあんな部屋に閉じ込めたのか理由を聞かせてもらおうかしら」

小さく「うぐっ」と声を上げた副生徒会長が俺に助けを求めるような視線を向けてくるが、軽く受け流して律子ちゃんとコハルを連れて帰ろうとしたが、こっちもこっちで不穏な空気になっていた。

「梅津律子、あんたはトモ兄ちゃんと親密な関係になりたいって思ってるでしょ？」

「え、あ……あの、コハルちゃん」

「コハルちゃんじゃない！ 私の事を呼ぶ事は『コハル様』と呼びなさいっ」

女王様降臨す……って感じだな。

しかし、なんでコハルはここまで律子ちゃんに固執しているのだろうか。それに俺の名前が出てくるのも気になるけど。

「ちよっと聞いてんの、華子！ さっさと答えなっ」

「あー、もう！ 答えてやるわよ。ブツブツうるさいわね、この文句ババアっ」

「誰がババアだって！ この馬鹿っ」

「ば……馬鹿じゃないわよ！」

あっちもヒートアップしてるけど、完全に子供の喧嘩になってるし。

「だけど……梅津律子、クラスメイトの好で特別に『コハル』って呼ぶ事を認めてあげる。ただし、これからは私達はライバルよ……

『好敵手』と書いて『ライバル』よ！ いいわねっ」

「は、はいっ」

こっちはなんだか分からないけど『永遠の好敵手宣言』をされて戸惑っているし。

「……僕達は帰ろうか？」

「そうですね。で……部長は人間ですか？ それとも、地球外生命体ですか？」

そして、気付けば俺の隣には部長がいた。

「人間だよ、ともちゃん。そうそう、荷物があるから付いておいで

こっちだよ、ハニー。あっ、はははーっ」

顔をベツタリと真っ赤に染めて平気そうにスキップされても信憑性はゼロですよ、部長。

……疲れたな。

未だに言い争いを続ける二組（ほぼ一方的だけど）を横目に、俺は荷物を取りに部長のあとを付いていった。

第一三話：疲れた……人生に（いや、そこまではないけど）（後書き）

久しぶりに更新です。

色々と忙しく更新も出来ずに申し訳ありませんでした。

来月から何とか更新は出来ると思いますが、毎日は難しいと思いますのでご了承ください。

第一四話：一夜明けて……。

一夜明けて平穩な朝を迎え、そして気付けば放課後。

昨夜の最終決戦は大魔王と馬鹿勇者（和音さんと副生徒会長の決闘）は一二ラウンド引き分けで終わり、天才と天然の『ＴＴ娘』達
は天才の一ラウンドＫＯで天然の号泣で幕を下ろした。

何ともうやむやの内に終わった感があるのだけど、外に出れたので文句はない。あれで外に出る事が出来なかったなら俺の機嫌は最高潮に悪かっただろうな。一緒にいた律子ちゃんがどうなっていた事やら……別に身体に危害を加えるつもりはないが精神的な被害は尋常ではないと思う。

「ふう……眠い」

微妙な睡眠不足で頭がぼんやりとしている俺の視界には昨日の再現ビデオを見ているような光景が広がっていた。

「ちよつと、華子！　なんで今日もいるんだよっ」

「今日は翔様に用があつて来たのよ！　あなたには関係ないでしょ」
昨夜から冷戦状態の二人だから会話がかなり殺気立っている。

「梅津律子、あんたにこの問題が解けるかしら」

「で、出来ないよお。これ、大学の入試問題だよ」

こっちは完璧に優位に立っている天才が天然を弄んでいる。

……大変だな。

一晩でやけに賑やかになった部室内で男二人は肩身が狭い。だが一人はとても嬉しそうに鼻の下を伸ばして鼻息が荒い。

「コハルちゃんって、ちよつときつそうだけど可愛いね」

「そんな事言っていると、酷い目に遭いますよ。あいつ、『手加減』と『躊躇』^{ちゆうしゆ}って言葉を子供の頃に捨ててますから」

「……さすがはともちゃんの従妹だね」

それは誉め言葉ですか？

が、すでに俺の事など無視をして女の子達（主に下半身）に釘付

けの変態部長は徐々に身体を屈めていく。

「何をしようとしてますか……」

「え、いや。ちょっとした探検に出掛けようかと」

「そこは色とりどりで綺麗なんでしょうね」

「それはもう。ピンクや白、たまに黒とか紫があるけど、興奮する秘境の旅なん……」

拳を握って力説する変態部長だったが、うしろで何か感じたらしく”僕、やっちゃった？”的な顔をしていた。

……さようなら。

天に召します我等が何とかに祈りを捧げて目を閉じた瞬間、耳にこびりつく部長の悲鳴が何と哀れだった事か。まあ、自業自得なので土壌の余地はまったくないけど。

「ふう……成敗完了」

「ったく、スケベ面して私を見ないで欲しい」

静かになったのでゆっくりと目を開けていくと、仁王立ちの和音さんとコハルが足元で虫の息の部長を見下ろしていた。かわいそうなくらいにボロボロな部長に駆け寄って「私を一人にしないでください」と芝居がかった言い回しをしている副生徒会長と、いつの間にか俺の横に立っていた律子ちゃんが怯えた様子で俺の制服を引っ張っていた。

「こらっ、律子！ 何勝手な事をしてんのよっ」

「な、何も……きゃっ」

「トモ兄ちゃんに近づくな、触るな、話し掛けるなっ」

無理やり俺から律子ちゃんを引き剥がしていくコハルは感情剥き出しで俺の腕を掴み、律子ちゃんに向かって舌を出していた。

……子供だ。

昨日はよく分からなかったがどうやらコハルは随分と感情表現が激しくなっていた。ただ、その表現の仕方が子供っぽくて乱暴なのは幼少期より続けられた英才教育の負の部分かも知れないな。

「とりあえず、皆さん座ってくださいますか？ このままでは話も出来

ませんからね」

軽く威嚇して見渡すとさすがに騒々しかった部室内が静かになった。

みんなの顔が一斉に俺を向くが構わず

「俺は真実が知りたいんです。言っておきますが俺は女性でも手加減はしません。それはよくご存知ですよね？」

指を鳴らして言葉を続けると、みんなは黙って首を縦に振っていた。

俺ってどんなイメージで見られているのかいささか気になるところだが、これでスッキリする事が出来るってものだ。

「わ、悪かったって……それじゃ、会議を始めるとしますか」

和音さんの一言で『昨晚の事件は誰が一番悪いのか』という微妙な議題で会議が始まった。

昨日は何も聞き出す事が出来ず、今日こうして集まってもらったのは状況説明をしてもらうためだった。

全ては副生徒会長の『翔様と一緒にいたい』と『翔様を覗き疑惑をなすり付けた犯人に制裁をする』というもので、それに色々な思惑を巡らす連中が次々と加担していき、結果的にはこんな大掛かりな事になってしまったと言う事だった。

そして俺達が閉じ込められていたマンションは全室をトリックルームに改造され、普通では脱出が出来ない一つの巨大な監獄として作り変えれ、そこに俺と律子ちゃん、和音さんの三人は睡眠薬を飲まされて放り込まれたわけだ。

他の部屋には色々な事情（詳しくは副生徒会長の私情が激し過ぎで言えない）で捕まった生徒が問答無用に押し込んでいたみたいで、まったくもって容赦がないワガママお嬢様のお遊びである。

「まったく迷惑な話だな。で……なんでコハルが加担していたのかな？」

「別に好きでやったわけじゃないよ。ただ……トモ兄ちゃんが会い

に出来ないから」

拗ねたような声で俺を見るコハルが「入学して一度も来てくれな
いし」と呟いているが、それくらいでこんな事をするなよって話だ。
「それにママツキーさんまで関わっているとは……勘弁して欲しか
った」

「あの人は嬉しそうに部屋を改造してたからね。『トモキンはこの
謎が分かるかな』って鼻歌を歌いながらしてたから」

それは容易に想像がつくから嫌なんだけど。

ママツキーさんは実験や発明が出来れば相手が誰であれ手を貸す
とんでもない人だからな。話を聞いていくと、あの観葉植物にはと
んでもない仕掛けがあったらしく、入れ替える事で床に配置されて
いた重量センサーが感知し、黒電話に電波が飛ぶ仕組みになってい
たと言う。植物自体は水の中で循環させているが、これは植物に微
弱の電気を流して電波を発着信するアンテナの代わりをさせる国家
事業みたいな実験をしていたわけだ。まあ、あれだけの大規模な実
験施設を与えられたのだから、ママツキーさんは喜んでやったに違
いない。

「で、全てが副生徒会長のわがままだったわけですね」

「だな。まったく迷惑な話だ」

俺と和音さんが見下ろす先には俺達を見上げる副生徒会長が

「んーっ、んぐぐっ、ふーっ」

何かを言っているがまったく言葉になつてなかった。

「相変わらず、手加減って言葉を知らないな……智樹は」

「先ほども言いましたけど、女性でも手加減はしません。我が家の
家訓です……ね、コハル」

呆れた顔で副生徒会長を見る和音さんの横で首を縦に振って青ざ
めているコハル。

「……なるほど。すでに経験済み、か」

「………はい」

和音さんに青ざめていた顔を一瞬赤く染めて頷くコハル。

勘違いされるから変な態度はとらないようにしてもらいたいね。
子供の頃にちよつと悪戯をしたコハルを軒下に「てるてる坊主」と
言つて吊るしただけの話なのだから。

今の副生徒会長はてるてる坊主の一步手前で床にロープで縛られ
て寝転んでいた。この前（更衣室の一件）、部長を緊縛していたロ
ープらしく、「これで僕を縛つて」と渡されたのを使つたのだが俺
には縛りの才能もあつたらしい。

「まあ、こいつはこのまま外に吊るすとして、こっちはどうする？」
「そうですね。俺達を売つたわけですからそれなりの制裁を受けて
もらわないと」

同じように床で仲良くロープに縛られている変態緊縛部長を見下
ろし、ため息とも何ともとれない息を吐く。

部長は副生徒会長の誘いに乗つて俺達に睡眠薬を持つたお茶を飲
ませたのだ。あのとき、副生徒会長が持つてきた小包に何が入つて
いるのかを知つていたと言う事になり、その結果何が起ころのかは
十分に分かつていたはずなのに俺達を見捨てて楽しく馬鹿娘とデ
ィナーを食べていた。それだけでも許されないのに俺達を助けようと
もしないで笑つていたと言うのだから万死に値する行為である。

「あ、あの……そこまでしないでいいじゃないですか？」

「甘い！ 律子は砂糖十杯入れた珈琲くらい甘いつ」

基準が分かりませんが確かに甘いですね。

飲み干したら底に溜まつていた砂糖の洗礼を受けるし、喉越しが
最悪で想像しただけで胸焼けがしてきた。

「律子だつて部屋に閉じ込められて大変だつたんだろ？ そんな甘
い事を言つていてはこの戦争は勝てないぞっ」

「は、はいっ」

テーブルを力任せに叩き、声を荒げる和音さんに背筋を伸ばして
返事をしている律子ちゃんは涙目になっていた。いつから戦争にな
つたのだろつかと思うが、和音さんはヒートアップして言葉を捲く
し立てていく。

「トモ兄ちゃん……」

「いつもの事だから気にしない。それよりも今度からこんな事はするんじゃないぞ」

「わ、分かってるよ。でも……その」

頬を少し染めて俺を見るコハルが何を言いたいのかは先ほどから分かっているつもりだ。しかし、それに関しては以前断っているの
で今更どうこうしようという気はない。

「分かっているならいいよ。いい子にしていたら、そのうち遊びに連れて行ってあげるから」

「や、約束だよ、トモ兄ちゃんっ」

驚いたように目を見開いて身体を乗り出してきたコハルは俺の手を掴んで「約束破ったら拷問ね」と、かなり物騒な事を言っていた。さすがに俺の従妹だなと思っただが、護身術を会得しているコハルに勝つのは中々難しいだろう。だって俺は普通の一般市民だし、運動は面倒だからほとんどしない。だが、身体のキレは普通の人よりは色々鍛えられている（主にこの部室で部長相手だけど）。

「覗き事件でこっちは迷惑を被^うっているのに、この人はそれが分か
つていないようだね……少し、お仕置が必要かな」

「そうだな。律子、珈琲淹れて」

肘を付いてやる気のない和音さんはすでに飽きた様子で「何か他に遊ぶ事ない？」と俺に聞いてくる始末。

「ですね。その前にこの二人をお願いします」

「しょうがないね……それじゃ、処分してくるかな」

面倒臭そうに「どっこいせ」と立ち上がった和音さんは徐に二人を縛ったロープを握って歩き出した。無論、引つ張られる副生徒会長は口を塞がれていても何かを叫んでいるのだが、変態緊縛部長は目覚めた快感に身を委ねて「オーイエスッ」と副生徒会長とは違う意味で熱く叫んでいた。

「アレはいつもの事だから」

「……そうなんだ。トモ兄ちゃんも随分変わったね」

驚いたように口開けて微妙な顔をしていたコハルは小さく息を吐くと、今度は呆れたような顔を俺で笑みを浮かべていた。

「失礼なヤツだな。俺は昔から何も変わってない」

「変わったよ。前はほとんど家にいなくて、夜も帰らないっておばさんが」

「コハル、それ以上は言うな」

何を言いたいのが分かっていて。

コハルの口からこぼれ落ちる言葉の先を聞きたくなつた俺はコハルを一喝していた。

「ご、ごめんなさい……で、でも、私はトモ兄ちゃんが」

「心配しなくてもいい。俺はもう過ちは繰り返さないから」

怯えたように俯きながら俺を見上げるコハルの頭を撫で、俺は聞こえないようにため息を吐いていた。

不毛な言い争いをしているのは十分に承知しているが、昔を知っている人物というのは相手にし辛いものがある。

「お待たせしま あ、あれ？」

そこに何の悩みもない呑気な笑みを浮かべて珈琲カップが載つたトレイを持ってきた律子ちゃんは、注文したお客がいない事に不思議そうな顔をしていた。

「和音さんならゴミ捨てに行つたよ」

「……それはちよつと酷いと思うよ、トモ兄ちゃん」

何事もなく言い切る俺にすかさずツツコミを入れるコハルは少し笑顔を取り戻していたが、意味が分からない律子ちゃんは頭の上にクエスチョンマークをいくつも点灯させていた。

……平和が一番だな。

律子ちゃんの持つているトレイからカップを一つ取って口を付けると、苦味と酸味が効いた珈琲が喉を流れていった。

暫くして帰ってきた和音さんと一緒に珈琲を飲んでいたが、何やら渋い顔をしている和音さんに誰も声を掛ける事が出来なかった。

コハルと律子ちゃんはずっと俺の方を見ているが、それは俺に口火を切れという無言の圧力でしようか？

「和音さん、どうかしたのですか？」

「ん？ いや……さっき焼却炉にあの二人を連れて行ったんだが」
本当にゴミ捨てに行ってきたのか？ この人は。

「そこで覆面をした変な連中を見かけたんだが、私の顔を見たら慌てて逃げ出してしまつてな」

「……覆面？ それはまた、この暑い時期に馬鹿みたいな事を」

「だろ？ で、気になったので少しあとをつけてみたが、特訓部の部室近くで見失つてしまつてな」

コハルと律子ちゃんは和音さんの話が分からない様で首を傾げていたが、俺は『特訓部』という言葉に自然と眉が寄っていた。

……まさか、ね。

忘れもしない去年の十月二〇日。

朝から降り続ける雨に憂鬱な気分を味わっていた生徒達を衝撃が襲った。覆面をした武装集団が突如職員室を占拠して数人の先生を人質に取って立てこもつたのである。

後に『一〇二〇事件』と呼ばれる事になったその事件の首謀者は、度重なる騒動を起こした罪で生徒会によって有害部活指定を受けた特殊戦闘訓練支援部　通称、特訓部　で、職員室を占拠して三日三晩立てこもり、最終的には校舎を爆破して半壊させて終結した。その事件で特訓部のほぼ全員が無期停学となり、大半の生徒が自首退学したと聞いている。

だが、事件がそれだけは終わらず、思わぬ形で俺達にも煽りがやってきた。

当時の電腦革命クラブ、ふくだたかし福田高志部長が関わっている事が判明し、事件後に先生達から事情聴取とばかりに一週間ほど生徒指導室に毎日のように呼ばれたが、福田部長が独断でやった事と自白したので俺達は無罪放免となった。が、あのときは先生達も冷静さを失っていたので、かなり酷い目にあつたのも覚えている。

だが、それでも事件から半年以上経っているにも関わらず一つだけ解決しない疑問がある。

それは首謀者であった隊長が事件のときに大火傷をおって入院したと噂になっていたが、入院したという病院も現在の所在もまったくの謎になっている事だった。

「しかし、あの覆面連中は何者だ？ …… 妙に気になるんだけどな」
「気にしても仕方ないと思いますよ。暑いから変な連中が多いだけです」

「そうだが私の顔を見て逃げたのが気になるんだよ。失礼だとは思わないか？ レディの顔を見て逃げるなんてっ」

バンッと拳を机に叩きつけた和音さんは微妙に違う論点で怒っているようで、それを宥めるのは俺では無理そうなのでここはコハルと律子ちゃんの二人に任せるとしますか。

願わくば、これが新たな迷惑の火種にならないでほしいと思いつつ、珈琲を一口含んでいた。

第一五話：白菜……いや、厄災はどうして忍び足が得意なのだろうか？

七不思議。

それは学校には必ずある怪奇現象や不思議な言い伝えなどの総称的なものである。しかし、七不思議と言われているものはほとんどが噂話や地元に伝わる伝説をアレンジしたものであったり、その学園のシンボリックな場所と結びつけるなど、生徒が面白半分で言い伝えているのがほとんどである。そしてどの七不思議も『七つ目を知ると不幸になる』と言われ、それが七不思議を恐怖の対象と探究心を煽る結果となっているのだろう。

「……七不思議を探す？」

「そう！ この学園にある七不思議を検証しようではないかっ」

「却下します」

「な、なんでだよ！ ともちゃあーんっ」

鼻先一〇センチほどで叫ぶ変態部長の顔を横に避け、飛んできた唾を拭いてため息を吐いた。

「いいですか……夏と言えば怪談。怪談と言えば七不思議。そんな連想ゲーム的な安直な発想に付き合ってるほど俺は暇ではありませんせん」

「いいじゃん。七不思議を堪能する学園ツアー……女の子をいっぱい呼んで『きゃー、恐いっ』って抱きつかれたらウハウハだよ、ウハウハっ」

エロ親父全開の変態部長は妄想の世界に旅立っていったが、今時「ウハウハ」なんて言う人がいたんだな。

「和音さん、やっていいですか？」

「うーん……昨日、私がやり過ぎたから少し壊れたみたいなんだよね」

「でしょうね。顔が酷い事になってますから」

「顔は変わってないだろ？」

いえ、かなり痛い事になってますよ。

まず右と左で顔の大きさが微妙に違うし、ありえないほど大きなたんこぶがあるし、瞼は紫色だし……数えればきりが無いほどの変わり様である。

……ゾンビより酷いかも。

律子ちゃんは部室に入って来てこの顔を見るなり、泣きながら出て行って帰ってこないし、一緒に来たコハルも先ほどから一言も言葉を発する事なく、部長を見ないように膝を抱えて固まっていた。

何故コハルがここに居るのかと言えば、電腦革命クラブの栄えある六人目の部員として部長が許可したらしく、「私は入部する気はない」と断ったが強引に押し切られて結果として仮入部という形になった。まるで俺が入部させられたときを見ているような光景だったが、コハルも強引な押しには弱いようだ。訪問販売には気がつけろよ。

「コハル……やっぱり駄目か」

「私は超常現象とかオカルトは信じない主義なの。こ、こんな……ひゃうっ」

少しだけ顔を動かしたコハルだったが、視界に部長の顔が入ったようですぐに下を向いて震えだした。そんなコハルを見て面白そうに笑う和音さんはお腹を抱えて苦しそうだった。

……性格悪いな。

今に始まった事ではないが和音さんも新しい遊び道具を見つけたらトコトン遊ぶ人だからね。壊さないようにお願いしますね……一応は俺の血縁なので。

「で、結局のところ……何故、七不思議なのですか？」

「だって面白そうだから」

理由になってないですよ、部長。

「ほら、この学園って七不思議が五つしかないの知ってるでしょ」

「……そう言われてみれば、そうですね」

「でね。この度六つ目の不思議が発見されたのですっ」

どこからともなくファンファーレが鳴り響き、紙吹雪が舞っている中、部長は胸を逸らして誇らしげにしていた。

……用意がいい事。

ファンファーレは部長が用意していたラジカセで、紙吹雪は無理やり押し付けられたコハルが嫌々投げていたが、六つ目の不思議ってなんだ？ 確かに今まで五つしか不思議は存在しなくて変だとは思っていたけど、それにも意味があると思っていた。実は『七不思議なのに五つしかない不思議』みたいな……ごめんなさい、自分で言っていて恥かしくなりました。

「それで、部長はその不思議を知りたいわけですね？」

「うん！ 『怪奇、一本松の祟り』っていう不思議らしいよ」

目をキラキラと子供のように輝かせる部長がともうつとうしく感じるが、ここで一つ疑問が生まれた。

「この学園に松なんてありましたか？」

「あるよ。中庭に切り株だけ残ってるけど、あれが噂の松なんだよね」

いつ噂になったのかは知らないが、中庭のほぼ中央に切り株だけになった樹木があるのは知っている。それもご丁寧に金網で囲まれて入れないようにされており、上には有刺鉄線まで張り巡らせる念の入れようである。

「でね、あの松が」

「一本松の噂はデマに決まってるだろ」

急に話に割って入ってきた和音さんに俺と部長は顔を向けたが、語気に圧倒されて言葉を失っていた。

「そうなんですか？」

「ああっ……海藤も二年前の事は覚えてるだろ？」

俺の質問を適当にあしらい、部長の方を真っ直ぐに見つめて言葉を待っている和音さん。珍しく表情を曇らせる部長は小さく「ああ、覚えている」とだけ告げて椅子に座った。

「もう二年も経つんだな。そうだよ……僕達が三年になってるんだしね」

二人の様子から口を挟む事が出来ない俺はコハルに部室を出るように目配せをした。すぐに意味を分かってくれた様子のコハルは立ち上がると俺のうしろを通って部室を出て行き、俺もそのあとを追って出た。

何ともシリアスな空気に背中には変な汗がいっぱいである。

「はあ……なんか疲れた」

「あの人も真剣な顔が出来たんだね。それにしても似合わない人達だね」

隣で大きく息を吸い込んで深呼吸をしているコハルと同じように俺も息を吸って吐き出す。しかし、シリアスが裸足で逃げ出すほど似合わない部長があんな顔をするとは思わなかった。

「さて、どうしようか」

「そうね。ところで律子はどこに行ったの？」

「分からない。あの子は暴走するとコハル以上に奇怪な行動をとるからな」

「……失礼ね」

俺をジト目で睨むコハルは「私のは計画的よ」と否定する場所が違っていた。奇怪な行動は否定しないんだと思いつつ、廊下を右へ左へ見渡しても律子ちゃんの姿はなかった。

「探しに行くかな。ほつといても心配だし」

「ふーん……やっぱりトモ兄ちゃんは律子が気になるんだ」

「変な言い方は止めなさい。それよりもコハルはどうする？」

「一緒に行く。トモ兄ちゃん一人だと律子の身体が心配だしね」

俺はそんな節操なしではないし、律子ちゃん相手にそんな事は……しないはずだ。

「でも、どこにいったのかな？ あの子、あれで結構足が速いから

ねえ」

「……こつち」

腕組みをして考え始めたコハルをよそに俺はもう一度左右を見渡して歩き出した。

「え、なんで？」

「律子ちゃんはいそうな場所は見当が付いている」

「…………ふーん、そうなんだ」

かなりトゲのある語気で俺を睨むコハルを一瞥し、俺は律子ちゃんがいるだろうと思われる場所を目指していた。

天然は他人を巻き込んで次々と被害を拡大させていく『誘爆タイプ』と、一人で事を起こして一人で自滅する『自爆タイプ』の二種類に分類されるだろうな。その中には稀に二つを掛け合わせたタイプもあるらしいけど、律子ちゃんは自縛タイプだろう。いつも転んではパンツを丸見えにするのは本人としては不本意なんだろうけどね。

……。

……。

「いないよ」

「そうだね。これは予想外だ」

俺の予想した場所には律子ちゃんの姿はなかった。

律子ちゃんの事だから食堂の隅で蹲ひざまづっていると思ったのだけど、

食堂には人の姿はまったくなかった。今から一ヶ月ほど前に律子ちゃんが和音さんに遊ばれて泣きながら飛び出していったときは、食堂の隅で紙パックのいちご牛乳をエグエグと泣きながら飲んでいるのを見つけたからてっきりここだと思ったのだが。

「おっ、翔のところにいる男女の伏峰ではないか」

「違います、大熊猫熊五郎先輩」

人じゃないのはいるけど……。

「誰が大熊猫だ！俺はパンダじゃないっ」

確かに顔は可愛くないですし、図体の大きさは二倍以上あります

けど、漢字がしっくりくるのでこれでいいですよ、風紀委員長の中川先輩。

「今頃食事ですか？ 風紀委員長も大変ですね」

「そうなんだよ。誰が流しがデマか知らないが、新しい七不思議の影響で生徒が浮き足立っておってな。何か起きなければいいと警戒を強化している最中なのだ」

珍しくまともな事を言っている大熊猫が笹の葉を食べている……わけもなく、手に持ったら小さい器に山盛りのカレーライスを食べていた。

……すごいな。

普通の人なら四人前はありそうな量だがあの人なら一人前って感じだな。まあ、今はそんな事はどうでもいいか。

「では、ゆっくり食べてください。失礼します」

「ん？ そうか。ああつ、ちよつと待て男女、伏峰ちゃん」

聞き流そうと思ったけど二度も言われるとさすがに頭にきた。

静かに大熊猫（中川先輩）の背後に立ち、すつと箸立てから割り箸を一膳取り上げ

「俺は男です。断じて女ではありません」

紙の袋を投げ捨て、割らない程度に両手を使って箸を広げて耳たぶをロックオンしたとこで勢いよく手を離す。

「ぎゃあ！ いだだっ いきなり何をするんだ、お前はっ」

これは地味に痛いので嫌がらせには打って付けである。

「今回は注意なので終わりますが次は手加減を一切しませんし、躊躇する事なく割り箸を鼻に突っ込みます。それから」

ビシッと決めようと一歩前に出ようとしたところで

「今度トモ兄ちゃんに変な事言ったら、全力で鼻の奥まで割り箸突っ込んでやるから覚悟しなさいっ」

何故か俺より一歩前に出て、中川先輩に指を突きつけて言い切っていた。

……俺の出番は？

ここぞって決め台詞まで取られてしまつては俺の立つ瀬つてもない。別にどうでもいい事かも知れないが、これでは俺の怒りつてものが収まりきれないのだが。

「トモ兄ちゃんを男女って呼ばないでください。トモ兄ちゃんは、れっきとした立派なものを持った　あたっ」

「余計な一言は言わないように」

「だって昔は一緒にお風呂も入つたし、それから考えれば今は立派なもの　きゃうっ」

だから、余計な一言は女性として慎みなさいって。

勉強は出来ても言っていていい事と悪い事の区別がつかないのでは意味がない。それに目の前にいる人に聞かれたら誤解を受ける事間違いないのに……そう思っていたのだが、どうにも大熊猫先輩の様子がおかしかった。

「か……可愛い」

その顔は恋する乙女のように輝く瞳をコハルに向け、その口からは絶対に似合わない言葉を呟いた中川先輩は、コハルを見つめて「可愛い」を連呼して一人で悶えてた。

「あ、あのっ……君は一年生なのかなっ？」

「え、ええ……そうですけど」

「俺、三年の中川卓郎です。いきなりですが一目惚れです、俺とお付き合いしてくださいっ」

思い切つた事を叫び、顔を真っ赤にした中川先輩がコハルを見つめていた。

……恐い。

と、素直に思ってしまうほど似合わない言葉を連発している中川先輩を前に、コハルは完全に思考が停止した顔で固まっている。

オカルト現象より恐い真つ赤な顔をした中川先輩にドン引きして青ざめた顔をしているコハルが俺に助けを求めるような視線を向けてくる。しかし、俺も同じくドン引き中なので身動きが取れないので、コハルへにじり寄っていく中川先輩を止める事が出来ない。

「ト、トモ兄ちゃん……」

「頑張れ、コハル。今は試練の時間だ」

「やあー！ お嫁にいけないし、中古になるのは嫌だよっ」

俺の熱烈なエールに歓喜の声を上げるコハル……なんて事はなく、まったく逆の反応をしてくれたコハルが俺を射殺すくらいの眼光で睨み返していた。

……中古ってなんだよ？

心の中で応援する事しか出来ない俺は真面目な顔をしていたが、内心はコハルの取り乱しように大笑いしたい気分を必死に我慢していた。こう考えると俺って結構酷いヤツかも知れないな……まあ、今更ではないか。

「一目見たときから君の瞳が俺の心を奪って、俺は君のラブスレイブさ」

「あ、あの……」

「ふっ……言葉はいらないさ。君の声は俺を狂わせる。愛の言葉は俺を暴走させ、君への想いを爆発させるだけなんだよ」

あの中川先輩が愛の告白をする現場を始めて見たが、顔と図体に似合わずかなりのラブポエマーみたいだ。

そんな中川先輩に怯えた表情だったコハルはゆっくりと俯いたかと思えば、膝を折って腰を屈めて中川先輩を見上げた。そんなコハルに笑顔を返す中川先輩だが、コハルは身体を伸ばすように跳躍して中川先輩の膝に軸足である左足を踏ん張り

「消えろ、変態！」

柳の如くしなる右足が下から弧を描きながら振り上がっていき、足首を返すようにして延髄に入っていた。

「ふごっ……あ、ああっ」

綺麗に延髄に入った廻し蹴りを振りぬき、身体を反転させて着地したコハルは乱れた息を整えるべく、大きく吸い込んでゆっくりと吐いていた。

……手加減なしだ。

白目を向いて倒れていく中川先輩の身体がスローモーションのように床を一度跳ね、埃を舞い上げてぐったりと横たわった。

「うーっ、気持ち悪い」

「やり過ぎだ、馬鹿」

「だって、目の前に鼻息荒く気色悪い事言われたら誰だってするでしょ！」

いや、さすがに廻し蹴りはしないと思うぞ？

やるならビンタか、少しグレードを上げて往復ビンタだろう。それを飛んで廻し蹴りっていうのは驚いた。それ以上に驚いたのはコハルの運動神経が予想外に良くなっていた事だった。

昔は五〇メートル走をしても完走出来ないほどだったのに、今は廻し蹴りが出来るまでに成長しているとは……ちょっと感動した。

「しかし、どこで覚えたんだ？」

「書店で見つけた護身術入門書が面白かったから読んで覚えたの。」

まさかこんなところで役に立つとは思わなかったけど」

見ただけで覚えるとはさすがは天才だな。まあ、頭で理解する事は出来ても身体は動かないと思うのだが、この窮地で運動神経が覚醒でもしたのだろうか？

「それよりも早く行こうよ。この人気持ち悪い」

「一応は風紀委員長だからこのままにしておくのはさすがに……な」

「いいよ。変な事言ったら『痴漢されそうになりました』って大声で叫ぶから」

恐い事を本気で言っているコハルは汚らわしいものを見るように中川先輩を一瞥して食堂を出て行った。

俺は中川先輩の脈を確認して問題ないと判断したが

「ス……スイートエンジェルちゃん、ラブ……ユー」

気持ち悪い事を口走ったので思わず足蹴にしまった。

「それでは行くかな。律子ちゃん……どこまで行ったのかね」

今はいない愛しの彼女　ではなく、天然娘を求めて俺は食堂をあとにした。

第一六話：色々と疑問が出てきました。

さて、困った事になった。

予想を外して律子ちゃんは食堂にはいなかったが、少し前までこの場にいたらしい痕跡が残っていた。

それは食堂を出る間際に見つけた一枚の紙。

その紙に律子ちゃんの行方を暗示する手掛かりらしきものが書かれていたのだが。

「……………どうするの？」

「どうすると言われても……………。多分こういう星の元に生まれたんだろう、あの子は」

紙を覗き込んでため息を吐くコハルは面倒臭そうに歩いていくが、正直俺も面倒臭いので投げ出したい心境なのだ。

『パンツちゃんは預かった』

別に断りを入れられても俺には「どうぞ」しか言えないのだけど、紙の最後にはご丁寧に『電腦革命クラブ様へ』と書かれているので見捨てるわけにはいかない。

……………はあ。

とりあえず部室に帰って和音さんと役に立つのか分からない部長に相談しようと思ったのだが、これが一筋縄ではいかない状況になりそうだった。

「コハル、逃げる準備はいいか？」

「うん……………でも、アレって何？」

食堂を抜けて校舎に入った俺達の目に飛び込んできたのは、のっそりと俺達の方へ向かって来る大型の爬虫類だった。

「学園長のペットで、コモドオオトカゲの『オペロン』ちゃんだ。

非常に大人しい性格だが学園長のカツラが大好きでいつも遊んでいる。それよりも逃げないと喰われるぞ」

「え……学園長ってズラなのっ？」

「今はそこで驚いている場合ではないぞ、コハル」

俺達の方へ近づいてくるオペロンは体長が五メートルを越す超大型のコモドオオトカゲである。ぬらりと光る皮膚に長い舌。そして鋭く獲物を狙う目は俺達を真っ直ぐに見つめていた。

「でも、あんな大きいのは見た事もないよっ」

「まあ、普通は三メートルくらいだと聞いているが、オペロンは突然変異で現在も成長中らしい。ちなみに鶏が大好物で丸呑みで、今は子豚なら丸呑み出来るかも知れないと学園長は言っていた」

すでに俺のうしろに隠れて逃げる準備は万全のコハルだが、俺の前に押し出すのは止めてくれないだろうか？

……しかも、ロックオンされてるし。

俺を見つめたまま一歩ずつ近づいてくるオペロンは、舌をチロチロさせて『いつでも喰えますよ』的な脅しをかけてくる。どうやら三時のおやつは飼い主からもらえなかった様子で、お腹を空かせてご機嫌が悪いのか、低い唸り声も上げていた。

「トモ兄ちゃん、腕一本どう？」

「どうってなんだ、どうって……。コハルも余計なお肉をあげ」

「そんなもんじゃないわよ！ 無駄なお肉なんてこれっぽちもありませんっ」

間髪いれずに否定し、俺の首を締め上げようとしているコハルの腕を掴み、投げようと思ったがさすがにかわいそうなので止めた。確かに余計なお肉がないようで背中には何も当たってないのが更にかわいそうで、思わず涙が出そうになった。

……寂しいもんだ。

好き嫌いいしないでちゃんとご飯は食べると言いたくなっただが、ゆっくりと近づいてくるオペロンを忘れてはいけない。余所見をした瞬間、威嚇するように「シャーッ」と鳴き声を上げるオペロンは一

気に数歩近づいてきたが、目が合うとその動きを止めてこちらを観察するようにゆっくりとした動きへと戻った。

「とりあえず、この場を逃げる事を考えよう」

「そ、そうだね。でも、飼い主はどこに行ったのよ」

「それはあとから考えよう。今はこの場を切り抜ける事だけを考えろ」

鬼気迫る緊迫感に押し潰されそうな俺の心臓……なんてわけもなく、このままうしろ向きに下がって行けば脱出だと思っていたら

「おおっ、ここにいたのかっ」

地響きをさせて背後からまさかの登場人物が現れた。

「きゃあ、熊っ」

「いいえ あなたのプリンス、中川卓郎です」

膝を付いてお辞儀をする中川先輩に驚いているコハルが思わず足を振り上げていたが、さすがは二度も同じ技は当たらないようだ。

ふっと笑みを浮かべ、身体をうしろに逸らしていったが

「ふござっ」

間抜けな声を上げて倒れていった。

「気持ち悪い！ 近寄らないでっ」

しかし、まさかのうしろ廻し蹴りが炸裂するとは中川先輩も思っ
てなかったのだろう。笑顔のままその図体を横たえて気絶していく
様は哀れの一言しかなかった。

「ほらほら、早く行かないと喰われてしまうよ」

「そうだね。この人を変わりに置いて行きましょ。こっちの方がお
いしいよ、ほらっ」

床に倒れる中川先輩を残し、俺達はオペロンから逃げるようにそ
の場をあとにした。あの人なら大丈夫だろうな……熊すら倒せる人
だから。

逃げ出して走って来た先は中庭だった。

夏の日差しは容赦がなくて勘弁して欲しいほど降り注ぎ、地面からはかげろうがゆらっと立ち上っていた。

そんな暑い中を外にいる馬鹿はいないだろうと視線を軽く動かしたのだが

「……あつ、いた」

そこに探し求める律子ちゃんがいたのには驚いた。

「誰が誘拐したのよ、まったく」

「人騒がせだったな。まあ、これで問題も解決したし、部室に帰るとするか」

コハルも安堵したように笑みを浮かべていたが、俺が見ているのに気付いて恥かしくなったのか慌てて顔を逸らしていた。しかし、律子ちゃんが見つかった安堵感はあるのだけど、様子がちょっとおかしくて違和感を感じていた。

……何してるのだろうか？

空を見上げて直立不動のまま動こうとはしない律子ちゃんを眺めていた俺の横で、コハルはため息混じりの息を吐いて律子ちゃんの方へ歩いていこうとしていたが

「ねえ、トモ兄ちゃん」

怯えたような顔でぎこちなく俺を振り返った。

「どうした？」

「り、律子………す、すすす、透けてない？」

「はっ？ 透けて」

コハルが何を言っているのかすぐには理解出来なかったが、そう言われて俺の感じていた違和感の理由がやっと分かった。

律子ちゃんがじっと空を見上げて立っていたが、その姿は微妙に向こう側の景色が透けて見えている。その違和感は今まで起きていたラブポエマーもオペロンも忘れそうなほどにインパクトがあった。

……確かに透けてる。

嘘でも幻でもなく本当に目の前にいる律子ちゃんは透けている。何が起こっているのか理解するのに苦労している俺の目に何やらお

かしなものが飛び込んできた。

「んっ？」

「どうしたの？ やっぱり、律子なのっ」

「いや、コハル。あの植え込みのところに足が見えないか？」

「……あ、本当だ」

コハルに「見てくる」言い残して近寄って見ると、一本松を囲むフェンスの脇にある植え込みから伸びている足の先　眠るように横たわっていた律子ちゃんの姿があった。

「律子が二人っ？ え、え……ど、どどど、どうなって」

「落ち着け、コハル」

少し遅れてやってきたコハルは及び腰になりながら俺の腕を掴んでいたが、どもりながら腰を抜かして座り込み、真っ直ぐに律子ちゃんの方を見て目を丸く見開いている。

さすがの俺も腰の骨が砕かれそうな衝撃を受けているが、これは何かあると考えた方が無難だろうな。この学園にいる変な人達は山ほどいるのだ。

この超常現象みたいな事が出来るのは『黒魔術開発クラブ』と『交霊同好会』、それに『イタコラブ愛好会』などが思い当たる。が、この中に律子ちゃんをこんな目に遭わせた犯人がいても相手にはしたくないのが正直なところである。それに食堂にあったあの紙がただの悪戯だったのか、それとも悪意のあるものだったのかは現状では把握出来ないが、そんな事が些細な事だと思える出来事が目の前で起きているのだから、こちらを解決するのが先決だろう。

「こんな昼間から幽霊は出ないから落ち着けて」

「で、でも……」

「幽霊も時間は守るはず。こんな中途半端な時間帯に出ては幽霊のプライドにも傷がつくってものだろう」

「……プライドなんてあるのかな」

そこはもう少し強く否定してくれてもいいんだよ、コハル。

「ほら、勇気を出して触ってごらん。きっと生暖かい感触があるは

ずだから」

「無理！ それは無理っ」

そこは強く拒むんだね、コハル。

「……何をやっているんだ？ 二人共」

「きゃあっ」

「うきやっ　び、びつくりしたっ」

いきなり背後から声を掛けられて心臓が口から飛び出そうになったが、声を掛けた方もコハルの声に驚いていた。

「……和音さん、不意打ちは卑怯ですよ」

「何を言っただよ。それより、律子は大丈夫なのか？」

振り返った先にいた和音さんは呆れた顔をしていたが、視線を俺達のうしろに動かして表情を一変させて俺の横を通り抜けていった。そのまま律子ちゃんのそばにしゃがみ、脈と呼吸の確認をして安堵した表情を浮かべていた。俺達は驚きで律子ちゃんの安否確認を忘れていたが冷静に対処する和音さんは手慣れたものだ。

「ところで、どうしてここに？」

「ん？ さっきの話聞いてたろ……気になってちよつと見に来たら、これだ」

と、律子ちゃんを交互に指差す和音さん。

倒れている律子ちゃんに直立不動で空を見上げたままの律子ちゃんの二人を交互に見比べたが、透けている以外はまったく変わりがなかった。

「これな、ママツキーの発明らしい。なあ、ママツキー」

「そうざんす。世紀の大発明、その名を『マトリクサーキット』という立体映像投影装置さね」

ざっぱーんつと背後に大波が描かれた板らしきものを背負って登場したママツキーさんは、「重いがなっ」とフラフラになりながら白衣のポケットから何やら取り出して俺達に向けていた。

登場のインパクトが抜群でコハルも言葉を失ってママツキーさんを見つめているが、今のママツキーさんはかなり危険なテンション

になっているようだ。

……やばいな。

この背中に背負っているのは『怒涛の締め切りラッシュ』という漫画家などが連載を複数抱えて締め切りがダブった際に陥るアシスタント泣かせの生き地獄であり、今のママツキーさんは掛け持ちの部活で発明が煮詰まっている状態を表す赤信号のようなものだ。加えて喋り方がエセマダムと関西人が入り交ざったようになってるのは更なる注意が必要である。

「ちよつと実験していたのだけど、どうやら暴走したみたいだね……ちつくしょー、べらんぼうめつ」

頭をかいて歩き出したママツキーさんは中庭の植え込みから妙な機械を取り上げて俺達の前に持ってきた。

赤と緑と黄の三色が怪しく点滅している三〇センチ四方の妙な機械から小さなパラソルのようなアンテナが一本伸びているが、今回はママツキーさんが江戸っ子になっているのが今までない恐怖を与えてきていた。

「ママツキーさん、今回はどうしましたか？」

「ん？ 今回は某宇宙ステーションからこの装置を一週間前までに完成させる依頼だったのだが、思いのほか手間取ってしまって……中途半端な仕上がりになっちまったんだよ、ちくしょうつ」

江戸っ子全開のママツキーさんはかなりの危険人物と化しているが、どこでそんな仕事を受けているのだろうか。

「ふむ……立体化には成功しているがやっぱり動かないか。これはまだ改良の余地があるな」

そう言つて足早に歩いて行くママツキーさんが

「そこ、磁場が安定しない特殊な場所だから、色々あるんだよねえ」

小さく「ふふふつ」と笑いながらうしろ向きに去って行った。

「それじゃ、私は律子を保健室へ連れて行くから智樹は天才ちゃんを連れて行ってな」

と、軽々と律子ちゃんを持ち上げて歩き出した和音さんは未だに座り込んだままのコハルを顎で示し、少し呆れた顔で歩いて行ってしまった。

残された俺達は顔を見合わせて「立てるか?」「うん」と短く言葉を変わして和音さんのあとを追って保健室へ行く事にした。

何が起こるのか分からないから現実楽しい。

「食堂に行こうとしたところで、いきなり誰かにうしろから押さえられて……気付いたら、中庭にいたんです」

「そう……それで、どうしたんだ?」

「なんでだろうって思っていたら……切り株の上に女の子が立っていたんです」

ぼんやりとした瞳で宙を見つめている律子ちゃんは和音さんの声に反応しているが、この世のものとは思えないほど儚くて今にも消え入りそうだった。

「女の子?」

「え、えつと……綺麗な黒髪で一〇歳くらいの女の子でしたけど」ため息のような息を吐き、複雑な表情を浮かべている和音さんは「そうか」と呟いて俯いていた。

「和音さん、大丈夫ですか?」

「ん? ああ、大丈夫。でも、誰があんな噂を……いや、デマにしても」

言葉を濁す和音さんは考え込むように眉をひそめ

「智樹は『屋上の幽霊』の話を知ってるだろ?」

いきなり妙な話を振ってきた。

「え、ええ……屋上から意味不明な紙を投げるっていうアレですよね?」

「そう。その『屋上の幽霊』っていうのは本当にいるんだ。まあ、幽霊じゃなくて生きてる人間だけだな」

不意に顔を背けた和音さんは少し鼻声になっている気がした。

……泣いている？

そう思ってもさすがにこの雰囲気ではこの先を聞くのは躊躇ってしまう。だが、和音さんが気になる事を言っているのも事実だが、急がなくていいだろう。

「そうですか。分かりました……では、俺達は遅くなったので先に帰りますね」

「んっ、分かった。じゃあ、また明日」

「はい。律子ちゃんの事よろしく願います」

「分かってるよ、じゃあな」

軽く片手を上げる和音さんは結局俺の方を振り返る事もなく、俺とコハルは掛ける言葉も見つからずに保健室を出て行くしかなかった。

第一七話：なんだか面倒な展開に……。

屋上の幽霊。

俺が入学したときから噂になっているもので、この学園に伝わる不思議話の中では比較的信憑性が高いものだ。

話の大筋は高校に入学したばかりの女子生徒が一年生の夏休みを前にして突然体調を崩して入院してしまうのだが、今の医学では完治する事が不可能に近い病氣らしく、それ以来女子生徒は現在も入院したままだと言われている。

「その話のどこが幽霊と関係とあるの？」

不満そうに口を尖らせるコハルがテーブルに肘を付いているが、しつかりと耳には耳栓をして更に手で塞ぐほどの念の入れようだった。

部室の中は俺とコハルの二人だけで、他のメンバーは各々の用事で遅れていた。しかし、すっかりこの部員のような振る舞いのコハルは「珈琲淹れて」だとか、「お菓子ないの？」だとか、かなり横柄な態度になっていた。

その内に天誅を喰らわせてやろうと内心思いつつ、珈琲の用意をしている俺は弱いのでしょうか？ それともこれが地なのでしょうんか？

でも、この前のトリックルームでの出来事は、まだ俺の中では終わった事にはなっていないのだよ、コハルさん。夜道を歩くときは気をつけるんだね……ふふっ。

「いや、その話はそこで終わりなのだけど、その女子生徒が入院して数日経ったある日、屋上から紙が落ちてくるを目撃した生徒が拾ってみると『臼三兵八赤ク染マリ、真実八閻二紛レタ』と書かれていたんだ。それから数ヶ月の間、毎日のように時間を選ばず屋上から紙が舞い落ちていたが、誰がやったのかは未だに分かっていない。先生も知っているくらい有名な話だからな、これは」

「そ、それで……」

「屋上から投げ落とされている紙に紛れて、いくつかの筆記用具やノート、教科書も一緒に見つかっているんだ。持ち主が分からないそれらの物は、その女子生徒が学園に來れない事を妬んで捨てているんじゃないか、と言われているんだよ」

「きゃあ！ あ、ははっ……そ、そうなんだ。ははっ、根拠がないよ、根拠が」

悲鳴を上げながらも体裁を整えながら乾いた笑いを浮かべて否定をしているコハルだが、顔はモノの見事に真っ青で生きているのか微妙なラインだと正直思った。

耳栓までしているのに聞こえているとは本能で聞いているのだろうか？ それほど恐い話が苦手なのになんでこの話を聞きたがったのか不思議で仕方ない。

「何もそこまで恐いのなら聞かなくてもいいだろうって」

「だ、だって……気になったから」

「気になるって、何が？」

「桜井先輩の態度がちょっと気になったし、『幽霊じゃなくて生きている人間』って言ったのも気になるでしょ？ なら、それを知りたいと思うのは人間の心理だよ」

理路整然と話しているコハルだったが、気付けばいつの間にか壁際まで下がって震えていた。

……馬鹿だな。

確かに和音さんの態度は気になるものだがそれを俺達がどうこう出来るものではない。それに話したくないのなら無理に聞くのは俺の主義ではないし、影で隠れてコソコソとするのも俺の主義ではない。

「俺は何もしないから一人でやるように。まあ、コハルは強くて頭のいい子だから一人でも大丈夫だよな？」

「だ、大丈夫よ！ な、ななな、何を言ってくれちゃってるのからしねえ、トモ兄ちゃんは」

「からしねえ」ってなんだよ。

すでに頭がパニックになって壊れているコハルはロボットのよう
に足をギクシャクと動かして部室を出て行き

「……伏峰先輩、コハルちゃん大丈夫だったんですか？」

入れ違いに入ってきた律子ちゃんは不思議そうな顔をしていたが
俺は適当に答えていた。

さて、ここで一つ忘れてはいけない事柄がある。

それはあの変態部長が疑われている『覗き現場激写されちゃった
事件』であり、未解決のままだという事実である。でも、その事件
については今のところはどうでもいい見解になっているようで、部
長も和音さんも違う事をしている。

なので、俺も違う事に注目する事にした。

「……律子ちゃん、もう大丈夫なの？」

「はい。昨日はご迷惑をお掛けしました」

明るく笑みを浮かべてお辞儀をする律子ちゃんは珈琲を淹れた力
ツプを俺の前に置いていた。

昨日は先に帰ったので和音さんに任せてしまったが、律子ちゃん
の身体も心配である。しかし、本人は言葉には出さないが顔には辛
そうな部分が見え隠れているので、部室に来たときは声を掛けるの
も躊躇ってしまいそうになった。

「それで何があったのか、詳しく教えてくれないかな？ 思い出し
たくないと思うから無理にとは言わないけど、出来れば事の真相を
知っておきたいからね」

「……はい」

テーブルを挟んで向かいに座った律子ちゃんは珈琲カップを持つ
て何かを考えるように視線を巡らせていた。思い出させるのは酷だ
とは思ったのだが、何があったのかを聞いてみたいという好奇心が
勝ってしまった。しかし、やっぱり無理に聞くのはかわいそうかな

と思っていた

「中庭の切り株に女の子が立っていたのです」

小さく搾り出すような声で律子ちゃんが喋り始めた。

「そう言えば、昨日もそんな事言ってたね」

「はい。真っ白なワンピースを着た一〇歳くらいの女の子が、悲しそうに空を見上げて切り株の上に立っていたんです」

これはまた如何にも”幽霊ですよ”って感じの服装をしているが、普通の人間がああ切り株の上に立つのは不可能に近い。出入り口のない金網と有刺鉄線に囲まれている中に一〇歳くらいの女の子が入るのは現実的に考えてもありえないだろう。

そうなると思ったくはないが、その女の子が生身の人間以外の存在であると言う事になる。

「本物、か？」

「え？ 本物って……」

「まあ、そんな事あるわけないか。多分、ママツキーさんが作ったあの機械が誤作動でもしたのだろう」

律子ちゃんは不思議そうな顔をしていたので、ママツキーさんの発明した立体映像投影装置を説明すると納得したように何度も頷いていた。

その装置が何らかの誤作動をしたと考えるのが一番筋が通っているし、穏便に解決するってものだ。

「誤作動とは失礼さね、トモキン」

しかし、俺の考えを簡単に打ち砕く声が部室内に響いていた。

「マトリクスキットは正常に作動をしていたから問題はない。それにあそこは磁場が安定しない特殊な場所だと教えたけど？ 私としては現時点ではあそこで何があったのかを断言するのは避けるけど、素直に事実を認めるのも一つの解決法だと思うけどね」

「非科学的な現象を認めるっていう科学者も珍しいですよ」

「私は超常現象もオカルトも信じてるし、いつかは幽霊と話が出る機械を作りたいと思っているのだよ、トモキン君」

人の探偵の助手みたいに呼ばないで欲しい。

しかし、幽霊を信じるマッドサイエンティストっていうのもある意味貴重で不気味だな。どちらも俗世からは掛け離れた存在だし、似た者同士だし。

「あ、あの……東山先輩」

俺達の会話を静かに聞いていた律子ちゃんが片手を上げて何かを言いたそうな顔をしていた。

「ん？ なんの用かね、リッコー。私の事はママツキーと呼ぶよろし」

「え、あ……は、はい」

そこに妙なあだ名をつけて満足げに微笑むママツキーさんも律子ちゃんの様子が違う事には気づいたようだったが、徐に律子ちゃんおもむろのうしろに立ったかと思えば

「必殺、スカートおろしっ」

スカートをいきなり下ろしていた。

……アホだ。

スカートめくりなら話は分かるのだが、何故に下ろす必要があるのだろうか？ それもパンツまで脱がしそうな勢いだったのに驚いた。

そんなわけで悲鳴と笑い声、そして何故か俺には罵声が降り注ぎ、二人が何やら言い合っているのが聞こえるので終わるまでの間暫し待つとしましょうかね。

……。

……。

空になった珈琲カップを眺めていたら上機嫌のママツキーさんと半ベソ状態の律子ちゃんがやってきた。

「で、何の用ですか？」

「あつ……リッコーに見てもらいものがあつて来たのを忘れていたさね」

ポンっと手を叩いて白衣の中から昨日の装置 マトリクサーキ

ット　を取り出したが、あの白衣の仕組みを聞いているのにあの大きさの装置が出てくるのが不思議で仕方なかった。

しかし、そんな俺の思考を中断させるような事がまたしても起こった。

……その配線とテレビは何処から？

何食わぬ顔で手に持ったケーブルを鼻歌混じりでマトリクサーキットとテレビを繋いでいるママツキーさん。

もうマッドサイエンティストからマジシャンに転向した方がいいのではと思うほどの手際の良さで、部室の中にミニシアターが完成していた。

「これからリッコの恥かしい映像　じゃなかった。この映像をリッコに見てもらいたいのだよん」

呆然として完成したミニシアターを見つめていた律子ちゃんは、言葉を発する事も出来ずに頷くだけで、俺は律子ちゃんの恥かしい映像って方が気になったけど、ママツキーさんの目配せを『今度見せてあげる』という俺なりの解釈して頷いていた。

「では、いくよ」

カーテンを閉めて薄暗い部室の中で機械の作動する音が大きく響き始め

「これはマトリクサーキットに内蔵された録画装置『アレ見ちゃ（いや）ん』が記録した真実の映像である。諸君、心して見ろっ」

相変わらずのネーミングセンスに閉口している俺達を無視して、妙なテンションで興奮しているママツキーさんの講釈を聞いている間に映像が流れ始めた。

「あっ、私です」

「そうだね。これは……中庭、みたいだけど」

テレビに映し出されたのはローアングルから狙う隠し撮りのような映像で、間違いなく近くを通ればパンツが見えるだろう。

そのカメラの前を横切っていったのは律子ちゃんを抱えてている数人の覆面とした男子の制服を生徒だった。

「な、何……この人達？」

「さあ、なんだろうね」

「もしかして、この人達が私を……」

映像を見ながら怯えたように自分の肩を抱きしめていく律子ちゃんを、ママツキーさんは映像を解説しながら優しく抱き寄せていた。中庭の中央辺り、一本松のフェンス近くで抱えている律子ちゃんを下ろして植え込みへ隠した覆面集団は、一本松を囲むフェンスに何やらしていたが驚いたように振り返って走り去って行った。

こいつ等が律子ちゃんをさらっていった犯人か？

食堂の入り口に落ちていたあの紙を覆面達が残したものと判断しているのか？

それに、顔が見えないので覆面達を男だと判断するのは早計だと言うものだ。女子が男子の制服を着ている可能性もあるわけだし、律子ちゃんくらいの体重なら女子でも数人集まれば抱える事も出来るだろう。そうになると、色々な観点から物事を見ないといけなくなるわけだ。

それに和音さんが焼却炉の近くで見たという覆面集団と、この集団が同じ人物達なのかは俺には分からない。

「……そろそろかな。リッコ、ここをよく見て欲しい」

と、画面右上を指差しすママツキーさんにつられて俺と律子ちゃんはそこを食い入るように見つめていた。

「あつ……私が出てきた」

映像は有刺鉄線とフェンスに囲まれた中にある切り株に焦点があっている映像が、その横にある植え込みに動いていき、横たわっている律子ちゃんの足元から少し離れた場所に忽然ともう一人の律子ちゃんが姿を現した。

「これはマトリクサーキットに取り込んでいたリッコの映像を投影しているところだよ。マトリクサーキットは左右から挟む形で近くに人が通るとその人物をスキャンして投影するシステムになっているのだけど、まだ実験段階だから取り込む事が出来なくて、あら

はじめ電腦革命クラブの面々を取り込んでおいたから、和音ママに実験の手伝いをお願いをしに行っている間に作動したわけさね」

「……つまり、律子ちゃんが近くを通ったから反応して映像が出たって事ですか？」

「ピンポンッ、さすがはトモキン。まだ未完成だから精度が低くて動く事が出来ないから立っているだけなんだけど、本来はあの装置の前を和音ママに通ってもらう予定だったのさね。そのあとはトモキンにもお願いしようと思ったけど」

何やら面倒な事を言っているがマトリクサーキットは正常に機能していたようで、そこに関しては満足そうにママツキーさんは頷いていた。

「で、問題はここから　ちょっと切り替えるさね」

あの装置に内蔵されているカメラは三六〇度自由自在に動く事が出来るようにアングルは逐一変わっていた。

映像が次々と切り替わっていく中、一本松の切り株が大きく映し出されていた。しかし、場所は移動できないので切り株までは少し距離があり、映像に鮮明さが欠けていた。

「切り株の上に人影があるの分かる？」

「えっ？　……どこ、ですか」

ママツキーさんは映像を指差したまま律子ちゃんに確認しようとしているが、律子ちゃんには見えてないようで首を傾げていた。

「トモキンは見える？」

「いえ、映像が不鮮明でよく分からないですね」

切り株の上に何か背景とは違う”何か”があるのは何となく分かりますが、それが人影と言われても断言は出来なかった。

「相変わらず手厳しい事だね……だが、しかしっ」

俺の言葉に小さく苦笑いを浮かべたママツキーさんはマトリクサーキットを操作し

「拡大縮小、左右旋回に加えて、モノクロ撮影からモザイク処理まで何でも出来る『アレ見ちゃ（いや）ん』を見くびってもらっては

困るねえ、トモキン」

俺に向かつて勝ち誇ったように鼻を鳴らしていた。

別に見くびってはいないけど過大評価もしていないし、期待もしていない。だって始めてみた機械に何の評価が出来るっていうのだろうか？

評論家が新製品を評価したりしている事があるけど、あれは本当に新製品に触れて体験しているのか気になってしまふものだ。それにどのくらいの期間試用したのかによってもその評価の信憑性が変わって……いや、こんな話はどうでもいいか。

「それでだ。これが問題の人影だが、映像を鮮明に加工しているのだから分かりやすくなってるさね。ついでに別の映像で説明すると、ほれっ　こんなにリッコのパンツがクツキリと見える」

そこには廊下で転んで目を回している律子ちゃんのパンツが、シワまでクツキリと……。

「きゃあ、きゃあつ、見ないでくださいっ」

まあ、当然の反応をしている律子ちゃんをよそに楽しそうなママツキーさんは「シワシワパンツ」と妙な歌を口ずさみながら、更にズームして拡大していた。

最初からこの機能を使つて説明してくれたら分かりやすいのに、ママツキーさんの事だから色々と自慢したいのだろうな。俺達が驚く様子に満足した顔を見せているし、質問してくるのを待っているような節もあるし。

「で、映像を戻して　これが問題の人影エックスさね」

「確かに人影がハッキリしましたけど、これはママツキーさんでは？」

「軽くこちらを無視して確信をつくとは、さすがはトモキン。それはまさしく私……って、なんでやねんっ」

微妙なテンポでノリツツコミをいれてくるママツキーさんはちょっと恥かしそうだった。

慣れない事はするものではないですよ。裏拳ツツコミなんて芸人

でも過酷な訓練が必要な高等テクを素人が使うなんて無謀ですからね。俺はこれでも頑張って通信教育（テレビのお笑い番組ですけど）で覚えたので、スナップを効かせた裏拳ツツコミが出来るのですよ。「ママツキーさんによく似てますけど、本当に違うんですか？」「私はこんなに小さくないぞ。それに胸も平らではなく、それなりに立派さね」

それについては言及は避けます。

「……何とか言えよ、タマ」

「タマって何ですか、タマって」

「ふっ……気にするな、タマ。人間、知らない方がいい事もあるんだから」

意味が分からないし、俺は猫ではない。

しかし、見れば見るほどママツキーさんにそっくりな女の子がテレビ画面に映っているのだが

「あっ……この子です」

驚いたように目を丸くしてテレビ画面を指差していた。

「ちなみにこの白いワンピースを着た女の子は画像解析の結果、九〇パーセントの確率で生きている人間ではないと結論が出た」

事もなげに話をするママツキーさんを見つめて震えだした律子ちゃん。俺はテレビ画面を見ながら頭の隅を色々なものが駆け巡っていたが、この映像は封印する事にしようと思った。

それは新たな騒動の幕開けを示すに違いない映像だと直感したからだ。

第一八話：どうでもいい事だな、こりゃ

カレーパン。

絶妙な具とパンのハーモニーがお口の中で広がり、カレーのスパイシーな香りとジャガイモやお肉のジューシーな味わいが味覚のオーケストラを奏でる。

俺もカレーパンは好きだが辛過ぎるのは勘弁して欲しいが、この人は何を食べても大丈夫なんだろうな。

「カレーパンが盗まれたんだよ！ 一大事ですよっ」

目の前で唾を飛ばして俺の頭をシェイクする和音さんの胸も一緒にぶるんつと揺れていた。

……は、吐きそうだ。

昼飯を食べて一時間ほどの胃袋にはきつい仕打ちで、リバーシしないように口を閉ざしてないと危なかった。

「……で、一体何の話ですか？」

「だから私のカレーパンが誰にか盗まれたんだよっ」

言っている意味が分からないが、俺にはどうでもいい事だというのは十分に理解出来た。

現在、部室の中で和音さんと二人つきりなのだが、決して色恋沙汰には発展しないのは色気より食い気が勝っている和音さんが目の前にいるからだろっな。でも、この部室内に充満する油の匂いが更に吐き気を増長させてくるのでトイレに行つて来てもいいでしょうか？

「それが授業中に俺を拉致つた人の台詞ですか？」

「授業よりカレーパンだっ」

いや、授業でしょ？ 普通。

「ほら、ここに入っていた『激辛ハバネルネルカレーパン』が三個もなくなっているんだぞ！ これが緊急事態以外の何ものでもないだろっ」

テーブルの上には竹で編まれたザルの上にキッチンペーパーを敷き、その上に色とりどりのパンが山のように積み重なっているのだが、和音さんの話では全てカレーパンらしい。

呆れるとか感心するとか関係なく面倒な事になりそうなので関わりたくないと思っていたところで、タイミングよく授業終了のチャイムが鳴っていた。

「俺には関係ないので、ここで」

「どこに行くんだい？ 智美」

立ち上がろうとした俺に向かって何か飛んできたので寸前のところで避けた。

しかし、今通り過ぎていった銀色に輝く物体はなんだったのでしようか？ そう思い、恐る恐るうしろを振り向いて見ると、壁に突き刺さっている包丁があった。

……殺す気かよ、この人は。

壁に突き刺さった包丁が窓から差し込む日の光を受けてきれいに輝いているが、その斜め下で腰を抜かして蹲っている人の姿もある。

「ぼ、僕が何かしたのっ？」

「なんだ、海藤か？ ……あつ、もしかしてカレーパン食べたのはお前かっ」

部室の入り口で蹲る部長を見下ろして舌打ちをした和音さんだったが、いきなり声を荒げて二本目の包丁を部長に向けて突きつけていた。

「え？ えっ……な、何の事だよ」

「とぼけるんじゃないよ！ 私のカレーパン食べただろっ」

「知らないって。今来たばかりなんだから」

すでに部長を犯人と決め付けて話を進める和音さんの目は血走り、恐怖で怯える部長は「お許しを、お代官様っ」と土下座をしていた。完全に理性を失っている和音さんは部長を刺しそうな勢いなのでひとまず包丁を置いてもらうように説得をしようと思うのだが、近づくと俺が刺されそうなのでここで説得するしかない。

だが、話を聞いてくれそうな雰囲気はまったくないので諦めて部長の尊い犠牲を待つとしますか。

「ちよ、ちよっと！　ともちゃん、僕を見捨てようとしてるでしょっ」

「はい」

「うわっ、気持ちいいくらい潔い返事だけど助けてよーっ」

スパッと言い切った俺を涙目で見つめる部長は気持ち悪いので助ける気が失せてしまった。

だが、ここで『七曜学園殺人事件　カレーパンに秘められた愛と復讐の過去』なんてサスペンス劇場を繰り広げられても嫌なので、やっぱり止める事にしよう。

「和音さん、カレーパンを食べた犯人を探しましょう」

「さすがは智美。そう言ってくれると思っていたよ」

クルッと満面の笑みで振り返った和音さんはどこから出したのか手には女子の制服を持っていた。

……もしかして、ハメられた？

ハメるのは男の特権　おっと、下ネタに走ってしまったが、そう言えば先ほども俺の事を『智美』と呼んでいたな。

「……何か隠していますね、和音さん」

「さすがは智美ちゃん。察しがいいね　ちなみに、アレはサッシで、コレは冊子」

と、上機嫌で窓ガラスを指差し、表紙に『魅惑のカレーパン　愛するあの人はカレーパンの匂い』と描かれた一冊の本を持ち上げた和音さん。

……理解不能なタイトルだな。

そう思ったのだが和音さんの手に持った本に心奪われそうになってしまったが、和音さんの態度からして完全に何かを隠しているのは明白だと思った。

「はあ……で、何をすればいいんですか？」

「何って、カレーパンを盗んでいった犯人を探すんだよ」

「本気ですか？」

「本気も本気。これは私がカレーパン嗜好会と作り上げた最高の一品なんだ！」

そう言つて手に持っていた本を広げて『愛しのあの人もイチコロ激辛ハバネルネルカレーパン』の頁を開いてテーブルに叩き付けていた。

そこにはあの世界一辛い唐辛子をふんだんに使ったカレーパンの作り方が書いており、注意書きで「食べ過ぎには注意しましょう。次の日がありませんから」と物騒な文面が綴^{つづ}られていた。

思わず「イチコロつてそっちの方かよ」つてツツコミをいれたかったが、和音さんが拳を振つて話すカレーパンへの思いを聞いてみると変なツツコミは命がないと判断した。

「でも、探すつて言つてもこの学園の生徒数をご存知でしょう？」

「心配しなくても大丈夫。この部室に入ってくる生徒なんてほとんどいないだろ」

「確かにそうですけど……」

「だからこの部室に入つて泥棒をしていくのは部員である私達と、この部室にいつも出入りしている連中……それ以外には考えられないんだよ」

力がこもった演説風の語りを聞きながら確かにそうかも頷いていた。

この電腦革命クラブに近づいてくる生徒はほとんどいない。部長は顔がよくてモテるのに放課後になると誰にも相手にされないのか、この部室まで追い駆けて来る女子生徒はいない事に今更ながらに気付いた。まあ、それは和音さんも同じ事で昼間は女子生徒や男子生徒に揉みくちやにされているのに、放課後になるとこの通りの人になるから誰も近寄つてこないのかも知れない。

「つまり、カレーパンを盗んでいったのはこの部室に出入りしている人物だと言いたいわけですね？」

「そう。私がちよつと部室を空けた隙について誰かが侵入してカレ

「パンを盗んでいったんだよ。それも一番楽しみにしていた激辛ハバネルネルカレーパンをつ」

悔しそうに片膝を付いた和音さんは小刻みに肩を震わせて泣いているようにも見えたが、次の瞬間立ち上がったかと思いきや

「そこでだ、智美！　これから潜入調査を行なうのでこれに着替えるっ」

テーブルの上に女子の制服を投げてきた。

俺は観念してとりあえず制服を手にとって固まった。それは女子の制服と色だけは似ていたが、まったくの別物だった。

「……………和音さん、これは」

「メイド服だ。それを着てカレーパン嗜好会へ潜入調査へ行つて来て」

まったく言っている意味が分かりませんか？

「そんな不思議そうな顔をするな、智美。大丈夫、智美なら絶対に似合うから」

いや、そこは心配はしてませんし、着るつもりもありません。

「なんだ、まだ何か質問があるのか？」

「色々あり過ぎて何から聞いていいのか分かりません」

「それなら無いと一緒だから、早く着替えて行って来てよ」

結局会話がかみ合わずに討論の余地さえ与えてもらえず、強制的に着替えさせられた俺はカレーパン嗜好会との未知の遭遇をするハメになった。

ハメられたよ……………ずっぽりと、ね。

そう思ったときは後の祭りで、俺の人生は流される笹舟の如く、緩やかに流れる小川から大波うねる時化^{しけ}の大海原へと出航していった。

出航して数分　すでに遭難して沈没寸前だった。

「そこっ、カレーの極意を述べなさいっ」

「はい！ カレーは愛でありますっ、彼との愛は煮込んで育てますっ」

ついていけないテンションと鼻の奥が痛くなる香辛料の匂いに頭がクラクラとしていた。

「で、智美さん。あなたは和音様のお知り合いと言うのは本当かしら？」

「はい、本当です。和音さんにはいつもお世話になってます」

つい先ほども色々とお世話になったはばかりだが、目の前にいる女子生徒は気に入らなかつたようで眉をしかめて明らかに不機嫌な顔になっていた。

「そのメイド服……確かに和音様のものですね」

「え、ええ、そうですね」

「きーっ、なんであなたみたいな四流パン職人が和音様の高貴なメイド服をっ」

ハンカチの端を噛んで本気で悔しそうな女子生徒についていけずに俺はどうしていいのかと辺りを見渡した。

が、誰一人として助けくれそうな雰囲気はなく、遠巻きにこちらを見て『どつかいけよ、馬鹿』みたいな視線を飛ばしてきていた。「ちよつと聞いてますのっ」

そして目の前にいる女子生徒はこのカレーパン嗜好会の一番偉い人。カレーパンスターと言うらしい。

色々とツツコミをいれたい部分があるのだけど、そこは大人の事情で事で無視しよう。多分聞いてしまうと話が長そうだし、面倒な事になるのは今までの経験で十分に把握している。

「とりあえず、和音さんからの伝言をお伝えします」

「和音様の？」

「はい。『大至急、激辛ハバネルネルカレーパンを作っ』という事です」

「な、なんですって！」

何故かカレーパンスターは驚いて数歩後退り、同じくカレーパン

職人（ここでは部員はそう呼ぶらしい）達に伝染して俄かに騒がしくなっていた。大体、これのどこが潜入調査なのだろうか？ 思いっきり正面から入って普通に「カレーパンを作ってくれ」と言っているのと同じなのだが。

「うつつ……和音様のご命令でもそれは出来ません」

「どうしてですか？」

「ないんです……もう、作れないですよっ」

泣き崩れたカレーパンスターが俺を見上げて

「唐辛子が目にしみるから」

微妙な事を言って倒れた。

そして一斉に駆け寄ってくるカレーパン嗜好会の職人達が励まし、カレーパンスターは「ありがとう」と一言残して目を閉じていった。

……面倒だな。

この先の展開までついていく自信と暇がないので、ここで退散した方が被害も少なくていいだろう。これ以上学園青春ドラマに付き合う気もないし、早く着替えたいし。

そんなわけで徒労に終わったカレーパン嗜好会への潜入調査を終え、重い足を引きずって部室に帰っている俺の視界にこれまた面倒な人物が入り込んできた。

「ちやお、智美ちゃん」

「消えてください、部長」

現れたのは妖しげな笑みを浮かべた変態部長が俺の身体を舐めますように観察していた。

「やっぱり似合ってるよね」

「さっきも同じ事言っていましたよ。それよりも、その格好はなんですか？」

俺の格好について感想を述べる前に、俺としては部長が着ている服について考察したい気分だった。

「何って、白馬の王子様」

「白馬の王子様って言うより、白身の玉子様って感じですよ」

顔を丁寧に黄色く塗って全身を真っ白なシートで包んだ部長は見た目が目玉焼きのようになっていた。

……馬鹿だな。

本人は楽しそうにやっているようだが、これが学園一モテる男の姿なのだろうか？ まあ、何でもするのが今のモテる要素の一つかも知れない。

「演劇部ですか？ コスプレ同好会ですか？」

「ううん。オバケ屋敷研究会だよ」

俺の聞きたい事をすぐに理解してくれる部長は好きだが、本当にどんな部活でもある学園だよ。しかし、オバケ屋敷研究会で何故に玉子なのだろうか？ 見た目はオバケに見えない事はないのだけど、まるつきり恐怖を煽るものは感じない。

俺なりにこの格好を解釈をするとしたら、冷蔵庫から取り出すときに落とされて割られてしまい、黄身が崩れて目玉焼きになれずに卵焼きになってしまった玉子が「目玉焼きになりたかったよ」と、無念を残して食べられてしまい、その結果化けて出てくるようになったちよつと悲しいお話なんだろう。

まあ、俺の勝手な解釈なのでまったく意味がないのだけど。

「でも、この格好って何だろうね」

しかも何も分からないで着ているこの人には頭が下がる思いだ。それにしても知り合って二年目になるが行動パターンがさっぱり分からない。

「ところで、智美ちゃん」

「何でしょうか？」

「僕達ってかなり目立ってるよね？」

痛い視線が廻りから浴びているが放課後なのでその数は少ない。しかし、まだ授業が終わって一時間も経ってないないので教室や廊下で友達と喋っている生徒達もいるので、こんなコスプレ野郎（

メイドと玉子のオバケ）は場違いに目立つ。しかし、玉子のオバケはそんな事は関係なく女子生徒に手を振って黄色い歓声を受け、俺は男子生徒から携帯のシャッター音を数え切れないほど受けていた。
……ウザイ。

徐々集まってくるゾンビのような集団をなぎ倒して行きたい気分だが、さすがにこの格好では動き難い。

「海藤さん、ちょっと失礼しますね」

「え、ちよっ　きゃああっ」

女子生徒にスケベ面を全開で手を振っている部長を足払いで転ばせ、徐に足を掴み、少し反動を付けるために振り子の原理を応用し、ジャイアントスイングの要領（俺の場合、右へ一度振って左回転がしやすい）、でゾンビの集団をなぎ倒し

「よっ、せいっ」

最後の一振りとはかりに部長を投げ飛ばした。

呆然とする女子生徒の集団が俺を真っ直ぐに見つめているので軽く笑みを浮かべてウインクをすると、「お姉様、素敵」と言いながら薄く頬を赤くして俯いていた。

……嬉しくない一言だね。

そんな姿を見ながら俺はゾンビを踏みつけていたが、足元で「もつと踏んで」「そこ、そこっ」「ああっ、女王様！」なんて聞こえるが全て空耳と言う事で片付けてその場を去って行った。

第一九話：面倒なんですけど、ねえ。

廊下を疾走する二つの影が角をアウトからインへと滑り込み抜けていく。ゆつくりとスローモーションのように動いていく人影はまるで一流のレーサーみたいだが、やっている事はかなり間抜けな事なのだが。

……暑いのによくやるね。

ギャラリーの喝采を受け、デットヒートを繰り広げていた二人が煌めく汗をそのままに健闘を称えあっているのを横目で通り過ぎていた。

廊下でデットヒートを繰り広げていたのは『雑巾掛けレース愛好会』のメンバーでギャラリーは一般生徒である。「廊下を洗淨、廊下は戦場」を合言葉に不定期で廊下で雑巾掛けレースを行なっている連中である。日々改良を繰り広げている雑巾を手に己の身体一つで駆け抜けていく勇姿は感動すら覚えるが、今の俺には邪魔な存在でしかなかった。

表彰式を執り行っている横を通り過ぎ、俺は何気なく外を見ると中庭が目に入ってきた。

「ん？ あれは律子ちゃんと……ママツキーさん？」

そこには見覚えのある二人の姿があったが、どうやら中庭で見た『ワンピースの女の子』を捜そうとしているようだが、何故か二人共真つ白なワンピースを着ているのが気になった。

金網に囲まれた一本松の前で妙に目立つ格好だね、あれは。

気になれば聞かずにはいられない俺は中庭まで歩いていき「何をしているのですか？」

二人に声をかけた。

「ん？ その声はトモ」

俺の存在に気付いたママツキーさんが振り返ったが、その顔は珍しく驚きで固まっていた。

「どうしたんですか？」

「それは私の台詞だって……なんだよ、その格好は」と、俺を指差すママツキーさん。

「人の事は言えませんか？」

「まだ私達の方がまともだぞ。なあ、リッコ」

隣にいる律子ちゃんに同意を求めるママツキーさんだが、当の律子ちゃんは驚きで完全に言葉を失っていた。まだ俺の女装に免疫がないらしく（あつたらあつたで困るが）、新鮮な反応を示してくれるのだが

「……か、可愛いです」

このズレた感想がなければ尚いいと思う今日この頃。

しかし、この二人恥かしくないのだろうか？

……透けてるんだよね。

見事に下着が透けているママツキーさんは真っ赤な上下とかなりセクシーで、律子ちゃんは透けてないところを見ると白の下着を着用しているようだ。つまりはほとんど下着姿を晒しているのと代わりなのに何故平気そうなのだろうか？

「トモミンのメイド服は新鮮だな」

「それはいいですから、見つかりましたか？」

俺の服を楽しそうに見つめるママツキーさんにいきなり聞いてみたが、俺の聞きたい事は分かっているようで「まだ」と一言だけ返してきた。

「でも、面白いものを見つけた」

「……面白いもの？」

「そう、面白いもの。これはある意味私への挑戦だね」

楽しそうに声を上げて俺を見上げたママツキーさんの顔には、声とは明らかに違う表情を浮かんでいた。

苛立ちと怒りが入り混じった複雑な表情を浮かべ

「私の研究が遊ばれてるよ」

小さく自嘲気味に笑っていた。

「なんでそう思っんですか？」

「これを見てよ」

ママツキーさんが掌を開いて見せてくれたのは小さな機械だった。一見して何の機械なのかは俺には分からないがママツキーさんには何かが分かっているようだ。

「これは私が今開発中のマトリクサーキットに搭載予定だった物質変換投影装置『ミラージュ』の試作品だよ。一ヶ月前に紛失して探していたんだけどね」

不満爆発と言わんばかりのママツキーさんはその小さな機械を丁寧に足元にあるジュラルミンケースに入れてため息混じりの息を吐いていた。

「それが『ワンプീスの女の子』の正体って事ですか？」

「多分間違いないと思うさね。このフェンスにコレは仕掛けられていたし」

と、手に持っている小さな箱状の機械を俺に見せていた。

「更にはご丁寧にワイヤレス送信出来るようにシステムまで書き換えられているようだから、ほぼ間違いはないだろうね。ただ、一つ疑問が残るのはこの装置の使い方をどこで知ったのかって事だけなんだけど……」

不満そうに口を尖らせているママツキーさんは不満爆発と言った感じだった。

そう言えば、学園七不思議『一本松の祟り』の話今日の休み時間に、部長がわざわざ俺の教室までやって来て聞かせてくれたが、夕方になると一本松の切り株に女子生徒が座って屋上を見上げているというオーソドックスな話だった。

これは時期的に『屋上の幽霊』と絡めた話のようで、「デマだ」とあとから追い掛けて来た和音さんが部長の頭を叩きながら否定していた。だが、今のママツキーさんの発明品があれば可能な話ではないか？ いや、マトリクサーキットでもあれだけの映像が映し出せるのだから、はつきり言えば完全にデマだと言い切れない。

現に何の目的か分からないがこの場所に仕掛けられ、『一本松の祟り』の噂が出回ったのは、あまりにもタイミングが良過ぎる。

「でも、これでハッキリしてよかったじゃないですか」

「よくない！」

ママツキーさんが珍しく感情を剥き出しにして俺を睨みつけ

「これは泥棒なんだよ！ 私の発明が遊ばれているんだから、絶対に許されるものじゃないのっ」

声高に詰め寄ってきた。

「私の素晴らしい発明を横取りしたくなるのは分かるけど、これは明らかに」

「分かりましたから落ち着いてくださいって」

ママツキーさんの異変をいち早く察した俺は先手を取って話を止めて落ち着くように宥めていった。このまま話をさせていると半日は自分の発明を語り続ける事になるのは分かりきっているし、そんなものに付き合っている時間がもったいない。

「まあ、危ない事はしないようにしてくださいね」

「分かっているって。そのときはトモミンが手伝ってくれるんでしょ？ いつものように……ね」

キラリと輝く瞳で俺を見上げて可愛らしい子犬のようだが、瞳は澄んでいなくて少し穢れて澱んでいるように見えた。

「そのときって、すでに何かする気満々の目をしてますね？」

「バレた？ 一応は犯人の目星がついているから、スモークしようと思っただけ」

「手加減してやってください」

一応注意喚起はしておかないとこの人は全力でやるし、その後始末を平気でこちらに押し付けてくるからな。

ちなみに『スモーク』っていうのは犯人を煙で追い込み、^{いぶ}煙り出す事を指しているママツキーさん独特の言い回しで、この他にも『スモークチップ』というのがあるが、これは出来れば使って欲しくないものだ。

「大丈夫だつて。赤色時雨と蒼槍五月雨は調節中で使えないし」

「当たり前です。その二つで校舎が半壊して、先生達にどれだけ怒られた事か……それにママツキーさんは停学にもなったんですよ」

「そうだったかなあ……覚えてないや」

本気で覚えてない様子のママツキーさんは首を傾げているが、研究以外の事には頭が廻らないようだ。

この『赤蒼爆撃校舎半壊事件』と名付けられた事件は、特訓部の事件から更に三ヶ月後の事で、そのときは先生達も呆然として事の顛末を見届けていた。

そのときにはママツキーさんはすでに電腦革命クラブから飛び出して色々な部活を点々として研究を繰り返し、その研究成果を発表すると言つて俺達の前で実験をしたときに起こった事故なのだ。

当然、先生達も俺達の心配をしていたが、実験の責任者はママツキーさんと言う事で俺達は無罪で、ママツキーさんはそれから二週間の停学処分となった。しかし停学中も気付けば学園の中にいてその度に先生につまみ出されていたが、何度も繰り返している内に先生の方が諦めて、結局うやむやの内に停学処分は解けていた。

それくらい研究馬鹿なママツキーさんなのだから、自分の研究しているものが他人に使われるのは嫌なものだと言つのは分かる。

一般人レベルに置き換えれば、苺のショートケーキの苺だけを食べられるようなものだ……ちょっと違うかも知れないけど、悔しい気持ちは一緒だろう。

「覚えておいてくださいよ……自分の事ですから」

「私は無駄な知識はいない主義なのさね」

「それから、あれは二度と使わないでください。こちらまで被害を受けますからね」

ちなみに赤色時雨と蒼槍五月雨はママツキーさん特製の武器である。

赤色時雨は直径が五センチほどで壁にぶつかりと粘着質の赤い液体が飛び出すペイント弾になっている。その赤い液体には目潰し効

果があり、一時間ほど目を開ける事が困難になる痛みに襲われるが、その後は問題なく見えるようになる不思議なものだった。しかし、赤い液体はママツキーさんが作った未知の液体で成分は「秘密」だと言っ事だ。

あおやりさみだれ

そして蒼槍五月雨は連射タイプの小型ミサイルポッドで肩に担げるほど軽く、ミサイルと言われているのはロケット花火と弓道部の矢を改良して掛け合わせたようなものだが、破壊力は並のミサイルでは敵わないと思うほどだ。

まあ、その辺のミサイルがどんなものかは俺も詳しくは知らないのだが。

「大丈夫。今は調整中で一気にヴァージョンアップして『せきしよくゆうたち赤色夕立零式』と『蒼槍雪月花改』となる予定だから」

しないてくださいよ、そんな事は。

「出来れば、その二つは使わないでください。今度は校舎が全壊しそうですから」

「うーんっ……この二つは間に合いそうにないから、新しく作ったこれを使うから心配なくていいって」

徐にワンピースのポケットに手を入れたママツキーさん。

「きゃあっ」

「あ、ごめん。ちょっと大人しくしててよ……んっ、あれ？ おかしいな」

確かにママツキーさんはワンピースのポケットに手を入れたのだが、それは律子ちゃんのポケットで何やら身体中を弄られていた。

……頑張れ、律子ちゃん。

俺に助けを求める律子ちゃんの瞳は儚げで胸が締め付けられそうな感じだが、今の二人に近づくのは色々と危険（俺の格好込み）なので止めておこう。そんな事を思っている間にすっかりワンピースを脱がされてしまった律子ちゃんはかわいそうに下着姿で

「トモミン、下着だと思ってたでしょ？ 甘いなあ……こんなスケスケのワンピースではないって」

と、思っていたら水着だった。

しかし、その水着もかなり際どいデザインで律子ちゃんの身体には小さいようで色々とかぼれそうになっており、恥かしさのあまりその場にしゃがみ込んでいた。

「ほれ、ほれ　この水着をデザインしたのは私なんだよ。どう、すごいでしょ？」

そんな律子ちゃんを見ながらすでに話が違う方向に進んでいるのもお構いなしで自分の着ていたワンピースを剥ぎ取ったママツキさんは見てくれと言わんばかりに胸を張っていた。

「色んな意味ですごいですけど、せめて胸は隠してください」

「ん？ おっと、失礼」

ひらりと俺の手に舞い降りてきたのは赤い水着。

どうやらワンピースを剥ぎ取ったときに勢い余って一緒に水着まで剥ぎ取ったみたいで、それが俺の手に舞い降りてきたわけだ。

「トモミン、ただ見はよくないぞ」

「そう思うのなら隠してくださいって」

「別にこれ以上は減りようがないから　って、誰が貧乳さね」

誰も何も言っただけから、隠しましょよ。

「どうせ、こんな貧乳見ても興奮もしないって言っさねっ」

「落ち着いてくださいって……ほら、周りから見えますから」

怒っているのか拗ねているのか微妙なママツキさんを宥めつつ、足元に座り込んで立ち上がるうとしない律子ちゃんを立ち直らせて手伝ってもらおうと思ったのだが、「恥かしいです、死にそうです、切腹ですっ」と、こちらも意味不明な事を口走って暴走していた。結局、何を作ったのかを確認出来ず、ママツキさんの逆ギレに勘弁してくれよと思っていたら、俺達の周りには人だかりが出来上がっていた。

数分後　。

人垣の中から脱出した俺は部室へと歩を進めていた。

「す、すいません」

ママツキーさんと律子ちゃんの尊い犠牲の上に今の俺があるわけで、二人には感謝しなければいけない。

「も、もしもし……すいませんが」

しかし、この格好で校内を歩くのは目立って仕方ないが、着替えは部室で待つ和音さんが持っているでここは頑張つて部室まで帰るしかないのだ。

……罰ゲームだよな。

この前の三馬鹿娘を思い出していたが、俺はあの境地には達する事は出来ない。と言うか、達したくない。

「あ、あの……」

確かにあの三馬鹿の域に達すると部長の相手は楽だろうけど、俺のアイデンティティが崩壊するだろうから無理だ。

「すいません。あの、ちょっと気付いてもらえませんか？」

「……ああ、すいません。何でしょうか、生徒会長の鈴木君先輩」

何やら先ほどから声がすると思っていたが気のせいだろうと無視をしていたが、気付いたら俺の横に一人の男子生徒が立っていた。

「はあ、はあ……」

「大丈夫ですか？」

顔面蒼白で肩で息をするというより、身体全体で息をしているようにも見えるこの男子生徒は、この学園の生徒会長である鈴木義晴^{すずきよしはる}先輩である。

気が弱くて引つ込み思案、ついでに小柄で虚弱体質、体育はいつも隅っこに座って体育座りで見学する人だが、母性本能をくすぐりそうな童顔で密かに人気があるらしい。と、部長から聞いた事がある。

こういうタイプの人間は勉強が出来るのが一つのパーソナリティでもあるのだけど、この人は勉強も今一つで学年でも中間くらいの

成績をしている。おかげで学園でも目立つ事が少なく、呼称が『生徒会長の鈴木君』と同級生はもちろん、下級生にまで呼ばれている影の限りなく薄い人なのだ。

まあ、そんなわけでかなり立場の弱い生徒会長は、よく生徒会から逃走するので副生徒会長が探し回っている姿を見かけの種の名物と化しているが、今日はそれとは違うようだ。

「だ、大丈夫だよ……そ、それより、君は伏峰君だよね？」

「違いますよ」

「え……あ、すみません。僕、てっきりそうだと思って」

面白い反応だが、この人は素直過ぎるので騙すと心がちよつと痛い。

俺が知っている人物の中で唯一の常識的な行動が出来る人なのだから、大切にしないと部長や和音さん達がいるあっちの世界へ行ってしまうかも知れない。

「俺ですよ、生徒会長の鈴木先輩。伏峰です……でも、この格好では『智美』で通してますので、その辺の配慮はよろしくお願いします」

「は、はい！ 分かりましたっ」

周りには誰もいないが小声で耳打ちすると、生徒会長は俺に向かって顔を真っ赤にして敬礼していた。

……楽しい人だ。

俺は男だというのに何故か俺を見て照れている生徒会長が面白くて遊びたいが、俺を呼び止めたのだから何か用があるのだろう。この人が自分から声をかけてくるなんて滅多にない事なので余程の事なんだと思う。

「それで何でしょうか？」

「え、あつ……そ、そのですね」

「はい？」

とても言い難そうに俺の顔を見たり逸らしたりと忙しい生徒会長。まるで愛の告白でもするかのように……いや、俺にはその趣味はな

いから。

例えこんな格好をしていても俺は至ってノーマルなのだ。

「あの、ですねっ」

「はい。それは無理です」

「え、無理ですか……いや、無理と言われても予算の都合ってものがあります。でも、伏峰君に無理って言われると海藤君と桜井さんを説得するのが難しくなってます」

本当に困ったような顔をしてオロオロとし始めた生徒会長は何だか俺の予想とは違う事を言っているような気がするのだが。

予算がどうのこうのって言っていた気がするが……。

「あの、何の話ですか？」

「え、あっ、えっと……廃部勧告なんですけど、電腦革命クラブの」

申し訳なそうに告げる生徒会長の言葉はまさに青天の霹靂だった。

第二〇話：平穩はいずこに……。

あまりに唐突な事を言われて一瞬ではあつたが頭の中が真っ白になつてしまった。

生徒会長は「一応、海藤君に話しておきます」と言う事で一緒に部室へと行く事になり、現在大方の話が終わつてリアクション待ちの状態であつた。

いわゆるドローして攻撃を終えたので相手のターンである。

そう言えばカードゲームが最近は多種多様なもので、ルールが簡単そうだが複雑で頭をフルに使つて知略の限りを尽くすのは最高に面白いと思う。俺も昔は少し遊んだ事があるけど、今は机の引出しで肥やしになっている。おっと、また話が逸れてしまった……最近、頭が暴走気味だが周囲の影響が大きいのだろうか。

「……ほえ？」

「廃部勧告つて、まだ予算審議会は先の話だろ」

間抜けな声で呆けている部長とは対照的に、今にも噛み付いてきそうな勢いで歯を剥き出しにしている和音さんに怯え、俺の隣で悪戯をして叱られている子供のように縮こまっている生徒会長がいた。予算審議会とはこの学園にある委員会や部活の今年度の活動に対して、来年度の予算を概算で算出する会議の事である。

出席者は各部活動の部長と各委員会の委員長。そして審議会議長に生徒会書記長が就任し、二学期の始業式から二学期の終業式までの間に審議、監査、予算編成の全てが行なわれるのが決まりになっている。ちなみに書記長は公正な判断を下す必要があるので一切の部活動を禁じられており、『生徒会の中で一番忙しいのは書記長で、就任すると必ず痩せる』とまで言われる過酷な仕事である。

今年度の書記長である三年の江頭先輩は、就任する前は七〇キロあつた体重がすでに五キロほど痩せ、現在も体重が減つていと言

うのが気の毒でならなかった。まあ、生徒会長に逃亡癖があつてワガママな副生徒会長が上にいれば、気苦労も絶えないだろうけどね。「そ、そうなんですけど……今年度に認可した部活動の数が、えっと……あまりにも多すぎまして」

「もしかして、それで予算が足りないって言うんじゃないだろうね」小さく申し訳なそうに頷く生徒会長に「がおっ」と吼える和音さんを止める事は最早不可能に近い。

やっている事は恫喝に近いのだけど

「それは生徒会の失態だろ？ 何も考えずに次々と認可した結果、今度は予算が足りないから潰すって、ふざけるんじゃないよっ」

言っている事はとても正論だった。

「は、廃部になっちゃうんですかっ？」

「それは何と言つか困ったね。一応は私もこの部の人間だし、愛着はそれなりにある」

目に涙をいっぱい溜めた律子ちゃんと無然とした表情ながらも納得出来てない様子のママツキーさん。二人も生徒会長に話を聞いたあとで連絡をとったのでこの場にいるわけで、部長は俺が帰ってきたら普通にお茶を飲んでいた。相変わらず行動パターンが読めない人だよ。

「まあ、二人共落ち着いて。それよりもまずは服を着ようね」

「え……あ、えっ？ あわわっ、きゃー！」

そう言われて我に返ったように自分の姿を確認して瞬く間に顔を真っ赤にした律子ちゃん、窓ガラスを揺らす超音波並の悲鳴を上げて部室を飛び出していった。そのあとを「待っておくれよ、リッコ」とマイペースでとぼけた調子で駆け出して行ったママツキーさんだったが未だに上半身が素っ裸だった。

「何っ？ 水着 って、水着はどこ？ とめちゃんっ」

二人が出て行って数秒経ってから辺りを見渡している部長は俺を見上げて「水着、水着」と呪文のように唱えていた。

そう言えば二人が部室に入ってきたときもまったく眼中にないよ

うに生徒会長の話に聞き入っていたから、今の話がどれほど部長にショックを与えていたのかが窺い知れる。

「こいつもかなり動揺しているみたいだね。ふーっ……話進める前に智樹も着替えておいで」

「……そうですね」

どうやら俺も部長と同じで動揺しているようで、メイド服を着ていたのをすっかり忘れていた。

テーブルを囲む電腦革命クラブの面々。

みんなが一堂に介するのは久しぶりというか、始めての事かも知れない。若干名余計な人達もいるのはご愛嬌かも知れないけど。

「なんで私を見るのよ。あ、もうっ　　うっとうしいわよ、熊っ」

「そんな事言わないでくれよ、ハニー」

「きゃーっ、気持ち悪い！」

テーブルの端で漫才を繰り広げるコハルと中川先輩の二人。コハルに関しては部長公認なので分かるのだけど、中川先輩まで何の用でここにいるのだろうか？

「話をまとめると、現状では電腦革命クラブは廃部候補の上位に入っていて、このままいけば間違いなく廃部って事ね？」

「は、はい……ぐ、ぐるじいっ」

和音さんは冷静に分析をしているがその腕には生徒会長の首が挟まっており、興奮の度合いに応じて生徒会長の顔色が青から白へ、白から茶色へと変化していた。

こんな光景が前にもあったような気がしながら話を整理をしていると

「部長が悪いって事ですネ」

この一言で片付いてしまふのだった。

「な、なんで僕なんだよっ」

「今までに起こした数々の不祥事が雄弁に物語っていますけど、そ

れを全て否定出来る意見はお持ちですか？」

「あう……とめちゃんが恐いよお」

鋭く睨みつけると身体を縮こまらせて俺を見上げる部長は「僕だって、僕だって」と男前オーラがゼロになっていた。俺が知り合って二年ほどだがこの人が起こした迷惑極まりない数々の伝説は女子には大人気だったが、男子には反感ばかり買っていた。その度に和音さんに「うるさいから」と言う理由で女子の制服を着せられ、近寄ってくる男子生徒達を蹴散らしていた。そのときは言われるがままに初めて女装して意味が分からなかったが、それがまた新しい伝説を作って『謎の美少女クールビュティ撫子』と呼ばれるようになっていた。

「それで救済はあるんだろ？」

首を締め上げられてタツプする生徒会長が助けを求めているが誰一人として助けにいかうとはしない。こういう場合の和音さんには触らぬ神に祟りなしである。しかし、和音さんの言っている『救済』の事を忘れていた。

「そう言えば、今回は救済があるんですか？」

「さあ、それは生徒会次第だから分からないけど」

俺と部長の二人で茶色を通し越して死人のような顔をした生徒会長を見つめていたが、あの人にそんな権限があるようには見えない。多分、今の生徒会で一番の権限を持っているのは

「こんなところで何を油売ってるの！ 鈴木っ」

この人だろう。

部室のドアを勢いよく開けて雪崩れ込んできたのは副生徒会長の田乃中華子だった。

「まったく……こんなところで馬鹿女とイチャついて」

「誰が馬鹿女よ、誰がつ。あんたは正真正銘の馬鹿でしょうがつ」

「なんですって！ 乳デカ女っ」

「あら、胸が大きいのは色々大変なんですよ。小さいあなたには分からない事でしょうね、ほほほっ」

相変わらず仲が悪い事で……。

それからヒートアップしていった二人の戦い（内容に関しては頭が痛いので言いたくない）が暫く続いたのは言うまでもなかった。

「で、何をしに来たんですか？ 副生徒会長の田中花子様」

「田乃中華子です！ ったく、いつもあなたは私に対して失礼ですわ。私はいつまでも帰ってこない生徒会長を探しに来たんですよ」

鼻息荒く生徒会長を睨みつける副生徒会長。対する生徒会長は縮こまって「ごめんなさい」と答えるのが精一杯だった。

この二人が学園のトップだと言うのがどうにも信じられないが、選んだのは俺達なのだから文句は言えないのだろう。まあ、一応は生徒会の仕事をしているので問題はないけど、ほとんどが言い出したら何でも実行する副生徒会長の尻拭いを生徒会長がして方々に頭を下げて廻っているという構図が出来上がっているのだが。

「まあ、何でもいい。いきなり廃部勧告とはどういう見だ？ 華子」

「それはまだ正式に決定したわけじゃないわ」

「……どういう事よ？ これが私達にハッキリと言ったぞ」

と、生徒会長の頭を叩く和音さん。

「江頭書記長がこのままでは活動予算が二学期まで持たないって言い出したの」

「それじゃ、なんで廃部勧告なんて発令してるのよ」

「まだ発令はしてないわよ。一つの案として『現在、活動をしていない部活動を把握しておく必要がある』って話になっただけで、生徒会長にはその調査方法を考えて欲しいってお願いしたのっ」

と、生徒会長を睨む副生徒会長。

二人に睨まれて更に小さくなっていく生徒会長は浮気が見つかって彼女と浮気相手に板ばさみになっている男みたいに見えるが、『調査方法を考えて欲しい』という副生徒会長の言葉が気になった。

「ナコナコ、調査って何？」

「誰がナタデココよ！　って、東山……何してるのよ？」

「何って私もこの部員だし」

俺の聞きたい事をズバッと聞いてくれたママツキーさんに驚いた様子の副生徒会長は目を丸くしていたが「そうだったわね」と片付けて咳払いをしていた。

「そんなに驚く事はないさね。それより、調査って何さ？」

「調査って言うのは活動していない部活や委員会を調べてもらうのよ」

簡単に手短な説明でママツキーさんを一瞥し、俺達を見渡した副生徒会長は意味もなく生徒会長の頭を力いっぱい叩いていた。ちょっとかわいそうだがとてもいい音がしたので俺も叩いてみたいなと思ってしまったが、話の内容はかなり重いものでそんな雰囲気ではなかった。

「……つまりはスパイをしろ、と？」

「スパイとは違うわよ。これは言わば学園のヒーローにしか出来ない一大イベントなのよっ」

「正義のヒーロー？」

「そう！　この広い学園の中で誰かも好かれ、下民共の羨望を一心に受け、尚且つ活動内容を調査出来るようなヒーローは普通にはいないわっ」

ママツキーさんに答えながら、目を見開いて拳を打ち出す副生徒会長。それを全て受けて瀕死の生徒会長。

まさしく迷コンビだよな、この二人は。

しかし、副生徒会長の発言は妙に具体的に誰の事を言っているの？　はすぐに分かってしまったのですけど。

「そこで、この大役を電腦革命クラブの部長である海藤翔様をお願いしようと思ひまして、ここに來たのですっ」

「……僕？」

いきなり名前を呼ばれて驚きで目を見開いている部長に「そうです！　これを出来るのは翔様しかないのですよ」

副生徒会長は、すぐるように膝を付いて部長の手を取っていた。

その瞬間、誰もが口を閉ざして一通り顔を見合わせていたが、誰からとなくため息にも似た力の抜ける息遣いが聞こえていた。

「それじゃ、頑張つてな。律子、珈琲淹れて」

「私は研究があるので失礼するよ。トモキン、暇なときは手伝つておくれ」

椅子の背もたれに身体を預けた和音さんはいつものように律子ちゃんに珈琲を注文し、ついでに「お菓子取つて」とコハルまで使っていた。

「え、ちよつ　僕を見捨てないでよ！　ああ、ともちゃーんっ」

「見捨ててはいませんよ。始めから相手にしてないだけです」

「それつて一番酷いよーっ」

皆が首を縦に振つて頷いている中、一人泣き叫ぶ部長の横で腕組みをして「そうかね」と頷いている副生徒会長は俺の視線に気付いたようで、顔を少し赤くして白々しく逸らしていた。

味方が誰もいない完全アウエーの部長は可愛くない瞳に涙を浮かべて「みんなの馬鹿」と部室を駆け出していき、そのあとを追って副生徒会長が走り出し、更にその二人を追って今にも死にそうな生徒会長がヨロヨロと部室を出て行ったのだった。

……これで静かになった。

肩の力が抜けて和音さんと同じように椅子の背もたれに身体を俺の前に湯気の立ったおいしそうな香りを放つ珈琲が置かれた。

「どうぞ」

「ありがとう」

お礼を言つて珈琲カップに手を伸ばしたが、よく考えれば夏の暑い時期に熱い珈琲を飲むのはどうかと思う。しかし、夏こそ熱いものを飲むのは身体にもいいと言つし、律子ちゃんはそのままで熱くはしないので飲みやすいものだ。

「ぶあちゃー！」

ただ、勢いよく飲んで噴出している大熊猫バンダがいるけど、それは気

にしないでおう。

「……………つて、まだいたんですね？ 森の大熊猫さん」

「いたよ、伏峰のお兄さん。と言うか、俺はちゃんとした用事があったきたのに張本人が出て行ってしまったではないかっ」

『森の大熊猫さん』をスルーして部屋のドアを指差して憤慨している中川先輩は「俺も暇じゃないんだっ」と更に怒り出した。俺も『伏峰のお兄さん』をスルーしたがコハルが申し訳なさそうな顔をしていたので、あとで理由だけは聞いてあげるとするか。その後の対処は話次第と言う事で。

「部長に用事ですか？」

「そう、海藤に用事だったんだよ。ったく……………あいつはまた問題を起こしてくれた」

「……………問題、ですか」

その言葉に俺は中川先輩の用事が想像付いたが、俺以上に過剰に反応したのは和音さんで

「また、何かやらかしたのっ？ あの馬鹿っ」

テーブルを力いっぱい叩き、珈琲カップが宙を舞っていた。

珈琲がテーブルの上に広がり、慌ててタオルを持って駆けて来た律子ちゃんがテーブルを拭いていたが、辺りには緊迫した空気が流れていた。たった今、似たような話をして何とか収まったと思った矢先にこれでは和音さんが怒るのも無理はないだろう。

「ああ、また送られてきたんだよ。今度は生徒会に送られてきたらしい……………生徒会長が持つて来たから」

「送られてきたって、また写真ですか？」

渋い顔をして俺の言葉を否定するように首を横に振った中川先輩は制服のポケットに手を入れ

「今度はコレだ」

テーブルの上に置いたのは小さなメモ리카ードだった。

そう言えば、カレーパンを食べた犯人……………誰だったのか分からない

いままだけれど、今はどうでもいい事になってしまった気がする。

第二一話：何故、こんな事になったのだろうか

さて、面倒事を一つも片付ける暇もなく、今回も極上の面倒を蒔いていった変態部長は副生徒会長に連れ去られて部活行脚の旅に出掛けていた。

活動実績のない部活を調査してピックアップするのが目的らしいけど、海藤翔が登場するのは色々と迷惑な感じもする。

部内で淡い色恋沙汰があったりするところに、あの変態色男が乱入したらどうなるだろうか？

女子ばかりの部活に変態色男が乱入して、副生徒会長がどんな態度をとるだろうか？

結論　見てみたい。

それは俺だけではないはずだろう。多分、和音さんも律子ちゃんも見てみたいに決まっている。っと、話が何となく逸れたので、何となく元に戻して。

そして、俺は新しい面倒事を解決するために集まっているのだ。

「はあ、暇だね……智樹、モノマネやってよ」

「出来ませんよ。って、今まで一回もした事ないですから」

と、言うのは嘘で、特別に活動をするような事もなく、いつものように部室でまったりと珈琲ブレイク中だったりする。

「律子、お菓子作って来てくれた？」

「あ、はい。えっと……『林檎のタルト』と『わらび餅』を作ってきましたけど」

テーブルに肘を付いてやる気のない様子の和音さんは律子ちゃんを呼んでいたが、律子ちゃんはビクッと身体を震わせて和音さんを困惑したような表情で見つめ返していた。

しかし、すぐに表情を緩めてテーブルに鞆を置いたが、それに素早く反応して奪い取った和音さんは興奮した様子で鞆の中を漁り始

めた。

律子ちゃんの微妙な変化が気になったが、今は和音さんの大いなる覚醒の方が気になる。

……また、野生が覚醒したようだ。

獰猛な野獣のように鼻息荒い和音さんは鞆の中に顔を突っ込んでいたが、開けられた鞆からは甘い林檎の香りが漂い、和音さんもそのまま動きを止めて甘い香りを吸い込んで鼻を鳴らしていた。

「うーんっ……アップルのいい香り！」

「う、うまく出来た心配ですけど、味見はしましたので大丈夫だと思いますよ」

呆氣にとられていた律子ちゃんも苦笑いを浮かべて立ち直り、ちゃんと調理の過程を説明しているのだけど、まったく聞く耳を持ってない和音さんは鞆の中身を全て出して目を輝かせていた。

「おおっ、ワンダホーっ」

「そつとしておいてあげて……今が幸せならそれでいいんだから」
歓声を上げる和音さんに律子ちゃんは呆れた顔を向けていたが、俺は今の和音さんが幸せならそれでいいと思うのだ。

だって、それで平和なら問題ないし、俺もゆったりした時間が持てるからね。

「まあ、律子ちゃんも座って一緒に寛ぎましょう」

「は、はい。でも、コハルちゃんは今日は来ないんでしょ　きゃあっ」

部屋のドアを一度見て椅子に腰掛けようとしていた律子ちゃんがいきなり悲鳴を上げるものだから、すでに林檎のタルトを食べ始めていた和音さんは「ぶほっ」と喉に詰まらせてむせ返っていた。

「和音さん、一気食いし過ぎですよ」

「ふごっ、むぐっ……ふおぐぐっ、はぐっ」

何を言っているのかさっぱり分からない和音さんは胸を叩いていたが、その動きに合わせて豊満な胸が揺れていくのはさすがの一言だ。

「はいはい、これは俺が確認しますから、和音さんはまずは飲み込んでください」

「ほふっ、ひゃふふはっ」

まったく意味不明な奇声を上げ、林檎のタルトを貪り食う和音さんをほつといて、律子ちゃんが悲鳴を上げた原因となったテーブルの上に突き刺さっている数本の矢を引き抜いた。

矢尻の部分に紙がくくり付けられていたが、今のご時世に矢文と
はいいい趣味をしているよ。

が、どこから飛んできたのは深く考えないようにした。

何故かといえば、この部屋にも近代文明の雄　空調機器エアコンがちよ
つと前に副生徒会長の計らい（簡単に言えば、この前の監禁騒ぎに
対する口止め料）で設置されたばかりなのだ。しかし、プレハブ造
りの鉄骨剥き出しは変わりないので、今度はそこも改造してもら
う。現在とはとても快適に過ごせるようになったが、エアコンが稼動
しているのにドアや窓を開け放つ馬鹿はいない。だから、深く考え
ないようにしたわけだよ……だって、どこから飛んできたのか考える
だけ野暮でしょ？　それに常識では計り知れない人達ばかりいるの
で、閉鎖空間でも何でも関係なく矢を打ち込んでくる技術は持つて
いるのか知れない。

「とりあえず、確認します」

驚いて涙目になっていている律子ちゃんに、未だに胸を揺らしている
和音さんの二人を一瞥して俺は紙を解いて広げていった。

「……………はあ」

そして盛大にため息を吐いた。

「ど、どうしたんですか？　先輩」

「ママツキーさんが助けを求めているんだよね」

「た、大変じゃないですかっ」

慌てた様子で立ち上がるうとした律子ちゃんを制して落ち着かせ
ようとしたが

「いつものアレだろ？」

落ち着いた様子の和音さんは紙に何が書かれているのか分かったみたいで、タルトを食べ終わって口を拭きながらわらび餅に手を伸ばしていた。

「ええ、どうしますか？」

「どうって……別に暇だし、ママツキーが『助けて』って呼ぶのは遊んで欲しいときだろ？ これ食べたら行ってみよう」

そう言ってわらび餅の入った器を抱え込んで一気食いを始めた和音さんを見ながら、面倒な事にならなければいいなと内心思っていた。

佐々木研究所。

文化部活動棟の三階に二部屋を繋げた大掛かりな部室を持ち、本来は『機械工学研究開発応援部』という学園の中でも歴史の長いメジャーな部活だったのだが、ママツキーさんの加入によって半ば強制的に名前が変わってしまったかわいそうな部活でもある。

「……すごいな、こりゃ」

感心しきりの和音さんが部室の中を見渡しているが、俺も久しぶりに来たので独特の雰囲気飲み込まれそうになっていた。

いかにも科学者の実験室と言わんばかりの備品(?)がところ狭しと置かれ、全体的に薄暗い部屋の中には微妙な機械音が幾重にも重なってさながらハーモニーを奏でているように聞こえるが、結局のところはただの雑音である。そして、部員が忙しなく動き回って俺達の横を何度も行ったり来たりと大変そうだが、何をしているのはさっぱり分からなかった。

「しかし、相変わらず散らかってるなあ」

「あまり変わりませんよ……これは」

「そうか？ まだ電脳の方がきれいだって」

和音さんはそう言うが俺達が座っている椅子も埃が溜まっていたし、テーブルには設計図やら見た事もない公式が書かれた紙切れが

無造作に広げられて物を置くスペースがまったくない。さすがにここまででは電腦革命クラブの部室は汚れていないと思うけどね。

「よく来てくださった。今日呼んだのは、ちょっとした実験のお手伝いをして欲しいのね」

そのテーブルを囲むように俺達の向かい側に座ったママツキーさんが、持ってきた箱から妙な機械を取り出して俺達に手渡してきた。「なんだい、コレ……変な形だね」

「本当ですね。えっと、コレはどうやって使うんでしょうか？」
和音さんと律子ちゃんは不思議そうに機械を手に取って眺めていた。

見た目は眼鏡のようだがフレームの部分が少し分厚くて何やらボタンがたくさん並び、レンズも普通の眼鏡とは違う印象を受けていた。

「コレで戦闘力でも測定するつもりですか？ それとも、救世主になれとでも？」

「何を言うかな、トモキンは。コレはインスパイヤだよ……決してパクリではない事はここに断言しよう」

断言しているが俺から目を逸らすママツキーさんはワザとらしく咳払いを一つして

「みんなには今から私の作ったゲームを体感してもらい、感想と改良点を教えて欲しいのさね」

間が持たなくなったのか話を無理やり進め始めた。

「で、みんなが今持っているのは操作端末で『メガネポータブル』」

通称、メガポと言う眼鏡型のコントローラーで、こっちが本体と、ママツキーさんが指差した先には薄暗い部室の中で一際光を放っている大きな機械があった。

「コレは仮想空間を作り出して、そこでゲームの主人公となって遊ぶ『ササキンデラックス』なのだよ」

「……すごいな」

「でしょ？ 結構作るのに苦労したんだよ。生徒会からリベート

おっと、それは秘密だった。で、ここのみんなと一生懸命作った最高傑作で、みんなで遊べるゲーム機なのさね」

ママツキーさんは得意げに胸を逸らし、部室の中にいる佐々木研究所の面々を賞賛していた。

そんな中、トレイを持った七三わけの小柄な男子生徒が俺達の前に氷の入った麦茶を置いて、ママツキーさんの隣に立っていた。

「ちなみに、このマツクルがこの佐々木研究所の所長さね」

「どうも。所長の松本修司まつもとしゅうじと言います。一応は三年ですので、よろしく願います」

ママツキーさんが隣に立っている七三分けの男子生徒を普通に指さしてそんな事を言うものだから俺達は驚いていた。見た目（主に身長）は限りなく一年生にしか見えないのだが、頭は限りなくサラリーマンしているのでギャップがあり過ぎるのですけど。

……んっ？

そう思っていたがママツキーさんを見るマツクルさんの瞳が怪しく光ったように見えて、俺は妙な違和感を覚えていた。

「で、これがソフトだから代表してトモキンのメガポに入れておくさね。これで五人まで同時に楽しめるようになってるから問題なし」

白衣のポケットを漁り、俺達に見えるようにかざしたのは一枚のメモリカードで、それを徐に俺の方へ投げて超越した。

「……………『ハイパーかくれんぼ』見つけて忍び寄ってトキメキバキューン』？」

「そう。レトロな遊びを未来志向にヴァージョンアップした最新鋭のかくれんぼなのさね」

意味を理解するのに辞書が必要な気がするけど、さすがはママツキーさんが作ったゲームだけあってネーミングは飛び抜けている。

「それじゃ、今から説明するからさね。しっかりと聞いてないと酷い目にあうよん」

脅しなのか、冗談なのか、はてはそのどちらも当てはまるのか、ママツキーさんの顔は真顔で真意はまったく読みとれなかったが、

律子ちゃんは一人怯えて和音さんの腕にしがみ付いていた。

ハイパーかくれんぼ。

ルールは簡単で隠れている人達を見つければいいだけの話だが、そこはママツキーさんが作ったゲームだから一筋縄ではいかないものだった。

「さて、ここがかくれんぼ会場である第一校舎さね。じっくりと対戦相手を見ておくれませ」

「……って、相手はどこだよ？」

「今日は第一校舎は先生に許可をもらって特別に人払いをしてもたつたのさね。一階の職員室以外は誰もいないから静かでしょ？」

ノートパソコンを操作しながら俺達の方はまったく見ていないママツキーさんに呆れ顔の和音さんは辺りを見渡して「そりゃすごい事で」と大きくため息を吐いていた。

ここは第一校舎の三階 教室が並んでいるだけで何も変哲のない場所で廊下にも生徒の姿がなくて、耳が痛いくらいに静かだった。いつもなら放課後になっても残っている生徒がいるでそれなりの賑わいを見せているのに、近くにある教室を覗いて見ても誰もいなかった。

「誰もいないって、さっきからみんなの前にいるのに気付いてよ」

「うわっ な、何っ？」

いきなり声が聞こえて和音さんは驚いて膝から崩れそうになったのを必死に堪え、律子ちゃんは悲鳴を上げる間もなく座り込んで俺の足にしがみ付いて震えていた。

「酷いな。僕だよ、ねえ……とモちゃん、おーいっ」

「………その声は部長ですか？」

すぐ近くで聞こえている声に驚いている和音さんと律子ちゃんは声すら出ない様子だが、声の主は俺達をよく知っているようだ。それに俺の事を『とモちゃん』と呼ぶのはこの学園では一人だけで、

ゆっくりと目を閉じて声だけに集中してやっとな声の主に確信が持てた。

「そつだよ。みんなのアイドル、海藤翔君だよん」

「誰だよ。僕はそんな事言わないぞ」

「失敬。シヨウポンならこれくらいは言うと思ったし」

見えない相手と普通に会話をしているママツキーさんは

「まずは姿を現して挨拶しないと始まらないさね。時間がもつたないからコートを脱いで準備して」

楽しそうに誰もいないところに向かって話し掛けていた。

「折角、もう少しでやれると思ったのに……ちっ」

「うわっ　　は、華子！」

その声が一番最初に何もなかったところから姿を現したのは副生徒会長で、顔だけが和音さんの背後に浮いていた。

「はあ……なんでこんな事やってるんだろっ」

「それは愛のためですよ、コハルちゃん」

「気持ち悪いから近寄らないでって言ってるでしょ。熊！」

次いで何もないところから顔が突然現れ、それからゆっくりと何かを脱ぐような感じの動きで姿を現したのは予想外の人物達で、しかも俺の真横に立っていたのに驚いてしまった。

俺の横で掛け合い漫才を繰り広げるコハルと中川先輩の二人に副生徒会長という移植の組み合わせが何とも言えず、和音さんと律子ちゃんも驚いて言葉が出ないようだった。

「はあ……このコート、結構暑いよ。それより、大馬鹿会長……早く脱いだ方がいいですよ。顔だけ浮いて恐いですから」

「誰が大馬鹿会長よ！　失礼な天才娘ねっ」

顔を真っ赤にして怒っている副生徒会長はゴソゴソと慌しく服を脱ぐような音をさせていたが、気付いたときには真っ白なロングコートのようなものを手に持っていた。それはコハルと中川先輩も同じで、どこから出したのか不思議で仕方なかった。

「それじゃ、みんな揃ったからルールの再確認をしたいと思いますさね」

「ちょ、ちよつと、僕がまだ姿を　あ、あれ？　なんで脱げないのっ」

「……面倒だからそのまま話を聞いてよ、シヨウポン」

「ちょっ、酷いよ！　なんで僕だけいつもこんな扱いなのっ」

それは自業自得ってものでしょね。

姿は見えないのでどんな顔をしているのか分からないが、声の感じからすればかなりへこんでいるようだ。少しだけ同情してやるかな。

「えつと、まずはナコナコ達が隠れる人。イエーイ、パフパフっ」

と、テンション高めに副生徒会長達を指差すママツキーさん。

「このゲームでは隠れる人が『脱獄犯』で、トモキン達は捕まえる人で『警備官』で、脱獄犯を全て捕まえるか、脱獄犯に逃げ切られてしまうか……結末はいかに」

「ところでママツキーさん。何故、みなさんの姿が消えていたのでしょうか？」

「あれ、言ってなかったかな？　このゲームでは脱獄犯は透明になれるコートに羽織って逃げるようになってるさね」

何事もなく平然と言っているが先ほどの説明では、一言もそんな説明はなかった。

もし説明があつたのであれば和音さんがあそこまで驚く事はなかったと思う。まあ、律子ちゃんに関してはいつも通りのリアクションでパンツが見えていたのは秘密であるが。

「しかし、見えない敵をどうやって探すんだよ。さっきの説明ではそんな事言っただけだろ」

「それはナコナコが黙ってないと酷い事するって言うから……うつつ」

「こら、華子！　ママツキーを脅すなっ」

ぽふつと和音さんに抱きついて嗚咽をもらし始めたママツキーさんだったが、チラリと見えた顔は”してやったり”という顔をして舌を出してあくどい顔で笑っていた。

……嘔泣きかよ。

無論、言い掛かりをつけられた副生徒会長は怒り心頭で和音さんと口論しているが、そんな中をすり抜けて俺の方へ歩み寄ってきたママッキーさんは「さて、説明を続けますかね」と、うしろの騒動はまるで無関心だった。

「どこまで説明したかな……あ、そうそう。脱獄犯の着ているコートは特殊なコーティングがされて外部から光を反射して自分の姿を消す事が出来るコートで、その名を『スガタミエナクール』という大発明なのさね」

相変わらずネーミングセンスが……ねえ。

「そして、これがトモキン達の武器『スカットガン』で、これで脱獄犯を捕まえて欲しいさね」

「先ほどの話と複合すると……この校舎内を逃げ回る脱獄犯を追い掛けて、この銃で撃って捕まえれば終わりという事でいいのですか？」

「そうですね。で、さっき渡した『メガポ』の定番になってくるわけさね。トモキンとリッコのメガポをスカットガンとシンクロさせるから、ちよつと待ってな。和音ママのはマツクルがやってちようだい」

俺の手に銀色に鈍く輝いている見た目は合格点の銃を載せ、耳に掛けていたメガポに何やらしているママッキーさん。俺の視界からは見えないので何をしているのかはさっぱり分からないが、何かの調整をしているようで後ろに立っていた佐々木研究所の部員と話をしていた。

「マツクル、そっちは終わった？」

「あ、はい。こちらは準備完了です」

マツクルさんは忙しく動き回って和音さんのセッティングが終わったのか、今度は律子ちゃんの方へ近づいていき、それと同じくして俺のメガポは終わったのか、今度は律子ちゃんの方へ近づいてマツクルさんと一緒に何やらメガポに付いているボタンを操作してい

た。

何をしているのかはさっぱり分からないがすぐに終わったようで、和音さんへと近づいていくママツキーさんは副生徒会長と未だに口論が続いている和音さんに目もくれず、慣れた手つきでメガボを操作して佐々木研究所の部員と真剣な顔つきで話をしていた。

「よし……それじゃ、準備が完了したのでこれよりハイパーかくれんぼを開始したいと思います」

にこやかに笑みを浮かべたママツキーさんがノートパソコンのキーボードを軽やかに打ちながらカウントダウンを始め

「三、二、一、ハイパーかくれんぼ スタートっ」

カチッと一際大きなキーボードを叩く音が廊下に響き、かくれんぼがスタートした。

これからどんな事が始まるのか正直想像がつかないほど話がややこしくなっているが、素直に終わりそうにない匂いが始まる前からしているのはどういう事だろうね？ 長年の勘かも知れないけど、嫌な勘だよな。

第三話：楽しいかくれんぼ？

さて、成り行き任せで始まりましたハイパーかくれんぼ。

脱獄犯である部長達を捕まえるべく、俺達は第一校舎内を探し回らなければいけない。しかし、これって俺達には不利な条件が多過ぎる気がしなくもない。

「弾丸は一人三発で、全員弾切れになったら負けか」

「ですね。無駄撃ちが出来ないので確実に当てないと四人を捕まえる事は出来ませんよ」

このハイパーかくれんぼは『とある研究所施設で起こった実験体の脱走事件』という設定になっており、俺達警備官は実験体である脱獄犯を追い掛けて捕まえるのが目的となるかくれんぼ風のサバイバルゲームみたいなものだ。

実験体は身体を透明にするコートを盗んで逃げ出し、それを追いつける警備官（俺達の事）は実験体を捕獲するためにスカットガンという特殊な武器を装備している。

スカットガンには透明コートのコーティングを剥がす特殊な塗料が入ったペイント弾が装填されており、『実験体の着ているコートはスカットガンでしか無効化出来ない』と設定がされていた。

つまりはスカットガンの弾が全て尽きたら俺達はゲームオーバーとなり、脱獄犯の勝ちである。

相手側（脱獄犯）は研究所から逃げ出すか、警備官の弾切れで勝ちなのだが、今回は特別ルールでこの第一校舎で脱獄犯が全員捕まるか、警備官の全員が弾切れになるかで決着がつくようになっていく。

まあ、これはあくまで実験の最終調整なのでそこまでシビアではないらしいが、「完成すればかなり本格的な体感ゲームになるさね」と、ママツキーさんは自身満々に語っていた。

「分かってるが、その相手は透明なんだぞ？ しかも、こっちはコ

レで探せつてムチャクチャだろ」

少しキレ気味にメガポを小突いている和音さんの気持ちは分かる。俺達が透明になった部長達を探すのはメガポに搭載された様々なセンサーを駆使しないとほぼ無理なのだ。

『メガポの説明書あげるから熟読して理解するさね』

そう言つてママツキーさんより手渡された分厚い説明書を読み気にもなれず、必要なところだけを目次で抜粋して読んでいくと、このメガポには、音、振動、温感、赤外線、指紋、など様々なセンサーが搭載されており、それ等を使って捕まえないといけない。しかし、全てのセンサーには有効範囲というものが設定されているので、使いどころが難しいものである。

「一番使えそうなのが温感センサーですね。『スガタミエナクールは姿を消すだけで体温などは感じる事が出来る』って書いてますから」

「……んっ？」

「つまり、姿が消えていてもこの眼鏡を通して見れば体温でどこにいるかが分かるって事です。あとは声や靴音なども普段通りに聞こえるみたいですから、振動センサーや音センサーも使えると思います」

俺の説明を受けても理解出来てない様子の和音さんは首を傾げて律子ちゃんに聞いているが、律子ちゃんも分かってないようで首を横に振って困り果てていた。

「言つより、実践した方が早そうですね。二人とも俺が言う通りにメガポを操作してください」

説明書を片手に俺は二人にセンサーの使い方をレクチャーして、一通りの操作方法を教えた。

和音さんはいつもママツキーさんの発明品で遊んでいるだけあつてすぐに操作方法を覚えたが、律子ちゃんは一つ一つを口に出して言いながら必死に覚えていた。

その姿は対照的ですでにメガポで遊んでいる和音さんは面白そう

に辺りを見渡し、律子ちゃんはやつと出来たのか嬉しそうに笑みをこぼしていた。

「ほお……こうやって見えるんだな」

感心している和音さんは俺の方を向いて上から下へ顔を動かしているが、俺も温感センサーをオンにして和音さんを見てみた。目の前にぼんやりとした輪郭で立っている和音さんの姿が見えているが、服と素肌の温度差は結構あるようで赤やら緑、青など見事なグラデーションが表示されていた。特に顔の下、胸元の二つある膨らみが何ともセクシーで思わず見惚れてしまいそうになった。

テレビの実験番組とかで見た事があるくらいなので詳しくは分からないが、サーモグラフィーの原理を応用したものだろう。それにしてもママツキーさんはよく次から次へと新しいものを作り出すアイデアが出てくるよな。

「それじゃ、探すとするか。とりあえず、何も映ってないって事はここにはいないって事だろ?」

「まあ、そうなりますね。この近くには誰も潜んではいないようです」

「じゃあ、張り切って行くぞお」

力強く拳を上げて「おおっ」と一人で気合を入れている和音さんは先をさっさと歩いて行き始め、俺と律子ちゃんは顔を見合わせてそのあとを付いていった。

三階から二階へと下りてきたが人の気配が感じられなかった。

「ったく……どこにいるんだよ」

「そう簡単には見つからないですって。それに反応がないですからこの近くにはいないと思いますよ」

悪態を吐き、暴れ出しそんな雰囲気のと音さんを宥めている律子ちゃん。

この光景はいつも見ているが、眼鏡越しに見えている視界は慣れ

てないせいかも知れないが気持ち悪く、たまに外してみないと眩暈を起こしそうになってくる。

しかし、この学園の校舎っていうのは横に長い造りをしていると思う。

教室が一〇にトイレが二つと、これだけでも全長は一〇〇メートルを超えているが、左右に階段があるので更に長く感じてしまう。まあ、全校生徒が多いので広くないといけないのだろうけど、校舎を増やせばいいに思うが色々と費用も掛かるだろうし、敷地の問題もあるのだろうけど生徒の身にもなって欲しいものだよ。

「誰もいないじゃないか。くそっ……どこに逃げたんだよ」

「焦っても仕方ないですよ。それにセンサーに反応する距離にないだけかも知れませんか」

悪態が悪行に変わる寸前の和音さんは、そのイライラをぶつける相手を律子ちゃんに口クオンしたようで、悲鳴を上げる律子ちゃんは身体中を弄ばれていた。

……耐えるんだ、律子ちゃん。

君の尊い犠牲は忘れないから安心して極楽へ逝っておくれ。まあ、違う意味で極楽に逝くかも知れないけど、そこは俺の管轄ではないのでコメントは控えさせてもらおうよ。

変態部長なら喜んで解説してくれると……んっ？

「和音さん……そのまま続けてください」

「なんでだ？ まさか、智樹はこういうプレイが」

「違います。好きでも嫌いでもありませんから誤解のないように」

和音さんは律子ちゃんの胸を触りながら目を丸くして驚いた風の顔をしていたが、小さく舌打ちをしておさわりを続行していた。

決してここは妖しげなパブではない事だけは付け加えておこうと思うのだが、その前に

「……………部長確保」

俺はスカットガンの引き金を躊躇いもなく引いた。

「あだっ　と、ともちゃん痛いよ！　それ、めちゃくちゃ痛いん

ですけどっ」

「至近距離から撃ったから痛いでしょうね」

スカットガンから発射されたペイント弾は和音さんと律子ちゃんの足元で破裂したが、廊下に落ちる前にゆっくりと中の液体が広がっていき、人の形へと変わっていた。

「きゃあ！ な、何ですかっ」

「何をしているんだ、海藤」

いきなり現れたライトグリーンの化け物に驚いて和音さんに抱きついてる律子ちゃんを宥めつつ、条件反射なのか部長の顔面と思わしき場所を踏ん付けている和音さんは盛大にため息を吐いて呆れていた。

「い、痛いよお…… かずちゃん」

「かずちゃんって呼ぶなと何度も言ってるだろ」

嫌悪感丸出しで何度も踏み付けていく和音さんに対し、歓喜の声を上げて喜んでいる真正正銘の変態となった部長。

…… 縄か？ 縄が開花させたのか？

あの更衣室での一件以来、部長の性癖が変わってしまったで、最近では色男オーラよりも変態オーラが目立つようになってきているが、これがまた女子には密かに人気があったりする。

最近の女性は男性に何を求めているのか、さっぱり分からなくなってきた。

さて、一人目をゲットして続いて二人目といきたかったが、さすがに近くにはいないようだ。

「でも、どうして僕がいるって分かったの？」

「足元で寝転がっていれば、誰でも気付くでしょうね。しかも、向こうからかなりの速度で滑り込んできましたから」

と、廊下の向こう側を指差す俺につられてみんなが一斉にそちらへと向いていた。

今なら”あっちむいてほい”をすれば俺の勝ちだな、と思いなが

ら事の顛末を説明していった。

和音さんが律子ちゃんで遊び始めて数分後、俺は辺りを見渡していたら、廊下の隅で左右に熱源が移動するのをセンサーが捕らえていた。この校舎には俺達以外にはいないはずなので、すぐに脱獄犯の誰かだと言う事は分かった。

しかし、相手によつては出方を考えなければ捕まえるのに苦労するだろうと思ったので、和音さんに続けてくださいとお願いしたのだ。まず、和音さんと律子ちゃんのいけない関係を見ても近寄ってこない、もしくは興味なく立ち去っていけば同性の可能性がある。逆に興味深く見つめる、もしくは近づいてくれば異性の可能性がある。と予想を立ててみたが、まさかいきなり駆け出して滑り込んでくるとは思わなかった。

「……それで僕って分かったんだ。いやあ、近づいちゃ駄目だつて分かってたんだけどねえ」

「まあ、パンツ覗くためにスライディングしてくるのは部長くらいですからね」

「そうだよ、ともちゃん。よく分かって　ふぎゃあつ」

余計な一言が油に水を落としたようで、黙って聞いていた和音さんは引きつった笑みを浮かべて徐に部長の首に手を回し、ヘッドロックを掛けていた。

柔らかいマスクメロンと、ちょっと筋肉質な腕とのせめぎ合いに失神寸前の部長を横目に俺は辺りを見渡してみると、そこに次のターゲットを発見をした。

「和音さん、次のターゲット発見」

「そうか。で、誰か分かるか？」

センサーに映っている赤と青と緑で誰か分かれば、苦労しませんって。

しかし、こちらを窺うようにして顔だけを覗かせている姿はコハルにしては用心が足りないし、中川先輩にしては図体が小さ過ぎる。

そうなるに残るはあの人しかない。

「まあ、消去法で考えていけば……あれは副生徒会長でしょうね」

「ほう……ヤツか」

「ええ。捕まえるなら捕虜は元気な方がいいですよ」

俺は足元でぐったりと生と死の狭間を行き来している屍を指差したが、和音さんは襟首を掴んでマリオネットのように立たせると

やまだはなみ

「山田花男、聞こえるか！ こいつを返して欲しければ、近くまで来いっ」

スカットガンを部長のこめかみに突きつけて吼えていた。

……悪魔だ。

これではゲームの趣旨を無視して暴走しているようにも見えるが、駆け引きとしては有効な手段の一つだろう。

しかし、この人が脱獄犯をやっていたればリアリティがあるだろう
など思ってしまったが、敵に回すと絶対に捕まえられないような気がする。

「誰が山田花男よ！ 私は男じゃないわよ。田乃中華子って立派な名前があるのっ」

「ふっ……あまり変わらないじゃないか。それより、こいつがどうなってもいいのかな？」

「ひ、卑怯よ！ 翔様を放してっ」

完全に立場が逆転して……いや、ゲームがゲームではなくなっている気がするが、この状況を俺は予想出来なかったわけではなく、俺の頭では計算上八〇パーセントの確率でこの二人が絡めばこうなるのは分かっていた。

しかし、面白い事になるのも百も承知で分かっているのにそれを止めるのは愚の骨頂だろう。律子ちゃんも緊迫したやり取りをどうしているのか分からない様子で俺の後ろに隠れているが、俺も少しこの場を離れた方がよさそうな気がしてきた。被害を被るのは勘弁だからね。

「ほら、ほら……どうした、華子」

「くっ……さあ、どこからでも撃ちなさいよっ」

開き直った馬鹿は強い　誰が言った言葉かは知らないが、今それを痛く実感している。

コートを羽織って透明になっているので肉眼ではまったく分からないが、メガポを通して見るとその馬鹿さ加減がよく分かる。

……足は閉じてくださいよ。

青と赤と緑のコントラストがメガポを通して大の字で寝転がっている姿はなんと説明したらいいのか言葉に困ってしまう。

ここまで潔いとさすがの和音さんも少しは遠慮して優しさというものか……。

「じゃあ、遠慮なく」

「はぎゃー！」

しかし、悪魔はやっぱり悪魔だった。

本当に遠慮なくスカットガンの引き金を引き、弾丸は一直線に顔と思わしき場所へとクリーンヒット。アホみたいな声を上げて廊下をのたうち回る副生徒会長は茶色の液体を身体中に浴びて化け物二号になっていた。

ご丁寧にペイント弾の中身は色違いのようだが、茶色はちょっと……ねえ。

「い、いたーいっ。なんで顔を撃つのよ！」

「そこに顔があるからよ」

「……な、なら、仕方ないわね」

スパツと言いつつ和音さんはにんまりと笑みを浮かべ、副生徒会長は苦虫を噛み潰したような顔で見上げて唸っていたが納得していた。

しかしながら、和音さんの『そこに顔があるから』は名言だと思うが、よい子の皆さんは例えペイトン弾でも銀玉でも銃を人に向けて撃ってはいけません。

これはこの人達だからこそ出来る芸当という事で、俺は絶対に真似はしません。

それは、とても痛いからである……。

第二三話：かくれんぼはルールを守って。

変態部長に続いて副生徒会長を捕まえ、残りはコハルと中川先輩だけとなった。

中川先輩は以外と簡単に捕まえる事が出来そうな気がするのだけど、コハルに関しては俺の行動パターンを知っているから少々厄介な気がしている。

「智樹、天才ちゃんはどこにいると思う？」

「そうですね……俺達の様子を把握出来き、尚且つ、見つからない自信がある場所に潜んでいると思います」

俺の言葉に「そうか」と頷いて顎に手を当てている和音さんは眉を寄せて考え始めていた。

……明日は雨が、はたまた槍か。

雨だけならいいけど、槍はもれなく血の雨が付いてくるから勘弁だなと思いつつ、和音さんの足元で手足を縛られた部長と副生徒会長に目を向けた。この前と同じような光景だが、あときは和音さんが二人を本当にゴミ捨て場に連れて行ってしまったようで、それを発見した用務員のおじさんが焼却炉を開けて驚き、その拍子に腰を打って現在は入院中である。

ちよつとしたミニ情報ですが、お年寄りは大切はしましょうね……。

「しかし、中川がこんな遊びに参加するとはねえ……珍しい事だ」

「確かに珍しいですね。でも、それを言うならコハルの方がもっと珍しいですから」

「そうなのか？」

「ええ、あいつはあまり人付き合いが得意な方ではありませんからね」

腕組みをしていた和音さんは「それは分かる」と頷いているが、コハルが自分からこんなゲームに参加するとは思えなかった。まあ、

人付き合いの苦手なコハルには友達が出来ていいかも知れないが、ここにいる人達を友達にするのはお勧めはしないがね。

「智樹……おっと、動かずに聞くんた」

コハルについて考え事をしていた俺の耳元で声を潜めて話し掛けてきた和音さんだったが

「……………あの、俺を撃つても意味がないですよ」

何故か俺の背中にはスカットガンの銃口が突きつけられていた。

背中に押し当てられた銃口が横に動き、それに合わせて和音さんも一緒に俺の背後に回り込んでいた。

「律子ちゃん、今までありがとう。骨は拾って綺麗な南海に散骨して欲しい」

とりあえず定石であるボケを一つしないといけなだろうと思い、驚いて言葉も出ない律子ちゃんに手を振って笑みを浮かべて最後の瞬間を演出していた俺の背後で「余計な事はするな」と地獄の底から聞こえる悪魔の声がした。

「それで一体、これはなんでしょうか？」

「しっ　智樹にだって見えてるだろ」

三色の熊みたいなのが隠れているつもりで身体半分見えているのは気付いています、そこには触れないようにしていたのですよ。

「熊狩りですか？」

「まあ、そんなところだ。それより、もう一人の姿はないようだが……………」

確かに廊下の端でこちらの様子を窺うように隠れているのは間違いない、中川先輩だと思う。だって、あの図体をした生徒はこの学園でも滅多にいないし、この校舎でゲームに参加している中で大きいのは中川先輩くらいだ。

その中川先輩の姿を確認出来たのは副生徒会長が捕まって少ししてからだった。どうにもこちらを見ている動物的な気配に気付いて辺りを注意深く見渡していたら、廊下の端で隠れきれないのに自分では隠れていると思っている馬鹿な人を発見したわけである。

「早く撃つたらどうですか？」

「馬鹿。この銃の有効射程を覚えているだろ」

そう言えば、そんなものがあつたな。

確か有効射程距離は一〇メートルほどで、それ以上は弾丸の威力が落ちてペイント弾がうまく破裂しないようになっていたらしい。その状態では捕獲したとはいえずに逃げられてしまうので出来るだけ近づいて射撃する必要があるのだ。

「なあ、智樹」

「何ですか？ 耳元で大声を出さないでくださいよ」

「この機械、ちよつとおかしくないか？ さっきまで見えていたのに、急に見えなくなつたんだが」

ワザとらしく中川先輩がいる辺りを指さして大声で喋り始めた和音さんに律子ちゃんは驚いていたが、俺も和音さんの真意が読めずに困惑していた。

さすがに大声で指をさされたら逃げようとするのは道理で、中川先輩は慌てた様子で逃げようとしていた。が、和音さんの『見えなくなった』という言葉に動きを止めてまたその場にしゃがみ込んでいた。

……ああ、そう言う事が。

中川先輩の動きと和音さんの言動を一致させて、やっと和音さんが何をしようとしているのが分かった。しかし、今の太根芝居でうまくいくとは思えないのだが、中川先輩の頭ならこちらの思惑おもわくに気づく事はないだろう。

「そう言えば、確かに映らなくなってますね。機械の故障でしょうか」

「え？ あの……映つてま ひにやつ」

しかし、ここにも状況を理解していない子が一人おり、不思議そうに首を傾げて中川先輩を指さそうとしていたが、その動きをピタリと止まった。

理由は至極簡単なもので、悪魔も裸足で逃げ出すほどの顔（どん

な顔かは想像にお任せします）で律子ちゃんを睨み、俺の背中で銃口が揺れていたので色んな意味で恐かった。

暴発はしないよね？ 決して実弾ではないよね？ 一発目はペイント弾で二発目は実弾ってそんな事はないよね？

色々考えると冷や汗が流れてくるのですけど…… ママツキーさんならそれもありかなと思ってしまい、自分で自分を窮地に追い込んでしまった。

「律子……少し黙ってようね」

「は、はい！ ず、ずずず、ずいばぜんっ」

ゆつくりと爽やかに人を射殺せる微笑みで律子ちゃんに顔を近づけた和音さんは先ほどの芝居を再開したが、律子ちゃんは涙目に鼻声というかわいそうな顔になって頷くだけだった。

「智樹、ママツキーを探して機械を直してもらわないとダメだな」

「そうですね。それじゃ、ママツキーさんのところへ行きますか」
いつもより声を大きくして話しているので多少の不自然さはあるが、中川先輩には分らないと思う。あの人は感性よりも本能で動くタイプなのでこちらの考えている事など理解はしてないだろうし、こちらは少しでも中川先輩に近づいてスカットガンの有効射程距離に入れる必要がある。

しかし、こちらの下手な芝居にも気付く様子もなく、その場で文字通り、岩のように塊となっている中川先輩は姿が見えていたら気持ち悪いストーリーカーだろうな。

徐々に中川先輩と距離を詰めていく俺達だがあまりにも不自然な会話の仕方をしているのは分かりきっている。

……そろそろだな。

だが、そんな俺達の会話に何も感じないのか中川先輩はその場で身動きしないでしゃがみ込んでいるだけ。

智樹、行くぞ。

小声でそう呟く和音さんの声に俄かに緊張感が走り、俺の背中に付きつけられた銃口にも力がこもっているようで少し震えていた。

そして

「今夜は盛大に熊さんフルコースだ」
俺のうしろで和音さんの悪魔の囁きが聞こえてきた。

茶色の物体で真っ先に思い浮かぶのは……まあ、いいものではない。

別に茶色がいけないわけではないが、どうしても連想してしまうアレがいけないのだろうね。安直な思考回路だと思っっているかも知れないがほとんどの人がアレを連想するはずだ。間違いない。

「で、どうするんですか？ 和音さん」

「どうするって言われてもなあ……触るのは抵抗あるし」

目の前にある茶色の大きな物体を蹴飛ばしている和音さんは「うわっ、付いた！」と上履きを壁に擦りつけていたが、それはペイント弾の塗料ですから問題ないですって。

「あ、あの……中川先輩、大丈夫なんですか？」

「問題ないよ。ちょっと失神しているだけだから」

「……それって、問題あるんじゃないですか？」

確かにその通りだけど、この人が勝手に驚いて転んだわけで俺達も困っているのだけだね。

和音さんの悪魔の囁きが聞こえる数秒前 中川先輩の前を通り過ぎようとした俺と和音さんの耳に中川先輩の緊張した息遣いが聞こえ、更に唾を飲み込む音までリアルに聞こえてきた。メガポには集音マイクも搭載されているようで、かなりクリアな音質が鼓膜を震わせていたが中川先輩の息遣いは興奮しているのか荒く乱れ、更に早まっていったので気持ち悪かった。

それは和音さんも同じだったようで身震いをしたので俺の背中では銃口が震えていたわけで、そして”あの”悪魔の囁きが聞こえたわけだ。

で、結果がコレだ。

それにしても図体の割に甲高い乙女チックな悲鳴を上げて倒れたのには驚いたが、メガボを通して聞こえた音が超音波かと思うほど痛いものだった。

「それじゃ、起こしますよ」

茶色で全身を覆われて見るも無残な格好となつた中川先輩だが、見ようによつては本当の熊に見えてしまうので恐い。

さすがに触るのはどうしても視覚的に無理なので近くの教室からほうきを拝借して突付いてみると、少しだけ身動きをして薄目を開けた。

「熊さん、熊さん、春ですよ」

「だ……誰が熊じゃ……うべつ、べつ」

むくつと起き上がった茶色の物体が声を上げたが垂れている塗料が口に入つたようでむせ返っていた。

「それじゃ、最後の一人を捕まえに行くかねえ」

「最後つて……俺は捕まったのかっ？」

「何を言つてんのよ？ 見事に捕まって茶色に染まっているだろうが」

一瞬呆けたように辺りを見渡していた中川先輩にスカットガンを突きつけてため息を吐く和音さんは俺に向かって苦笑いを浮かべて首を横に振っていた。

律子ちゃんにタオルを濡らしてくるようお願いして、俺は状況を理解出来ない中川先輩に何が起こつたのかを説明していくと、項垂れて膝を抱えて体育座りをしていた。

「ちくしょう。これではハニーに……コハルちゃんに顔向けが出来んではないかっ」

「そう言えば、コハルはどこにいるんですか？」

「なんでお前に教えなければいけないのだ！ 敵に味方売るなどとは風紀委員長の名に掛けて出来んっ」

敵ながら心意気だけは伝わってきたが、それで諦める俺ではない。最後の強敵であるコハルを捕まえないとこのゲームは終わらない

し、どこにいるのか分からないのに探し回っても無駄に疲れるだけであって効率的ではない。

「本当に教えてくれませんか？」

「出来ん。俺の信念だから、それを曲げる事は死を意味するのだっ
そうになると、ここにいる中川先輩を丸め込んで居場所を聞き出す
のが一番手っ取り早いのだが、この人は公明正大で有名だ。

だからこそ、小学校以来の友人でもある部長にも疑惑が掛かって
も、色眼鏡なしで風紀委員の仕事をまっとう出来るだけの信念を持
っているのだ。

でも、あの手ならもしかしたら。

「……コハルのプロマイド五枚セット」

「コハルちゃんは一階の職員室であります、お兄様」
簡単に自分の信念を売っちゃったよ、この人。

廊下に額を擦りつけるくらいの低頭で土下座する中川先輩に呆れ
た顔を向ける和音さんはやれやれと両手を広げ、濡れたタオルを持
ってきた律子ちゃんは苦笑いを浮かべて中川先輩にタオルを手渡し
ていた。

「ありがとうございます。では、中川先輩は大人しくそこにいてく
ださいね」

「お、おい！ プロマイドはっ？」

「誰もあげるとは一言も言ってませんよ」

「ひ……卑怯者！」

負け犬の遠吠えならぬ熊の咆哮が背後から聞こえていたが、俺と
和音さんはその場をあとにして一階を目指して走り出した。

職員室の前に到着した俺と和音さんは中の様子がおかしい事に気
付き、姿勢を屈めて少しドアを開けて覗いてみた。

「……智樹、奴等だよ。ほら、この前私を見て逃げた覆面　ふぐ
っ」

少し興奮した和音さんが大声を上げそうになったので、急いで口

を塞いで中の様子を窺った。

ドアの隙間から見える職員室の中で行なわれていたのは、覆面をした黒装束達が先生の机を片っ端から漁り、何かを探している妙な光景だった。

……何をしているのだろうか？

考えても分かるはずもないが必死になって何かを探す姿には鬼気迫るものがあつて恐怖すら感じてしまう。

「智樹、あそこ。あれ、天才ちゃんじゃないか？」

「……そうですね」

覆面の方に気を取られていた俺の脇腹を小突く和音さんが指さす方を見ると、メガポを通してサーモグラフィの映像が見えてきた。この校舎にいるはずの人間はこのかくれんぼに参加している人間だけで、脱獄犯はコハルが残っているだけである。

しかし、身動き一つしないでじっとその場にしゃがみ込んだままで少し震えているようにも見える。かなり怯えているようにも見てとれるので早く助け出してあげたいが、覆面黒装束の集団が武器となるようなものを持っていたとしたらこちらが危険な目にあつてしまう。

「……ちっ」

だが、俺の考えを全て打ち消すように苛立った表情で舌打ちをした和音さんは、いきなり立ち上がってドアを開け

「……………先生！　いますかっ」

一呼吸置いて大声で職員室の中に入っていった。

その瞬間、覆面集団は蜘蛛の子を散らすように窓を開けて次々と飛び出していき、和音さんはそのままコハルの元へと駆け寄っていた。俺もそのあとを追って駆け出し、頭を抱えて震えているコハルに声を掛けた。

「コハル？　コハル、大丈夫か？」

「え？　あっ……………トモ兄ちゃん」

肩に触れた俺の手にビクッと身体を震わせて身を翻して逃げよう

としたが、俺に気付いたようでコートを脱ぎ捨てていた。

すると、空間が裂けるようにして顔が現れた。

その顔は間違いなくコハルで、強張った表情から一変して瞳に薄っすらと涙を浮かべて安堵の表情へと変わっていた。

「大丈夫か？ どこも怪我はないようだが……痛いところはないか？」

「う、うん、大丈夫だよ。いきなり変な人達が入ってきて慌てて隠れたけど、よく考えたら私の姿って相手に見えなかったんだよね？ 今覚えればバカみたいだよ」

苦笑いを浮かべているコハルはかくれんぼの状況を聞いていたので説明すると「私が最後なんだ」と呟いて大きく息を吐いていた。

「僕達の負けなんだねえ、残念」

「仕方ないですよ、翔様。向こうには人間じゃないのがいるのですから」

気付けば職員室の入り口に律子ちゃんを始め、部長に副生徒会長、そして中川先輩が立っていたが、部長は残念そうに項垂れてそれを慰めている副生徒会長は和音さんを指さして睨んでいた。

そんな事をすれば、和音さんが黙っているはずもなく。

「誰が化け物よ」

「あら、そんな事は一言も言っていないわよ。おほほほっ」

「馬鹿笑いするな、馬鹿っ」

「誰が馬鹿ですか！ 馬鹿ではなくて私はエレファントなお嬢様なんですっ」

和音さんとの一騎打ちのバトルが始まったがエレファントは象だと教えた方がいいのだろうか？ 多分、エレガントって言いたかったのだろうけど、さすがは馬鹿娘だな。

「それより、ママツキーさんはどこに行ったのだろうか？ 始まつてすぐに姿が見えなくなっちゃったし」

「私ならここさね、トモキン」

そこにいきなり俺の正面から声が聞こえたかと思えば、突然と姿

を現したママツキーさんに隣にいたコハルは驚いて腰を抜かしそうになっていた。

「みんな捕まるのが早いさね。データもあまり取れなかったし、もう少しやる気を出して欲しかったね」

「……いや、それは分かりますけど何をしてるんですか？」

「何って、隠れてトモキンのあとを付いて行つてたんだけど気付かなかった？」

何事もなく言っているママツキーさんは手に持ったパソコンを操作して収集したデータを整理し始めたが、和音さんと副生徒会長は未だに馬鹿な口論を続けているし、部長は中川先輩と何やら話をしているが顔は真面目で近寄る事が出来なかった。

誰もママツキーさんの登場に気付いていない節はないし、まったく無関心で自分達の話をしているのを見て、ここにいるのも馬鹿馬鹿しくなってきた。

「ママツキーさん、俺達は帰っていいですか？」

「あ、うん。もう用はないし、問題ないよ。あつ、そうだ」

主催者のお許しが出たので踵を返してその場をあとにしようとしたのだが

「これは今回のお礼だよ」

ママツキーさんが思い出したように言葉を続けて白衣のポケットから一通の封筒を取り出して手渡してくれた。

「……ありがとうございます」

「いえいえ、どういたまして。またよろしくさね、トモキン」

受け取った封筒の下には小さく三日月の中に浮かぶ星のマークがあり、それを面白そうに笑っているママツキーさんに「そうですね」とだけ告げて俺はコハルと律子ちゃんを連れてその場をあとにした。

まあ、封筒の中身は駅前にあるお好み焼き屋『三日月』のお食事券だろうから、コハルと律子ちゃんを連れて寄って帰るとしますか。それにしても、あの覆面黒装束達は何をしていたのだろうか？

何やら嫌な感じがするけど、それが気のせいであって欲しいものだ。

第二四話：一男去つて……いや、一難だろ。

ハイパーかくれんぼから数日。

取り分け何もなく過ごしているが、部長は相変わらず部活巡りの旅をしている。それに同行している副生徒会長は嬉々としているのに対して部長は日々やつれていく姿が対照的で、見ていてとても面白い……いや、哀れになってきている今日この頃。

「さて……どう思う？」

で、俺は俺で少々ややこしい問題を和音さんと話し合っていた。

部室の中は機械的に作られた冷気が容赦なく循環し、少し肌寒く感じているのが和音さんは顔色一つ変えずに渋い顔をしてテーブルに肘に付き、律子ちゃんの淹れた珈琲に手を伸ばし、律子ちゃんは俺達の様子を交互に見ながら先ほどから一言も喋っていない。

まあ、こう言うときの和音さんに下手な事を言ってしまうと何をされるのか分からないので賢明な判断だろう。

「そうですね。俺としては関係ない事を祈るばかりですけどね」

「確かにね。でも、今のところは何も分からないからなあ」

ふうつと小さくため息を吐き、背もたれに身体を預けた和音さんは「参ったね」と誰に言うでもなく言葉を吐き捨てた。

今、俺達が話し合っているのは数日前から俄かに目撃者が増え始めた覆面黒装束集団の話である。

一年生は意味も分からずに面白そうな事が起こっていると楽しそうだったが、二年と三年は去年の『一〇二〇事件』を思い出して色々と噂をしていた。

律子ちゃんが連れ去られそうになった事は先生達にも伝わっているが、先生達もどう対応しているのか分からずに朝のホームルームでは注意喚起だけで終わっているのが現状である。しかし、この数日

の間で先生達の表情と態度が明らかに変化し、一部の先生は眉間にシワを寄せて語気が荒くなり、完全に生徒に八つ当たりをする始末だった。

そして、それに関係あるのか　ハイパーかくれんぼの翌日から職員室は生徒の立ち入りが全面禁止となってしまった。

「現在分かっているのは和音さんが見た七人組と職員室で見た五人組……最低で五人、最高で二組合わせて十三人だと言う事だけで、それ以外はまったく分かってませんからね」

「そうだな。あいつ等が同一人物って覆面で分からないから、人数が把握出来ないからな。しかし、変な連中が多いところだよな、学園は」

「……ですね」

変な人に変な連中呼ばわりされる素性も分からない覆面集団に同情してしまいそうになったが、陰でコソコソとやっている変人集団である事は変わりはないか。

悪事も表に出て堂々と……しては捕まってしまうので隠れてするのだろうか。まあ、顔を隠している時点で完全に悪役決定なのだけだ。

「それよりも、中川先輩が持ってきたアレはどうするんですか？」

「ああ、アレか。ここは探偵クラブじゃないって言うんだよ……」

面倒臭そうに椅子から立ち上がった和音さんは腰を叩きながら部屋の奥に置いてあった手提げ金庫を持ち上げ、俺を一瞥してアンダーローで投げてきた。

……ムチャクチャしますね。

そう思ったが和音さんのコントロールがいいのか俺の手にすっぽりと収まった手提げ金庫だったが、中は空に近いようでカランと寂しそうな音を立てていた。

「危ないですよ、和音さん」

「智樹なら二〇〇キロオーバーの剛速球も素手で大丈夫だろ？」

「それは骨が折れると思うので無理です」

「そうか？ 智樹はやれば出来る子だと信じているから」

笑みを浮かべて投球モーションに入る和音さんは綺麗なフォームで腕を振り下ろしていたが、見事に二つのメロンが揺れて制服から溢れ出しそうになっていた。

その姿を見ながらため息にも似た息を吐き、俺は手提げ金庫をテーブルに置いてダイヤルを廻して鍵を開け、中に入っていたメモリーカードを取り出した。

このメモリーカードは、中川先輩が新しい面倒の火種として持ってきたものだ。

中身はまだ確認していないが中川先輩の話ではこの中には動画が入っており、そこには女子更衣室で女子の下着に埋もれて喜んでいる変態部長が映っているらしいのだが……見てもないのに脳裏に鮮明な映像が浮かんでくるのは何故でしょうね？

「じゃあ、ソレ持ってママツキーのところへ行っとくれ」

「どうしてですか？」

「秘密兵器のノーパソ君は現在調整中で、ママツキーが持つてるんだよ。なので、ここにはソレを再生する方法がまったくないんだよね」

そついう事ですか。

「分かりました。で、和音さんはどちらへ？」

「私は覆面集団の事が気になるからちよつと調べてみる。律子を拉致つていこうとしたのも同じ連中だろうし、野放しにしていたら他の生徒にも被害が及ぶかも知れないからな」

俺から律子ちゃんへ視線を移した和音さんに、律子ちゃんは表情を曇らせて俯いてしまった。

ママツキーさんが持つてきたマトリクサーキットの録画装置『アレ見ちゃ（いや）ん』の映像は和音さんと部長、それに生徒会の面々にも一応は見せたのだ。

副生徒会長は「女の敵だわっ」と憤慨し、「どこのどいつだ、こいつ等はっ」と雄叫びを上げた中川先輩の隣で神妙な顔をして見ていたコハルは唇を噛み締めて悔しそうな顔をしていたのを覚えている。

「で、でも、違つかも知れませんか……そ、それに、桜井先輩にもしもの事があつたら」

「大丈夫だつて。別に喧嘩しに行くわけじゃないんだからさ。調べるって行っても生徒会に行くだけだしな」

ぽんつと律子ちゃんの頭に手を置いて「それじゃ、よろしく」と言い残して和音さんは部室を出て行った。

そのうしろ姿を見送りながら心配そうな表情を崩さない律子ちゃんの肩に手を置き

「それじゃ、俺達も行こうか」

背中を押すように部室をあとにした。

俺と律子ちゃんは佐々木研究所でマッキーさんと会い、事情を説明してメモリカードを手渡した。

しかし、その場にいたマツクルさんはメモリカードを見るなり、何だか落ち着かない様子で不機嫌さを露わして出て行ってしまった。その様子に違和感というか、肌に刺さるような敵意のようなものを感じたが、それ以上の事は分からないのでとりあえずは心の中にしまっておこうと思い、用意された椅子に腰を下ろした。

「ほいほい、コレを再生すればいいんだね。ちよっくらお待ちになつて……よつと」

軽いノリで自前のノートパソコンにメモリカードを差し込み、俺と律子ちゃんの座っている椅子の間に無理やり割って入ってきたマッキーさんは鼻歌混じりにマウスを操作していた。

小気味よいマウスをクリックする音が響く中、時折首を傾げているマッキーさんが何やら呟いているがよく聞き取れなかった。

しかし、そうこうしていると

「ほい、どうぞ」

ママツキーさんの声が聞こえ、パソコンの画面から雑音のようなノイズが聞こえてきた。

パソコンの画面には何やら薄暗い部屋のようなものが映し出され、その中央付近に動く人影のようなものが見てとれた。

「これは…… ショウポンだね。うはー、変態丸出しやん」

「か、海藤先輩がパンツに…… パンツに海藤先輩がつ」

声を上げて笑い出したママツキーさんとパニック状態になった律子ちゃんが意味不明な事を口走っているが、確かに俺の予想を遥かに越えた映像に思わず声が出そうになった。

ロッカーが並んでいるところを見ると更衣室みたいだが、その部屋の中央で下着の山に埋もれてこれ以上ない変態チックな顔をした部長が狂喜乱舞するように下着を手で抱え込んで掬い上げては投げる、という一連の動作を繰り返していた。

「…… 律子ちゃん、更衣室にカメラって見た事ある？」

「い、いえ。私は見た事ないですけど……」

そう言つてママツキーさんを見上げたが、ママツキーさんも首を横に振っていた。

カメラアングルは斜め上からという至って普通なのだが、更衣室の中にそんなカメラを仕掛けられていれば、今頃大騒ぎになっているだろう。

これは完全な隠し撮りの映像であり、もし映っているのが部長でなければ大問題の映像だと思う。

「それでは、これは誰が撮ったんでしょうか？」

「そうさね。映像全体には鮮明さが無い割にショウポンのところだけはやけにクッキリしている様にも見えるし」

パソコンの画面を覗き込んで唸っているママツキーさんはブツブツ言いながら歩いていき

「トモキン、ちよつと留守番お願いさね」

そう言って部屋を出て行ってしまった。

残されたのは俺と律子ちゃんだけで、他の部員は誰もいなかった。確か、ここにきたときに「今日は外で実験をしているから」とマッキーさんは言っていたが、もしかしたらそちらへ行ったのかも知れない。しかし、部外者に留守番をさせるとは危機管理がなっていないと思うのだけだね。

そんな事だから発明品を盗まれたりするんですよ、ママッキーさん。

「さて、どうしましょう」

「そうですね……困りましたね」

はにかみながら困ったように眉尻を下げる律子ちゃんはパソコン画面に目を向けたが、そこに映っている変態丸出しの部長を見て苦笑いを浮かべていた。

いつまでも変態部長を見ていると仕方がないので、俺はマウスを操作してメディアプレイヤーを消した。

……んっ？

だが、その下にはメモリーカードの中に入っているデータがアイコンで表示されており、フォルダ分けされていた。

「何ですか、コレ」

「さあ、ね。でも、何やらおかしい匂いがしてきたね」

「え？ わ、私は別に……今日は体育もないですし、そんな匂いは」
律子ちゃんは顔を赤くして制服の匂いを嗅いでいるが、さすがは天然娘だなと思う模範解答をしてくれたよ。

……いや、その匂いではないんだけどね。

訂正するのも面倒だし、面白いから少し観察するのも面白いと思いい、律子ちゃんをほったらかしにして俺はパソコンの画面に目を向けていた。

画面には名前が付けられたフォルダは全部で四つ表示されており、今再生していた映像はフォルダには入っていなかったみたいで、すぐに再生出来るようになっていたようだ。

俺は試しに『動画』と名付けられたフォルダをクリックしてみたが、パスワードを要求する画面が出てきて開く事がなかった。『写真』も試しにクリックしたが結果は同じ。

「開かないか……」

最後に『音声』と名付けられたフォルダをクリックしてみたが、これもパスワードを要求する画面が出てきた。

先ほどママツキーさんが首を傾げていたのは、もしかしてこのフォルダを見たからだろうか？ あの人はこのいうのを見ると火がつくタイプだから変な事をしなければいいけど。

「ただいま、トモキン。お留守番ご苦労さまさま」

もやっとした気持ちを抱えて腕組みをしていた俺の頭上で呑気な声が聞こえ、ママツキーさんが隣の席に腰を下ろしていた。

「早かったですね？ どこに行つてたんですか」

「ちよつと荷物置き場に行つてきた」

ニヤつと妖しげな笑みを浮かべ、手に持ったCDケースをテーブルに置いたママツキーさんは、鼻歌交じりの上機嫌な様子でCDをセツトしていた。

ママツキーさんの言っている『荷物置き場』ってどこだと思うが簡単に言えば教室の事である。この人にとって教室は勉強するところではなくて、私物を置く場所ではないわけだ。

勉強する気あるのかね……まあ、俺もないから人の事は言えないけど。

「何ですか、ソレ」

「これはパスワードを強制解除する特製のソフトウェアなのさね。どんなパスワードも一分も掛からずに解析するスグレモノ。では……クククツ、ご開帳」

楽しそうにマウスを操作するママツキーさんに今は何を言っても無駄だろうな。

暫く様子を見ながら待っていると、明らかに成功したときの音ではないハズレ的な音がパソコンから聞こえ、ママツキーさんの口か

らは唸り声が聞こえていた。

「……おかしい。なんで解除出来ないさね？」

「無理にしないでいいですよ。俺達が見たかったのは先ほどの映像だけですから」

「それはダメなのさね。こんな事、私のプライドが一ナノも許さないのだよ」

随分と狭い見ですねとツツコミを入れそうになったが止めた。

俺を見据える目に危ない色を滲ませてキーボードを軽快に叩いていくママツキーさんは、プライドを傷つけられたようで意地になっているようにも見える。

暫くはほっておいた方がよさそうな気がするので、このまま俺達は退散した方がいいかも知れない。それにここまで嚴重なパスワードを掛けてまで保護しているデータと言うのも気になるところだ。

「ますます匂うようになってきた……か」

「そ、そんなに匂いますか！ はううつ」

俺の隣で妙な悲鳴を上げて一人パニックになっている律子ちゃんは未だに自分の制服を嗅いでいた。

ママツキーさんを残して部室をあとにした俺と律子ちゃんは自分達の部室に戻るべく廊下を進んでいた。

他の部活も頑張っているようで部室の中からは楽しげな声が聞こえ、廊下にも数名の生徒がたむろして談笑している姿が見える。

「……桜井先輩は大丈夫でしょうか？」

不意に声のトーンを落とした律子ちゃんが窓の外を見つめてそんな事を聞いてきた。

「大丈夫だよ。何気にあの人は強いからね……多分、この学園でも最強に近いと思うけど」

「で、でも……もしもって事があるかも知れませんか」

律子ちゃんの気持ちを和らげようにしたつもりが逆効果を示した

ようで、口を噤んで黙ってしまった。

何をそんなに気にしているのか分からないが、中庭の一件以来、どうも律子ちゃんとの和音さんに対する態度が微妙に変化しているように感じるのだが。

「律子ちゃん、何か気になる事があるなら言ってくれないかな？」

「……………伏峰先輩」

「言い難い事なら無理には聞かないけど、そんな律子ちゃんを見るのはちよつと辛いからね」

ぽんつと頭に手を置くと反射的に顔を上げた律子ちゃんの瞳には溢れんばかりに涙が浮かんでいた。

唇は言葉を紡ごうとしているのか少し開いたかと思えば、きゅつと真一文字に結んでまた俯いてしまい、結局は何も聞けずに電腦革命クラブの部室まで到着していたが

「おつ、伏峰のお兄さん」

そこに大きな熊さんがいるのは予想外だった。

「何をしていますか？ 熊五郎さん」

「いや、ちよつとした問題が起きてな。校内の見回りをしているところなのだ」

「……………問題？」

見上げる俺の顔を「誰が熊じゃ」と一瞥し、中川先輩は隣に立っている風紀委員に指示を出していく。

眼鏡を掛けた風紀委員の腕には、銀色の狼が刺繍された腕章があり

「では 我等白銀狼隊つ、校内の巡回に向かいます」

気合の入った声で号令を掛けると、皆鋭い眼光で中川先輩に敬礼をし、駆け足で方々に散っていった。

ブラチナウルフ

白銀狼隊

。

風紀委員会の中でも委員長が選任した特別部隊で、去年起こった『一〇二〇事件』のときも大活躍して実績は折り紙つきの集団であ

る。

ブラチナウルフ

「白銀狼隊が編成されるなんて……第一級非常事態って事ですか？」

「ああ、今回は先生達の要望で副委員長が選任したからな」

「そうなんですか。副委員長って今の眼鏡を掛けた人ですよな？」

「永山か？ あいつは仕事熱心だから俺も信頼しているが、融通が利かないので少々扱いに困ってしまう事もあるのが難点だな」

本当に困っているらしい中川先輩は、頬をかきながら苦笑していた。

シルバーフレームの眼鏡を掛け、片目が隠れるほど長い前髪が特徴の永山先輩は、知的な雰囲気と共に眼光が鋭くて確かに融通が利かないような真面目そうな印象を受けた。中川先輩とは正反対のタイプだろう。

「で、熊さんは一人寂しく森を散歩ですか？」

「俺は熊じゃねえし、ここは森じゃねえよ。今、覆面をした黒装束集団　俺達は『クロフク』と呼んでいるが、学園内で不穏な動きをしているのは知ってるよな？」

俺は静かに頷き、律子ちゃんは身体を硬直させていた。

「クロフクが教室や部室を次々と荒らしているという報告を受けて、こうして見回りしているわけだ」

「大変ですね」

「それが仕事だからな。お前達も何かあったらすぐに連絡するようにしてくれ」

「分かりました。では、お仕事頑張ってください　あつ、熊さんちよつと」

「だから熊じゃないって……なんだ？」

俺は嫌そうに不機嫌な顔をしている中川先輩に、先ほど見た映像とメモリカードの事を聞いてみた。

「ああ、アレか。我々も試したがパソコンに詳しくないのですぐに諦めた」

「それならそうと最初に言ってくださいよ」

「そりゃ、すまん。関係ないと思ったから言わなかっただけで、悪気はなかったんだが」

「いえ、別にいいんですけど……ママツキーさんに火がついたみたいで、意地になってます」

「……そうか」

中川先輩は苦笑いを浮かべて「悪い事をしたな」と頭をかいていた。

「気にしないでください。いつもの事ですから」

「まあ、中身が分かったら教えてくれ」

一応、礼儀としてお辞儀をしたが「それじゃ、お兄様も頑張つて」と笑顔で手を振っていく中川先輩が気持ち悪かった。

「はあ……それじゃ、中に入ろうか」

「……あ、はい」

不気味にお尻を振って歩いていく中川先輩のうしろ姿に吐き気を催しながら、律子ちゃんの方を向いて促したがワンテンポ遅れて返事をしてユラリと揺れるような足取りで部室の中に入ってしまった。

どうも調子が狂ってしまう律子ちゃんをどう対応していいのか困っていたところに、鬼気迫る迫力のあるクラシック調の着信メロデイが鳴り響いていた。

……これは部長か。

すぐに鳴り止むだろうと思っていたのだが思いの他しつこく鳴らしてくるので、仕方なく通話ボタンを押して電話に出た。

『ともちゃん！　ともちゃん、どこにいるのっ？』

しかし、俺が話し出す前に向こうから慌しく怒鳴る声が聞こえ、それにかき消されまいと切迫した声が俺の耳に届いていた。

「部長、どうしたんですか？　何かあったんですか」

『大変なんだよ！　かずちゃんが　かずちゃんがっ』

かなり狼狽した様子の部長が電話越しに何かを伝えようとしているが、声にならないように荒く乱れた息遣いだけが受話口から聞こえていた。

「和音さんがどうしたんですか？ 部長、しっかりしてください」

『かずちゃんが……どうしよう。ねえ、ともちゃん……かずちゃん
が』

「部長！　しっかりしてくださいっ」

何を聞いても心ここにあらずといった部長が何を言いたいのかも分からず、事態が飲み込めない俺は苛立ちに任せて声を荒げてしま
ったが

『かずちゃんが……階段から落ち、て……っ』

途切れ途切れに搾り出した部長の言葉に、呆然と俺を見つめる律子ちゃんから目を逸らす事が出来なかった。

第二五話：困惑、迷惑、迷走、狂騒。

部長がいたのは第二校舎三階、西側の階段前。

四階へと上がる階段には赤く点々としたシミが不気味に上まで続き、俺の足元にも数滴の赤い点が落ちていた。これが何であるかは言葉にしくても分かるが、どういう状況でこんな惨状を引き起こしたのかまでは分からなかった。

俺と律子ちゃんが部長のところへ着いたときには、和音さんは保険医の車で病院へ行くところだった。

何があったのかは分からないが部長の取り乱し様は尋常ではなかったので、ひとまず部長を落ち着かせるのが先決だった。

……和音さん。

この赤い点が和音さんから流れ落ちたものではない事を祈りながら、階段の周囲に風紀委員と特殊鑑識ファンクラブの部員達が、現場保存と指紋採取のためにロープを張ってしまったので、その場所から少し離れたところで部長を休ませる事にした。

廊下に腰を下ろしている部長は青ざめた顔に空ろな目をして焦点の定まっていなかったが、先ほどよりは随分と落ち着いてきていた。

「落ち着きましたか？」

「……だいぶ、ね」

かなり焦燥した様子の部長に買って来た缶珈琲を手渡したが、受け取っただけで飲む気配もなかった。

「何があったのか、聞いてもいいですか？」

「ん……僕もよく分からないんだよ。ただ、いきなり見覚えのない番号から携帯に電話があつて……『白い羊が赤く染まる』って男の声で……それから、いきなり女の子の悲鳴が聞こえて、嫌な予感がして、夢中で走って来たら　くっ」

抑制のない声で話し続けていた部長だったが頭を抱えて俯き、空ろだった目を閉じて首を横に振っていた。

「また、だ……ここで、また」

うわ言のように呟き、それ以上は話すのを拒むように口を閉ざした部長は俯いたまま身動き一つせず、律子ちゃんも心配そうに部長を見つめては俺に視線を繰り返して何とかして欲しいと無言で訴えていた。

こんな部長を見るのは本当に初めて、どうしていいのか分からないのが正直なところだった。いつもの変態部長ならあしらい方も熟知しているし、色男モードの部長を相手するのもお手のものだ。

しかし、こんなに憔悴した部長にどう接していいのか、俺には分からなかった。

「ともちゃん……」

「はい。無理はしなくていいですから」

ゆっくりと弱々しく口を開き、俺の名前を呼んでいる部長は顔を上げて真っ直ぐに見つめていた。

悲壮感漂う表情で声を出そうとしたところに

「翔様！ 大丈夫ですかっ」

馬鹿娘の声が廊下中に響いていた。

「伏峰、これはどういう事なのっ？」

「それは俺が聞きたいですよ……少し黙っててもらえませんか」

俺の耳元で子犬のように吼える副生徒会長を苛立つ気持ちを押さえて鋭く睨みつけた。小さく悲鳴を上げた副生徒会長が俺の顔を見て怯えたように俯き、律子ちゃんも怯えて震えていた。

これでは話がまったく出来ないの一旦部室へ戻ろうかと思っただけなのに

「おおっ、ここにいたのかっ」

迷惑な森の熊さんがやってきた。

しかも、それに赤ずきんちゃん……いや、コハルが付いて来たのには驚いたが、二人の顔は真剣でいつもの冗談をやっている場合で

はない事は十分に分かっているようだ。

「中川先輩……それに、コハルまで」

「今、桜井は病院に搬送されていった。意識はあるから問題ないと思うが　　って、聞いているのか？　翔」

真っ直ぐに部長のところまで近づいていき、しゃがみ込んだ中川先輩は明るく振舞うような声で話し掛けていたが部長はまったく反応を見せずにぼんやりと一点を見つめていた。

「あ、ああ……心配掛けて悪い」

「それから桜井から伝言だ。『私は大丈夫だから心配するな、変態だ』とさ」

部長の肩に手を置いて「大丈夫だ」と何度も言葉を掛けていた中川先輩。

副生徒会長の顔にいつもの表情がなくなり、コハルも事の重大性を認識しているので何も言わずにその場に立っているだけだった。

「ほら、立て。とりあえず、部室に戻るぞ」

中川先輩はぶっきらぼうに部長の腕を掴んで立たせると、強引に引っ張って歩き出した。

そのあとを追って何か言いたそうな顔をした副生徒会長が続き、俺と律子ちゃん、コハルも続いて歩き出した。

部室に戻った俺達はテーブルを囲んで座っていた。

律子ちゃんは人数分の珈琲を用意すべく給湯器の前で奮闘中で、部長は並べた椅子に横たわってタオルで額を冷やしていた。

ここにいるのはいつもの面々だが、ママッキーさんはどこかで話を聞いたようで俺達が部室に帰ってくるのと同時に息を切らせて走って来た。その顔はいつもの様に科学者然としたものではなく、「和音ママは……？」と紡がれる声が弱く女性を感じてしまった。

「まずは何があったのかを話した方がいいな」

そう言ったのは中川先輩だった。

恐らくこの中で部長以外では唯一事情を知っている人物だろうと思われ、誰もがその言葉に異論なく頷いていた。

「結論から言えば、桜井は階段からクロフクに突き落とされた」

「……クロフクって、覆面黒装束ですか？」

「そうだ、これは桜井本人が言ったので間違いはない。しかし、今まで部室や職員室を漁っているだけだったが、とうとう人に怪我をさせてしまうとはっ」

苦々しく言葉を吐き捨てた中川先輩は拳を握って悔しそうに唇を噛み締めていた。

「それで和音さんの怪我は大丈夫なんですか？」

「ああ、意識もハッキリしているから問題ないと思うが念のため。それに右腕にクロフクに切られたのか切り傷があったから、その治療も兼ねて病院に行っている」

それを聞いて誰の口からも言葉はなく、俺も黙ったまま中川先輩の話聞いていた。

中川先輩の話では、和音さんの怪我は深刻なものではなくて見た目は軽いものと言う。しかし、階段から落ちているので念のため脳波などの検査をするために病院へと搬送されていったらしい。

和音さんを発見したのは部長ではなくてたまたま教室に忘れ物を取りに帰ってきた女子生徒で、倒れている和音さんを見て先生に報告したらしく、その直後に部長がその現場に駆けつけ、更に遅れる事数分、中川先輩と風紀委員達が先生達とやってきて、それから暫くして俺達に部長から連絡が入ったわけだ。

だが、ここで一つ疑問がある。

この時間に誰もいないはずの第二校舎の三階に和音さんが行くような事があったのだろうか？

和音さんの教室は第一校舎で、部室を出て行くときに『生徒会に行く』と言っていたが、生徒会室は第一校舎の四階にあり、第二校舎に行く必要はまったくない。

「副生徒会長。和音さんが生徒会室を訪ねて来ませんでしたか？」

「私は翔様と一緒にいましたので生徒会室にはいませんでしたから……でも、生徒会長がいたはずですが」

顎に手を当てて真剣な瞳をしている副生徒会長は制服のポケットに手を入れて携帯を取り出し、電話を掛け始めた。

静かな部室内に携帯から呼び出し音が鳴っているのが聞こえている。

「……………あれ？ 出ないわね。ったく、あの会長は本当に役立たずなんだから 馬鹿っ」

が、中々相手が出ないようで次第に眉を吊り上げていく副生徒会長は携帯を口元に近づけて怒鳴っていた。

「出ないんですか？」

「鳴ってるのに出ないのよ。前から逃亡癖があっただけど最近は特に酷くて、気付けばどこかにいなくなってるし、生徒会の仕事をして欲しいわねっ」

多分、あなたと一緒にいるのが嫌なんですよ、と口が裂けても言えないが、生徒会の仕事はほとんどが副生徒会長と書記長がやっているのだから生徒会長の出番がないのも事実なんだけど。

「ちよつと様子を見てください。生徒会長も少しは仕事しろっていうのよ……………ああ、もうっ」

ご立腹の副生徒会長は勢いよく立ち上がって部室を出て行ってしまった。

廊下から八つ当たりをする雄叫びと被害を受けたらしき男子生徒の哀れな悲鳴が聞こえてきたが、あれが本当にお嬢様なのか少し心配になってきた。

「ところで中川先輩。他に何か分かっている事はないんですか？」

「分かっている事か……………今のところはまったく言った方がいいな」

「……………そうですか」

「ああ。ただ、一つ気になる事があってな」

そう言って首を捻るようにして視線を逸らした中川先輩は

「先生達が言っていた『あのときと同じだ』って言葉が気になって

仕方がないんだ」

何とも釈然としない表情を浮かべていた。

「あのときと同じって……なんですか？」

「多分、あの事だと　いや、何でもなし。まあ、先生達の顔は怯えているような感じで小声で何かを話していたが聞こえなかった」

中川先輩の言っている事が何を意味するのは分からないが、今回の事件には何か裏があるって事だ。

それに和音さんは偶然巻き込まれたのか、それとも意図的に狙われたのか。

どっちにしろ、和音さんが怪我した事には変わりがないが、情報が少な過ぎて何から手を付けていいのかも分からない。

「少々面倒だが、アレを借りるしかないか。それよりも今日はもう遅いからお前達はさっさと帰れ。くれぐれも余計な事に首を突っ込まないようにしてくれよ」

「分かってますよ。中川先輩はどうするんですか？」

「俺はまだ他の生徒が残っているから校舎の見回りをしなくては行けないのでな。じゃあ、俺は行くから早く帰るんだぞ」

そう言って副生徒会長と同じように勢いよく立ち上がり、俺を渋い顔で一瞥して部室を出て行った。

二人いなくなった事で静かになった部室内で誰も口を開く者はおらず、そこにやっと準備が珈琲の準備が出来た律子ちゃんがやってきた。

「ありがとう」

「い、いえ……」

トレイに載せた珈琲カップをテーブルに置いていく律子ちゃんだが、手は小刻みに震え、顔は青ざめて白く染まって見えた。

広くない部室の中では何をしても話は聞こえるものだ。中川先輩の話を聞いて自分の事を責めているのか、唇は紫色に変わり果てて見ているこちらが辛くなってきた。

「律子ちゃん、そんなに自分を責めないで……ね？　和音さんは大

丈夫だから」

気付けば俺は立ち上がって律子ちゃんを抱きしめていた。

驚くように息を吐く律子ちゃんの頭を何度も何度も撫でて「大丈夫だから」と言い聞かせていた。それは俺自身にも言い聞かせているのか、自分でも知らない内に心が穏やかになっていくのが分かった。

「……………ふ、伏峰、せん……………はい」

俺の胸に顔を埋める律子ちゃんは声もなく泣き始め、いつの間にか律子ちゃんのうしろに立っていたママツキーさんが優しく頭を撫で、不満そうな表情を浮かべていてコハルも近づいてきて律子ちゃんに声を掛けていた。

「トモキン……………私はやるよ」

「それは危険です。風紀委員と先生達に任せていれば問題ないですよ」

「トモキンは和音ママがこんな目に遭っても何とも思わないんだ？いつももお世話になっている和音ママを見捨てちゃうんだねえ……………薄情な人さね」

冷ややかな瞳を俺に向けたママツキーさんは感情を押し殺したように言い放った。

俺が何とも思わない？

ママツキーさんの顔は俺を真っ直ぐに見つめているが俺は即答出来なかった。

まだ何をどうすればいいのか分からない手探りの状態で闇雲に探し回るのは得策ではない。それはママツキーさんも分かっているはずなのに、少し頭に血が上っているようで言動にも統一性がない。

「何もしないで待っているだけって言うのは私の性に合わないのですね。私は一人でも調べるから」

それだけを言うと律子ちゃんの頭を一撫でして部室を出て行くこととしたママツキーさん。

律子ちゃんはそんなママツキーさんを止めようしたのか手を伸ば

したが、その手は空を切っていた。コハルも俺とママツキーさんを交互に見て”止めなくていいの”と言っているようだった。

「分かりましたよ。俺も手伝いますから、一人で行動するのは止めてください」

さすがにこれ以上、誰かに傷付くのを見たくない。

俺の気持ちを分かってくれたのか、ママツキーさんは小さく笑みを浮かべて足を止めて俺達の方へと戻ってきた。

……感情を抑える、俺。

テレビなどで通り魔や事故で誰かが怪我をしても、所詮はテレビの中での出来事で直接には関係ないと冷たい言い方かも知れないが割り切る事が出来る。

だが、それが現実に起こってしまえば、人間は冷静にはいられない。

目の前にいるママツキーさんがそうであるように、俺も冷静な感情を持ち合わせていないようだ。震える拳を握りしめても胸の奥に芽生え始めた黒い感情は、ゆらりと揺れて激しく燃え上がりそうになっっていた。

「僕も……手伝うよ」

「……部長、大丈夫ですか？」

「ああ、もう大丈夫だよ」

いつもの部長ではない真面目な顔をした部長が、ゆっくりと起き上がって俺達を見つめて静かに頷いていた。

……明日からだ。

今回ばかりは面倒だ、なんだ、と言っている場合ではない。

俺は皆の顔を見渡すと真っ直ぐな瞳を俺に返し、同じ気持ちで芽生えているのは分かった。

必ず、犯人を突き止める、と。

第二六話：探しものは見つかり難いものです。

一夜明けて登校したが、和音さんの事件はすでに話題になっていた。

第二校舎三階の階段前は綺麗に掃除され、何事もなく生徒が行き来して笑い声も聞こえている。そんな様子を見ながら俺は朝の清々しかった気持ちが一瞬にして吹き飛び、暫くその場から離れる事が出来なかった。

「今日はかずちゃんは大事を取って休みだけど、暇で退屈だって授業中に電話してくるのは止めて欲しかったなあ」

苦笑いを浮かべている部長は「本当に暇なんだろうね」と頷いていたが、和音さんの怪我は大した事がなくて安心して居るのは部長なんだろうな。

階段を落ちたときに咄嗟に頭を庇って受け身を取ったので頭には異常はなく、肩と背中を打撲した程度で済んだらしい。腕に付いた刃物で切られた傷も、見た目ほど酷い怪我ではないのですぐに治るようで、傷跡も残らないだろうと事だ。

女性なので見えるところに傷が残るのは嫌なものだろうし、何よりも酷い怪我ではなくて本当によかったと思う。

「俺のところには電話がありましたよ。とても元気で本当に病人なのか疑いましたけど」

昼休みに和音さんから携帯に電話があって『ハバナロネロカレーパンとラベリアのケーキが食べたい』と言われたときにはどうしようかと思ったけど、そのあとに和音さんが告げた言葉に俺は困惑していた。

『覆面には気を付けるんだよ。特にあいつの赤い目だけは見ちゃダメだからなっ』

受話口から聞こえる和音さんの声は少し震え、『私も同じ場所で

……』と、意味不明な事を言っ言葉に詰まっているようだった。さすがに、これ以上聞き出すのは和音さんに辛い事を思い出させるだけで逆効果なんだろうと思い、俺は早々に話を切り上げて電話を切った。

あれだけ憔悴した声の和音さんは始めてかも知れないが、普段は男みtainな言動や行動をしていても、やっぱり和音さんは女性なのだと改めて認識させられた。

「それでは、終わったらみなでお見舞いに行きますか」

「だね。じゃあ……調べものを開始しようか」

部長は本棚の前でしゃがみ込み、数冊の本を手にとってテーブルへと歩いていく。

現在、俺と部長は図書室の一角にある本棚の前で調べものをしていた。この学園で起こった様々な出来事を網羅した学園新聞『一週間新聞』のバックナンバーが置かれている本棚で発行年順に並んでいる。しかし、発行している『七曜特命新聞部』は学園創立時から歴史がある部活動で発行部数は半端なく多いが、俺達の探しているのはここ最近のものだけなので昔のものには用事はまったくない。「去年の新聞は………つと」

「ともちゃん、去年の一〇月以降のを全部持つてきて」

部長は俺に目もくれずに本を捲っていき、真剣な目をして一つ一つの記事に目を通していた。

俺は「分かりました」と一言告げて、本棚から去年の十月以降のものを手に取ってテーブルへ持つて行った。

……こりゃ、大変だ。

本と行っても学園新聞をバインダーに綴じたただけなのだが、一ヶ月単位ではなくて一週間単位で纏められているので数が半端なく多く感じてしまう。

しかし、文句を言っても始まらないし、これは和音さんのためだ。頑張つて犯人を探すというのはみんなの同じ気持ちで、そのために律子ちゃんやママツキーさん、それにコハルも動いてくれている。

ママツキーさんは今日は佐々木研究所で「対覆面用の秘密兵器を完成させるさね」と意気込んでいたので、律子ちゃんとコハルは二人つきりになってしまった。部長にどちらかを付けようかと思ったのだが、今の部長はいつもとは違うので何かの弾みに暴走（エロモードを含み、色々である）しては女の子に止める事は不可能だろう。しかし、あの二人だけで行動させるのはさすがに心配なので保護者（見張り役という意味もある）として森の熊さんこと、中川先輩と一緒に置いてきた。

「喜んでお受けしますよ、お兄様」と言って笑顔で俺の手を握る中川先輩は気持ち悪かったが、あの人がいれば大丈夫だろう。

「……それにしても、あの事件に関する記事って少ないですね」

「そうだね。あれだけの事件になったのにテレビでは何も言っていなかったし、先生達はあの事件を口にする機嫌が悪くなるし、おかしい事ばかりだよ」

学園新聞に目を通しながら会話する俺と部長だが、顔は見なくても話す内容はお互いに分かっているので問題は無い。

覆面で連想するのが去年起こった『一〇二〇事件』だけなので、この事件を調べたら何か分かるかも知れないと思っただけで何も確証はない。中川先輩に聞いても覆面の事は詳しくは分からないように、風紀委員も総力を挙げて行方を追っているのが現状らしい。

「しかし、何故和音さんが狙われたのか……謎ですね」

「確かに、今まで生徒には危害を加えなかったのに、かずちゃんだけを襲うなんて……おかしい話だよ」

ほぼ同時に顔を上げた俺と部長は目を合わせて首を傾げていた。

「和音さんは生徒会室に向かったはずなんです。なのに第二校舎で事件にあった……これは明らかにおかしいです」

「その辺の事はかずちゃん本人に聞かないと分からないよ。でも、あの場所……また」

「……部長、前に言っていましたけどあの場所で何かあったのですか？ いや、多分偶然だと思うから気にしないで。それよりも、今は少

しでも情報が欲しいから手を止めない」

部長は真剣な目で俺を一喝して、視線を新聞に落として目を通していた。

……何かあるのか？

あまりの剣幕に俺は二の句が告げられず、聞き出そうにも今の状況では無理だと判断した俺は、ただ黙って新聞の記事に目を通していった。

新聞の記事は生徒同士の恋愛から先生の恋人発覚という、どうでもいいゴシップ記事が多くて事件の記事はほとんど載ってなかった。……何もないか。

見つけた記事に書かれていたのは特訓部のやってきた悪事の数々で見ていて気分のいいものではないが、その記事には取り分け収穫になりそうなものはなかった。その後、他の新聞にも目を通していったが何も発見出来ずに一冊目が終わり、二冊目に手を伸ばした。「ともちゃん、見つかった？」

「何もないです。部長は？」

「何も……はあ、肩が凝って来たよ」

さすがに同じ姿勢を続けていると腰と肩に来るものだ。

俺と部長は背伸びして上体をうしろに逸らしたのだが、そのとき俺の視界に妙な人影が映り

「きゃあ！ オバケーっ」

部長が女の子みたいな悲鳴を上げていた。

「失礼ですわ、翔様。私はオバケではありませんよ」

「え？ あ……なんだ、田乃中さんか」

「まあ、翔様ったら。私の事は華子とお呼びくださいまし」

そこには不機嫌そうに頬を膨らますお馬鹿なお嬢様が片手に何やら掴んで立っていた。

「……で、そこにいるのはもしや、生徒会長？」

「え？ ええ、そうですね。昨日の事を聞こうと思って捕まえてき

ましたの、ほほほっ」

恐る恐る指さす部長に優雅な笑みを浮かべている副生徒会長だが、襟首を掴まれた生徒会長は生きているのか微妙なラインの顔でグツタリとしていた。

「酷いですよ、副会長。僕が何をしたんですかつ」

「だまらっしゃい！ あなたに聞きたい事があつて翔様のところへ連れてきたのですから」

かなりの剣幕で怒られている生徒会長は理不尽な仕打ちに耐えながらもその顔は笑っているように見えたが、一瞬だけ表情が変わり、瞳に鋭い殺気のようなものが見えて背筋が凍り付いた。

……なんだ、今のは。

瞬きしたときの見間違えかとも思ったのだが、一瞬の出来事だったので今では確認する術がない。

掴まれたままの生徒会長は半泣きで助けを請う姿はいつもの生徒会長で、それに違和感を感じる事はないので俺のみ間違えなんだろう。

まあ、あれだけの事をされていれば、さすがの生徒会長でも怒るだろうし、それは人間として当たり前前の行為なのかも知れない。

「ほら、早く話さないよ。まったく、グズなんだから」

「は、はい。えっと……何を話せばいいんですか？」

「だから、昨日の事よ！」

「いたっ 叩かないでくださいよお」

掛け合い漫才的なノリで、ツツコミとボケをする二人に、俺と部長は苦笑いを浮かべて事の成り行きを見守っていた。

「昨日、事件が起こる前に桜井が生徒会室に来たでしょ？」

「えっと……昨日は先生に呼ばれて職員室に行っていましたから僕は会ってませんよ。それに昨日はみんな用事があるって言ってたから、生徒会室には誰もいないはずだけど」

「あつ……そう言えば、そうね」

二人のやり取りを聞きながら俺と部長は眉をしかめていた。

和音さんは生徒会室を訪ねて行ったが誰にも会ってない。それは本人に聞けばすぐに分かる事だが現状では無理だ。

今の話を総合すると、生徒会室に行ったが誰にも会えなかった和音さんは、仕方なく部室へ戻ろうとして第二校舎を通った。

そこで偶然にも覆面に遭遇して今回の事件となった……。

しかし、どこで寄り道して三階に下りたのだろうか。そんな寄り道さえしなければ、怪我をする事も事件に巻き込まれる事もなかったかも知れないのに。

まあ、今更そんな事を言っても後の祭りだけだな。

「つまりは生徒会室には誰もいなかった、と？」

「ええ。昨日は江頭君も珍しく用事があると言って早く切り上げて帰りましたから。それに、他の生徒会役員も揃って用事があるとかで来なかったし」

ペコペコと頭を下げる生徒会長に「使えない連中ね」と愚痴をこぼす副生徒会長だが、一番役に立ってないのは間違いなく貴女だと言う事をこの場にいた誰もが認識していますからね。

だが、生徒会の役員達が用事で誰もいないと言うのは妙な偶然が重なったものだ。

「それよりも、翔様はこんなところで何をなさっているのですか？」

「え、えっと…… かずちゃんを襲った覆面と関係あるかなと思ってね」

そう言いながら見ていたバインダーを副生徒会長の前に差し出した。

「……これは、『一〇二〇事件』ですか」

それほど驚きもなく平然と記事に目を通していく副生徒会長の横で、首の無事を確かめている生徒会長は何度も首を廻していたが視線は俺を向いていた。

……俺を見た？

他の二人には見えないように顔を逸らしていく生徒会長の顔が怪しく歪み、挑発的な笑みを浮かべているようにも見えた。

「ちょっと、聞いているの！」

「え？ あつ、ご、ごめんなさいっ」

しかし、副生徒会長に頭を叩かれ、驚いたように目を丸くしている生徒会長はいつもの様子に戻っていた。

俺の目がおかしいのか、それとも考えて事をしているから誰もが怪しく見えるのか。どちらにしても人を疑うのはよくない事だ。

だが、生徒会長が覆面の中身なら人畜無害そうだけど……ねえ。

「な、何かな？ 新聞なら間に合ってますよ」

「違うわよ！ 生徒会に去年の事件に関する記録がなかったかしら
って聞いているのっ」

「え、えつと……」

何故か理不尽な怒鳴られ方をしている生徒会長は首を傾げて唸っていたが

「思い当たるものはないですね。でも、生徒会室を探してみたら何かあるかも知れませんが」

困ったように首を横に振っていた。

「それで何をすればいいですか？ 私、翔様のためなら何でもしますわ」

「え、いや……それは大丈夫だから」

「そんな、遠慮なさらずに。私と翔様の仲ではありませんか」

しかしながら、そんな生徒会長を見ているのは俺だけで、目の前でバカップルごっこをしている二人の耳には届いていないようだった。

……かわいそうに。

しかし、あの事件はかなり規模の大きなものだったので、事件の全貌を生徒会が把握していないのはおかしい話である。そして、その記録を探してみないと分からないと言うのもおかしいと思うが。

「生徒会長は事件の記録を見た事はないのですか？」

「僕が知る限りでは生徒会にはそんな記録は残っていないだよ。だから、去年の事件に似たような人達がウロウロしているから、先生

達が詳しい話を知っていると思つて職員室に行つたんだ」

そう言つて眉を寄せていく生徒会長は困つたような表情を浮かべていた。

「そうなんですか。それで、何か分かつたのですか？」

「うつん……先生達は何も言つてくれなかつた。でも、何かを隠しているのは明らかだよ」

生徒会長の言う通り、先生達は何かを隠している。

それは昨日、中川先輩が聞いた『あのときと同じだ』という先生の言葉と生徒会長の言葉が、更に俺の中で疑惑を増していく結果となつた。

「僕は何を隠しているのかを調べてみるよ。でも、用もないのに職員室に入るのは無理だから困つてるんだけどね」

「そうですね。暫くは立ち入りが不可能ですから……ねえ」

入り口を固める屈強な肉体をした体育教師を思い出し、俺と生徒会長は苦笑いを浮かべていた。

「簡単に中に入れる方法があれば、先生達が何を隠しているのかを調べる事が出来るんだけどね」

「ですね。でも、隠し事をしたがるのは大人の特権ですから」

「それは違ふと思うけど……でも、あつてるような」

困つたような顔で俺を見ている生徒会長は「では、僕はこれだ」と言つて歩いて行つた。

……さて、困つたね。

和音さんに被害を加えた覆面黒装束集団に、先生達の微妙な態度。何やら不穏な空気が漂っているように感じるが、とりあえずは何か手掛かりを探さない事には始まらないだろう。

第二七話：何やら複雑な状況になりました。

覆面黒装束集団　クロフク　の事を調べ初めて三日目。

和音さんは今日から来ているらしいが、休み時間に部長から「ともちゃん助けて」と悲鳴を上げている声が携帯越しに聞こえていた。……元気な事だ。

どうやら無駄な心配はいらないようで和音さんは元気みただが、それが本当に元気なのかは本人のみ知る事だろう。

で、現在は放課後になって久しぶりにみんなが部室に揃っていた。

「……生きてますか？　部長」

「か、辛うじて……痛いよ、ともちゃん」

テーブルの上につく伏した部長は死んだ魚のように目が濁り、半腐乱状態だった。

うさ晴らしに一日中遊ばれたらしいのでその実害は相当なものだろう。まあ、そのおかげで今の俺はこうして普通にいられるので部長には感謝しなくていけない。

「あれくらいで情けない事を　いたたっ」

「和音さんも無理はしないでくださいよ。まだ、完全に治ってないんですから」

「これくらい何でもないって。それよりも、智樹」

同じように椅子に座ってテーブルに突っ伏している和音さんだが、顔をしかめて大丈夫と言われても信憑性がない。腕に巻いている包帯が痛々しいのだが、本人はそれを「かっこいいだろ」と不謹慎な事を言っていたので、とりあえず叱っておいた。

まあ、言い出したら聞かない和音さんに何を言っても馬の耳に何とやらだ。

「ダメです！　大人しくしてないと怪我が酷くなりますからっ」

「いや、大丈夫だから……ね？」

「そんな事言ってもダメですっ」

でも、その馬に念仏を一生懸命唱えたと結構聞くのかも知れないと思う事を実践中の子が一人。

「なあ、智樹……律子をどうにかしてよ」

「一番心配していたのは律子ちゃんですから、仕方ないですよ。我慢して聞いてください」

項垂れて律子ちゃんの小言を聞いている和音さんは、母親に叱られる子供のように何度も手を合わせて「ごめんなさい」と繰り返し、律子ちゃんはいつもの天然ぷりが影を潜めてすっかり者になっていた。

「で、今日はどうするんですか？」

「今日も調べるよお……ほええ」

空ろな目でヘラヘラを笑う部長は軟体動物のように身体をくねらせて椅子から立ち上がったが、気の抜ける悲鳴を上げてそのまま部屋を走って出て行った。

……壊れたか。

廊下の遥か向こうから部長の変態チックな声が聞こえ、それに混ざって黄色い悲鳴も聞こえる。が、その中に「下民共、近づくんじやないわよっ」と、馬鹿っぽい叫び声が混ざっているのでは？とも大丈夫だろう。部長的には大丈夫ではないだろうけど、俺には関係ないのでキツパリと無視する事にした。

「トモキン、今日は何を調べるのさね？」

不意にうしろから俺の制服を突つく感触に振り返ると、少し眠そうな顔をしたママツキーさんが俺を見つめていた。

「そうですね。生徒会長にも去年の記録を探してもらっているのですが、昨日頼んだばかりなのですぐには見つからないと……聞いてますか？ ママツキーさん」

「……………ほえ？」

開いているのか、閉じているのか、微妙な目で俺を見ているママツキーさんが

「トモキン……おやつは、ドリアンのジャムパンがいい……………ふああ」

大きな欠伸をして俺にもたれかかってきた。

さすがにいきなりの事で驚いてしまった俺は咄嗟に両手を広げて受け止めたが、ママツキーさんは腕の中で規則正しい寝息を立ていた。

「また、徹夜でもしたんでしょうね」

「そうかも知れないね……ごめんな、智樹」

申し訳なさそうに俺に謝る和音さんに律子ちゃんは驚き、俺は苦笑いを浮かべて首を横に振っていた。

「俺達が好きでやっている事なので、和音さんが気にする事はないですよ」

「だが、ママツキーは」

「はいはい、それ以上は言わないでいいですよ」

これ以上和音さんに謝られても調子が狂うので早々に遮って止めていた。

ママツキーさんはこの前使った『スガタミエナクール』を改良して単独でも機能するようにしているらしいのだが、昨日の今日で完成するわけでもないのに最初から飛ばし過ぎだろうと思う。

でも、それくらい和音さんを傷つけたクロフクが許せないという気持ちの表れなのだろうけど。

「そう言えば、どうして第二校舎に行ったのですか？」

「ん？ ああつ、生徒会室に行ったが誰もいなかったから、部屋に帰ろうとしたら覆面野郎を見つけてな」

興奮したようにテーブルに身体を乗り出してきた和音さんを落ちて着くように説得し、俺はママツキーさんを抱き上げて簡易ベット（椅子を横に並べただけ）に寝かせた。

「それで、興味本位にあとを付けて行った結果がコレですか」

「……面目ない。まさかナイフを持っているとは思わなかったから」

「でも、それだけの怪我で済んだのは不幸中の幸いと言うものです」

よ。下手をすれば最悪の結果も考えられたわけですから」

「反省してますから、はい。それ以上は言わなくて分かります」

俺の言葉にバツが悪そうな顔をしてテーブルを指で叩く和音さんは棒読みの台詞で反省の色はほぼゼロだった。まあ、これくらいで懲りるような人なら最初からあとを付けたりはしないはずだし、こちらとしてもこれ以上は何も言えない。そんな俺の心境などまったく分からないだろう和音さんは「律子、珈琲」と言っていたが、律子ちゃんの鋭い一睨みに「律子さん、珈琲をお願いします」といってもより弱めの声で言い直していた。

それから暫くの間、和音さんと律子ちゃん、俺の三人で珈琲を飲んで過ごしていた。

「それじゃ、何も分かってないんだな」

「ええ……本当に何も分かってませんから、お手上げなわけです」

珈琲を飲みながら話していた内容と言え、和音さんに怪我を負わせた覆面 クロフク の事だけ。

その覆面に関連しているもので誰もが思いつくのは去年の『二〇二〇事件』の首謀者である特訓部の部員達であるが、その部員も隊長を除いて全員が退学しているのは、この二日ほどで生徒会に調べてもらってハッキリしている。

しかし、依然として隊長の素性はおるか、行方すら分かっていないので生徒会が引き続き、調べてくれている。

「そうか。しかし、何が目的なんだか……」

ため息ととれる息を吐き、和音さんは珈琲を飲み干して立ち上がった。

「どこに行くんですか？」

「……トイレ。智樹も一緒に行くか？」

「遠慮します」

ニシシッと笑い、楽しそうに笑いながら部室を出て行く和音さん

のあとを追って慌てて「私も行きます」と律子ちゃんも一緒に出て行ってしまった。

律子ちゃんは和音さんを一人にするのが心配なのだろうけど、あれではどちらが年上なのか分かったものではない。まあ、あれだけそばいられたら和音さんも滅多な事は出来ないだろうし。

さて、一人になってしまったがどうしようかね。

先ほどママツキーさんが寝入る前にドリアンのジャムパンが食べたいと言っていたが、さすがにこの暑い中を買いに行くのは面倒である。それに、ドリアンのジャムパンとは何ぞや？　と言うのは俺の正直な感想なので、申し訳ないが却下しよう。

「……さて、今日は何を」

背伸びをして立ち上がりうとうと腰を浮かしたところで耳を劈く破裂音が鼓膜を震わせ、何が起きたのか理解する前に身体が勝手に動き、椅子から飛び退いて身構えていた。

……なんだ？

俺の視界をゆっくりと舞うように透明なものがキラキラと輝き、それがガラスだと理解したところで、止まっていた時が動き出したように更なる破裂音を響かせて床の上に散らばっていた。

ママツキーさんの実験がまた失敗したのかと思ったが、本人はすぐそばで寝息をたてているのでそれはありえない。

冷静にこの場で解説していても仕方ないので確認をしようと立ち上がったところで

「何？　……騒がしいさね」

むくつと起き上がり、眠そうな目を擦っているママツキーさんが不機嫌そうにぼやいていた。

「すいません。でも、俺のせいではなく何者かの襲撃です」

「……そっか。じゃあ、頑張って」

そう言ってまた寝ようとしたママツキーさんだったが

「……………襲撃って、何さね？」

さすがに事態を把握したらしく、驚いたようにズレた眼鏡を掛け直していた。

「見ての通りですよ」

寝ぼけたような顔を一つ叩き、目を覚ましたママツキーさんは辺りを見渡して現状を確認しながら窓に近づいていこうとしていた。

窓ガラスの一枚が割られて大きな穴が開いている状況で、ガラスの欠片が部室内に広がって宝石のように輝いている。しかし、そんな悠長な事を言っている場合ではなく、何が起こったのかを理解するためにも調べる必要があるわけだ。

「ママツキーさん、触ったら危ないですよ」

「大丈夫さね」

俺の忠告に問題ないとはかりに手を振って窓際に近づいていくママツキーさんは、割れた窓ガラスをじっと見つめていた。

「石……………か、それに近い硬いものが当たって割れたみたいさね」

「足元、気をつけてくださいよ」

「分かってるさね。それでも運動神経は……………お、おっと」

言っているそばからガラスを踏んで転びそうになっているママツキーさんを受け止めて立たせ、俺は足元に散らばっているガラスの欠片に目をやった。

……………片付けるが面倒だな。

今考える事ではないが俺は小さくため息を吐いてほうきを取りに行こうと思ったが、ふと視界に入ってきたテーブルの下にガラスとは違う明らかに不自然なものが落ちている事に気付いた。

「……………石？」

「どうしたさね、トモキン」

「いえ、テーブルの下に石みたいなものがあるので」

俺はママツキーさんから離れてテーブルの下に手を伸ばして石らしきものを掴んだ。

ソフトボールほどの大きさで石にしては軽く、妙に丸みを帯びて

角がほとんどなかった。河原や流れの早い川底に転がっていきそうな丸い石だが、あれは角は削れただけでこれほど見事な球体になる事はほとんどないだろう。

「やけに不自然な石さね」

「そうですね。明らかに削っているのが分かりますし、軽いです」
手に持っていた石のようなものをママツキーさんに手渡すと、「本当さね」と頷いて手の中で転がしていた。

「これがガラスを割った犯人でしょうね」

「そうさね。明らかに人工的に削っているけど……ん？」

「どうしたんですか？」

「これ、開くかも知れないさね」

手に持っていた石のようなものを徐に振り上げ、床に叩き付けたママツキーさん。

ガラスの欠片を巻き上げて床を転がっていく石のようなものが壁際で止まり、ポシュっとおかしな音をさせて煙を噴き上げていた。

……怪しさ一〇〇パーセントだ。

ママツキーさんも何も考えもなしに行動するのは勘弁して欲しいものだ。

「……なんですか、アレ」

「時限爆弾……… イッツ、冗談」

真顔で冗談言わないでください。

しかし、これであれば石ではない事がハッキリとしたわけだ。普通の石が煙なんて噴き上げる事はまずないから。

「それよりも、危ないからいきなり投げないでくださいよ」

「……開かなかったさね」

残念そうに呟いて歩いていくママツキーさんは転がっている石もどきを拾い上げていくが

「あ……割れた」

振り返って手の中にあるものを見せてくれた。

そこにはまだ煙を上げている石もどきが半分に割れ、中から透明

な丸い玉が見えていた。

「紙みたいなのが入ってますね」

「そうさね。何が入っているのか、トモキンよろしく」

妖しげな笑みを浮かべて俺の方に差し出してくるママツキーさん。

「自分で取ってくださいよ」

「何か得体の知れない毒でも塗っていたら嫌だから、トモキンに任せたまね」

俺ならいいのか？ などと思いながらも手を伸ばしている自分が嫌で仕方ないが、見ない事には話が進まない。

透明な丸い玉を手にとってみると子供の頃に一〇〇円を入れると出てくるおもちゃが入っていたカプセルによく似ており、中には折りたたまれた紙が入っていた。

真ん中から半分に割れるようになっていたので軽く捻っていくと、プラスチックの軋むような音をさせて丸い玉は思いのほか簡単に開いた。

「さて、何かな」

呑気な声を上げて透明な玉に折りたたまれた紙を取り上げていくママツキーさんを見ながら、苦労はしてないが肝心なところを持っていられると寂しい限りだと思っていた。

……まあ、この人に言っても仕方ないか。

俺は気付かれないようにため息を吐き、ママツキーさんが紙を広げていく姿を見ていたが

「何事ですか！」

いきなり部室のドアが開いて人が雪崩れ込んできた。

「何事で あっ、ガラスが割れてるじゃないのっ」

「あ、副生徒会長。敵の襲撃です、反撃の許可をお願いします」

「よしっ、許可します。って、違うわよ！ これは何なのよっ」

小気味よいノリツツコミを入れてくる副生徒会長はキャンキャンと子犬のように吼えていた。

「しかし、お二人でどうしたんですか？」

「いや、他の部活から『革命部でガラスが割れる音がした』って通報があつたから見に来たのだ」

「そうですか。でも、実験に失敗わけでも、和音さんが暴れたわけでも、喧嘩をしたわけでもないです」

苦笑いを浮かべて副生徒会長を見ている熊さんこと、中川先輩は俺に呆れた顔を向けて「だろうな」と部室の中を見渡していた。

部室の中には俺とママツキーさんしかいないわけで、実験道具も暴れる張本人もいないわけで静かなものだ。

「それで、一体何があつたんだ？」

「いえ、それが……原因はアレです」

と、俺はママツキーさんを指さした。

「東山か？」

「いえ、手に持っている紙です」

それから一通りの事情を説明すると中川先輩も納得した様子で頷き、副生徒会長も話を聞いて納得したのか窓ガラスを確認して「早急に入れ替えますわ」と、どこかに電話をしていた。

そんな様子を見ていた俺の制服を引っ張る感触にそちらを向くと

「トモキン、トモキン。コレ、読んでみて」

ママツキーさんが渋い顔で俺に紙を付きつけてきた。

「……手紙、ですか？」

「ただの手紙じゃないさね」

不思議な事を言っているママツキーさんを不信に思いながら文面を読み進めていったが暫く呆けてしまい、声が出なかった。

『白き羊を赤く染めた犯人を探し出せ。拒否、他言する事あらば、汝らの命を捨てるのと等しい行為だと思え』

紙には『電腦革命クラブへ』と名指したあとに、たった一行だけ短く書かれている脅迫状紛いのものを手に俺とママツキーさんは顔

を見合わせていたが

「これは……一体」

紙の隅に『真実を追求する復讐者 特訓部隊長』と記されていた
衝撃は生半可なものではなかった。

第二八話：盡く闇に飲み込まれ

部室の中は静かなものだった。

割れた窓ガラスはビニール袋で応急措置をしてガラスの欠片は掃除をしたので問題はないが、重苦しい空気に押し潰されそうになっていた。

「……シャレなら最悪だね、これは」

「シャレで済むような事かよ、馬鹿っ」

場の空気を和ませようとしたのか、冗談混じりに呟いていた部長を一喝して睨む和音さんがテーブルを叩いていた。

確かにこれをシャレで済ます事が出来るのなら一番いいのだがそうもいかないだろう。

「それで、どうするんだよ」

「どうするって……どうするの？」

「それは部長のお前が考えろっ」

先ほどと同じ事が繰り返り広げられているのを横目に俺は紙を手にとって目を通していった。

特訓部隊長。

まさかの人物からの脅迫状紛いのものを受け取ってしまったが、何故このクラブを名指して指名してきたのか？ 去年の部長が関わったせいなのか？ 謎が残るばかりだ。

「ねえ、トモキン……あの覆面集団は特訓部？」

「それは断言出来ませんけど、可能性は一番高いですね」

ママツキーさんは首を傾げて考えているが、覆面黒装束集団の正体はほぼ間違いなくそうだろう。

しかし、特訓部自体はすでに廃部となつて存在しないが『特訓部隊長』と名乗る人物が出てきた以上、分けて考えるのは非論理的である。

問題は覆面達

クロフク

の素性であるが、学園の生徒数を

考えると普通に探しても、探し出すのは不可能に近いだろう。

「でも、これはどうやってこの部屋に打ち込んだきたのだろう……さね」

「打ち込んで来たってロケットか何かですか？」

「可能性は大きね。この部屋は四階で、窓はグラウンドに面している。下から投げるにしてもコントロールがよくなければ無理だし、何度もやっていけば廻りから気づかれてしまうさね」

「まあ、そうですね。グラウンドに野球部やサッカー部がいますから、下手な動きをすれば見つかりますね」

「そう。つまりは下からロケットランチャーみたいなもので打ち上げないと、ここには到達出来ないわけ……分かる？ トモキン」

科学者然とした仮説を立てているが、その仮説は一番有効な気がしてきた。その仮説を立てている人が昔、ミサイルランチャーを作って校舎を壊しているのを忘れてはいないからね。

それにしても、特訓部の出現に大騒ぎしているこちら側とは違うところに関心がある辺り、ママッキーさんの自由気ままな性格と科学者としての好奇心が関係しているのだろう。俺ならそんな事より特訓部の事を知りたい方が上で、あの石もどきは二の次になってしまっから。

だが、そういうところから謎を切り崩すヒントが得られる事もあると思うので、ここはママッキーさんの好きにさせておいた方がいいだろうな。とりあえず、無茶はしないように釘は刺しておかないいけないが。

「と、言う事は特訓部には機械工作が得意な人物がいるって事ですか？」

「可能性はあるさね。もしくは協力者かも知れないけど……どっちにしろ、科学を悪用するのは許せないさね」

あなたが言うとは信憑性がないのはどうしてでしょうかね？

「で、トモ兄ちゃんはどうするつもりなの？」

「そっだな。いや……なんで、お前がここにいるんだ」

「なんでって、呼ばれたから来たんだけど」

当たり前のように椅子に座っているコハルが珈琲を飲んでいる姿に俺は驚いたが、コハル自身は平然と律子ちゃんにお菓子を催促していた。

「コハルには関係のない事だから口出しはしないように。これは俺達の問題だ」

「確かにそうだけど……あの二人はいいわけ？」

そう言っつて副生徒会長と中川先輩を指さすコハル。

「あの二人は現場に居合わせたから仕方ないんだ。それより、誰に呼ばれてきた？」

「ん？ 変態」

と、和音さんからピンクボムを受けている部長を指さすコハルは珈琲を一口含み、律子ちゃんが持つて来たお菓子に手を伸ばしていた。

……何を考えているんだ、あの人は。

真っ赤な顔をして和音さんの腕をタップしている部長の横で、負け犬の遠吠えばりに喚き散らす副生徒会長に負けじと罵詈雑言を浴びせ返す和音さん。いつ見ても子供の喧嘩もいいところだが、今はそんな事をしている場合ではないはずだ。

「部長、何故コハルを呼んだのですか？」

「と、ともちゃん、ぐっ……い、今は、それどころでは」

もがき苦しむ部長はタップしていた腕をだらりと垂らして項垂れていき、「うしゃっ」と勝利の雄叫びをあげる和音さんは自分が座っていた椅子に下ろし

「コハルもこのクラブの仮部員だからだろ」

ごく普通に言い切った。

その態度が妙に癪に障った俺は苛立ちを抑えつつ、馬鹿みたいなコントを続ける副生徒会長と部長を横目で見ていた。

「それは分かっていますが、巻き込むのは止めてください」

「そうかも知れないが、これは安全確認の意味もあるんだから海藤

を責めるなよ」

「……安全確認？」

「コハルが仮部員として登録されているのは事実だ。それなら、何もしないでいれば拒否をしたとみなされて狙われる可能性だってある。私のように……な」

そう言つて苦笑している和音さんはわざとらしくため息を吐いて背もたれに身体を預けて天井を見つめていた。

「多分、私はこのための見せしめだろうな。逆らえばこつなるって……」

和音さんのやるせない表情に俺は何も言えなかった。

それを言われてしまうと何も言えなくなってしまう。無理やりなこじ付けかも知れないが、タイミング的に考えてもそれが一番妥当な考えである事は誰もが分かり切っていた。

だからこそ、中川先輩もコハルも、そして律子ちゃんも誰一人として口を開く事がなく黙っているのだから。

ただ一人を除いては。

「これ以上は誰も傷付けたりはしないよ」

真剣な口調で真っ直ぐに俺達を見つめる部長にみんなが注目していた。

「僕は調べようと思っている。そうしないとまた誰かが傷付くのであれば、そうさせないためにも調べないといけないと思うんだよ」

「海藤の言う通りだな。しかし、何をすればいいのか……」

部長と和音さんは真剣な顔で唸り始め、中川先輩は渋い顔で二人を見つめ

「本来なら止めなくていけない立場だが、話を聞いてしまったから手は貸す事にする。これは他言ではなく、偶然聞いてしまったので仕方なくだから、何の問題もないはずだ、なっ？」

強引な解釈でまとめて一人で頷いていた。

「たくちゃん……伊達に女の子にフラれてないね」

「余計なお世話だ！　これは風紀委員長ではなく、中川卓郎という協力をするわけだからな。風紀委員長としては止めなくていけないのは分かってくれよ？　いいか、これは個人的な協力だからなっ」

「それでも、ありがとう。やっぱり、持つべきは友達だね」

必死に体裁を取り繕うとしているが素直にお礼を言われて恥かしかつたのか、咳払いをして顔を逸らした中川先輩の顔は少し赤く、「いいって」と小さく呟いていた。

「それなら私もお手伝いしますわ。無論、この事は他言はしませんので安心してください、翔様」

「あんたは別にいいわ。いても邪魔だろうし」

「なっ……誰が邪魔ですって！」

こちらはいつものパターンで喧嘩を始めた和音さんと副生徒会長だが、どちらも軽く笑みをこぼしていた。

この人達って、なんだかんだで仲がいいから羨ましいものだ。

そんな二組を横目に眺め、俺は律子ちゃんとコハルの方を向いて姿勢を正し、それを見たコハルと律子ちゃんの二人も俺の向き直って姿勢を正して真顔になっていた。

「二人はここで調べてきた事を整理してもらうからね。決してそれ以外の事はしては駄目だから　コハル、聞ってるのか？」

「トモ兄ちゃん、それってフリ？　あえて逆を言って私を煽ってる？」

フリって、俺は芸人ではない。

「違う。二人を危険な目に遭わせるわけにはいかないって言うてるのだ」

「それは俺も賛成だ。あまり大勢で動いても何か起こったときに対処が出来ないだろうしな」

「熊さんの言う通りだぞ」

小さく「俺は熊でない」と呟く中川先輩をコハルは睨みつけて不貞腐れた顔をしていたが、中川先輩の有無を言わせない迫力に下を

向いて悔しそうに何やら呟いていた。

「私は大人しくここに居るのは嫌だからなっ」

「でも、かずちゃん怪我してるし……」

「かずちゃんって呼ぶなって何度も　　ったく……もう大丈夫から
気にしなくてもいいって」

目を伏せて少し下を向いている部長がいつもの調子とは違うと気
付き、少しだけ優しい口調で話し掛ける和音さんの顔は心なしか赤
かった。

ちよつとラブラブな雰囲気醸し出している二人に不満そうに頬
を膨らます馬鹿娘が一人。

……また始まったよ。

説明も面倒なのでダイジェスト版でご覧いただくか。

大魔王との一騎打ちに挑んでいく見習い勇者は、一太刀も浴びせ
る事も出来ずに見事なまでに返り討ちにあつて帰っていったとさ……
……おとぎ話風に見てみたが、副生徒会長は痛そうに額を押さえて蹲
り、勝ち誇ったように胸を張る和音さんは本当に悪魔のように見え
た。

「さて、ここでグダグダ話していても何も進まんぞ？　まずは何を
するのか決めないとな」

「そうだね」

真面目な顔で相槌を打つ部長に呆れ顔の中川先輩はテーブルの上
にある紙を手に取り、唸り声を上げていた。

「とりあえず、その紙に書かれている『白き羊を赤く染めた犯人を
探し出せ』って言うのが分からないと話が進まないと思いますよ」

「ともちゃん、そうだよ。何か手掛かりでもないかな……ねえ」

部長は俺に”ともちゃん頑張つて”と言わんばかりの顔を向け、
自分は手を上げて態度で示していた。

……お手上げですか。

呆れて物も言えないが何か謎を解くキツカケでもないと、とても
でないが推理のしようもなかった。

「そもそも、特訓部は何をしたかったのでしょうか？」

「それが分かれば苦労しないって。あいつ等は好き勝手に暴れて退学していった連中だからな」

と、副生徒会長と遊び飽きた様子の和音さんが話に割って入ってきた。

「学園新聞も事件の内容には一切触れてなかったし……」

「風紀委員会にもその当時の記録はあるが、事件の詳細に関しては全て先生達が」

部長と中川先輩の話聞きながら和音さんと話していた俺は、不意に耳に入ってきた言葉にある疑問が浮かんた。

「中川先輩、先生達が事件の詳細を公表しなかったと言うのは本当ですか？」

「ん？ ああ、去年の委員長が書いていた風紀委員会の活動記録に、『一〇二〇事件から一週間、詳細は全て職員室の中』と書き殴ったような字の跡が残っていたからな」

「そうですね……そうになると、先生達が何かしら関与、あるいは隠したい秘密がある可能性が出てきましたね」

それも、生徒には知られてはまずい事があるのかも知れない。

「たくちゃん、この前はそんな事言ってなかったじゃんっ」

「今日、調べていて見つけたんだ。そもそも、委員長の活動記録は一年毎に新しくなるのは知ってるだろ」

「……知らない。僕、委員長になった事ないから」

「ぐっ だから、去年使われていた各委員会の活動記録は全て職員室に保管されているんだ。それを借りるのも今の状況では色々と手続きが必要で、大変だったんだからなっ」

そう言えば、和音さんが怪我をしたときに何かを借りると言っていたが、これの事だったのか。

「それで、タックマン。他には書かれてなかったの？」

「誰がタックマンじゃ！……ったく。他にも何か書かれていた形跡はあったが、頁が破り取られていて確認が取れないんだ」

徐に顔を上げたママツキーさんが中川先輩に質問していたが、「あつそ」と、また下を向いてしまった。

ママツキーさんはどこから取り出したのか分からない小型のノートパソコンで何やらやっているが、「違う」とか「これはダメ」とか意味不明な言葉が聞こえていた。

「破られていたって、どういう事ですか？」

「そのままの意味だ。一〇月二〇日以降から数頁に渡って破り取られているようだな……さすがに何を書いてあったのかは分かん。

活動記録は委員会予算を配分する都合から改ざんや不正収支がないように、訂正する場合には副委員長と顧問の捺印が必要になるほど厳しいものだ。それを委員長が破り捨てるとは考え難いだろ」

「そうですか。でも、これで先生達が無かしの情報を隠したがつているのは確実のようですね」

「ああ……考えたくないが、俺が活動記録を借りに行ったときの先生達の慌て様は異常だったからな」

顎に手をやり、目を細めてる中川先輩は渋い顔をして、ふうつとため息を吐いていく。

先ほど中川先輩が去年の活動記録に『書き殴ったような字の跡が残っていたからな』と言っていたが、字の跡というくらいだから、その前の頁が破り取られていたという事だろう。しかし、余程思いを込めて書いたのか、何か別の感情が働いたのか、筆圧が強くて下の頁に残った。

しかし、先生達がそれほどまでにして隠すような事とは何だろうか？

先生達が職員室を封鎖したのは俺達がハイパーかくれんぼをした翌日で、あときクロフク達は職員室の中で何かを探している様だった。

クロフク達は何を探していたのか？

そして、先生達は何を必死になって隠しているのか？

先生達とクロフクを結ぶ線が、もし『一〇二〇事件』なら……。

俺達が調べようとしているのは、もしかしたらとんでもない事なのかも知れない。

しかし、調べないと面倒事が先に待っているのは明白なので、少しずつ謎を取り除いていかないといけないだろう。

なので、謎解きの第一段階としてまずは身近な人から情報収集するのが手っ取り早い。

「誰か、福田部長の連絡先は分かりますか？」

「福田部長って……あの福田先輩？」

不思議そうに首を傾げて俺を見つめる部長に頷くが、部長は暫く宙を見つめて面白い顔を披露し

「あつ……携帯知ってるんだった。ちょっと待ってね」

携帯を取り出して掛けようとしていたが

「で、何を聞くの？」

更に面白い顔を俺達に披露していた。

言葉で伝えるのが難しいのが残念で仕方がないが、本当に面白い顔である。しかし、今は真面目な話をしているので勘弁して欲しいと思いつつ、部長に用件を伝えた。

「そうか。一〇二〇事件で事情聴取されていたな、あの人」

「だから何か知っているのではないかと思ったのです」

和音さんは思い出したように頷き、部長も「ああ、そっか」と頷きながら携帯を操作して電話を掛けていた。が、携帯を耳に当てていた部長はすぐに電話を切って首を横に振った。

「携帯が解約されてるみたいで繋がらない。明日にでも、家の番号を調べて自宅に掛けてみるよ」

「それではそちらは部長にお願いします」

「しかし、困ったね。これじゃ、何を調べていいのか分からないよお」

すでにお手上げ状態の部長は諦めムードたつぷりに、本当に両手を上げて困った顔をしていたが

「それじゃ、職員室を調べてみようよ。そうすれば何か分かるかも

知れないから」

いきなり拍手を打って突拍子もない事を言い出した。

「あのな、翔……馬鹿も休み休み言え。今の職員室に入るには手続きがかなり面倒なんだ。いきなり行って中に入るのは、こいつでも難しいのだぞ」

と、副生徒会長を指さす中川先輩。

「そつか。でも、それならどうやって職員室に入ればいいのかな」

「部長」

「何、ともちゃん？ 何かいい考えでもあるの」

部長は”ワラにもすがる”と言った顔で俺を振り向き、一斉に回りから俺の視線に集まった。

「部長は職員室に入って何を探すつもりですか？」

「何って………何だろう」

「はあ……いいですか。現状、分かっている事は先生達が二〇二〇事件に関する何かを職員室に隠しているという事だけです」

俺はそこで一旦言葉を切り

「今のまま、いきなり職員室に行っても時期尚早、無駄足です。それよりも、まずはこの紙に書かれている『白き羊を赤く染めた犯人』の赤く染まった白い羊を調べるべきだと思います」

テーブルの上にあるあの紙を指さした。

「で、智樹は何か思い当たる事でもあるのか？」

「いえ。ですが、先生達とクロフクを結ぶものが『一〇二〇事件』なら、全ての始まりがここにあると思うのです」

和音さんは無造作に紙を掴み上げ

「白い羊を探すのが、全てを知る近道………って事か」
眉間にシワを寄せて唇を噛んでいた。

誰も口を開こうとはしない中、俺はゆっくりと息を吐き出して静かに宙を見つめていた。

第二九話：謎を求めて三千里

一夜開けた放課後。

俺と和音さん、部長の三人で図書室へ来ていた。

「それじゃ、二年前くらいから調べてみるか？」

「でも、もっと前かも知れないよ」

「調べる前から文句を言うな。海藤はそっち！ 私はこっちを調べるからっ」

何やら言い争っている和音さんと部長。傍から見るとバカツプルの痴話喧嘩に見えるから不思議だ。

現在、俺達は学園新聞で学園内で起こった事件や事故を調べている最中で、紙を捲る乾いた音が俺を包んでいた。この前は『一〇二〇事件』を探したが当たりがなくて無駄足に終わった感があり、今回もそうならないように願うものだ。

「……和音さん、ちょっと聞いてもいいですか」

「ん？ なんだ」

俺は新聞から顔を上げ、本棚の前で前屈みになっている和音さんと呼んだ。

振り返った和音さんは胸の上にバインダーを数冊載せ、器用にまだ手を伸ばそうとしていた。さすがだな、と感心しつつ、俺は和音さんに特訓部が出来た経緯^{いきさつ}を聞いた。

「えっと……確か、一年のときだったと思うが　なあ、海藤？」

「あ、うん。特訓部は二学期の途中から活動を始めたと思うけど」

二人の話を聞きながら俺は考えた。

和音さんと部長を纏めると、特訓部は二学期の途中から活動を開始した不思議な部だと言う事だ。

設立して少しの間は普通に活動をして部員を集めていたが、二学

期の終わり頃から徐々に活動内容が過激になっていき、生徒会と風紀委員会の再三の注意を無視して行なわれる行為に、最終判断を下した生徒会が『有害部活指定』に認定したのは俺が入学して少しからだった。

それから更に過激さを増していき、あの事件を起こして廃部となった。

「まるであの事件を起こすためだけに出来たような部活ですね」

「そう言われるとそうだな。そうになると、特訓部隊長が事件を起こすキッカケとなった出来事があった……と、言う事になる」

「職員室に立て籠もってまで何かを成し遂げようとしたわけですから」

和音さんはバインダーをテーブルの上に置き、顎に手を当てて俺の顔を見つめていた。

「ほら　手を休めるな」

そう言って椅子に座った和音さんはバインダーを開き、真剣な目で読み進めていく。

「はあ……重かった」

少し遅れてやっていった部長がため息とも取れる息を吐き、テーブルの上にバインダーを投げ出して椅子に座っていた。

それから暫くの間、俺達は無言で新聞と向き合っていた。

どれほどの時間が経ったのだろうか、凝り固まった肩が悲鳴を上げて俺に訴えている。

そんな中、一番最初に口を開いたのは和音さんだった。

「ああ　目がチカチカする」

「うーっ、僕もだよ」

図書室に響き渡るほどの大声で叫ぶ和音さんに次いで部長も声を上げていた。

「少し休憩しましょうか」

「賛成。海藤、ジュース買ってきて」

と、ポケットから小銭を取り出して投げ渡す和音さん。それをしつかりと受け取っている部長は瞬きを繰り返して「へっ」と間拔けな声を出していた。

「ほら、早く行け」

「な、なんで僕が」

「役に立たんからだ。それに私は怪我人だから、さっさと行つて来い」

わざとらしく怪我をしている手を振っている和音さんに「酷いよーっ」と泣きながら立ち上がって走っていく部長を「静かにしてください」と、図書委員が一喝していた。

「……いいんですか？ さすがに、ちょっと」

かわいそうになつてしまいかね。

「いいんだよ。それより、手掛かりは見つかった？」

俺は首を横に振り、和音さんはため息を吐いて天井を見上げていた。

「キツカケ……か」

「ですね。和音さんが一年の頃に何か大きな事件や事故はなかったのですか？」

「あれば、これに載ってるだろうって」

「そうですね。そんな大きな事件があつたのあれば、俺も知っているはずですから」

「智樹が知らないような事……か」

「あれば、の話ですよ。それにしても、新聞部はよく調べているんですね。詳細に事件の事を伝えてプロも顔負けと言った感じですね。天井を見つめたまま学園新聞を叩く和音さんは暫く唸っていたが、小さく「あっ」と声を上げた。

「何かあつたのですか？」

しかし、俺には目もくれず、何も答えず、テーブルの上にあるバインダーを掴んでは、投げ捨てる和音さん。

バインダーがテーブルの下に山積みになっていく中、何度も「違う」と繰り返していた和音さんが

「これだ。智樹、これを見てくれないか」

興奮した様子で俺の前にバインダーを放り投げ、そして一箇所を指さしていた。

「……………階段から女子生徒転落？」

七月一七日付けの新聞。

その隅にある小さな記事にはこう書かれていた。

放課後の第二校舎、西側の三階階段で女子生徒が転落し、頭を打って病院に搬送された。第一発見者である先生に事情を聞くと共に、女子生徒が足を踏み外して転落した事故として学園側は調査しているようである。

一見すれば普通の記事のように見えるが、何かがおかしいように感じていた。

それはこの日の一面トップが男子の人気投票で一位になった人が写真入で紹介されているのだが、その一位が海藤翔 部長なのである。

満面の笑みでトロフィーを掲げる部長の写真が紙面の四分の一を占め、女子生徒の転落記事はその何分の一という非常に小さい扱いだった。しかも、今まで見ていた記事に比べると、短くて曖昧な感じがしていた。

「女子生徒の名は、白浜葵^{しらはまあおい}」

「白浜……………葵？」

「私のクラスメイト……………だったんだ」

突然、和音さんが知らない名前を呟き、視線をそちらに向けた。和音さんは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべて唇を噛んでいた。辛い事を思い出したのか、和音さんの瞳には薄っすらと涙が浮かんでいた。

「大きな事件とか事故とかじゃなくて、私は今でも忘れられなくて……。でも、何故か先生達が規制を掛けてしまって、学園新聞にもその記事以外は載っていないから、智樹は知らないはずだ」

「……ええ、知りませんでした。すいません、辛い事を思い出させたいです」

「いや、気にしないでいいよ。それよりも、智樹 前に話した『屋上の幽霊』の事は覚えてるのか？」

「はい、覚えてますよ。『幽霊じゃなくて生きてる人間』って言うてましたよね」

「あれ……葵の事なんだ」

俺は驚いて一瞬、間抜けな顔をしたかも知れないが、和音さんは窓の外を見つめてゆっくりと話し始めた。

白浜葵。

和音さんが入学して同じクラスに一年留年した白浜葵という女子生徒がいた。

運動神経がよくてスポーツが得意だった彼女は、高校に入学して陸上部に所属していた。しかし、夏合宿のロードワーク中に居眠り運転の車に撥ねられ、その事故で腰を強打して左半身に麻痺が残ってしまった。

そのせいで留年してしまった彼女だったが、そんなハンデに臆する事なく半年で奇跡的な復学をしてみせ、一緒のクラスだった和音さんともすぐに仲良くなった。

「まあ、葵はハンデがある事を隠す事もなかったし、明るい性格だったから自然と人が集まってとても賑やかだったよ。介助用の杖を振り回して私達のクラスに遊びに来ていた海藤の頭を叩いてたくら

「いだったからな」

懐かしそうに話す和音さんは時折鼻をすすり

「そしてもう少しで夏休みになるうとしたあの日、葵は階段から落ちた。でも、葵が階段から転落したとき……近くに杖がなかったんだよ。どう思う？ 智樹なら、何を考える？」

眉をしかめて俺を睨むように見つめた。

「葵は平坦な場所を歩くのは特に問題ないが、階段を上るのは左膝がうまく曲がらないから杖が必要になるんだ」

「……つまり、杖がないと階段を上るのも、下りるのも、難しいと言う事ですか？」

「そう、葵は一人で階段を使うときは杖を必ず使っていたんだよ。そうしないと、身体を支える事が出来なくて落ちてしまうから……それなのに、葵を発見した先生は『杖はなかった』の一点張りでっ」「不自然……ですね」

ゆっくりと頷く和音さんは複雑な顔をしていた。

白浜葵（葵さんと呼ばせてもらおう）は事故で半身に麻痺が残り、階段を上り下りするには杖や人の介助がないと危ないと言う事だ。それなのに、階段から転落した現場には葵さんの杖はなかった。

何故か……？

足を骨折をして松葉杖を使っている人が、松葉杖を忘れたりするものだろうか？ 目が悪い人が眼鏡を忘れるだろうか？

「なあ、智樹……偶然ってあるのかな？」

いきなり意味不明な事を言い出した和音さんは、また窓の方を向いてしまった。その横顔は至って真面目で、冗談を言っている雰囲気ではなかった。

「そうですね。何をもって偶然と言うのか分かりませんが、必然の中にも偶然は隠れていると思います。そして逆もまた然りです」「智樹らしい考え方だな。なら、私が怪我をした場所と葵が階段か

ら落ちた場所が一緒だと言ったら、どうする？」

瞳に涙を浮かべ、唇を固く結ぶ和音さんを一瞥して、俺は学園新聞を読み返していた。

放課後の第二校舎西側の三階階段。

それは確かに和音さんが怪我をした場所で、今でもあの赤く点々した跡が脳裏に焼き付いていた。

「葵は屋上で空を眺めるのが好きだったんだ。あの階段を上って何度も屋上に一緒に行って……他愛もない話をして笑いあって　っ」顔を俯かせて声を押し殺すように肩を震わせる和音さんに掛ける言葉もなかった。

屋上を開放しているのは第二校舎のみで、東側と西側にある階段は西側のみが屋上まで通じている。だから、西側を上がって行った方が屋上へは近道だ。

……葵さんなら、尚更の事だろう。

そして、階段から落ちた日も屋上へと行こうとしたのだろう。

「これを偶然だと思うか？　智樹」

「偶然にしては二つは酷使してますね。まるで、何かを案じするような　」

そこで俺はもう一つ思い出した事があった。

『あのときと同じだ』

中川先輩が聞いたという先生の言葉。これが何を意味するのか今まで分からなかったが、やっと点と点が線になって繋がったような気がする。

その事を和音さんに話すと「そうか」と別段驚いた様子もなく、小さく頷いて黙ってしまった。

「悪いな、智樹。しんみりすると思ったから黙ってたけど、やっぱり無理だった」

「気にしないでください」

「ずっと考えていたけど、一人じゃ何も解決しなくてな」

「和音さんらしくない。いつもは無理やり俺達を巻き込むのに、変

なところで遠慮はしないでください」

「私らしくない、か。そうかもな、ごめん」

無理やり笑っている和音さんの瞳には涙が溜まり、乱暴に拭って顔を逸らしていた。

和音さんは自分の怪我と葵さんの事を、心のどこかで同じかも知れないと考えていたのだろう。しかし、一人で抱えている事が辛くなり、誰かに聞いてもらい、『答え』が欲しかったのかも知れない。肯定でも否定でも自分以外の考えを聞いて納得したかった。

俺自身がこんな場面に直面した事がないのであくまでも憶測だが、人間とは一人で考えても所詮は自己の枠を越える解答を出せる生き物ではない。そこに他人が介入し、そこに新しい考えが発生して、新たな解答を導き出せる。

「あのあと、葵は病院に搬送されて……今も目が覚める事なく眠ったままなんだよ。面会も出来ないし、本当は会って声を掛けてあげたいんだ」

何かを思い出すように、目を閉じて呟く和音さん。

「……そうなんですか」

「これが屋上の幽霊と呼ばれる噂の真相だよ。今では噂が先行して微妙に話が変わっているけど、真実は今話した通り……っ」

そう言って天井を見上げた和音さんは目を乱暴に拭っていた。

「やっぱ、先生は何かを隠しているんだろうな……そこまで動揺するなんて、絶対におかしい」

「ええ。和音さんの姿と葵さんの姿がダブって見えたのでしょね」
今回の和音さんに起こった事件と葵さんに起こった出来事が、あまりにも酷使していたので先生達には衝撃的だった。葵さんに起こったのが事故なのか、事件なのか、それは分からないけど隠さなければいけないような事が起こったと、考えるのが妥当だろう。
「しかし、そうなるとなんで私は覆面に襲われたのだろうな？ 襲われる理由がさっぱり分からんのだがね」

「それは分かりませんが、一つ疑問があるのです」

「疑問ってなんだよ？」

「部長が和音さんを発見する前に、男の声で『白い羊が赤く染まる』という電話を受けているのです」

「なんで、あいつは黙ってたんだ　　っ」

さすがにそれには驚いた様子で目を丸くしていた和音さんは両拳を握ってテーブルを叩いていたが、怪我をしている左腕に痛みが走ったように顔をしかめていた。

「大丈夫ですか、和音さん？」

「だ、大丈夫だ」

「部長が黙っていたのは、和音さんは何をするか分からないと思っただけですよ。現に、こうして冷静さを失っているではありませんか」

更に語気を強くした和音さんは悔しそうに顔を歪めていくが

「信じなくなっただよ……僕は」

どこからか、声が響いていた。

「……海藤」

「ごめんね。でも、信じなくなっただよ……あのときと同じ事がまた起きたって」

俺達から少し離れた場所で呆然と立ち尽くしていた部長は、ゆっくりとこちらに近づいてきた。その顔を酷く焦燥したように見え、和音さんも何も言えずに言葉を飲んでいった。

「葵ちゃんが階段から落ちて……かずちゃんも、葵ちゃんと同じようにになるんじゃないかって思ったら」

「馬鹿、か……ったく。そんなにやわじゃないわよ、私はっ」

声を荒げて立ち上がった和音さんは大股で歩いていき、部長の襟首を掴んでいた。

「ごめん……」

「　　っ」

力なく俯く部長の手からジュースの缶が転げ落ち、床を転がって

いく。

それを見向きもしないで和音さんは部長の横をすり抜けて歩いて行っている、部長は止める事もなく俯いたままだった。

どれほど時間が経ったのだろうか。

俺と部長はテーブルに座ったまま窓の外に広がる夕暮れから闇へと変わる空を眺めていた。周りに誰もいないからいいけど、いたら今頃は確実に追い出されていると思うな……俺達。

現に図書委員がこちらを睨んで鋭い眼光を向けているのを背中ではヒシヒシと感じている俺です。

痛いです、背中が火傷しそうです。

とりあえずのところ、和音さんはあのまま部室に戻ったようでコハルから様子がおかしいので連絡があった。とりあえずそつとしておくようにと伝え、目を離すと念押しはしている。

俺にはこっちの方が問題なんだよ……と、部長の顔を横目で盗み見たが沈んで色男の影もなかった。

「葵ちゃん……本当に元気だったんだよ」

ぽつりと呟いた部長の声。

「あの人は本当に元気で、僕は憧れていたんだよ」

「……そうなんですか」

「うん。どんなときも笑顔で、誰にでも優しく……僕はそんな葵さんに憧れていた」

懐かしい思い出話をするように目を細めて微笑む部長。その顔は辛そうであり、幸せそうでもあり、複雑な顔をしていた。

部長、もしかして葵さんの事が。

「自分の髪を触りながら、『シヨックで白くなっちゃったよ』と、笑顔で言われたときには何も言えなかったけどね」

小さく乾いた笑い声を上げ、自嘲気味に口角を上げていく部長。身体が完全に治らないと知り、もう走れないと知ったときに、「

精神的ショックから白髪になっちゃった」と、葵さんが話していたと部長は教えてくれた。

「……あつ、そう言えば　葵ちゃん、自分の髪が天然パーマだから『モコモコして羊の毛みたいになっちゃうだよ』って写真を見せてくれたなあ」

だが、その言葉が俺の中で引つ掛かっていた。

「部長、今のもう一回言ってもらえますか？」

「え？　な、何を」

「葵さんが自分の髪をどう言っただのですよ」

「え、えつと……『モコモコして羊の毛みたい』って」

やはり、聞き間違えではなかった。

「その事は和音さんは知らないですか？」

「……多分、知らないだろうね。葵ちゃんの髪は普段はストレートで、そんな風には見えなかったから」

「そうなんですか？」

「うん。屋上で偶然あったときに自分の髪を触りながら、『誰にも秘密だよ』って、写真を見せて教えてくれたときは驚いたよ」

あれだけ葵さんとの事を覚えていた和音さんが、こんな大事な事を忘れるはずがない。知っていれば、あれだけ鮮明に覚えているのだから、話の中に出てきても不思議はないだろう。

「なんで、そんな事を……あつ、もしかして」

部長も気付いたようで、眉を寄せて困惑した顔で俺を向けていた。今まで聞いていた話を総合していくと、どうしてもその結論に辿り着いてしまう。それは部長も同じ様で唇を真一文字に結んで拳を硬く握りしめていた。

俺達の中で出た結論。無言で見つめ合う俺と部長の気持ちは一致しているだろう。

『白い羊』とは、白浜葵さんだろう　と。

第三〇話：過去への扉

白い羊。

俺と部長が出した結論を皆に伝えるべきかを迷ったが、伝えなければ何も進まない。

「そう……か」

押し殺したような声で呟く和音さんに、誰も声を掛ける事が出来ずに黙っていた。

これから調べようとしているのは友達の過去。

それを暴く事が本当にいい事なのか、和音さんの中で迷いがあるのが痛いほど分かる。もし、俺がその立場ならやはり迷ってしまう。友達の知らない、分からなかった一面を知る事で、何かが変わってしまうかも知れない恐怖があるからだ。

絶対に変わらない。

そう言い切れる自信なんて誰にもないのだから。

昨日は和音さんに伝えるべきかと迷ったが、考えうる事実はある必要がある。部長と一緒に図書室から部室へと行ったがもぬけの殻だった。すでに皆は帰ったあとでテーブルの上に置き手紙が残っていた。

『ゲーセン、うさ晴らし』

一言だけに凝縮された怒りを感じ、俺と部長は苦笑いを浮かべて帰路に着いたわけだ。

で、一夜明けて放課後。

俺と部長は皆に昨日の話をして、現状のような状態になっている。渋い顔で一点を見つめる和音さんに声を掛けようか迷っている部長。その部長に声を掛けようとして手を伸ばしたり、引いたり、を繰り返す副生徒会長。

横に目をやれば、『屋上の幽霊』の正体を知りたがっていたコハルは俯き加減に泣きそうな顔をし、それを一生懸命宥めている中川先輩は困りきった顔をしていた。律子ちゃんは給湯器の前で珈琲を人数分用意しているが、手が震えている珈琲カップとソーサーがぶつかる音が聞こえている。

……辛いね。

俺は一人、部室の壁を見つめ、心の中でばやいた。

校舎の四階で、交差した鉄骨が剥き出しのプレハブ造りの部室なんてどこにあるんだよって話が、現にここにある。この部室も俺が無理やり入部させられてからまったく変わりなく、慣れ親しんだ風景に心が落ち着く。

葵さんも屋上がそんな場所だったのかも知れないな……。

俺には葵さんがどんな人なのかは分からないが部長や和音さんの話を聞いていると、元気で強い人という印象がある。でも、きっとどこかで息抜きがしたかったのではないだろうか。

それが屋上だった……俺はそう思っている。

おっと、現実逃避が過ぎたか。

いい加減、ここでお通夜みたいに顔を見合わせていても仕方ない。それで、今日はどうするのですか？」

少しきつい言い方だったかも知れないが語気を強め、俺は和音さんと部長を見据えた。

「……そうだね。どうしようか」

しかし、言葉を発したのは部長だけで、和音さんは押し黙ってテーブルを見つめたままだった。

「今日は止めますか？　少し頭の中を整理した方がいいかも知れませんが……」

「そうかも……ね。でも、僕はやるよ」

部長の顔は真剣そのもの。

俺は頷いて和音さんを見たが、和音さんは空ろな目をしていた。

「それじゃ、僕はもう少し調べてみるから」

「分かりました。あつ　部長」

椅子を引いて隊上がった部長はそのまま歩いていこうとしたが、俺を振り返って「何？」と聞いてきた。

「福田部長と連絡は取れましたか？」

「ああ、それがね。今は海外にカメラマンの修行に行ってるらしくって連絡が中々取れないだつて。それにいつ帰ってくるのか分からないとも言ってたよ」

「そうなんですか。それは仕方ないですね」

部長は両手を広げて眉を寄せて困ったように息を吐いて部室を出て行った。

そう言えば福田部長は「報道カメラマンになるのが夢なんだ」と本格的な一眼レフカメラを俺達に見せてくれた事があった。それなら写真部に入部すればいいのに思ったが、自己流で技を極めると無茶苦茶な事を言っていたが、あれは本気だったのか。

てつきり俺達に向けた壮大なボケかと思っていたが、いないのなら話を聞く事も出来ないので諦めるか。

「それでは私も行きますわ。お待ちになって、翔様」

そんな事を考えている俺の耳に呑気なミ－ハー声が聞こえ、部長を追いかけて出て行ってしまった。

出て行くときに俺を一瞥した部長の顔には「かずちゃんをよろしく」と書いているようで、俺は静かに頷いて見送っていた。

「では、俺はもう一度去年の活動記録を調べなおしてみよう」

そのあとを追うように中川先輩が立ち上がったが、「私も手伝う」とコハルも立ち上がり、止める間もなく二人は部室を出て行ってしまった。

結果、残されたのは俺と和音さん。

そして、やっと珈琲を入れ終わり、テーブルへとやって来た律子ちゃんだった。

空調が効いた部室の中、湯気の立つ珈琲カップが並んでいる。

俺の隣で縮こまって椅子に座る律子ちゃんは上目遣いで俺を見つめ、俺は苦笑いを浮かべる事しか出来なかった。

「……さて、どうしましょうか？」

「どうしましょうかあ……」

俺の声をオウム返しのように繰り返す律子ちゃん。

「なあ……智樹」

「なあ、智樹　えっ？」

同じようにオウム返しをしていた律子ちゃんは、一瞬不思議そうな顔をして、遅れて驚いて目を丸くしていた。

俯いたまま俺の顔を見ずに話し掛けてきた和音さんの声は酷く沈み

「これから葵の事を調べ……るんだよな」

それだけ言うと、また黙ってしまった。

「和音さんは無理しないでいいですよ」

「……いや、私も調べる」

ゆつくりと顔を上げた和音さんは

「葵がなんで階段から落ちたのか、なんで杖がなかったのか……ずっと気になっていた。でも、調べようとしても何から調べていいのか分からなかったけど、葵に何が起きたのを私は知りたい」

両頬を平手で一発、気合を入れていた。

和音さんの瞳は覚悟が出来たと言わんばかりで、力強く迷いを断ち切ったように見えた。多分、今まで色んな事を考え、葛藤し、そして出した答えが真実を知る事なんだろう。

「悪かったな、智樹」

「いいえ、気にしないでください」

照れ臭そうに顔を逸らし、「律子も、ごめんな」と律子ちゃんにも謝っていた。

それは心配を掛けた謝罪だろう。

だが、それを謝られるような事だとは、俺も、律子ちゃんも思っていないので首を横に振っていた。

「それで、何から調べますか？」

「まずはそこからだよな」

腕組みをして考え始めた和音さんに、律子ちゃんも首を傾げて考え始めていた。

現状で分かっているのは、『白い羊』はほぼ間違いなく白浜葵さんである事。

それは部長が教えてくれた『ショックで白くなっちゃったよ』『モコモコして羊の毛みたいでしょ？』の二つの言葉で一つの推論が成り立つ。

更に葵さんが転落した場所で和音さんが階段から落ちて怪我をし、そのときに部長が男の声で『白い羊が赤く染まる』と電話を受けている事。そして、先生達は和音さんを見て『あのときと同じだ』と呟いたのは、その光景があまりにも似ていたのだろう。

もしかしたら、葵さんは怪我をしていたのも知れない……和音さんと同じように。

「葵さんを発見した先生って言うのは誰なんですか？」

「それは分からない。葵の事を発見したのは当直の先生だったと聞いているけど、誰なのかは教えてくれなかった。杖の事もやっこの思いで聞き出せたのだから」

和音さんは眉を寄せて憤りを露にしていた。

先生が何が隠しているのか、それが分かれば全ての謎が解けそうだ。

「そしてそれから数日後、放課後の屋上からあの紙が落ちてきたんだよ。まるで、忘れて欲しくないって言っているように私は感じたんだ」

「……それが『屋上の幽霊』ですか」

「そう　あの紙を見て、分かる人間には分かったんだ。あれが葵の事を言っているんだって」

和音さんはテーブルの上にあったプリントの裏にマジックって何やら書き始め、それを俺達の前に滑られてきた。

そこには『臼三兵八赤ク染マリ、真実八閻二紛レタ』と、屋上からばら撒かれていたものと同じ内容の文章が書かれていた。俺は本物を見た事がないが、赤い文字がまるで血のように滲んで見えて無気味だったと先輩が話していたのを聞いた事がある。

「その、『臼三兵』ってあるだろ」

「はい……ありますね」

「これは『白浜』って読むんだと思う。本物は字が滲んで『白』の字には穴が開いて『臼』という字に、『浜』はさんずいが横に並ぶように書かれていたから『三兵』と見えていたんだよ」

確かにそう読める。

「時期的に考えて葵の事だとすぐに分かった。誰かが葵の事を知りたがっているって」

和音さんの言っている事は分かる。だが、葵さんの事を知りたがっているのは誰だ？

そして、俺達に『白い羊を赤く染めた犯人を探せ』と言ったのは誰だ？

「でも、それが……特訓部だったなんて」

そう　特訓部。

そこに全てが繋がっているかのように、パズルのピースが、点と点が、一つになろうとしている。

「だけど、分からない事もある。なんで、特訓部は葵の事を調べていたんだ？」

「それは俺にも分かりません。分かるのは特訓部を指揮していた隊長のみでしょうね。……そして、俺達のそばにいますと言う事です」

「……そうだな」

俺は頷いて何気なく律子ちゃんを見たが、さっぱり意味が分からないといった顔で混乱していた。

その後、暫く部室で話をしていた俺達の上に中川先輩とコハルが戻ってきた。

「お疲れさま、何をしてきたんですか？」

しかし、その顔は何も収穫がなかったのか、疲れたように椅子に座ってテーブルに突っ伏していた。

「いや、俺は風紀委員の執務室に行こうと思ったのだが、ハニーが殴り込みじゃ、ボケッ」って職員室に　はがっ

「ボケなんて言っていないわよ！　『殴り込みだ、熊！』って言ったの」

テーブルに顎を載せて話す中川先輩の頭に容赦なく一撃を加えたコハルは、振り下ろした拳を振って「もう一発いくわよ」と、鼻息荒く睨んでいた。

しかし、大して変わっていない気がするのは俺だけだろうか？

「っーっ……顎が割れたかも。少しは手加減してよ、ハニー」

「気持ち悪いからその呼び方は止めてって言ってるでしょ！」

夫婦漫才のように見える光景を見ながら呆れる和音さんはため息を吐き、律子ちゃんも苦笑いを浮かべて珈琲カップの後片付けをしていた。

「それで、職員室に行っただけですか？」

「ああっ、行ったが門前払いされただけで中には入れなかった。それでも何度も入ろうとするものだから、先生に囲まれてな」

「……………ご愁傷様です」

「まさか、説教されるとは……俺、風紀委員長なのに」

そう言っただけでコハルをチラッと見た中川先輩から顔を逸らして「悪かったわね」と、さすがにバツの悪そうなコハルが謝っていた。

「ったく、少しくらいのお茶目を許す心のゆとりがないのかしらね」

コハルの事だからお茶目では済まされないような放送禁止スレスレの事を先生に向かって言っていたに違いない。中川先輩の顔が明らかに”お茶目じゃないよ”と俺に訴えかけているから間違いないだろう。

「でもね、一応はそれなりの収穫があつたよ」

「そうなのか？」

「うん。職員室の入り口にはカード式のセキュリティシステムが設置されてた。前にはなかったから、新しく付けたんだろうけど、どれだけ警戒してるのよって話だよ」

自慢げに胸を張っているコハルを横目に和音さんと律子ちゃんを見比べる。

……ああ、残念だ。

非常に残念だが負けている。色んな意味で負けているが、ここはあえて何も言わないでおこう。

「トモ兄ちゃん……今、違う事考えてなかった？ 私と律子を比べたよね？ どこを比べたのか、教えてもらおうじゃないのっ」

「気のせいだ。それよりも、先生達も面倒な事をしてくれる」

「あーっ、話し逸らした！」

俺の耳元で律子ちゃんを巻き込んで叫ぶコハルを退けて、俺は和音さんの意見を求めた。

「職員室に入るのは後回しにして、特訓部の部室を調べてみようと思っている」

「そうですね。でも、あの事件のあとで部室にあつた物は完全に撤去しているはずですけど？」

「分かってるけど、ここでじっとしているよりはいいだろ」

和音さんの言いたい事は分かる。

「分かりました。それでは行きますか？」

「そうだな。律子は悪いけど留守番頼む」

気合を入れて立ち上がった和音さんは律子ちゃんの前まで歩いていき、頭を数度撫でていた。

律子ちゃんは驚いたように目を丸くしていたが、心配そうに眉尻を下げて「無理はしないでください」と俯いていた。

「分かつてるよ。中川、二人を頼んだよ」

「……了解。はあ、俺は風紀委員長なのに」

未だに落ち込んでいる中川先輩が手だけを上げて答えたのを確認し、「私も行く」と言い出したコハルを律子ちゃんに任せて俺と和音さんは部室をあとにして一路、特訓部の部室を目指した。

第三校舎の一階、西側の一番端に存在する部室。

あの『一〇二〇事件』を起こした特訓部が部室として使っていた場所だが、今は空き部屋となっている。

「なんだか、不気味だな」

「ええ。妙な寒気を感じますね」

俺と和音さんは部室の扉の前に互いの顔を見合わせていた。

陽気……いや、妖気漂う洋館に迷い込んだカップルが化け物に襲われていく映画みたいだなと思いつつ、俺はドアノブを廻して扉を開けた。

「うわっ　ごほっ、ごほっ」

「すごいですね、これ」

「な、なんで一人だけハンカチ　ごほ、けほっ」

開けられた扉の隙間から我先にと溢れ出してきた埃を吸い込み、むせ返る和音さんは俺を睨んでいた。

「十分に想像出来る範疇だったので」

「それなら、先に言え、っ……くしゅっ」

「ハンカチを持ってますか？」

「失礼な事を言うなっ。それでも、れっき……っ……とした女……えつくしゅっ」

むせ返っていた和音さんは咳の次はクシャミの連発で、おっさんのようなクシャミをして立派なメロンが大きくぶるんつと揺れてい

た。

さて、縦揺れメロンは名残惜しいが、今は神棚に飾る気持ちでおいといて。

「ほら、中に入るぞ」

「押さないでくださいよ、危ないですから」

一步、部室の中に踏み入れた俺達の足元を舞い上がる埃に、肌を撫でる生暖かい風に窓の方を見ると開いていた。

「なんで、窓が開いているんだ？」

「……閉め忘れですかね」

「あんな、ここは誰もいないだろうって」

俺達の部室とさして変わらない大きさの間取りをしているが、壁はきれいに塗られて鉄骨は見えなかった。俺達の部室だけ工事途中で止めましたみたいになっているのは如何なものかと思うが、備え付けの給湯器とシンクに、壁に固定されているアルミ製の多目的棚と、壁以外はほぼ同じ内装だった。

「智樹っ、足跡があるぞ」

和音さんの声に下を向くと、開けられた窓から入り込む風に舞う埃に埋もれそうになっている複数の足跡が目に入ってきた。

「そうですね。しかも、随分と新しいように見えるのですけど」

「ああ、まるで今まで　っ」

和音さんと俺は慌てて窓際まで走り、明けら放たれた窓から外に顔を出した。

「……誰もいない、か」

「いるはずもはずもないですね……でも、誰かはここにいたのは間違いないでしょう」

和音さんは眉をしかめて舌打ちをし、俺は苦笑してうしろを振り返ろうとした。

「だ、ただだ、誰ですかっ。勝手に入っちゃったり、しちゃってる人はっ」

が、いきなり素っ頓狂に震えた声が部屋中に響いていた。

「きゃあ　な、何っ」

そして、妙に可愛らしい悲鳴を上げて振り返る和音さんに次いで、俺も振り返ってみると

「あ、あれ、桜井さんに……伏峰、君？」

そこには中腰で震えている生徒会長が涙目で俺達を見つめていた。

第三一話：少しずつ前に……。

お互いに顔を見合わせてどうしていいのか分からずに困っていた。

「脅かすなよっ」

「生徒会長はどうしてここに？」

激しく揺れる胸を押さえて窓に寄り掛かる和音さんは余程驚いたのか、腰が抜けそうになっていた。それでも野獣のような剣幕は健在なので、怯える生徒会長に苦笑しつつ、俺は猛獣使いの気分で和音さんを宥めていた。

「え、えっと。部活が増え過ぎだし、部室が足りないからここも使わないといけないかなって思って、見に来ただけだ」

「ここをですか？」

「う、うん。でも、みんな嫌がるかなって思ったりもするけど、使わないともったいないし」

「そうですね」

「で、でも、たった一つだけでは全ての部室は行き渡らないし、どうしようかなって思っている最中なんだけど」

歯切れの悪い生徒会長は額から噴出す汗を拭い、荒い息を整えるように苦笑いを浮かべていた。校舎内を来たにしては汗の量が異常に多く、まるで全力疾走でもしてきたのように見えるが、和音さんが怖いようで目を逸らしていた。

「大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫だよ……ちょっと驚いてね、はははっ」

この部室は一階の角部屋で出入り口にも近くて不動産物件的には最良なのだが、前の住人が色々と問題を起こしているので借り手がない。しかし、空き部屋にしているのはもったいないので、どうにかしたい。

まるで大家さんみたいな生徒会長は一生懸命に部室の中を見渡し、ポケットから取り出したメモ帳に何やら書き込んでいた。

「大変ですね」

「ははっ、そうでもないよ。これも仕事だし、僕はあまり役に立ってないからね」

自嘲気味な笑みを浮かべている生徒会長は指さしながら壁や床の状態を確認して、給湯器やアルミ柵も念入りに調べていた。

「あっ、そうだ。伏峰君、ちょっと聞いてもいいですか？」

と、思いきや、いきなり俺の方を向き直った生徒会長に「なんですか？」と聞き返すと

「中川君に預けたメモリカードはどうになりました？」

予想外の質問をしてきた。

「まだ部長を陥れようとした犯人は捕まってないですね。まあ、ぶっちゃけどうでもいいんですけど」

「ぶっちゃけ過ぎだと思うよ。いや、そうではなくて……あのメモリーカードの中に、他にも色々ありましたよね？」

「……ああ、あれですか。それなら多分、ママツキーさんが意地になって解析中です」

「そうなんだ。僕も気になって試してみたけど、まったく分からないくてね。もし、分かったら教えてよね」

苦笑いを浮かべてまた自分の仕事に戻った生徒会長に「分かりました」と告げたが、あのメモリーカードの中身が気になるのは俺も同じだった。

まあ、俺には分からない世界なのでママツキーさんに任せるしかないわけだけど。

「そう言えば、うちの部長を見ませんでしたか？」

「海藤君？ ……あっ、田乃中さんと一緒に生徒会室にいるはずだけど」

「生徒会室ですか？」

「うん。いきなり『部活動登録台帳はどこですのっ』て、すごい剣幕で来たときは驚いていつもの癖に逃げちゃった」

そう言っただけで笑っている生徒会長はメモ帳を閉じ、「癖って怖いね」

とため息を吐いて扉の方へと歩き出した。

先ほど汗だくだったのはそのせいかと一人納得した俺は頷き、和音さんは「だらしのないねえ」と呆れた様子で窓の外を向いていた。

しかし、何かを思い出したように振り返って

「陸上部だよっ」

俺の肩を掴んでいた。

「智樹、陸上部だよ。陸上部なら何か残っているかも知れない」

「陸上部……でも、二年も前の話ですよ？」

「それでも何かあるかも知れないだろ」

「分かりました」

俺の肩を掴む和音さんの手に力がこもり、必死な思いが伝わってくる。

「つと、ここはかなり痛んでるなあ。それじゃ、僕は行くけど二人共あまり長居はしないようにね」

「はい。もう出ますから」

扉の前で立ち止まっていた生徒会長は、壁に手をやって確認するように何度か叩き、またメモ帳を取り出して何やら書いていた。

珍しく仕事熱心だなと思いつつ見ていると、俺達の方を振り返って

「……ここには、何も残ってないよ」

一言残して去って行ってしまった。

瞬きの間、見間違ひとも思える一瞬の出来事。生徒会長の瞳が前に図書館で見たような冷たい笑みを浮かべているように見えた。

……まただ。

和音さんは生徒会長の变化には気付いてないようだが、俺達は顔を見合わせて不思議に思いながらも部室をあとにしようと歩き出すとした。

が。

「なんで、私達が探し物をしているって知っているんだ？ あいつは」

和音さんは驚いたように目を丸くしていた。

俺達は生徒会長に一言もこの部屋で探し物をしていいるとは言っていない。それに生徒会長と会って別れるまでは五分足らずで、会話らしい会話もなく、俺達は隅で邪魔にならないようにしていただだけである。

それなのに何故、俺達が探し物をしていいると知っているのだろうか？

「まさか、華子が話したのか？」

「それはないと思いますよ。多分、クロフクが横行しているこの時期に、こんなところにいれば誰だつてそう思いますよ」

「そうか……な。まあ、いいや」

あつけらかんと和音さんは追及するのを諦めたようで、「それじゃ、行くよ」と先に出て行つてしまった。

俺はそのあとを追つて部屋を出たが、今の和音さんに余計な事を考えさせるのは得策ではないと判断したのであえて何も言わなかった。

それに確固たる証拠が何もないのに生徒会長を疑うのは悪いと思う。しかし、生徒会長の瞳は何かを知っている可能性を秘めているように思えて気になっているのは事実だ。

不確かな事を口にしても現状では混乱を招くだけなので、今は俺の胸に留めておこう。

特訓部の部屋をあとにした俺達は陸上部の部屋へと行く事にした。しかし、休みなのか鍵が掛かっていたので渋々帰ろうとしたところで、「ちよつと寄り道していくか」と食堂まで足を伸ばしていた。何をするのかと思えば、「律子にお詫びの品を」と言う事で紙パツクのイチゴ牛乳を買いに來ただけだった。

「んじゃ、帰るか」

手に持ったイチゴ牛乳を振り回し、歩き出した和音さんと一緒に

食堂をあとにした。

視界に入るのは青く澄み切った空と無機質な校舎の壁。時刻は四時を過ぎて夕刻へと進み、日差しは少しばかり穏やかになっている。「やっぱり、夏は暑いな」

「当たり前な事を言わないでくださいよ」

「だけど、暑いものは暑い。なあ、智樹　これが片付いたら、みんな海でも行くか」

声のトーンを上げて明るく振舞っている和音さんは「水着でも買っていくかな」と、すっかり行く気満々である。和音さんの言う『これ』とはもちろん今抱えている問題の事だろう。

あと少しで夏休みにも入ってしまうので、出来ればそれまでに解決をしたものだ。長引けば俺達に何かしらの被害が出る可能性も十分に考えられる。

なんとかしてこれ以上の被害を出さないようにしないといけないが、全てが手探りの状態では何から調べるべきなのか、何を調べていいのか。

「……葵とも、海に行く約束してたな」

空を見上げて震えた声で唇を結び、「ほら、行くよ」とわざとらしく声を上げて歩き出した。

顔を拭い、何事もないように歩いていく和音さんに掛ける言葉もなく、生温い夕暮れの風が吹き抜ける中を俺は数歩遅れるようにして歩き出したところで前から歩いてくる人物に足を止めた。

「おや……えっと、伏峰君だったよね？」

「こんにちわ、松本先輩」

佐々木研究所の所長であり、学生離れた七三分けが一番似合う男であるマツクルさんこと、松本先輩であつた。

「今日は部活はお休みかい？」

「いえ、部活はしていますよ」

「そう。ところで東山君を見なかったかい？」

紙を撫でながら俺を見上げる松本先輩の瞳に不穏な色が滲んでい

るように見える。

一概にそれが当たっているのか言われると分らないが、何かを企んでいる人間には普通の人間とは違う異質な気のようなものを発している事があるものだ。

それは成し遂げようとする思いの強さに比例して、肌を焦がすような痛みを感じてしまう。まあ、これは俺の経験上の話であって意味があるものではないが、今までそのおかげでロクな目に遭っていないのを付け加えておく。

「今日は見てないですね。松本先輩は用事ですか？」

「うん。今開発している線香花火の配分を聞こうと思ったんだけどね」

そう言って苦笑いを浮かべている松本先輩からは、もう何も感じなくなっていた。

しかし、何を造っているのか知らないけど、怪しいものは造らないで欲しいものだね。

俺の神経が過敏になっているのか、何もかもを結びつけて考えるのは止めるべきか。そうしないといざというときに真実を見失う結果になるだろうから。

「智樹 何してるんだよっ」

「すいません。すぐ行きますから」

遙か前方で俺を振り返って大声で叫ぶ和音さんに俺達は振り返り、「それじゃ」と手を上げて食堂の方へ小走りに駆けて行った松本先輩に背を向け、俺は和音さんの方へと歩き出した。

部室に戻った俺達はいつもの椅子に腰を下ろしていた。

「律子、留守番ありがとうね。はい、お土産」

と、部長を軽く無視して律子ちゃんにイチゴ牛乳を投げて寄越し、律子ちゃんは驚いたように「わっ、きゃっ、きゃっ」と小猿のような声を上げて紙パックをお手玉しているのを見ながら、自販機で買

った缶紅茶のプルトップを開けた。

「トモ兄ちゃん、私のは？」

「自分で買ってきなさい」

むすつと頬を膨らませて「ケチ」と愚痴るコハルに「俺が買つて来ようか？」と中川先輩は尻尾を振る忠犬のように見えた。そんな様子を見ながら呆れている和音さんが苦笑いを浮かべているが、その顔は最近見なかった明るい感じに少し安堵していた。

「ところで部長はまだ帰ってきてないようだけど」

「あ、はい。出て行ったきり、帰ってきてないです」

忙しなく動き回っている律子ちゃんが何やら山のように盛られているお皿をテーブルの上に置いていた。

「……律子、なんだコレ？」

「クッキーです」

「そつか。んじゃ、いただきます」

山盛りの黒い物体に臆する事もなく、手を伸ばす和音さんは二枚ほど一緒に掴んで食べていた。

「んっ、ゴマの味が利いておいしい」

「ちよつとゴマを入れ過ぎたかなって思ってたんですけど、喜んでもらえて嬉しいです」

見た目は明らかに失敗作に見えるのだが和音さんの顔は至って普通だが、和音さんの味覚は普通ではない事は前にも経験しているで信用出来ない。

「智樹も食べるか？」

「いえ、お腹は空いてませんので」

あの黒い物体が黒ゴマの黒だとしても、明らかにおかしくくらいに真っ黒だ。どう見ても食べれるものには見えないので遠慮しておこう。

それに律子ちゃんも和音さんに食べて欲しいだろうしね。

怪我をした和音さんを気遣つての事だと思うけど、まだ自分のせいで怪我をしたと思っっているだろうな。

「伏峰先輩は何か見つかったんですか？」

「いや、きれいに片付けられてるから何もなかったよ」

和音さんも頷いていたが、クッキーが喉に詰まったのか苦しそうに目を白黒させ、律子ちゃんが慌てて水を差し出していた。

何をしているのかと思っただが、この妙に平和な感じは久しぶりな気がしていた。

最近は神経を使う事ばかりで、今だけはのんびりして過ごすのも

「大変だよ、みんなっ」

いいかも知れないと思っただけなのに、それは構わずに散っていった。

「そんなに慌ててどうしたんですか？」

「はあ、はあ……た、大変だよっ」

荒く乱れる息を整えるべく、大きく吸い込んで深呼吸をしている部長に、律子ちゃんが水の入ったコップを差し出し、それを一気に飲み干して近くにあった椅子に腰を下ろしていた。

「何が大変なんだよ？ お前の大変は、女の子絡みが多いからな」

「違っつて。本当に大変なんだって」

「だから、何が大変なのか早く話せって言っただよ」

多少苛立つように眉を寄せている和音さんは部長を睨みつつ、手はクッキーへと伸びていたが

「生徒会に殴りこみがあつたんだよ」

その言葉に動きを止めていた。

無論、律子ちゃんも未だにジューズの事でもめているコハルと中川先輩も顔を上げて部長を見つめ、俺も意味が分からずに部長の言葉待っていた。

「さっきね、生徒会にかなりの大人数で一齐に押し掛けてきたんだけど、『部活を潰さないでください』って口々に言ってたんだよっ」

「それはまた物騒な……って、部活を潰さないでください？」

「ともちゃん、そうなんだよ！ 部活がね、潰れるかも知れないっ

て　ふぎやつ」

部長は自分でも何を話しているか分からないほどに興奮している様子で、呆れた和音さんが落ち着かせようと中川先輩に顎で指示し、渋々立ち上がった中川先輩が熊の一撃とばかりに拳を振り下ろしていた。

これは落ち着かせようというより、黙らせるか、永遠の眠りを捧げているようにしか見えないのだけだね。まあ、部長は不死身に近い生命体なのでこれくらいではどうって事はないだろう。

「……………生きてますか、部長」

「く、首が……………景色が斜めなんですけど」

ほら、ね。

妙な形に曲がった首を撫でながら泣きそうな顔をしている部長は恨めしそうに中川先輩を睨み

「廃部勧告が正式に実施される事になったんだよっ」

まったく予想外の事を口走っていた。

「嘘だろ？　だって、まだ一学期だぞ」

「いや、それがこの前僕が田乃中さんと嫌々調査に行ったじゃない？　アレがどうにも関係しているみたいなんだけど、鈴木君が勢いでやるって言っちゃったんだよっ」

「……………バカだろ、あいつ」

クッキーを掴んだまま止まっている和音さんは呆れてため息を吐き、斜めに曲がった首を元に戻して安堵した顔の部長は頷いていた。「どこから出たのはか知らないけど、『調査に入った部活は全て廃部になる』っていうとんでもないデマが流れたみたいなんだよ」

「そっか。まあ、私達には関係ない話だし」

ふうつと小さく息を吐いて掴んでいたクッキーを口に運んでいく和音さん。

「でも、『電腦革命クラブを潰したら、廃部勧告は取り消し』っていう噂も一緒に流れてるみたいなんだけど」

「っ　ぶっ」

驚いて口に含んだクツキーを思いつきり噴出していた。

さすがに俺も部長の言っている事には驚いて危うく缶珈琲を落としそうになってしまったが、一体どんな噂が広がっているのか、とても気になるところだ。

「部長、そんな噂があるなんて俺は知りませんよ」

「それが、ついさつき数人の部長宛に生徒会書記長名義で携帯にメールが届いたんだって。僕も見せてもらったけど確かに本当だったよ」

「……書記長名義？」

「うん。でも、江頭君は送った覚えはないって断言していたけど、それが余計に混乱を招いて生徒会はメチャクチャな大騒ぎで」

両手を広げて困り顔の部長はクツキーに手を伸ばして口に含んだが、「にがっ」と顔をしかめてうめいていた。そんな部長に律子ちゃんの水を差し出し、和音さんは呆れた顔から真顔に切り替えて考え始めていた。

部長の話をつかりやすくまとめると、書記長名義で『廃部勧告』を匂わせるメールを送りつけられた部長達が同じように調査に入られた部活に連絡をとり、一致団結して生徒会に押しかけていった。と、言う事になる。

でも、誰がそんな事をするのだろうか？

考えてみても何も浮かんでは来ない。今は葵さんとクロフクの事で頭がいっぱいで、こちらの方まで手が廻らないというか思考も廻らない。しかし、『電脳革命クラブを潰したら、廃部勧告は取り消し』というのは如何なものだろうね。明らかに名指しで俺達を攻撃しているように思えるだが、何か恨みを買っような事をしたのだろうか？

と、考えていたところで和音さんと目が合った。

「なあ、智樹」

「はい。なんですか？」

「あいつ等の仕業なんだろうか……なあ、どう思う？」

『あいつ等』とは多分、特訓部の事だろう。

「断言出来ませんが、ないと思いますよ。今、俺達を解散させるような事しても、向こうにはメリットがないです」

「……そう、だよな」

納得はしていないが渋々頷いた和音さんはテーブルに肘を付き、また考え始めていた。

和音さんの頭には葵さんの事でいっぱいなんだろう。全ての出来事が葵さんへと繋がっているように感じていてもたってもいられないと言った感じである。でも、ここはじっくりと考えて行動をしないと次は怪我だけでは済まない気がして俺は正直、怖かった。このメンバーが一人でもいなくなる事は嫌なので、なんとしても早々に決着をつけたい。

だからこそ、こんなときに面倒事を増やされたくないのだ。

「とりあえず、廃部勧告の件は生徒会に任せて、俺達は今まで通りで行きましょう」

「そうだね。僕達はしなくちゃいけない事があるから　今日はもう終わりにして帰ろうか」

部長の声に誰もが頷き、俺は窓の外に目を向けていた。

先ほどまで青く澄み切っていた空は日が傾いて赤く染まり、闇夜が迫っていた。その赤と黒を混ぜた空を見ながら俺は帰り支度をしていった。

第三二話：真実ヲ追求スル者

生徒会にちよつとした暴動が起きて二日。

俺達は特に何もなく葵さんの事を調べていたが、すでに調べ尽くした感もあり、行き詰まりを感じていた。

「やつぱり、あとは職員室しかないのかな」

「だから、職員室で何を調べるって言うんだよ」

「けど、葵ちゃんの事は学園内で調べ尽くしたと思うし、残すは職員室だけなんだよ？」

「まだ陸上部の連中が探してくれてるんだから、何か見つかるかも知れないだろっ」

喧嘩腰だな、二人共。

ほぼ打撲と打ち身は回復した和音さんは元気なもので、あとは腕に巻いた包帯が残るだけなのだが「かゆい」と喚いてうるさくて仕方なかった。

そんな和音さんが昨日のうちに陸上部の部長を恐喝　いや、話し合いをして葵さんの事を聞いたみたいなのだが、直接知っているのは一つ上の学年であり、和音さんの代には葵さんは陸上部には所属していなかった。それに在籍した期間が短いのであまり参考になるようなものは残っていないと思うのだが、それでも望みは捨ててはいけないのだろう。

そんな事を思いながら、俺はテーブルの上にあった一枚の紙に目を通していた。

「これ、どうするの？」

「どうすると聞かれても、困った事になったとしか言い様がない」「だよな」

テーブルに肘を付いてため息を吐き、珈琲カップを口に付けるコハルは俺と一緒に紙を見ていた。

その隣で身丈に合わない小さな珈琲カップを手にとってすすって

いる中川先輩は「うーっ」と苦そうな顔をしていた。

「しかし、生徒会長も思い切った事をしたものですね」

「そうだな。救済を発動するのは構わないのだが、さすがにこれはどうかと思うぞ」

顔をしかめながらも何とか珈琲を飲み干した中川先輩は渋い顔をして唸っていた。

あの暴動に近い一件で生徒会長が『救済』をすると約束してしまったらしく、それを実施する日取りが書かれたのが配られてきたのだ。

救済とは以前、生徒会長が勘違いをして電腦革命クラブに廃部勧告にきたときに少したけ話題に上がったが、これは生徒会長が発動できる最高権力の一つで、活動実績がほとんどない部活に対して行なう温情措置とも言うべきものである。

「明後日、土曜日っていくらなんでも急すぎるだろうって。こちらにも準備ってもんがあるんだから」

「そう言えば、風紀委員の人達は部活には入ってないんですか？」

「入っているヤツもいるが、救済の場合は委員会活動を優先するようになってるんだ。それに、ほとんどの委員会がこの機会に自分の力をアピールするために救済の手伝いを張り切るだろう。そうすれば、来年度の予算が少しでも増える可能性があるわけだしな」

ため息を吐いて呆れた様子で珈琲カップを口につけて「うーっ」

と先ほどと同じ事をしている中川先輩に、呆れた視線を向けるコハルは角砂糖を一つ抓んで珈琲カップに落とし、苦笑いを浮かべてトレイを抱えている律子ちゃんが「珈琲のおかわりいますか？」と俺のところへやってきたので、頷いてお願いをした。

「それにしても、この救済を本当にする気なんでしょうか？」

「やるんだろうな。委員会はすでに動いているし、今回は風紀委員会が総指揮を任されたから頭が痛いよ」

「なら、こんなところで遊んでいいんですか？」

「大丈夫だって。俺の部下は優秀だから俺の出る幕がないんだよ…」

…うん、出番がないんだよねえ」

つまりは役に立たないからいなくていいって事だろう。

「しかし……マラソンとはねえ。この暑いのになんでこれを選んだのかな、あの生徒会長は」

「一番運動とは無縁の人が言い出すと手加減を知らないから怖いね」紙には一言、『救済措置、マラソン』とだけ書かれているが、この夏真っ盛りの時期にする競技ではないと思う。それに救済を受ける部活は明日に各部に通達が届くようになってるが、いきなりマラソンをするのは無謀な事だと思うのは俺だけだろうか？

大変な事になるのは目に見えているのだけど、出来ればというか、絶対に走りたくはないものである。

「それじゃ、俺は進行具合を確認しに帰るわ。こっちは今日は大丈夫そうだし、任せたからな」

「いつも子守りをすいません」

「いやいや、中々楽しいスイートタイムを堪能しているから気にするな」

熊が獲物を狙うような狡猾な笑みを浮かべ（本人は爽やかだと思っ
っているのだろう）、部室をあとにした中川先輩に迷惑千万と言っ
た顔で中指を立てるコハルが俺を振り返り

「誰が子供よ、誰がっ」

と、般若も真っ青の形相で睨んできた。

「さて、俺はちよつと散歩でも行くかな」

しかし、所詮はコハルである。

見慣れた般若顔に怯む俺ではないので、無視して気晴らしに散歩でも行つて来よう。

「あーっ、逃げるな！ 私も一緒に行くっ」

「駄目。ちよつと考え事もしたいから一人がいいんだよ。コハルは律子ちゃんと遊んでなさい」

「……律子と遊んでも面白くない」

「友達だろ、そんな事を言うもんじゃないぞ」

ぽんつと頭に手を置いて髪を撫でた俺を見上げるコハルは、「分かったよ」と渋々納得したような顔をして律子ちゃんを呼んでいた。無論、呼ばれた律子ちゃんは狭い部室の中、今の会話が聞こえていたので完全に困り顔。

「それじゃ、律子ちゃん。コハルの子守りをよろしく」

「ちよつ 私の子供じゃないってばっ」

苦笑いを浮かべた律子ちゃんはご立腹のコハルを宥め、奥では話し合いを続けていた部長と和音さんは、いつの間にか腕相撲をしていた。何故に腕相撲と思ったが、賑やかな部室の中を一瞥して廊下を歩き出していた。

校舎の中を一人考えながら歩いていた俺は、気付けば屋上に立っていた。

両方を校舎に挟まれ、西側階段を上って屋上に出ると左手に中庭、右手に第三校舎があり、正面には体育館がある。ここからは見えないうが第三校舎の向こうに広がるグラウンドからは元気な掛け声が聞こえ、野球部とサッカー部、陸上部などが部活動に精を出しているようだ。

「……暑いな」

フェンスに肘を付いて中庭を見下ろすと、そこにはママツキーさんが何やら実験をしている最中だった。

数人の佐々木研究所の部員を従えている姿はまさしく科学者然として、周りを動く部員達は肩で息をしているところを見ると相当こき使われているようだ。

……頑張れ、佐々木研究所。

心の中で応援をして見上げた俺の視界に青く澄み渡った空がどこまでも広がって映り、吹き抜けていく風は夕暮れの日差しをまとって少しだけ熱気を帯びていた。

この場所で葵さんは何を見ていたのだろうか？

空は一日として同じ景色を見せてはくれない。毎日が刻々と変わる世界で、同じものなんて存在はしない。

流れる雲に同じ形がないように、空の色も毎日違うものだ。

そんな変わっていく景色を眺めて何を思い、何を感じていたのか。俺には分らないか……葵さんではないのだから。

「空八青イ……ナ」

不意に背後から聞こえた不思議な声に心臓を鷲掴みにされ、振り返った俺の目に真っ黒な人影が飛び込んできた。

「ヤア……伏峰、智樹君」

真っ黒な覆面から赤い瞳が俺を見据え、口元が怪しく歪んでいた。黒装束に身を包み、両手を広げて立っている姿は異様の一言。血のように赤く光る瞳は恐怖を煽るかのように、肌が痛みを訴えて熱く焼けるように疼いていた。

瞳の色は自然にはありえないほど赤く、カラーコンタクトだと言うのは分かる。それに、『赤い目を見ちゃダメだ』と言っていた和音さんの言葉を思い出したが、もしかしてこの覆面が和音さんを。

「何が見エル？ 君二八、ココカラ何が見エル」

ゆっくりと俺を指さす覆面は目を細めていく。

機械的な声が俺の耳に届き、ノイズ混じりの声は肉声すら分らないほどの変わっている。ボイスチェンジャーで変えているような陳腐なものではなく、もっと高性能な何かで声を変えているようだが、覆面に隠れた顔にも首の辺りにも違和感がない。ママツキーさんなら何か分かるかも知れないが、生憎俺は機械の専門知識なんではないのでこれ以上の推論は無理だ。

「特には見えませんよ。それより、あなたは誰ですか？」

「誰二見エル？」

「分かりません。まずは名前を教えてくださいなければありがたいです

けど……それに、その声をどうにかしてくれませんか？ 耳障りですから」

ここは冷静に相手の出方を待った方が得策だろう。

恐怖は捨てろ、怒りも捨てろ。

ここで争っても意味がない。

見た限り、俺よりも小柄で身長は一六〇前後。黒装束に包まれた身体は痩せているが、それが筋肉質なのか、どうなのか、は服の上からではまったく分からない。不確かな情報しかない相手に不意に突っ込んで行っても、逆に怪我をするだけで形勢を不利にしかねない。

やはり、ここは冷静に状況を分析するべきだ。

「……ククツ、君八面白イナ。ヤハリ、君八注意スベキ存在デアルト同時に、頼モシイ存在デモアル。ソウダナ……真実ヲ追求スル者、『トウル』トデモ呼ンデモラオウカ」

「トウル……真実ですか」

覆面 トウルは楽しげに笑い、俺との距離を少しずつ詰めていた。

……まずいな。

俺の背後はフェンスでその下は中庭。横に逃げても相手が追ってくれば意味がない。

屋上の出入り口は一箇所のみで、そこまでの距離は軽く見積もっても一〇メートルはあるだろう。しかし、位置的にはトウルの方が近いので塞がれてしまっただけはお手上げだ。

「大丈夫ダヨ。今日ハ挨拶ヲシニ来タンダヨ……君ニダケ特別ニ、ネ」

しかし、俺の考えている事を呼んでいたように声を上げるトウルは先ほどより楽しそうに笑い始めた。

耳に付く甲高いノイズに神経が苛立ちを覚えている。平常心を保

たなければ相手の思うツボだというのは分かっているが、どうにもこの声は癪に障る。

「俺に挨拶ですか？ 随分と紳士的かつ、余裕ですね」

「ソウダロ？ コレデモ礼儀は重ンジティルンダヨ。君二ハアル種、同属ノ匂イヲ感ジルノダガ……違ウカイ？ 伏峰智樹君」

「俺はあなたのような異常な格好はしてませんよ」

「人ヲ見タ目デ判断スルノハ良クナイネ。コレデモ君ノ事ハ色々ト知ツティルツモリダヨ」

わざとらしくお辞儀をしていくトゥル―は俺を挑発している。

俺の名前を知っているのは驚きはしない。電腦革命クラブに名指して送りつけてきた脅迫文紛いのものがある限り、こちらの事は調べ尽くしている事は想像出来る範囲である。

俺の事を知っていると言う事で動揺を誘っているつもりだろうが、俺はそんなものには屈しない。

それに俺の過去は高校に入学して全てを切り捨てた。だから、ここで俺の過去を知っているのはコハル唯一人のはずだ。

「あなたが和音さんを階段から突き落としたのですか？」

「……アア、ソウダ。アノ人二ハ悪イト思ツタガ、アレハ宣戦布告ナンダヨ」

いとも簡単に自分の犯行である事を認めたトゥル―は目を伏せて拳を握っていた。

まるで申し訳なかったと謝っているように。

罪を犯して許しを請う罪人のように。

駄目だ こんな事を考えてしまうのは、相手の術中にハマっている可能性がある。頭を切り替えていかないと、ペースを掴まれたらそこで終わりだ。

「宣戦布告のために人を傷つけたのですか？」

「違ウ。争イハ好ナマイ……タダ、真実ガ知リタイダケダ。シカシ、必要トアラバ 君ナラバ、言ワズトスル事ハ分カルヨネ」

機械的な声に抑制はなく、淡々と語られる言葉がどこまで本当の

事なのか分からない。

争う事が嫌いだと言いながら、必要とあらばまた次の犠牲者を出す事を厭わない精神が俺には理解出来ない。

「私ハ、隊長ト呼バレタ男ノ意思ヲ継イダ者ダ」

「……意思を継いだ？ あなたは特訓部の隊長ではないと言うのですか」

「隊長ハ志半バニシテ倒レタ。アノ方の意思ヲ継ギ、私ハ全テヲ知ルタメニ動キ出シタ」

胸の前で拳を握り、空を見上げるトゥルーが何を考えているのか分からない。

意思を継いだと言う事は、二代目と言う事か？ 前とは違うから争いも好まないと言うのか？

しかし、そう言いながらも和音さんを手に掛けて、俺達に脅迫紛いの手紙を送りつけてきている。それで争いを好まないと言い切れるのだろうか？

分からない事ばかりで頭が変になりそうだ。

表情も声も分からない相手に見続ける苦痛というのは計り知れないものがある。人間は探究心が強い生き物で、知りたいと思う欲求が強くなれば聞かずにはいられない。かく言う俺もトゥルーの正体を知りたくて堪らないのだが、余計な事を聞いて機嫌を損ねてはこちらの身が危ない。

争いを好まないと言っても武器を隠し持っている可能性もある。

丸腰の俺では太刀打ち出来ないだろう。

「真実ヲコノ手デ掴ム日マデ、私ノ戦イハ終ワラナイ」

「それは、白浜葵さんの事ですか？」

俺は単調直入に切り出した。それは、あの脅迫状紛いの一文に書かれた事を確かめる必要があるからだ。

そこを明確にしないとトゥルーという人物の正体には辿り着けないだろう。

無言の時間が流れていく俺達の間、夏の熱気を含んだ風が吹き抜

けていき、俺を真っ直ぐに見つめる赤い瞳が少しだけ動揺したように震え、思わず身構えていた。

「ククッ……」

が、突然トゥルーは手で顔を覆い、身体を震わせていく。

「アハハハッ、愉快ダ。今日ハトテモ愉快ナ日ダ」

「……何がおかしいのですか？」

「伏峰智樹、君ハ真実ヲ掴ンデクレソウダ」

笑い声が屋上を包む。

「白浜葵……ソノ事実ニ辿リ着イタノハ喜バシイ事ダッ」

俺の顔を見て笑うトゥルーは本当に楽しそうで、それが俺の中で言い様もない恐怖へと変わっていく。

……危険だ。

トゥルーは限りなく危険な人物だ。口では争いを好まないと言っているが、心の奥底ではきつと違う”何か”を抱えているはず。

「あなたは、葵さんと一体どんな関係ですか？」

「ソレハマダ言エナイ。時ガ来レバ、ソノトキハ……君ニ、全テヲ語ロウ」

何故、俺に全てを語るつもりなのか分からない。

だが、俺には聞かなければならない一つの疑問がある。それを何故知っているのかを聞かなければいけないような気がしていた。

「白い羊……誰も知らない葵さんの秘密を知っているあなたは、葵さんの身近な存在ではないのですか？」

「……ソレモ、時ガ来レバ語ロウ」

全てを謎にしてトゥルーは空を見上げ

「コノ空ヲアノ人ハ愛シタ……私ハ、ソレヲ奪ツタヤツヲ許セナイ」
そう言い残して俺の前から立ち去っていった。

歩いていくうしろ姿を呆然と見送っていた俺は、大きく息を吐き出してフェンスにもたれかかっていた。気付けば、額から流れ落ちる汗が顎を伝い、掌には尋常ではない汗を握りしめていた。

トゥルーが屋上を出て行って少し経ってから妙な胸騒ぎを覚えた俺は、重い身体を引きずって部室へと帰ってきた。

「おかえり。どこまで行ってたの？」

「ちよつと屋上まで」

コハルは呑気にお菓子を食べながら俺を一瞥し、更に手を伸ばして頬張っていた。取り分け心配している様子もないところを見ると、何もなかったのだろう。

余計な事を言って心配事を増やしても混乱を招くだけなので今は俺の胸に留めておくか。

少し思案してコハルには心苦しいが適当な嘘を吐いて俺は椅子に座ろうとしたが、ふと目に入って来た光景に、この人達はまだやっていたのかと呆れてしまった。

「だから、職員室に行って何を調べるんだよ、ふんっ」

「い、行ってみないと分からないよっつ　うっつ」

こちらではまだ腕相撲をしている二人がいたが

「これで、三〇戦目。ちなみに、二五勝三敗二反則負けで桜井先輩の圧勝」

と、コハルが面倒そうに教えてくれた。

……平和だな、ここは。

そう思いつつ、部室を見渡してある違和感に気付いた。

「律子ちゃんはどうしたんだ？」

「ん？　律子なら教室に忘れ物をしたって、トモ兄ちゃんが出て行ってちよつとしてから出て行ったけど」

俺が出てから未だに帰って来ない？

「一人で行ったのか？」

「そうだけど……何かあったの？」

さすがにおかしな事に気付き始めたコハルは立ち上がり、部長と和音さんも俺達の方を向いていた。

「律子が帰って来ないってどう言う事だよ？」

「いや、僕に聞かれても」

「なんで見てなかったんだよっ」

部長と和音さんが言い争っているのを聞いていても今は意味がない。

「探してきます」

「あつ、私も行く」

「コハルはここにいろ。バラバラになったら何が起こるか分からないだろ」

駆け出して行こうとしたコハルの腕を掴み、俺は苛立ちを露にしていた。俺の感じた胸騒ぎは未だに消える事なく、今も胸の奥でくすぶって怖い想像が頭が離れない。

ここにいても何も解決はしない。

俺はコハルの腕を離して部室を駆け出していこうとしたが

「ただいまです。……………あ、あれ？」

そこに呑気な声を上げて今探しに行こうと思っていた人物が帰ってきた。

「どうしたんですか？ 皆さん揃って きゃっ」

意味が分からない様子の律子ちゃんも驚いて俺達を見渡しているが、コハルは何故か怒りながら呆れた顔で、和音さんは律子ちゃんの頭を驚掴みにして撫で回し、部長は安堵したように胸を撫で下ろしていた。

俺はその様子を見ながら思い過ぎであった事に安堵し、頭を振って椅子に腰を下ろしたが、少々順番を入れ替えて調べないといけない事になりそうだと、頭を痛めていた。

第三三話：パンドラの箱

特訓部隊長の意思を継ぐ者 トウルーが俺の前に現れ、嫌な予感が頭を過ぎったが特に何もなかった。

そして、翌日。

何もなく平和な一日が過ぎる事を望んでいたがそれは脆くも崩れ去り、俺達の間には暗雲が立ち込めていた。

「……どうしよう、ともちゃん」

「俺に聞かないでくださいよ」

俺の手を握る部長は泣きそうな顔をして懇願してくるが、俺は手を振り払ってため息を吐いていた。

部長が困惑するのも分かる。

俺も困惑している。

そして、和音さん、律子ちゃん、コハルも困惑して顔を見合わせていた。

一番最初に部室に来たのは和音さんだった。

扉を開けて入ったところで一通の封筒が落ちているのに気付いた。別段取られるものはないが、一応は鍵を閉めておかないと部室を荒らされては大変である。

その封筒を開けた和音さんは中を読んで驚き、そこに部長と俺、更に律子ちゃんとコハルがやってきた。

『電腦革命クラブ、救済措置を実施』

まさに寝耳に水の内容に、部長は呆然した顔を俺に向けて俺の手を握った。

そして、今に至るわけだ。

テーブルを囲むようにして座る俺達は緊急ミーティングを実施すべく、準備をしていた。

「律子、今日は少し甘めにして」

「あつ、はい。海藤先輩はどうしますか？」

「僕も甘めがいいな。あつ、ちょっと　コハルちゃん、お菓子はまだ食べちゃ駄目だよ」

「うるさいな。六時間目が体育でお腹空いたのよ」

なんでしょうね、この緊張感の無さは。

まるで今から楽しい遠足にでも行くような雰囲気だが、この中で俺はかなり浮いているような気がしてきた。

「で、どうするんですか？」

「そうだな……とりあえず、生徒会に殴り込みをかけて取り消しにさせる」

力こぶをつくって実力行使に出ようとしている和音さんを制し、

俺は部長に意見を求めようとした。

「それ、いいかも。ねえ、ともちゃん」

「駄目です。そんな事したら、即座に廃部決定ですよ」

だが、賛成意見を述べているので即座に却下した。

「大体、なんでうちが廃部勧告を受けなくてはいけなんだよっ」

「それは活動実績がないからですよ」

「何を！　今、頑張ってやってるじゃないか。これが活動と言わずして何と言っただっ」

「頑張っているのは部活ではないですよ」

確かに和音さんが言うように今はとても忙しいが、それは部活動で忙しいのではない。

「何としても廃部勧告を回避しないと、明日はマラソンが待っているんだからな」

「それは分かっていますが、救済措置の延期は出来ないますか？　そもそも二学期のはずですから、生徒会長に掛け合っくらいはしても

いいと思いますけど」

「……それはこいつに任せよう。私は話し合いは苦手だから」

と、部長を指さす和音さん。

部長は「へっ？」と間抜けな顔をして驚いているが、和音さんはもう関係とないばかりに律子ちゃんが運んできた珈琲カップを受け取って口を付けていた。

「それでは部長は生徒会に乗り込んで生徒会長の襟首を掴んで直談判をお願いします」

「えーっ、なんで僕なのっ？」

「それはあなたが部長だからです。それ以外に役に立たないのですから、頑張つて来てください」

「うわーんっ、みんなして酷い　ふぎゃっ」

顔を覆って泣き真似をしながら部室を出て行こうとした部長は

「おっと！　何をしてんだ？　翔」

熊さんとぶつかっていた。

「翔様、大丈夫ですかっ？　ちよつと、なんで避けないのよっ」

「そう言われても、なあ。いきなりぶつかってきたのは翔だから」

熊に猛烈な抗議する馬鹿娘の唾が飛び散り、熊さんはとても迷惑そうな顔をしていた。

ふむ、なんとも滑稽な図だろうか。

しかし、この二人は何の用でここに来たのだろうか？

「何しに来たんだよ、華子」

「ちよつと確認をしにきただけです、乳デカ女」

「確認ってなんだよ？　馬鹿娘」

「馬鹿ではありませんし、あなたには関係ありませんわっ。それより、こちらに救済の封書は届いてますか？」

馬鹿娘、副生徒会長は部室の中を見渡して俺達の顔を見ているが、和音さんは怒り心頭と言った顔で飛び掛らん勢だった。

それを律子ちゃんが何とか宥めつつ、コハルは封筒を掴んで「はい」と副生徒会長に差し出していた。

「……………ありましたわ」

コハルの手から封筒をもらい受けた副生徒会長は中を確認して、ため息のように息を吐いて肩を落としていた。

「その封筒がどうしたの？」

「この封書は我々生徒会が発行したものではありませんのよ、翔様」
「……………そうなの？　ってか、たくちゃんの身体って筋肉じゃなくて鋼鉄で出来るよね？　とっても痛いんですけどっ」

さっぱり意味が分からないといった顔をしている部長は、鼻を押さえて涙目になってジト目で中川先輩を睨んでいた。

「ええ。この書面には生徒会長の署名と捺印がありますが、予算審議会議長である書記長である江頭の署名と捺印がありません」

と、テーブルの上に置かれた紙を一同で覗き込んで見た。

「これは正式な救済執行権を有する書記長の採決なく発行されたものなので無効となります」

「……………確かに」

和音さんは頷いて「そっか」と安堵したように椅子に座り直していたが、「律子、珈琲おかわり」と機嫌はすでによくなっていた。

「しかし、よく偽物が出回っているのが分かりましたね？」

「それは野球部やサッカー部から苦情がくれば、誰でもおかしいと思うわよ。他にもバレー部や盆踊り同好会、お祭りワッショイ部からも苦情がきてるわ」

「確かにそうですね」

この学園でもメジャーな部活に廃部勧告はありえないだろうし、実績はかなりのものである。

ちなみに盆踊り同好会とお祭りワッショイ部はこの学園で部員を一〇〇名近く有するメジャーな部活である。何故人気があるのかは謎だが国民性を反映した部活なのだろう。

「それで調べてみれば、この偽の封書が何通が発行されているようなので、風紀委員と共同で調べている最中なのです」

「で、ここが最後というわけだ。見つかったのは、ここのをに入れて

全部で一〇通……それほど多くなくてよかった」

「よくないわよ！　これは明らかに妨害行為なのよ。総指揮官がそんな事を言っただうするのですかっ」

下から睨み上げる副生徒会長にたじろいで困り顔の中川先輩がこちらに助けを求めるような視線を送ってくるので、華麗にスルーして窓の外を眺めていた。

部室の中は賑やかな副生徒会長と中川先輩の悲鳴に似た声が聞こえ、外からは野球部やサッカー部の掛け声が元気よく聞こえていた。

「なあ、智樹」

「はい？」

ぼんやりと外を眺めていた俺の肩を叩かれ、振り返った先には真顔の和音さんが真っ直ぐに見つめていた。

「どうしたんだ？　昨日から少し変だぞ」

「そんな事ないですよ。俺は至って普通ですから」

「……何か隠しているだろ？」

野生の勘、あるいは女の勘？

「別に隠し事はありませんよ」

「そうか。なら、いいが……昨日は珍しく取り乱していたように見えただから、ちよつと気になつてな」

「すいません。俺は大丈夫ですから心配しないでください」

安心したように俺の肩を叩いて笑みを浮かべた和音さんは

「それじゃ、今日も頑張っていくよ」

気合を入れて拳を突き上げていた。

静かな部室で俺はコハルと一緒にのんびりと寛いでいた。

今日は和音さんが「たまには律子も出たいだろう」と言う事で、

和音さんと律子ちゃんと一緒に調べものを出て行き、副生徒会長は「今日はこちらのお手伝いが出来ないのですわ」と泣き真似をして部長に抱きつこうとして逃げられ、中川先輩はそれを大笑いしてタ

コ殴りにされていた。

熊がタコ殴りとは、これいかに……。

そんなわけで仕方なく俺は今日はお留守番である。まあ、少し頭を整理する時間が欲しいなと思っていたので丁度いいのだが。

「ねえ、トモ兄ちゃん」

「ん？」

「白浜葵さんってどんな人だったの？」

コハルの素朴な質問に、俺は和音さんや部長から聞いた話を聞かせていた。

「……そうなんだ。葵さんって元気な人だったんだね」

その元気な葵さんに何が起こったのか？

俺達はそれを調べているが今は行き詰まりを感じていた。調べられる事は調べ尽くした感があり、残すは部長が言うように職員室しかないように思っていた。

あまりにも葵さんに関する情報が少な過ぎるのあるが、学園にいた時期が半年にも満たないので原因の一つだろう。夏合宿で事故に遭い、それから半年以上を掛けて復学して和音さん達と同学年になる。

しかし、夏休みになる前に 今度は階段から落ち、現在も病院に入院しているが意識が戻っていない。

「なんか、嫌だね」

「そうだな」

しんみりとした空気が流れ、俺とコハルは口を噤んで黙っていた。本当に何があったのか、それを知りたいと思う気持ちの中に、知ってしまう恐怖というものがある。

二代目隊長 トウルーは争いは好まないといいつつ、真実を得るためには犠牲が出て仕方ないような考え方である。その犠牲になるのが俺達なのか、はたまたまったく関係のない人なのか、それは分からないが本当に急がなければ次の犠牲者が出てしまう可能性がある。

だが、部長や和音さんは何も分からない事に焦りを感じているのが分かり、俺も昨日の出来事から焦りの色が強くなり始めていた。

「ボンボン、トモキンいるさねさ？」

複雑で難解な考察に頭を痛めている俺の耳に、呑気かつ脱力する声が聞こえてきた。

「なんですか？」

「おっ、いた。トモキン、トモキン、ちょっと見て欲しいさね」

部室の入り口でノートパソコン片手に立っているママツキーさんが、小走りにこちらへ駆け寄ってきた。

「……どうしたんですか？」

「まあ、これを見て欲しいさね」

そう言つて珍しく真剣な声のママツキーさんは、テーブルの上にノートパソコンを置いて何やら操作をしていた。コハルも何事かとノートパソコンの画面を覗き込み、ママツキーさんはアイコンをクリックして見やすいように画面の角度を調整していた。

「……これは」

「トモキンが持つて来たメモリーカードに入っていた映像さね」

そう言えば、必死になってノートパソコンと格闘していたが、このパスワードを解読していたのか。しかし、ママキーさんにしては珍しく時間が掛かったものだ。

「パスワード、分かったのですか？」

「分からないからパスワードごと壊しちゃったさね」

いつもなら何でもすぐに出来てしまうのに、表情もいつもより疲れているように見えるから、今回ばかりはかなり手を焼いたような雰囲気だ。

「そうですか。でも、大丈夫ですか？　あまり、顔色が優れませんけど」

「いや……最近、私の周りをちょろちょろしている輩がいてね。そ

れがうつとうしくて集中出来ないさね」

「……大丈夫なんですか？　そういう事はもっと早く言ってくさいよ」

「大丈夫さね。前にも言っただけど目星はついてるし、なんとかなさあ。で、このメモリカードに使われているパスワードシステムは普通に出回っているタイプとは比べものにならないほど高性能なんだと、ちょっとした友人が言っていた。だけど、問題なくクラッシュしてもらっちゃったさあ」

まったく悪びれた風もなく言い切ったママツキーさんに、『ちょっとした友人』とは誰ですかとツツコミを入れたかったが

「この映像をよく見て欲しいさね」

顔は至って真面目でいつもの冗談が見られないのでタイミングを逃してしまった。

画面に映し出されているのは、緑豊かな山間の公道を走るランニングウェアを着た女の子が、楽しそうに笑みを浮かべて走っている映像だった。

映像自体は前を先導する車の中から誰かが撮っているようで手ブレがあり、櫛を飛ばす若い男性の声と、応援する女の子、二人の声が混ざって聞こえていた。

ビデオを撮っているのはどうやら女の子みたいで、手が映りこむほど横に振りながら、走っている女の子に名前を呼んでいた。

しかし、その呼ばれた名前に俺とコハルは驚いて顔を見合わせていた。

「葵って……この人が白浜、葵さん？」

「そうみたいだな」

顎に掛かるくらいの髪を風になびかけ、丸く円らかな瞳に血色のいい唇。可愛く見える容姿も、颯爽と走り抜けていく姿は凛々しくて惚れ惚れしてしまう。

部長の言う通り、ストレートの綺麗な髪で天然パーマなど微塵も

感じないほど自然だった。

でも……もしかして、この映像は。

俺達が少し目を離れたところで映像が切り替わり、山間の道から開けた公道へを走っていた。

カメラに向かって手を振る余裕さえある葵さんは楽しそうで、車の中には運転している陸上部のコーチらしき声と、マネジャーの女子生徒らしいやり取りの会話が聞こえていた。

楽しそうに走る葵さん。

それを応援する声。

何もない平和な映像に見えていたが、ある場面で俺達は思わず目を逸らしていた。

「これ、事故の映像さね。映像のタイトルは『夏合宿』」

ママツキーさんは映像を止めて頷くと、なんとも言えない複雑な表情を浮かべていた。

「もう一度、今度はスロー再生でいくさね」

小さく息を吐いたママツキーさんはパソコンを操作して先ほどの同じ映像を流し始めた。しかし、今度は先ほどよりも遅く、半分以下の速度で動いていた。

俺とコハルが目を逸らした映像。

それは、楽しそうに手を振る葵さんを撮っているビデオカメラが突然揺れるところが始まっていた。

カメラを持つ女の子の悲鳴が響き、運転している男性の声で「危ないっ」という声が聞こえ、ブレーキを踏んだのかタイヤの軋む音がノイズのように鼓膜を震わせた。激しく動いていく映像は道路を斜めに映し出し、車が対向車線にはみ出しているようで中央線が何度も映り込んでいた。

次の瞬間、真っ白な乗用車がカメラの前を横切っていった。映像

はそのままノイズが入って途切れ途切れになっていたが、何かがぶつかったような鈍い音を最後に映像は完全に途切れてしまった。

「この映像……調べてみたけど、マスターテープのコピーさね。加工は一切されてないよ」

そこで一旦映像を止めたママツキーさんは俺達の顔を見比べて「大丈夫？」と聞いてきた。

「大丈夫ですよ。それよりも、何故こんな映像がメモリーカードの中に……」

「それは分からないさね」

首を振るママツキーさんは続きの映像を再生し始めた。

次にカメラに映ったのは横向きの映像だった。震えているのか、映像は微妙なブレが生じて鮮明さがなく、ハッキリとはしない。時折鳴咽交じりの声が聞こえるが、どうやら先ほどのマネージャーが撮影をしているようだ。

くぐもった声で何度も葵さんの名前を呼んでいるが、カメラの先には乗用車の前で横たわる葵さんの息を確かめている男が二人。

遠くて顔がはっきりしないが、一人は乗用車から下りてきたスーツを着込んだ男、もう一人はジャージを着ているので車を運転していたコーチだろう。どちらも見た感じから言えば二〇代後半から三〇代前半くらいで、コーチが焦った様子で何やら指示をしている姿が映っていた。

真つ赤な血が流れ出して広がる中、葵さんは身動き一つせず、事故の悲惨さを伝えている。

それなのに事故を起こしたと思われる乗用車の男は車に乗って走り去ってしまい、コーチはこちらの方へ駆け寄って来て、マネージャーは慌ててカメラを隠して息を飲んでいた。

『今見た事は忘れる。それより、白浜を車に乗せるのを手伝えっ』
運転席に向いたレンズが男の腕を映し、顔は見えないが威圧的な声にマネージャーは小さく悲鳴を上げていた。

それから暫くの間、俺達は無言でいた。

張り付く喉に唾が流れ落ちていくのを感じながら、口を開こうにも何を喋っていいのか、頭を整理しないとうまく言葉すら出て来なかった。

「……ねえ、トモキン」

「なんですか？」

「私達がしている事はなんだろうね」

ママツキーさんには全てを電話で伝え、そのときは電話口で「分かった」とだけだった。

「必死になって開けたのがパンドラの箱だった……気分さね」

確かにママツキーさんの言う言葉がピッタリな気がする。

最後に希望なんて出て来ない悪魔ばかりで後味が悪いものを感じ、息を吐いたところで

「んっ？」

俺の携帯が突然鳴り始めた。

第三四話：騒動は次のステージへ

第一校舎一階、廊下。

職員室がよく見える廊下の隅で俺達は身を潜め、入り口に立っている先生達の様子を窺っていた。

「さて、どうしようかね」

「……なんで俺達まで呼んだのですか？」

「いや、智樹は呼んだけど……まさか、おまけが二人もついてくるのは予想外だった」

と、俺のうしろを見ながら苦笑いを浮かべている和音さんに、コハルは不貞腐れたように頬を膨らませ、ママツキーさんは関心がないいのかよそ見をしていた。

俺の携帯に電話をしてきたのは和音さんだった。

何やら職員室が騒がしくなったので来てくれないかというものだった。確かに職員室の入り口に立っている先生の姿もなく、中から騒がしい声が廊下の端まで聞こえているのはただ事ではないと思う。しかし、それを確認しに近づくのはさすがに危険なのでこうして隠れているわけで。

「ところで、ママツキーまで一緒になって何をしてたんだ？」

「……それはあとで話しますよ」

「気になるから今話せ」

有無もなく俺を見る和音さんを納得させるのは無理だと判断した俺は

「それでは、あちらへ行きましょう」

うしろを指さした。

「トモキン、人を指さすものではないさね」

「何気に折ろうとしないでください。ママツキーさんを指さしたわけではありませんから」

曲げていけない方向に曲げようとするママツキーさんから助け出した指を擦り、和音さんを渡り廊下の方へ促した。

不思議そうな顔をして付いて来る和音さんを複雑な表情を見ていたママツキーさんが、俺の顔を見つめて何か言いたそうな顔をしていた。ママツキーさんが何を言いたいのかは分かるので静かに首を横に振ると、小さく息を吐いて持っていたノートパソコンの電源を入れていた。

「どこまで行くんだよ、智樹」

「……この辺でいいですね。和音さん、これからあるものをお見せします」

「あるもの……？ まさか、エッチなビデオっ」

と、ボケたところで、この場の空気ではない事を感じ取った和音さんは、咳払いをして真顔になっていた。

「でも、約束してください」

「……約束？」

「ええ。決して大声を出さない、暴れない、取り乱さない、以上の三つを守ってください」

意味が分からない和音さんは真顔で「分かった」とだけ頷き、俺の合図でママツキーさんは和音さんにパソコンの画面を向けていた。

……。

……。

画面を食い入るように見つめる和音さんの顔は次第に青白くなり、唇が震えて始めていた。

「なんだよ……これ」

「落ち着いてください、和音さん」

「なんだよって聞いているんだっ」

すでに俺の言った事を忘れている和音さんは腕を振り上げて暴れ始めた。律子ちゃんとコハルは「きゃっ」と悲鳴を上げ、危険を察知して数歩後退^{あひざり}っていたが俺はそうはいかない。

こうなる事を分かっていて見せたのだ。その責任を取らなければいけないだろう。

「和音さん、落ち着いてください」

「うるさいっ　これが落ち着いていられるか！」

俺の声をかき消すほどの声量で睨みを利かせる和音さんの腕を掴み、なんとか穏便に落ち着かせようと思ったがこれは無理そうだ。あまり騒ぎが大きくなると、すぐそこに職員室があるのにまずい状況になってしまう。

「葵が……葵が、倒れているんだよっ」

「これはビデオです。しっかりしてください」

「……葵がっ」

現実と過去が混同し、頭の中で整理出来ない様子の和音さんは俺の腕を振り解いて駆け出していこうとする。

その方向には職員室。

ビデオの中に映っていた人物に身体が反応してそちらを目指そうと本能が命じているかの如く、力強く俺ごと引きずっていきこうとする。

「和音さん！」

だが、今はまずい。

ここで騒ぎを起こしてしまうのは色々とまずい事になるのはここにいる皆が分かっている事だ。

「……………とも、き？」

「落ち着きましたか？　和音さん」

目を丸くして俺の顔を見つめる和音さんだったが、膝から力が抜けるように座り込んでしまった。咄嗟に身体を支えたがその瞳は空るで焦点が定まっていなかった。

「和音さん、大丈夫ですか？」

「大丈夫……ちよっと、フラついたただけだから」

「保健室行きましょう。少し休んだ方がいいです」
弱々しく紡がれる声に不安を覚えた俺は、和音さんを腕を肩に廻して立ち上がらせ、保健室を目指して歩き出した。

保健室。

生徒数が多いので無駄に広い保健室の中にはベツトが横一列に五つ、それが手前と奥に一列ずつ並び、消毒液と保健室独特の雰囲気匂が匂いとなって辺りに漂い、心の中にある弱い部分を曝け出してしまいそうになる。

白いカーテンで仕切られたベツトの上で横になる和音さんは目を閉じ、静かな空気が流れて時計が現実が進んでいる事を教えてくれる。

ここでじつとしている時間はない、と。

「かずちゃん、大丈夫なの？」

「大丈夫ですよ。先生は問題ないって言ってましたから」

「そっか、よかった」

安堵したように胸を撫で下ろした部長だったが、急に真剣な表情を浮かべて俺の方を向いていた。

「僕にもその映像見せてくれるかな」

「分かりました。では、あちらで見ましょう」

俺はママツキーさんに目配せをし、部長と一緒に保健室を出た。

保健室から少し離れたところにある階段下で、ママツキーさんはノートパソコンを開いて準備を始め、その間に俺は部長に和音さんをお願いした「大声を出さない、暴れない、取り乱さない」の三つを伝えた。

「分かったよ」

ただ一言だけの返事だったが部長の声は震えているのが分かった。そして、準備が出来たママツキーさんが頷き、部長の前にパソコン

ンの画面を向けた。

和音さんを保健室に運び、すぐに部長にも連絡をいれた。

電話を切って一分も経たない内に、この前よりも取り乱した部長が保健室に飛び込んできたときはこちらの方が驚いてしまった。

どこのいたのかと聞いてみたところ、陸上部の主将に聞き取り調査に行っていたらしい。しかし、葵さんの記録は抹消されているのか見当たらず、「在籍していた記録すら残っていない」と陸上部主将から伝えられて言葉をなくしたと俺に拳を握りながら話してくれた。

部長は男前なだけではなく、性格もよくて人当たりもいいので、友好関係がとても広い。まあ、放課後になればそれを微塵も感じないほどの変態オーラが出ているので、誰も近寄りたくないのかも知れないけど。

と、そんな不謹慎な事を考えている間に見終わっただけの部長は大きく息を吐いて天井を見上げていた。

「大丈夫ですか？」

「ああ……大丈夫だよ」

ずっと目元を拭って頷いている部長だが、瞳は潤んで唇は少し震えていた。

固く握りしめた拳は色が変わり、部長の中でどんな思いが渦巻いているのか全てを理解する事は俺には出来ない。きっと俺が感じた以上の衝撃を受け、頭の中も、心の中も、混乱しているに違いない。和音さんと同じように。

だが、取り乱さないのは男の意地なのか、それとも違う何かがあるのか、そこは俺には分かるはずもない葛藤があるのだろう。

ママッキーさんも眉を寄せ、複雑な表情で俺と部長を見てパソコンの電源を切っていた。

「これ、夏合宿だろうね……葵ちゃん、元気に走ってたから」

やはりあの人が葵さんだった。

部長の言うように、本当に活発で元気そうな印象を受ける笑顔をしていた。

「今、こんな事を聞くのは申し訳ないとおもうのですが、あのビデオに映っていた男性は先生ですか？」

「……ああ、体育の先生で陸上部の顧問をしていた先生だよ」

部長は俺を一瞥して少し間があってから、眉をしかめて汚らわしく吐き捨てるようにして目を伏せていた。その心の内に巡る複雑なものが言葉に表れているのが分かり、さすがに質問を焦り過ぎたかと後悔していた。

「でも、もういないよ。僕達が一年の夏休み開けには辞めていなくなってたからね」

「そうなんですか。それじゃ、戻りましょうか」

一つ頷いて保健室へと歩いていく部長のうしろ姿は、言葉にするのが難しいくらい落ち込んで見えた。

「トモキン、私は部室に帰るさね」

「一人で大丈夫ですか？」

「大丈夫さね。それに他のフォルダも開けないといけないし……これ以上、和音ママやショウポンの苦しんでいる顔を見るのは嫌だから」

ふっと泣きそうな笑みを向け、歩き出したママツキーさんは「また、明日」と片手を挙げていた。

しかし、一つだけ不思議に感じている事がある。

部長は名前も教えてくれなかったが、一年の夏休み明けに辞めてしまった先生は何故そんな中途半端な時期に学園を去ったのだろうか？

部長達が一年のときであれば、葵さんの事故を苦にしてというわけではないだろう。

なら、何故辞めたのか？

分ければ苦労しないが何も情報がないのでこれ以上の推論を立てる事が出来ないが、もう一つだけ疑問がある。

それはあの乗用車を運転していた男性は何故逃げたのか？ あの先生は何故逃がしたのか？

「……やめよう」

考えれば一つの答えが頭が浮かんでくる。最悪で最低な考えに、自分で考えて気分が悪くなっていた。

あの映像から二人のやり取りが聞こえたわけではないが、俺の頭にはその仮説が成り立つほど不自然な態度をあの先生はビデオに残している。

『今見た事は忘れる』

その一言が色んなものを俺に連想させる。頭の中を駆け巡る不快な謎が結びつきそうになり、解けていく。

「伏峰君、大丈夫ですか？」

「……え？ ああ、生徒会長ですか」

いきなり声を掛けられ、驚きで一歩後退おひざりってしまった俺の前に、心配そうに眉を寄せる生徒会長が立っていた。

どうやら考える事に夢中になっていたようで、人が近づいてくるのに気付かなかったようだ。

「どうしたんですか、こんなところで……って、顔色悪いですよ？ 保健室に行った方がよくないですか」

「大丈夫ですよ。ちょっと考え事をしていただけですから」

納得はしてない様子の生徒会長は「気をつけてくださいよ」と俺を見上げ

「そう言えば、ちょっと聞きたい事があるんだけど」

珍しく真剣な顔をしていた。

「なんででしょうか？」

「……伏峰君達は何をしているのか、気になってるんですよ」

「何をとは、どう言う意味でしょう」

「とぼけないでください。副会長や風紀委員長の中川君まで一緒になつて、一体何を調べているんですか」

本当に珍しい。

いつもの弱々しい雰囲気は微塵も感じず、何か違う人が中に入っているのでは思うほど迫力があつた。

「生徒会長には隠し事は無理ですね」

「それじゃ、やっぱり何か調べていたんですね。この前も特訓部の部室にいたから、もしかして」

「違いますよ。俺達が調べているのは部長に掛かっている覗き疑惑ですよ」

「……覗き、疑惑ですか？ ああ、あれですか」

急にキョトンとした顔をして首を傾げる生徒会長だったが、思い出したように頷いて納得していた。

「そうだったね、すっかり忘れていたよ。あのときも聞いたのに特訓部の部室であつたから、てっきりそっち関係のを調べているのか思つたよ」

胸を撫で下ろすように息を吐く生徒会長は「考え過ぎだった」と苦笑していた。

騙すのは気が引けたが『拒否、他言する事あらば、汝らの命を捨てるのと等しい行為だと思え』と言う特訓部隊長の言葉があるので、余計な事はいえない。

屋上で遭つたときの印象は何でもする狂気の塊とも思えたので、誰かを危険に晒すわけにはいかない。

それにメモリカードの中身について生徒会長も知りたがつていたが現状ではそれを教えるわけにはいかないので、本人の口からその話が出る前に切り上げた方がよさそうだ。

「それよりも、生徒会長は何をしているのですか？」

「えっ、僕？」

と、自分を指さす生徒会長。

「僕は明日の準備だよ。コースの最終確認に、誘導員の配置もしな

くちやいけないし」

「大変ですね」

「そうなんだよ。副会長はムチャクチャ言っし、委員会は目の色が変わって怖いし……なんでこんな事になってるのかなあ」

まるで定年間際のサラリーマンみたいな風格漂う生徒会長は、心底疲れた感じのため息を吐いていた。

副生徒会長がとんでない事を言い出すのはいつもの事であり、各委員会が鼻息荒いのは来年度予算を少しでも上げてもらつと、主に二年が頑張っているのだらう。

「それで、こんなところで油を売っていていいんですか？」

「……あつ！」

一瞬、間抜けな顔をして口を半開きにした生徒会長の顔が見る間に青ざめ

「うわあつ、皆を待たせてるんだつた！　へぎやつ」

慌てて駆け出そうとして躓いて転んでいた。

「大丈夫ですか？」

「だ……大丈夫、だよ」

ヨロヨロと立ち上がった生徒会長は制服に付いた埃やら汚れを落とし、「それじゃ」と走って行ってしまった。

その颯爽とは言えない走りを見ながら本当に運動が苦手なんだと実感していると

「元気だね、生徒会長」

いきなり背後から聞こえた声に振り返ると、呆れた顔をしているコハルが立っていた。

「心臓に悪いヤツだな」

「失礼ね。それより、東山先輩は？」

「先に部室に帰ったよ」

「……一人で大丈夫かな」

心配そうに俺を見上げるコハルの瞳が訴えかけ来るので、俺はポ

ケットに手を入れて携帯を取り出そうとした。

が、その動きに反応するように階段の上から誰かが走り去る音が聞こえ

「っ」

急いで階段を半分ほど上ったところで、そのうしろ姿だけが確認できた。

「どうしたのっ、トモ兄ちゃん」

俺の異変に慌てて駆け寄ってきたコハルが同じように見上げているが、その目には何も映っていないだろう。

……男子だったな。

一瞬だったのでハッキリとした事は断言出来ないが、男子生徒だと言っるのは制服で分かった。

「今、そこに誰かいたのだが……」

「別に誰がいたって不思議はないと思うけど」

それを言っではお終いな気がするぞ、コハル。

確かに放課後で生徒の数は少なくなっているが、今日は明日行なわれる『救済』の準備で普段よりも残っている生徒が多い。だからと言って何かがあるわけではないのだが、明らかに不自然な逃げ方をしたのが気になっているのだ。

まるで俺達を監視していたような。

頭を過ぎる不吉な考えを振り払っても、振り払っても、何故かすぐに浮かんでくる。何度も浮かんでくるソレを振り払ってポケットから携帯を取り出して電話を掛けた。

「コハル、俺は部室に戻るから部長達を頼んだ」

「え？　ちょ　トモ兄ちゃんっ」

コハルが何かを叫んでいるが今は無視だ。

俺は階段を駆け上がって渡り廊下を走り抜け、電話の相手と話をしながら、第二校舎を抜けていた。

第三校舎に入って階段を駆け上り、目指す場所は電腦革命クラブの部室。

三階から四階へと上がり、そのままの勢いで部室へ向かって走り、扉に手を掛けて開けた。

が

「どうしたさね？ トモキン」

俺の顔を見て不思議そうな顔をしているママツキーさんがいた。部室の中も、ママツキーさんも、特に変わった様子がなく、これでは息が荒く乱れている俺の方が一大事のようなのだ。

「……いえ、ちょっとランニングを」

「明日のマラソンでもするさね？ この暑いのにトモキンは変わってるねえ」

変人のあなたに言われたくないと思ったが、俺もなんでガラにもない事をしているのだらうと苦笑してしまった。

普段なら面倒事には関わらないようにしているのに、今は自分から面倒事に突っ込んで行っている気がする。先ほどママツキーさんの話を聞いたばかりだったから、余計に神経が過敏になっていたのかも知れない。

……はあ、どうかしてるよ。

自嘲気味な笑いが勝手に浮かんできて俺は扉に寄り掛かって息を整えていた。

「伏峰のお兄様っ」

と、そこへ猛突進してくる熊がいた。

ジャングルを駆け回るゴリラの如く、こちらへ向かって来る姿は野獣であるが

「伏峰の はぎゃっ」

止まりきれずに俺の前を通り過ぎ、壁に衝突していた。

漫画に出てくるように一旦、壁に張り付いて倒れていた中川先輩は馬鹿極まりといった感じだったが、すぐに起き上がって頭を振って部室の中を覗き、安堵した顔をしていた。

「どうやら、何もなかったようだな」

「そうですね。思い過ごしだったみたいです」

俺達の会話に「何の事さね？」と首を傾げるママツキーさんに「何でもありませんよ」というと、興味なさそうに部室の中へと戻っていた。

しかし、中川先輩は咳払いを一つして”付いて来い”と目配せをしてきたので、不思議に思いながら付いて行くと階段の手前まで連れて来られてしまった。

「どうしたんですか？」

「ここで、松本が部室の様子を窺っていたんだ」

中川先輩が口にした名前に背中を汗が伝っていた。

「松本って……」

「松本は機械工学　あつ、今は佐々木研究所の所長をしているヤツだ」

「……マツクルさんですか」

苦笑いして「多分、それだ」と言っている中川先輩だったが、表情は明らかに複雑だった。

「松本はクラスメイトだから見間違える事はないが……あんな顔をしているのは始めて見たな」

「……あんな顔？」

「まるで鬼、だな。普段は温厚で人当たりもいいヤツだから友達も結構いるが、あんなに感情を剥き出しにした顔を見たのは始めたかも知れん。それに俺に気付いて逃げてしまったが、あれは明らかにここに用事があったのだろう」

と、電腦革命クラブの部室を指さしていた。

何故、マツクルさんがここに用があるのかは分からないが、不安を拭い去るだけの根拠が俺にはなかった。それよりもますます不安が募ってしまい、正直なところ頭が変になりそうだった。

第三五話：決行前夜？

部室に中川先輩を残し、俺は保健室へと帰って来た。

俺の取り越し苦労かも知れないが、もしママツキーさんが一人のところにもマツクルさんがやって来たら危ないだろう。どちらかと言えばマツクルさんの方が危険かも知れないが、ママツキーさんは一応は女の子なので用心に越した事はないと思い、駄々を捏ねる中川先輩をコハルプロマイドで買収した。

無論、今回もあげるつもりはないですが……。

それと、ママツキーさんには『ある事』を確認をしたが、「それは問題ないさね」と言う返答をもらっていた。

で、現在は保健室で作戦会議中。

ベットの上にあぐらをかく和音さんは不機嫌な顔で目の前に立つ人物を威嚇し、ベット脇にある椅子に座る律子ちゃん是完全に怯えて震えていた。同じく、律子ちゃんの隣に座るコハルは少々怯えた顔に、ベットに腰を下ろす部長も呆れ顔だった。

「それで、なんで華子がいるんだよ？」

「なんでって、大変な事になったと中川から電話をもらったから来たのですっ」

腰に手を当てて不満爆発といった顔で和音さんを睨み返す副生徒会長を、更に睨み返す和音さん。

ハブとマンガースみたいだが、この先の展開など目に見えているので今日のところは勘弁してもらう。そんな時間もないし、色々大変な事態になっているのは誰にも分かっているだろうから。

「で、明日の準備は出来たの？」

「ええ、それなりには進んでいますわ。生徒会長が言い出した事ですから、我々生徒会と委員会は従うだけです」

不満だと言わんばかりの顔で腕組みをしていく副生徒会長は舌打

ちをしていたが、準備をするにしても時間がないのは分かりきっている事である。

だが、いきなり決まった救済措置に動揺を隠せないのは先生も同じはずだ。

「それでマラソンを行なうのは放課後ですよね？」

「ええ、そうですね。午後二時スタートで、ここから十キロ先にある隣の役場前で折り返すハーフマラソンです」

「先生達は何人ほど引率しますか？」

「……ちよつと待ってください、な」

俺の質問に少し考えような仕草をし、制服のスカートに手を入れて折り畳んだ紙を取り出して目を通していき

「部活の顧問をしている先生以外は全員参加が決定しているみたいですわ」

と、教えてくれた。

「つまりは、職員室の警戒が手薄になるって事ですな」

「そういう事ね……って、伏峰！ あなた、もしかしてっ」

「ええ、こちらにしてはまたとないチャンスだと思いますが」

俺の言わんとする事が分かったのか、目を丸くしている副生徒会長。

「そうだな。智樹の言う通り、職員室に入る絶好のチャンスだろう」
和音さんは賛同してくれたようで、それに部長も頷いていた。

「今の学園は急遽決まった『救済』のために慌しいので、職員室への潜入も楽でしょう」

「しかし、どうやって入るつもりだよ？」

和音さんのご意見はごもっともであるが、そこにはぬかりはない。
「それは大丈夫ですよ。この前、ママツキーさんの発明品で遊んだばかりではないですか」

「………発明品って」

誰もが考えるように首を傾げ、顔を見合わせている。

……おいおい。

つい最近の事を集団で忘れるとは大丈夫か、この人達は。

しかも、コハルまで思い当たる節がないとばかりに考え込んでいるし、和音さんは唸って野獣が目覚めそうで、その声に怯えて律子ちゃんは半泣き。

だが、部長は思い出したのか、手を叩いて

「ああっ、かくれんぼのときに使ったアレだねっ」

俺を指さして笑みを浮かべていた。

人を指さすのは関心しませんよと思いつつ、頷く俺に皆も「ああっ」と声を上げて納得していた。

「でも、アレってまきちゃんが改造してるんじゃないかった？」

「もう終わつたらしいですよ。ただし、二着だけらしいですけど」

部長は「そっか」と頷いてベットから立ち上がってこちらへと歩いてきた。

その顔は何を言いたいのかはすぐに分かり、俺は小さく頷いて和音さん達を見渡し

「職員室に入るのは俺と部長の二人で行きます。和音さんは外でサポートをお願いします」

有無を言わせないように、少し語気を強めて言い切った。

「ちよっ それは」

「駄目だよ、かずちゃん。こう言うのは男の仕事って昔から決まってるんだからさ」

これくらい強めに言わないと和音さんから文句が出るのが分かっていたが、ベットから勢いよく下りて近づいて来て案の定口を挟んできた。しかし、それに負けなくらいの勢いで言い返した部長に少しだけ男の強さとかっこよさを感じていた。

本当に少しだけ、であるが。

「ふんっ……どうせ、失敗するだろ」

「翔様は失敗なんてしませんわっ」

「あんたには聞いてないわよ、黙ってる」

ビクツと身体を震わせた副生徒会長を一瞥し、和音さんは部長の

顔を真っ直ぐに見つめていた。

その瞳にどんな思いが巡るのかは計り知れないが、その胸の内に広がるのは葵さんへの、友達への、思いなのだろう。

「大丈夫だって。僕はやるときはやる男だから」

「その言葉……信じていいのか？」

「うん。信じてくれなきゃ始まらないよ」

互いの瞳が真っ直ぐに交差にして思いを伝え合っが如く、そっと手を取って顔を近づけていたが

「あの……ラブラブなところすいませんが、お子様には刺激が強いののでその辺にしておきませんか」

昼ドラになりそうだったので、とりあえず止めてみた。

「うわっ　離せっ、バカ！」

「はぎゃっ」

右ストレートに左アッパー、ボディブローのコンボで、トドメが金的。

半目で沈んでいく部長が哀れで仕方ないが、真っ赤な顔で息が荒い和音さんも面白い。しかし、今はそんな殺伐とした光景をのんびりと見ている場合でない。

「では、作戦会議と行きましょう」

「それじゃ、部室に戻るか」

颯爽と歩いて行ってしまった和音さんに次いで、律子ちゃんとコハルも保健室を出て行った。

「翔様、大丈夫ですかっ？」

「し、子孫繁栄が……ううっ」

「翔様死なないでっ」

こちらでも昼ドラが始まったが、付き合っのも面倒なので捨てていく事にした。

。 電腦革命クラブ部室

テーブルの上に広げられた一枚の手書きの図面を食い入るように見つめている四つの眼。

「で、ここが教頭の席で……こっちが三年の学年主任、その向かいが生活指導の」

図面を指さして説明する副生徒会長の話を真剣に聞き入っている律子ちゃんは必死にメモを取っていた。

コハルはテーブルを指で突付いているが、これはコハルが何かを覚えるときの癖みたいなものだ。ある意味、コハル式記憶術と言わべきものだろう。

明日、職員室に突入するための予備知識を全員で共有しておこうと言う事で、まずは職員室へほとんど行った事がないだろう律子ちゃんとコハルに職員室の見取り図を描いて説明している最中である。しかし、この話をする前に副生徒会長と中川先輩にはあのビデオを見てもらったのだが、やはりと言うか、言葉をなくして呆然としていた。

その後、今のように普通に話をしている副生徒会長だが、動揺している様子が微塵も感じられない。もう一人いたが、あちらは身体に似合わずダメージが大きかったようで椅子に座って呆然としていた。

「海藤」

「ちょ 危ないって、かずちゃん」

「うるさいっ。こっちは遊びじゃないんだよ」

で、真面目なあちらに対して、こちらのテーブル下では。床に腰を下ろしている部長と、立膝をせずと見えている（何がと言いません）和音さんが喧嘩腰で言い合っているがその度にものが飛び交って危ない状況になっている。

しかも、声ができる度に副生徒会長の顔が百面相の如く変化していくので楽しく仕方がないのだが、そんな悠著な状況ではないのでそろ

そろ止めるべきだろう。

ここで余計な喧嘩を始められても面倒なだけ。
それ以上に、あんなものを明日使われたら被害が尋常ではないだろう。

「ママッキーさん、それは使わないでください。また校舎を壊すつもりですか」

「何を言っているさね。これは威嚇用だから………被害はないさあ」

なんですか、今のたつぷりとした間は。

今、部長と和音さんの手には以前校舎を半壊させた赤色時雨と蒼あかいろしぐれ槍五月雨の二つが置かれ、部長の頭に蒼槍五月雨を突きつけている和音さんの顔は悪魔そのものである。

しかし、この二つは調整中で使えないと言っていたはずだが？
そう思っていたら

「こつちが明日使う『黄色炸裂線香弾』だよ。ほいつ」
おうしょくさくれつせんこうだん

ママッキーさんは何やら束になった細長い紐状のものを俺に投げ
てきた。

火薬が纏まっている部分は黄色と黒の虎模様になっており、持ち
手の部分は黄色で先端は指が一本入るくらいの輪が付いている。

また、おかしなものを作ったものだね……ママッキーさんは。

「これは……？」

「点火後一〇秒で黄色の閃光が辺り一面に炸裂して綺麗な線香花火
さね」

「色々という意味が違いますよね、それ」

『閃光』と『線香』が掛かっているのだろうけど、かなり危険な
物体を作ったものだ。

俺の手には約三〇本くらいの線香花火が握られているが、明日こ
れがどういう経緯を辿るのか容易に想像出来る自分が嫌だった。

「東山、とりあえずそれは使わない方向で行ってくれないか？俺
にも風紀委員長としての立場があるからな」

「覚えていたら、ね。それより、タツクマンって立場なんてあったの？」

痛いところを刃物の先で抉るように突くね、ママツキーさんも。胸を押さえて「ぐっ」と唸っている中川先輩がかわいそうなんて思いもしないけど、そろそろ話を進めないと明日になってしまいそうなのがした。

「では、本格的に作戦会議を始めましょうか」

その言葉を待ってましたとばかりに、全員俺の方を向いて頷いていた。

静かに始まった作戦会議。

作戦は至ってシンプルなものだ。

「つまり、囷が残っている先生をおびき出して、その隙に中に入るって事か？」

「そうです。まずは中に残っている先生達には消えてもらわないと話が進みませんからね」

「で、そのあとはどうするんだ？」

「そのあとは、入り口に立っている先生に用事を言いつけて開けてもらいます。その隙に俺と部長が中に潜入するという簡単なものです」

和音さんは俺の話聞きながら考え込み、部長と中川先輩も同じように思案顔だった。

「しかし、余程の用事がないと中には入れないぞ？俺とハニーが入れなかったのだからな」

「ハニー言うな！」

「そう照れなくてもいいじゃないか、はははっ」

「照れてないわよっ」

奇声を発しながらコハルは中川先輩を睨んでいたが、それを嬉しそうに微笑み返している中川先輩が気持ち悪い事この上ない。

「でも、たくちゃんの言う通りだよ。余程の用事がないと今の職員

室には入れないと思うけど」

「それなら大丈夫ですよ。和音さんに余程の用事を作ってもらいますから」

部長は「へ？」と和音さんの方を向き、和音さんは「はっ？」と俺の方を向いていた。

「和音さん、大学入試しましょう」

「……はい？」

「それも、国立大の一番難しいところを受験するのです」

「いや、意味が分からん。なんで私が大学受験しなくていけないんだ？」

目が点になっている和音さんは俺の言っている意味が分からないようなので、とりあえず詳しく説明する事にした。

「仮の話ですよ。適当な嘘を吐いて大学受験をするので模試の問題集や対策を教えてくださいと、先生に直訴してください。そのときは切実に、尚且つ真実味があるように話をしてください。そうしないと嘘だとばれて作戦は失敗に終わりますから」

「い、いや……言っている意味は分かってきたが、なんで私なんだよ」

「部長は潜入要員、中川先輩は他の役目があります。副生徒会長は……申し訳ありませんが、真実味がないので適任ではありません」
皆の視線が副生徒会長に向き、「な、なんですのっ」と動揺している副生徒会長に

「まあ、華子は馬鹿だしな」

大きく頷いている和音さんがトドメをさしていた。

「誰が馬鹿ですかっ」

「馬鹿だから、馬鹿と言ったまでだ。それよりも、他の内容だといけないのか？」

鼻息荒い副生徒会長が和音さんに食って掛かっているが、まったく相手にしてない和音さんは渋い顔をしていた。

「別に何でもいいですが、これは職員室の入り口にあるカードセキ

ユリティを開けてもらうのが一番の目的なのです。入り口で済んでしまう用件では意味がないのですよ」

「確かにそうだな。そうになると、今のが一番いいのか？ でも、私が受験って……似合わないなあ」

腕組みをして考え込んでしまった和音さんはとりあえずおいといで、俺は職員室の図面を手繰り寄せた。

「部長、俺達には中に入ってから探すものがあります」

「探すもの……って、何を探すの？」

「あのビデオに映っていた先生の秘密です」

誰が飲んだ息か知らないが、俺の耳に届いてきた。

部長と和音さん、中川先輩に副生徒会長も驚きで目を丸くしていた。俺がしようとしている事がどんな事なのか分かっているからだろう。

「でも、秘密って何があるって言うんだよ」

「和音さんは先生が辞めた理由が知っていますか？」

「……辞めた、理由？」

誰もが口を閉ざした。

その理由を知らないからだろう。その理由を知っていれば、すぐに答えてくれるだろう。

「そう言えば、あの映像を見て思ったのだけど……」

「どうしたんですか？」

急に口を開き、考えるように顎に手を当てて皆の注目を浴びている副生徒会長が

「あの乗用車に乗っていた男性に見覚えがあるのです」

とんでもない事を言い出していた。

「見覚えがあるって、どこだよ？」

「それが分かればこんなに考えてませんわよ、乳デカ女っ」

「だから胸が大きいのも色々大変なんだよ。って、話が逸れてるだろ」

何故、この二人は普通に会話が出来ないのかと思いつつ、副生徒

会長が思い出すのを待っていた。しかし、今すぐにも思い出すような雰囲気ではなく、時間だけが無駄に経過すると思い、話を進める事にした。

「副生徒会長は頑張っと思って思い出してください。それで、話を戻しますが 職員室に隠しているものが何かは分かりません。しかし、先生が辞めたあとに残っている先生に的を絞れば、可能性があると思うのです」

「智樹にしては、随分とアバウトだな」

「仕方ないですよ。まだ分からない事が多くて断定する確たる証拠がないのが現状です。しかし、このチャンスを逃すと職員室に入れないまま、夏休みになってしまう可能性が大きいのです」

「そうだな。確かにこのままじゃ、夏休みになってしまう」

和音さんは渋々と言った顔で頷き、部長は「そうだね」と小さく呟いていた。

「で、智樹はどうするつもりだ？」

「先ほども言いましたが証拠がないので確実性はありませんが、教頭と学年主任、あとは学園長室を調べてみようと思っています」

「……なるほど。だが、あくまで賭けだな」

一人唸る和音さんは眉が寄って怖い顔になっているが、これがデフォルトにならないようにして欲しいものだ。

その後、俺達は作戦会議を続け、明日の大一番に望む事になった。

第三六話：救済開始

廃部勧告『救済』、当日。

授業は平穩無事に終わり、時刻は一時を廻っていた。

「あと、一時間……か」

和音さんの呟きに皆が反応して顔を見合わせていた。

現在、俺達は部室にて作戦の最終確認をしているところで、テールの上には作戦で使うものが散乱していた。

「ママツキーさん」

「何さね、トモキン」

「なんで増えているんですか？」

俺はテールの上を指さして聞くと

「増えてないさね。これは『桃色娘々樂園』と『金剛爆走車』と言
う新アイテムなんだぴょん」

何故かママツキーさんは説明を始めていた。

ピンク色をした丸い物体『桃色娘々樂園』は幻覚作用がある不思議なキノコから抽出したエキスを含んだもので、裸の女性が見える男性限定アイテムで、輝き眩しい車体に物騒なミサイルランチャーを搭載したラジコン『金剛爆走車』は時速一〇キロで走り、動く標的を自動で捕捉してミサイルを打つ代物で、どちらも物騒さで言えば一二〇パーセントだった。

「その二つは出番がないと思うので撤収してください」

「人生何が起こるか分からないから人生なんだよ、トモキン」

言っている意味が分かりませんし、やけに大きな括りで話を纏めて進めないで欲しいものだ。

「部長、そちらはどうですか？」

「と、ともちゃーんっ」

「……………何してるんですか？」

ママツキーさんを呆れながら宥め、何とか新作二つを使わないと

約束させた。聞けば造ったばかりでぶつつけ本番と笑顔で言われたら誰だって止めるだろう。

俺達に被害が出てもたまったものではない。

で、こんな事で大丈夫かと頭を押さえつつ振り返った先に顔だけ宙に浮いた部長がいた。

「不気味ですね、それ」

「助けてよ、ともちゃんっ」

泣きそうな部長の顔から生えた紐が二本。

本当に生えているわけではなく、ちょうどパーカーのフードに付いている紐みたいなものなのだが、その紐と顔だけが浮いている姿は不気味以外に表現のしようがない。

「何故ですか？」

「何故って……そ、そんな事を言っただけで、ともちゃあ、いやっ、かずちゃんやめてっ」

が、俺がちよつと考え事をしている間に和音さんは躊躇いもなく楽しそうな笑顔と共に紐を引いていた。

するとあら不思議。部長の顔は見事に消えてなくなりました。

「ふぐっ、く……苦しいよ、かずちゃ」

「まだ一分も立ってないぞ。耐えなければ透明人間になれないぞっ」
透明人間になる前にあの世に旅立ちそうですけど。

「和音さん、遊ばないでくださいよ。それ、充電が一時間しか持たないですから」

「心配しなくても充電中だよ。一応は試しておかないと、使えなかったらまずいだろ」

和音さんの言っている事には一理あるが、誰もいないところから呻き声だけが聞こえると言うのは怖いだけである。

部長が着ているのは改良が済んだ『スガタミエナクール』で、見た目がかなり危険事物に変身出来るスグレモノになっていた。

……出来れば着たくない。

それが正直な俺の感想だ。前回まではなかった紐付きのフードと

袖から一体型になった手袋に、特殊ブーツで足音も完全にシャットアウト出来るコートは呼べなくなった代物。しかし、以前のように『ササキンデラックス』と接続して大掛かりな装置の中でしか動けないものではなく、単独で起動する事に成功したからこそ、今回の作戦には必要不可欠な存在となっている。と言うか、これがないと職員室には入る事すら出来ない。

だが、それでも欠点はある。

以前のものは『ササキンデラックス』から電源供給されていたので基本的には無制限に動けたが、今回は単独起動のために充電電池を使用している。しかし、長時間起動をしようとするとうと充電電池だけでは重さが一〇キロ以上になってしまい、機動性が確保出来ない。そこで仕方なく最低限の電源供給と機動性を重視した結果が、一時間と言う時間制限付きになってしまったわけだ。

「問題ないさね。フル充電して何度もテストしてるから、万全の状態なのさ」

「はいはい。分かりましたら、その二つをしまってくださいよ」

「むっ……仕方ないさね。この威力を知らしめて進ぜよう」

未だに先ほどのピンク色の丸い物体を持っているママツキーさんは、不満そうな瞳を向けて部屋を出て行った。

その様子に一抹の不安を覚えたが

「ねえ、トモ兄ちゃん」

こちらにも面倒の種が芽を出そうとしていた。

「なんで、私が熊と一緒になのよっ」

「この中で適任だと思ったからだ。頑張れ、コハル」

とりあえず、面倒の芽は除草剤をかけて枯らそうと、軽く笑みを浮かべてコハルをおだてていく。しかし、利いたのは最初だけで、すぐに鋭い目を向けて俺を睨んでいた。

さすがに付き合いが長いだけあって、下手な小細工は通用しないか。

「この作戦は皆で協力しないと成功しないのだ。わがままを言うも

のじゃないよ」

「ぐっ……トモ兄ちゃんがそう言うなら分かったよ、もっつ」

これまたビックリだ。

思いの他、正攻法が効き目があると始めて知った。まあ、コハル相手に正攻法が通用しないと思ってあまり使った事がなかったのがよかつたのかも知れない。

と、こんな事を考えている間にも時間は過ぎていくだけで、もっ
たいない。

「それでは各自、自分の持ち物を確認して準備をしてください」

俺の声を聞くまでもなく、皆は各自で準備を始めていたので俺も
あのコートを手にとって試着していた。

が、一人だけどうしていいのか分からない様子でオロオロと辺り
を見渡して今にも泣きそうな顔をしていた。

「律子ちゃんはこのうち来て」

「は、はいっ」

いきなり名前を呼ばれて驚いている律子ちゃんが小走りに駆け寄
ってくるが、そのうしろ姿に鋭い視線を向けて威嚇しているコハル
を宥めようとして、思いつきり顔を殴られている中川先輩の悲鳴
が聞こえていた。

律子ちゃんを一人部室に残すのは危険なので、ママツキーさんと
一緒に行動してもらった方が安全だろうと思ったが、今のママツキ
ーさんに預けるのは危険かも知れないと思いつつ、これも運命と諦
めた。

「な、何ですか？」

「これが校舎の見取り図で、こっちがトランシーバー。この二つを
渡しておくから、律子ちゃんはママツキーさんと一緒に行動して、
皆の状況確認をお願いするね」

「はいっ、頑張ります！」

気合の入った声で綺麗な敬礼をしている律子ちゃんは、回れ右を
して歩き出そうとして

「へぎよっ」

奇妙な声を上げて転んでいた。

……これでこそ、律子ちゃんだ。

見事に丸見えになった真つ白なパンツが何とも眩しいが、隣で鼻息荒い人がいるので目潰しは忘れない。

さすがに指先でするのは眼球を傷つける恐れがあるので、指を曲げて中指と人差し指の第二関節で交互に眼球を圧迫していく。

まあ、目潰しと言う名のマッサージではあるが、あまり力を入れすぎると眼球を痛めて網膜はく離の原因にもなると、テレビでやって見たのを見た事がある。

「と、ともちゃん……目が、目がっ」

「よそ見しないでしょっかりと準備してください。俺と部長が失敗したら、終わりなんですから」

「そ……それなら、目潰しは止めて」

「ごもつともなご意見であるが、部長のエロ顔について反応してしまう身体に言ってください。」

「よし、こっちは準備完了だぞ」

「……和音さんは武装しないでくださいよ」

斜め掛けにした蒼槍五月雨を背中を持ち、手には赤色時雨を持つてやる気満々。

昨日、包帯を外してみても傷も目立たないようになっていたらしく、今日は朝から妙に絶好調な和音さんを止めるのは中々骨が折れる仕事だった。そして、頻りに腕を擦っては「ふふっ」と不気味な笑みを浮かべ、まるでフリアットをするように素振りをするのは女の子がする事ではないので止めてください。

怖いです、不気味です、よい子が失神します。

「何でだよ？ 私だってやるからな」

「和音さんは職員室に何をしに行くつもりですか？」

「……討ち入り」

「違います」

この人は昨日の話をすっかりと聞いていたのか、今更説明する時間もないので心配になってきた。

「馬鹿な事やってないで真面目になさい、乳デカ女」

「うるさいよ、アホ。大体、華子は生徒会の方はいいいのか？」

「アホって言わないでよ！ 向こうは生徒会長に任せているから問題」

和音さんに食って掛かろうと副生徒会長が一步踏み出そうとしたところで、軽快な音楽が鳴り始めた。

「誰ですの、このくそ忙しいときに はい、もしもーしっ」

お嬢様らしからぬ言葉遣いでスカートから携帯を取り出した副生徒会長は、何故か腰に手を当てて胸を逸らして偉そうに電話に出ていた。

が、次第に眉間にシワが寄っていき、拳を握って震え始めていた。「生徒会長がいなくてどう言う事よ！ ちよつと聞いてんのっ？ ええ、こらっ」

電話の相手は誰だか知らないがあまりにも理不尽な言い掛かりをつけられているので、かわいそうで涙が出そうになってきた。

しかし、生徒会長……とうとう、逃げ出したのか。

そんな事を思いながら電話を切った副生徒会長を見ると、何も喋らずに部室を飛び出していった。

「騒々しいヤツだな、まったく」

「和音さんはいいい加減、武装解除してください」

横で未だに武装したままの和音さんは「ちえっ」と拗ねたように置いていたが、そこにママッキーさんが帰って来た。

それと同時に両隣の部室から男子生徒の「裸の女子じゃあっ」やら「お姉さーんっ」などの雄叫びと、女子の悲鳴と罵声が聞こえていた。まさかとは思ったが、ママッキーさんが口角を上げて笑みをこぼしてピースをしているのを見て、何をして来たのかは容易に察しがついた。

「それでは、そろそろ行きますか」

「うん。じゃあ、気合を入れるために円陣を　　って、無視しないでよ！」

一人、気合を入れて両手を広げた部長の前を皆は素通りしていた。コハルにお尻を蹴られながら嬉しそうな顔をした中川先輩に、「気持ち悪い」と更に蹴りを入れていくコハルが部室を出て行き、そのあとをノートパソコン片手に歩いていくママツキーさんとトランシーバーと見取り図を大事そうに抱えた律子ちゃんが敬礼をして出て行った。

「アホな事やってないで行くぞ。それに、十分に気合は入ってたよ」

そして、最後に出て行こうとしていた和音さんが振り返り、呆れた表情からふっと笑みをこぼして親指を立てて歩いて行ってしまった。

第一校舎一階廊下、東側階段下　　。

職員室が見える角に陣取り、ノートパソコンを弄っているママツキーさんが小声で何やら呟き、律子ちゃんは緊張した面持ちでトランシーバーを握りしめていた。

「そろそろ、始まるさね」

「ええ……そうですね」

部室にいたときは聞こえなかったが、第一校舎前には体操服に着替えた数多くの生徒がおり、喧騒が辺りを包んで静かとは言えない空間になっていた。

窓を開けているのでその喧騒は直接届いているが、暑いのに頑張るものだと関心する反面、俺達もよくやるよと泣きそうになっつまう。

「二時になったさね」

ママツキーさんの声と乾いた破裂音が重なり、地響きと共に大群

が動き出していた。しかし、走ると言うより歩いていると言った方がいい集団がゆっくりとした速度で校門の方へと向かっていき、最後尾は未だに動く事も出来ずにぼんやりと立っていた。

「……さて、タックマンの出番さね」

「スタートから五分後ですよ。それから更に五分後に和音さんが動きますから」

「分かってるさね。それより、和音ママとショウポンはどこ？」

今、この場にいるのは俺とママツキーさんと律子ちゃんだけである。

「和音さんと部長は反対側にいますよ。部長は和音さんのうしろを付いて近づく予定ですからね」

「あつ、そっか。で、トモキンは一人寂しく突入？」

「俺は一人の方が動きやすいだけです」

寂しく突入するわけではないが、そんな事を言われると何だか寂しくなってきたてしまうではないか。

「さて、皆の状況を確認しておきますか。律子ちゃん、ちょっと貸して」

「あ、はい」

律子ちゃんからトランシーバーを受け取り

「こちら、伏峰。各自、準備はよろしいですか？」

状況確認をした。

このトランシーバーは双方向多チャンネル同時通話が可能なママツキーさんの発明品でもある。簡単に言えば、同時に複数の人と同一周波数に設定されている半径一キロ以内にあるトランシーバー同士で会話可能な代物だと言う事だ。

『こちら、中川。所定の位置で待機中……いつでも、出撃出来るぞ』ノイズの向こうに聞こえてきたのは中川先輩の声だった。

うるさそうにコハルの声も聞こえているが、今は相手をしている時間がないので無視しよう。

「熊さん、了解。和音さんはどうですか？」

『ああ、桜井。こつちも問題ないや、ちよつと待てっ』
「何かあったのですか？」

同じようにノイズの向こうに聞こえた和音さんの声だったが、何かあったのか途切れてしまった。

「まづいさね、トモキン」

不意に消えた和音さんの声に不安を覚えていると、下から少し焦ったようなママツキーさんの声が聞こえてきた。

「どうしたんですか？」

ブラチナウルフ
「白銀狼隊が現れ　おつ……最新鋭の無線機を持ってるさね。欲しいなあ、欲しいなあ」

さすがにそれは予定外だった。

廊下の角から少し顔を出しているママツキーさんに次いで俺も様子を窺って見ると、永山先輩を筆頭に職員室の前に整列している白銀狼隊の姿があった。

確かに白銀狼隊全員が手に小型のトランシーバーみたいなものを持ってているが、俺達が持っているトランシーバーとの違いが分からない。と言うか、ママツキーさんの目がおもちゃを前にした子供のようになっているので、どなたか止め方を教えてください。

「こちら、伏峰。中川先輩、白銀狼隊がどうして動いているんですか？」

『ちよ、ちよつと待て！　そ、そそそ、それは俺も知らないぞっ』
本当に知らない様子の中川先輩は、かなり動揺した声でドモつていた。

しかし、この状況は非常にまづい。

『そう言えば、永山が白銀狼隊と何かやっていると思ったが……まさか、こんな事をやっていたとは』

「驚いている場合ではありませんよ。とりあえず、一旦退却しましょう」

中川先輩は一人呟いているが、本当に何も知らなかったようだ。しかし、この人は本当に風紀委員長なのか？　かなり立場が危な

いのではないかと思ってしまう状況ではあるが、そんな心配をしている暇はないか。

『こちら、桜井。智樹、別にこっちの動きがバレたわけじゃないから問題ないだろ』

先ほどいきなり途切れてしまった和音さんが、これまたいきなり会話に参加してきた。

「そうですが、こんなところを見つかったら怪しまれて危険ですよ」
『危険とか言っていたら何も出来ないだろ。もう、チャンスは今日しかないんだから、覚悟を決めろっ』

力強い和音さんの声がトランシーバーから聞こえ、思わず押さえ、職員室の方を窺った。

どうやら気づいていないようだが、和音さんの言う事も分かっているつもりだ。このチャンスを逃せば夏休みになるのは分かっている。

「分かりました。では、白銀狼隊がいなくなったら作戦を開始します」

『桜井、了解。それでこそ智樹だ』

和音さんは小さく笑いながら

『中川、了解。お兄さん、かつこいいぞ』

気持ち悪い声を出す中川先輩が続いていた。

「でも、和音さんは一旦ここから離れてください。中川先輩はそこで待機してください。どちらも見つかったら色々面倒ですから、早急をお願いします」

トランシーバーから『了解』と二人の声が聞こえ、俺達も一旦この場から離れる事にした。

二時二三分。

教室の壁に掛けられた時計の長針と短針が抜きつ抜かれつの戦いを繰り返している横を何食わぬ顔で通り過ぎていく秒針は決まった

歩調で進んでいく。

などと時計を見ながら変な事を考えていると制服を引く感覚に下を向くと、ママツキーさんがズボンを掴んでいた。

「おっ……来たさね」

廊下を歩いてくる白銀狼隊が一つ一つ教室の中を覗いては異常がないか点検しているようだった。

「だ、大丈夫でしょうか？」

「大丈夫だよ。律子ちゃんと言われた通りにしてくれたらいいからね」

心配そうな顔を俺に向ける律子ちゃんの肩に手をおいて笑みを浮かべると、真つ赤な顔をして俯いてしまった。ちよつと遊びたい気持ち湧き上がってきたが、ここは我慢して任務を遂行しよう。

今、俺達がいるのは第一校舎三階にある一年生の教室である。実際の律子ちゃんの教室とは違うが、とりあえず一番動きやすい場所の教室を選んだ結果、東側の一番端にある教室になったわけだ。

「それでは、所定の位置について」

俺の声にママツキーさんと律子ちゃんは頷いて散っていく。

「何をしている、お前達」

そこへ威嚇するような声で入って来たのは白銀狼隊だった。

入って来たのは俺の中で出来れば相手をしたくない人ナンバーワンである、風紀委員会副委員長の永山先輩とお供の三人。廊下にはもう少しいたはずだが、どうやら分担して校内の見回りをしてるようだ。和音さんや中川先輩は大丈夫だろうか思いつつ、この場を切り抜けるためにママツキーさんと律子ちゃんに手で合図を送った。

「何と言われましても、彼女の忘れ物を取りに来ただけですよ」

「忘れ物？」

俺は律子ちゃんの肩に手を置き、永山先輩は鋭い視線を律子ちゃんに向けていた。

「は、はい……え、えっと、教科書を忘れたので、その」

「部活の後輩なのですが、一緒に帰る途中で思い出しので付いて来たのです」

どもりながら話し出した律子ちゃんに助け舟を出したのだが、怪しく俺達を見る永山先輩の視線はきつかった。

「まあ、それはいいから早く帰りなさい」

「はい、分かりました。先輩達は何をしているのですか？」

「見て分からないか？ 我々は校内の見回りだ……こういうときには、必ず不届き者が現れて学園の風紀を乱すからな」

「そうですか。では、頑張ってください」

眼鏡を指で上げつつ、俺達を一瞥して教室を出て行った永山先輩達を見送り、ママツキーさんの方を振り返った。

「こっちは大丈夫。タックマンは第二校舎の四階で待機中……和音ママは第一校舎の二階で狼ちゃんをやり過ごしたところだって」

「そうですか。では、こちらも行きますか」

「不届き者って私達の事かね？ ふふっ……すでに見逃してるさねえ」

「まあ、そうですね。でも、用心しないと何が起こるか分かりませんよ」

窓に身体を預けていたママツキーさんは「分かってるさね」と呑気に返答し、俺は教卓の中に隠してあったコートを取り出した。

「律子ちゃん、そっちは大丈夫？」

「ちよっと待つてください……えっと」

律子ちゃんは腰を屈めて教室の扉から廊下の様子を窺い、「大丈夫です」と出て行った。

「ママツキーさん、行きますよ」

「トモキン、念のためにコレを持っていくさね」

こちらに歩いてくるママツキーさんが何かを投げてきたので、反射的に受け取って確認した。すると、それは昨日見せてくれた『黄色炸裂線香弾』の束で、ご丁寧にマツチまで添えられていた。

「……何だか、数が減ってますね」

「それが、朝来たら半分ほど行方不明になってさね。不思議だね、うんうん」

「出来れば嚴重に管理してくださいよ。これ……ある種、危険物としては最高ランクですから」

まったく反省の色がないママツキーさんは「リックー、待ってさあ」と、やる気のない声で教室を出て行ってしまった。

使うかどうかは分からないがママツキーさんのご好意なのでありがたうにいただいております。

……さて、作戦開始だな。

それを知らしめるかの如く、遠くで一際大きな破裂音が響き、それに混ざって怒声と叫び声が窓ガラスを揺らしていた。

第三七話：衝撃の職員室

二時三〇分。

右腕に表示されている時計はデジタル表示で針はないが、正確に一秒ずつを刻んでいる。

『こちら、桜井。今からターゲットに接触する』

『伏峰、了解。頑張ってください』

『私の色気に掛ければ、ちよろいもんだって』

何をする気ですか？ あなたは。

『変な真似はしないでください』

『分かってるって。華子と一緒にするな』

似た者同士のくせによく言う。

『それじゃ、今から行くから智樹も遅れるなよ』

『了解』

それを最後にランシーバーは切れていた。

俺とママツキーさん、律子ちゃんの三人は先ほど同じ、第一校舎一階廊下の東側階段下にいた。少し顔を出して廊下を見ると、向こうから職員室へ歩いてくる和音さんの姿が見えた。一人だけしかないが、メガポのスイッチをオンにして見ると、そのうしろに妖しげな動きをしている男が一人。

……絶対に覗いているな。

どこことはあえて言わないが、あとで和音さんに報告をしておいた方がいいかも知れないと思いつつ、俺はコートの右腕にあるコントロールパネルを操作してフードを被った。

『問題ないですか？』

『バッチリ消えてるから大丈夫さね。さすがは私の発明品と言いたいけど気をつけて、トモキン』

『分かってますよ』

普通に姿が見えていれば不審人物で警察に連行されてもおかしく

ない格好だろうと思いつながら、ママツキーさんが俺の周りを廻って「問題なし」と再度頷いていた。

「ああ、それと 何度も言っているけど、充電は一時間しかもたないから職員室の中にいれるリミットは、逃げる時間も考慮して五〇分。分かった？」

俺は「はい」とママツキーさんに頷き、心配そうに見つめる律子ちゃんの頭を撫でて廊下を歩き出した。

職員室の前に着くと、和音さんが先生と話を最中だった。

二つある出入り口に一人ずつ立っている先生のうち、どう見てもひ弱そうな先生を選んでいる和音さんは、もしかしたら殺^やる気なのではないだろうか、と一瞬考えてしまった。

まあ、さすがにそんな事をするわけもないだろうと見ているが

「先生、大学受験の模試集とか対策あったら教えてくれませんか？」
作戦通りの内容を話している和音さんに先生はちよつと困り顔で唸っていた。

しかし、その視線はやや下を向き、どこを見ているのか一目瞭然。
……どうしようもない先生だな。

そう思いながら和音さんの向こうに立つ部長にジェスチャーで話し掛けると、同じようにジェスチャーで返してきた。

今回はコートが改良された事により、メガポもパワーアップして改良されていた。

それは高性能グラフィックチップと言う、よく分からないものを搭載して通常の視界と熱センサーの映像を同時に表示出来るようになり、前回とは違って切り替えが必要なくなったので随分と楽になった。

それ以外にも骨電動で話が出るマイクセットが内蔵されているので、これで会話も可能だが今回は出番がなさそうである。しかし、それだけ無駄に機能を搭載した結果、メガポとコートの消費電力が

跳ね上がってしまい、一時間のリミットとなってしまったようだ。

「先生、お願いしますよ。私、どうしても大学に行きたいんです」

微妙に艶のある声色で誘惑するような和音さんの仕草に、先生はスケベ面全開。そして、その横にも同じようにスケベ面全開だろう熱源体が中腰で立っていた。

……どっちもどっちだな。

しかし、先生は和音さんの胸に夢中で動く気配はなく、ここで無駄な時間を過ごすとは充電が切れてしまう。

「先生、どうしたんですか？」

和音さんもいつまでも動かない先生に少しイラついたのか、少しでも語気を強くしていた。その様子に先生はワザとらしく咳払いをして、胸ポケットからカードを取り出してうしろを振り向いていた。少ししてピツと言う電子音に続いて職員室のドアが開いて先生が中へと入っていき、和音さんは周りには見えないように手で動かして早く入れとばかりに動かしていた。

「それじゃ、行ってくるよ」

「っ ひゃあっ」

中腰だった熱源体が和音さんの肩を一つ叩いて中へと入っていき、いきなり声を掛けられ、触れた事に驚いて小さく悲鳴をあげた和音さんが般若みたいな顔をして見えない相手を睨んでいた。

あとで部長がどうなるかを想像するとかわいそうで仕方ないが、俺も和音さんに声を掛けて反対側の肩を叩いて職員室の中へと入っていた。

無論、鬼気迫るオーラを背中に感じていたのは言うまでもない。

職員室内。

潜入するのに五分も掛かってしまい、無駄な時間を過ごしたと思っただが、静まり返った職員室の中は異様な感じがだが空調が利いているのでとても快適だった。

職員室に入って行った先生は何やら一冊の本を手にとって出て行き、和音さんと話していたがドアはすぐに閉められてしまった。出入り口は二つ共塞がっているし、中から開ければ怪しまれるが出口は二つだけではない。

広さは教室二つ分くらいの大きさで、向かい合わせに机が一〇ずつ並び、それが合計三列。先生の数全員で六〇人弱いるはずだから机の数も半端ではない。奥には給水室と言うべきか、ソファなどが備え付けられている小さな小部屋があり、いつも先生達はそこで喫煙をしている。今のご時世、喫煙者にはどこの場所も肩身の狭い時代だつて事だろう。

まあ、それはいいとして

「ともちゃん、うまくいったね」

「そうですね。では、早く探しましょう」

俺のすぐ隣で小声で話し掛けてくる部長の姿は熱源体のようになんか見えないので表情は分からない。しかし、嬉しそうであり、真剣な声に俺は頷いて職員室の中を物色し始めた。

現在、残っている先生は表の二人を入れて全員で一〇名ほど。しかし、先ほどの破裂音に残っていた先生達は校舎内を駆け回っているところだろう。

あの爆発は中川先輩とコハルがママツキーさんの作った爆弾もどきを破裂させた音で、校舎には何も被害はない。だが、今の状況であんな音がすれば大騒ぎになるのは分かりきっているし、被害場所が特定出来なければ見つかるまで探すしかない。

では、あの二人はどうするか？

それは爆発騒ぎに乗じて中川先輩は普通に風紀委員達と合流すれば怪しまれず、コハルは関しては少し経ってから中川先輩に『怪しい人を見ました』と申告する役目をお願いしているのだが、遠くで誰かの怒鳴り声と悲鳴、それに混じって妖しげな笑い声まで聞こえてきていた。

……おっ、誰かがやられた。

向こうはかなり賑やかな事をやっているようだが、あまり被害を大きくし過ぎると怪しまれるので程々にして欲しいと思いつつ、少しだけ向こうに参加して俺も騒いでみたい衝動に駆られてしまう。しかし、俺には俺の仕事があるので頑張っていきましょうかね。

ふと静か過ぎるのが気になって部長の姿を探してみると、入り口付近にある学年主任の机を漁っているのが見えた。

しかし、何もないところでものが宙に浮いているのは怪奇現象以外の何ものでもない。さすがのママッキーさんも「手に持ったものまで透明にする事は出来ない」と言っていたので、職員室に残っていた先生達には出て行ってもらう必要があったわけだ。

……それにしても、すごいな。

毎回思うがママッキーさんの発明品はたまにとんでもないものを作り出すので恐ろしい人だと思う。このコートも軍事用開発すればスパイなど簡単に出来るようになるだろうし、あの物騒な武器の数々も然りである。

とりあえず、それは今考えるべきものではないので放置して、探し物に集中しよう。

ふと顔を上げると、何も見つからないのか頭を抱えている熱源体が悶えている姿が目に入ってきたが、それを無視して目の前にある教頭の机を調べる事にした。

本来ならこのような騒ぎがあっても教頭が職員室を離れる事はないだろう。

しかし、今日は以前から決まっていた会合で教頭と学園長は不在あまりに都合のいい展開のように感じ、最初はクロフクが関係しているのかも知れないと思った。仮に書記長名義で偽のメールを送ったのがクロフク達だとしても、日時を決定したのは生徒会長であつてそれは考えられない。

だが、偶然にしては出来すぎているように思え、余計な事まで考

えてしまうのは俺の性分だろう。

などと考察しながら机の上を見たが、教頭はほとんどのものを置かない性格なのか、机はきれいに片付いていた。

左上に数冊の本がブックスタンドに挟まっているくらいで、あとは中央にデスクマットを敷き、その中にプリントやら紙切れが挟まっているだけだった。

……何も無い机だな。

そうは言っても探さない事には進まない。とりあえず、目に付く本を手にとって開いていくが特に変わったものは

「……ん？」

ないと思っていたが、あまりの衝撃的なものに思わず声が出てしまった。

「どうしたの、ともちゃん」

「……驚かせないくださいよ」

いきなり耳元で声が聞こえ、危うく声を出しそうになってしまい、寸前のところで何とか我慢して横を向くと赤く光り熱源体が間近に立っていた。

小声とは言え、声を立てるのは状況的にはまずいわけだが、この人の声からは緊張の欠片も感じられない。寧ろ、この状況を楽しんでいる感じさえするのは気のせいだろうか。

「いえ、これを見てください」

「……………痛いね」

率直なご意見ありがとうございます。

「教頭の秘密を知っても仕方ないのですけどね」

「だね。でも、まさか教頭に女装趣味があったとは……………うつ、気持ち悪い」

部長の言う通り、確かに気持ち悪いと思うが、俺はどう反応したらいいのでしょうか？ 決して同属ではありませんが女装をさせられている身なので親近感は沸きます。

俺が見つけたのは学園の年表を纏めた本の中に挟まっていた一枚の写真。

そこには真つ赤なワンピースを着たおっさんが悩ましげなポーズ（気持ち悪いだけだが）でウインクしている写真だが、その顔は教頭そのまま。化粧をしているが教頭の素顔が勝っているのはある意味、驚嘆に値する。

「部長は何か見つかりましたか？」

「まだ探している途中だよ、じゃあね」

と、離れていく熱源体が手を振っているので無視すると、地団駄を踏んでいるので適当に手を振り返して搜索を再開した。

が、すぐに行き詰まってしまった。

引き出しには鍵が付き物であるが、三つある引き出しには全て鍵が掛かっているのは予想外だった。

「鍵……か。予想はしていたが、これはどうしようも出来ないな」
さすがに鍵が落ちているわけでもなく、どうしようかと悩んでいるところに

『トモキン、お困りの様子ですな』

いきなりメガポから声が聞こえてきた。

「……ママツキーさん？」

『そうさね。メガポを通して骨電動で話しているから結構鮮明に聞こえるでしょ』

何やら自慢が始まりそんな雰囲気だが、今ここでそれを聞いている暇はない。

「あとから話は聞きますし、いきなり話し掛けて来ないでくださいよ」

『そんな事言わないでさ。それより、トモキンにスペシャルアイテムを紹介するさね』

「スペシャルアイテム、ですか？」

かなり危険な響きがする言葉だと思うんですけど。

しかし、この状況下で話し掛けてくるのだから余程の自信作だと思わないとやっていけない。

「ママツキーさん、こうして話しているのはかなりのリスクを伴うって分かってますか？」

「大丈夫さね。表の先生達は和音ママが二人共引き付けているから気づいてない……けど、和音ママの顔が般若も真っ青になりつつある」

「……かなり危険ですね。ではこちらも急ぎますので、そのスペシヤルアイテムと言うのをください」

『腕に付いているさね』

と、言われて意味が分からない。

腕を見ても右腕に付いているコントロールパネルくらいしか目に入ってくるものない。透明になっていて特殊な塗料でコーティングされているので、ボタンやコントロールパネルの輪郭がメガボを通して見ると、ハッキリと分かるようになっていて。

『コントロールパネルの左上のボタンを教えてみそ』

「ちよつと待つてください……」

言われたままにボタンを押して見たが、いきなり点滅をし始めたコントロールパネルが真ん中から縦に開いていった。

それをメガボ越しに見ても何だか分からないのでメガボを外して見た。すると、そこには灰色をしたカード状の物体が斜めに競り上がるように浮かんでおり、不思議に思いながら手に取ってみた。

「……で、何ですか？ コレ」

『ちよつと、律子。東山先輩も聞いてくださいよ』

『コ、コハルちゃん、今はちよつと』

メガボをセットして聞いてみると、向こうで律子ちゃんの声に混ざってコハルの声まで聞こえていた。

『失礼、トモキン。カードセブンって言う秘密の五つ道具が満載のピッキン スパイ道具さね』

色々とツツコミどころが満載ですが、時間がないので割愛します。

「コレをどうすればいいんですか？」

『そのカードセブンの表にボタンが四つあるさね。そのボタンの一番右のボタンと左から二番目のボタンを同時に押して五秒待つとい
い事が起きる』

意味が分からないが言われた通りにボタンを押して待つてみた。

……おっ？

ボタンを押して約五秒後、カードを二分するように半分に折れて
中からクリップが二つ出てきた。

『どう？ トモキン』

「……アナログですな、コレ」

『文明とはときに退化して、目覚しい進化を遂げるものさね』

言っている事はまともに聞こえるが、ただの手抜きな気がするの
ですけどね。

『じゃあ、頑張つてさね』

最後に「クリップは返してね」と付け加えて、ママツキーさんの
声は消えていた。

時間がないときに余計なもので無駄な時間を過ごした気がするの
は俺だけだろうか？ そんな事を思いながら俺はしゃがみ込み、ク
リップを一つ真っ直ぐに伸ばして一番上の引き出しから試してい
く事にした。

言っておくが俺には鍵開けの技術スキルなどは一切ない。

しかし、妙に胸が躍ってしまうのは何故だろうか？ やっぱり、
男ならこういう冒険心が詰まったものが堪らなくなるだろう。

が、クリップを動かして鍵を開けようと果敢に挑んでみて、さ
っぱり反応も手ごたえもない。

そもそもクリップだけで鍵が開くのか疑問だが、本当に無駄な時
間を過ごした気がしてきた。タイムリミットも刻一刻と押し迫つて
いるというのに、ママツキーさんにはあとからお説教をする事にし
よう。

「……んっ？」

と、諦めようと何気なく目線を上に向けたところで、俺は発見してしまった。

机の天板裏 セロテープで張られた鍵を一つ。

なんと言っているのか分からずに暫し呆然としたが、教頭の管理能力を疑いそうになってしまふ所業である。しかし、こちらとしては嬉しい誤算なのでありがたく使わせてもらおう。

……。

……。

で、俺は引き出しを開けた事に激しく後悔していた。

引き出しの中には筆記道具やファイルされた書類、あとは複数の印鑑が整理されて入っているのだが、その中で異質な存在が目を見ていた。

それを取り上げ、込み上げてくる吐き気を戦いながら一枚一枚確認していくが眩暈がしてきたよ。

「……………はあ」

今こそ新鮮な空気が欲しいと切に願うところだ。ここは空気が澱んでこの世とは思えない瘴気を放っている。

その元凶は目の前に並ぶ教頭の女装写真で、その数は四〇枚以上。精神的な拷問ならこれ以上のものはないだろうと思えるが、俺達が探しているものとは関係ないものである。全て処分した気持ちを押さえて引き出しに戻そうと思ったが、ふと視界の隅に引き出しの色とは違うものが入り込んできた。

それを取り出してみると引き出しの一番奥に引っ掛かっていたのか、シワになっていた茶色の封筒だった。

あれだけ整理された引き出しの中にあって、この封筒だけはどうでもいいような扱いを受けているのかと思ったが、手に取ってみてどうやら違うという事に気付いた。

封筒の上下にはセロテープが付いており、どうやら引き出しの上に貼り付けていたのが剥がれたようである。触ってみるとほとんど粘着力を失っているようだから、随分前から貼っていたのが見てと

れる。

何やらただ事ではない感じがする封筒を手し、俺の心臓は跳ね、落ち着かせようと深呼吸をして封筒を開けた。

「……………」

封筒の中には四枚の紙が入っており、その一番上にあつた紙に目を通していった俺はあまりの内容に絶句し、気付けば拳を硬く握りしめて唇を噛んでいた。

もう一度、ゆっくりと深呼吸をして胸の奥に芽生えた怒りを押し殺そうと必死だったが、考えれば考えるほど怒りは増してくるばかり。

…………腐ってるな。

そう思ってしまうほどの内容が書かれた紙を手にし、俺は引き出しの中を更に調べてみた。

しかし、もう引出しの中には何もないうで、怒りに任せて引き出しを閉めたい衝動に駆られたが、ゆっくりと音を立てないように閉めていった。

「…………ともちゃん」

周りが見えなくなっていたのはそれだけ衝撃的だったのか、不意に聞こえた声に俺は顔を上げた。

「どうしたんですか？」

いつの間にか俺のすぐ横に立っていた熱源体。

それは部長だと言うのは声ですぐに分かる。しかし、その声が酷く落ち込んでいると言うか、何かを耐えているような感じがして気になった。

そして

「これ、見てよ」

そう言っただけ出して来たものを見た俺は、更なる衝撃を受けていた。

第三八話：ときに真実は残酷なもの

部長が見つけてきたのは一枚の写真。

背後に学園長の名前と誕生日を祝う横断幕のようなものが掲げられており、その下に満面の笑みを浮かべた学園長を含めた五人の先生が写っている写真なのだが、その中に俺達はとんでもない人物を発見した。

「この男って、あのビデオに映っていた男だよ」

「……そうですね」

写真の端で斜に構えて立っている男は間違いなく、あのビデオに映っていた乗用車の男だった。

「ねえ、ともちゃん。この写真に写っているって事は……学園関係者って事だよ」

「ですが、学園では見た事ない顔です」

「確かにそうだけど……なら、誰なんだろう？」

部長の言う通り、学園長の誕生会に出ているという事は学園関係者の可能性が高い。

「部長、このスーツは高いですか？」

「どうだろうね……でも、ブランド品なのは確かだよ」

あとは学園に出入りしている業者という可能性も否定は出来ないが、ブランド品で着飾った業者と言うのは胡散臭くて信用出来そうにはない。

「それで、この写真はどこにあったんですか？」

「あそこだよ」

と、職員室の一番端にある誰か分からない机を指さす部長。

この人は当初の予定とは違うところを調べてどうするのだと思っただが一応は収穫があったので文句が言えない。

部長はまったく予想外の行動をしたのだが成果を上げるという、ある意味素晴らしい奇跡を起こしてくれたわけだ。

だが、この写真は俺が以前考えた推論をほぼ確実にするものであった。

俺の思考は先ほど教頭の机で見つけた封筒と、部長が見つけたこの写真。そして、副生徒会長がこの前言っていた『どこかで見た事がある』という言葉。

それらを繋げていくと、一つの真実が目の前に見えてくる。

……やはり、そうなのか？

考えたくない真実がそこにある。考えれば考えるほど、頭が痛い事実がのしかかってくる。

「部長、ちよつといいで」

『あー、トモキン。トモキン、トモキン、タマピー』

顎に手をあてて何やら考え始めていた部長に声を掛けようとしたところで、いきなりメガボから声が聞こえてきた。

「……ママツキーさん、心臓に悪いですって。それに最後の『タマピー』ってなんですか？」

『そんな呑気な事を言っている場合ではないさね。急いで　はあ、はあ……職員室から逃げて』

メガボから聞こえて来るママツキーさん声は電波状況が悪いのか、ノイズが混ざって途切れて聞こえ、他にも律子ちゃんとコハルの声が少し遠くに聞こえていた。

「何があつたんですか？」

『白銀狼隊が……を捕まえたのさね。それで……先生達が合流して、今そつちに　きやあつ』

「ママツキーさんっ？」

ノイズが酷くて最初の方は聞き取れなかった。

しかし、メガボ越しに聞こえてきたのはママツキーさんの悲鳴をかき消すほどの破裂音で、律子ちゃんとコハルの声も聞こえていたが通信は途絶えてしまった。

「ともちゃん、何があつたのっ？」

「部長、ひとまずここから出ましよう」

俺の肩を揺する部長も少し騒がしくなってきた廊下に気付いたよ
うで、更に俺の肩を揺すっていた。しかし、ママッキーさんに何が
あったのか分からず早く合流したかったが、今は俺達も危機的状況
に陥っている事には変わりない。

「先生達が帰って来ちゃったみたいだけど……僕達は見えないから
大丈夫だよな？」

「いえ、そうでもないですよ」

俺は腕時計を部長に見せた。

三時一七分。

俺達が職員室に入っすでに五〇分近くが経過している。探すの
に夢中になって危うく時間の経過を忘れるところだったが、ママッ
キーさんのおかげで気付く事が出来た。

しかも、すでにママッキーさんに言われたタイムリミットが間近
に迫っている。

「コートの充電池は一時間ですが、逃げる時間も考慮して五〇分が
リミットなんですよ」

「……えっと、どれくらい経ったの？」

「すでに四七分です。あと一〇分ほどで充電が切れます」

「そ、それはまず　っ」

大声を出しそうになった部長の口を押さえてしゃがんだが、今お
かしな事に気付いた。

「部長……」

「……ともちゃん」

俺と部長は顔を見合わせて自分達の姿を見比べ、目を丸くしてい
る部長に窓を指さして一目散に窓際へ走って鍵を開けていた。

的確に部長の口を押さえられたと思っていたが、俺達の姿は半分
ほど透けて現れている状態だった。何が起こったのか分からないが
この状況で先生達と鉢合わせてしまったら一巻の終わりである。

「ともちゃん、急いでっ」

窓を開けて先に出て行った部長だったが窓枠に足を取られ、「へぎゃっ」と奇妙な声を上げて視界から消えていった。

こんなときにはお約束をするなんて馬鹿以外の何者でもない人だと思いつつ、先ほどの封筒と部長が持つて来た写真を懷に忍ばせて窓枠に足を掛けたが、そこで何かが光ったように感じて上を見上げた。

……あれは、もしかして。

逆光になっているので真っ黒な影にしか見えないが、第二校舎の屋上に人影を発見した。

そのシルエットにはどこか見覚えがあった。しかし、今はそれを気にしている時間的余裕がないので、諦めて窓枠から外に飛び下りて走り出した。

校舎の外を小走りに駆けて行く部長のうしろを付いていく俺だが、何故中腰で走っているのか教えて欲しかった。

「はあ、はあ……ここまでくれば大丈夫だと思うよ」

「……そうですね」

第二校舎に入り、窓から外の様子を窺って見たが誰も俺達の事を追っては来ていなかった。

荒れる息を整えつつ、身体に纏わりつくコートを脱ぎ捨て、ついでに制服も脱ぎたい心境である。夏場に雨合羽あまがっぱのようなものを着て外を走れば、少しの間でも汗をかく事を身を持って体験しました。

「部長、俺はママッキーさん達を探しに行きますので、これをお願いします」

「あ、うん。僕も、かずちゃんと合流したら行くから」

部長にスガミエナクールと職員室から持つて来た封筒と写真を手渡し、俺は携帯を取り出してママッキーさんに電話しながら一階を東側階段に向かって走り出した。

第一校舎東側階段下にいたはずのママツキーさん達がどこへ走っていったのか分らない。しかし、西側^{こち}まで走ってくるのは考え難い。

人間、咄嗟に行動しようとするれば、一番近いルートを逃げるだろう。

この場合のルートは階段付近にいたので階段を駆け上がるか、すぐそばにある渡り廊下を渡って第二校舎へと逃げるかである。

それにたった今見た屋上の人影が俺の考える人物であれば、かなり危険な状況になっている可能性もある。

「……何があつたんだ」

しかし、呼び出し音が鳴り続けるばかりでママツキーさんは電話に出る気配がなく、俺は不安を覚えながらコハルに電話を掛け直す事にした。

いつもならすぐに出るはずのコハルも何故が出ず、俺は更に不安を募らせていたが

『もしもしっ』

電話を一旦切ろうとしたそのとき、受話口から大きな声が聞こえていた。

『トモ兄ちゃん、大変だよっ』

「それは分かっている。コハル、どこにいるんだ？」

慌てふためくコハルの息遣いはただ事ではなく、嫌な予感^{予感}は更に膨らんでいく。

『い、今……第二校舎の三階、だよ』

「分かった。すぐに行くからじつと　　律子ちゃんとママツキーさんはどうした？」

『律子はいるけど……』

そこで途切れた声に嫌な予感は確信に変わっていた。

……ママツキーさん。

まだ耳の奥に残っているママツキーさんの悲鳴に、何故かそこに

あの人の顔が浮かんで重なってくる。

「分かった。コハル、大丈夫だ」

『トモ、兄ちゃん』

今にも泣き出しそうな声のコハルは必死に電話を握りしめているだろ。俺はコハルを落ち着かせるように話をしながら階段を駆け上がっていた。

……。

……。

第二校舎三階、東側の階段を上がってすぐにある教室の中に、コハルと律子ちゃんはいた。

「先輩っ」

「トモ兄ちゃんっ」

教室の隅で床に座り込んでいた二人は俺の姿を見るなり、一目散に駆け寄って抱きついて来た。

その瞳に涙を浮かべ、声は震えて必死にしがみつく二人を落ち着かせようと背中を撫でながら見渡してみたが、教室の中には二人の姿以外はなかった。

「コハル、ママツキーさんはどうした？」

「……分からないの」

「分からない？」

コハルの言っている意味が俺には分からなかった。

「いきなり目の前が真っ白になって……気付いたら、東山先輩はいなくなってた」

「真っ白？」

「ちよっと焦げ臭くて、バーンって音がして」

首を横に振り、思い出したように俺から離れたコハルはスカートのポケットに手を入れて何かを取り出して俺の前に出していた。

「これが廊下に落ちていた」

「……これは」

コハルが俺に差し出したもの それは黄色炸裂線香弾の燃えた

カスだった。

ほとんど燃え尽きて残っていないが黄色の輪が付いた持ち手の部分でそれが何かが分かってしまうのは、俺も同じものを持っているからだろう。

ズボンのポケットに入ってる黄色炸裂線香弾を取り出して見比べてみたが、まったく同じだった。

「コハル、場所はどこだ？」

「渡り廊下だよ。階段を上って第二校舎に行こうと渡り廊下に入ったところで」

思い出したように眉をしかめたコハルは俯いてしまった。

「いきなりだったのでよく分かりませんが、足音と男の人の声が聞こえました」

それに少し震えた声で律子ちゃんが付け足して教えてくれた。

「そうか。それで、律子ちゃん 何が起こって逃げるようになったのか、教えてくれるかな？」

「は、はい。東山先輩が傍受した白銀狼隊の無線で、クロフクさんが捕まって白銀狼隊と先生達が帰って来るって」

「クロフクが捕まった……？」

ママツキーさんが何かが捕まったと言っていたが、それはまさに予想外の言葉だった。

「そ、それより、早く東山先輩を」

俺の腕を掴んで急かす律子ちゃんに我に返った俺は

「律子ちゃんとコハルは部屋に戻るように。鍵を掛けて知らない人が来ても開けてはいけないからね」

二人を残して教室を出て行こうとしたが、それは突如鳴り始めた軽快な音楽によって遮られていた。

こんなときに誰だと思ったがこの警戒な着信音は部長なので、和音さんと合流したのだろうと思って電話に出た。

『と、ととと、ともちゃーんっ、たたた、たたたっ』

しかし、受話口から聞こえたのは予想に反してドモって何を喋っ

ている分からない部長の声だった。

「落ち着いてください。はい、深呼吸」

「すー、はーっ。すー、はーっ。じゃなくて！ 大変なんだよ、一大事なんだよっ」

「何があつたんですか？」

電話の向こうでは一人大騒ぎしている部長の声だけが聞こえているが、いつもならこれほど騒いでいれば制裁が入ってもおかしくないはずだ。

「部長、和音さんはどうしたんですか？」

「だから、それが大変なんだよ！ かずちゃんも暴走　あ、ちょっと」

何やら喋っていた部長の声が途切れたかと思いきや

「智樹、ママツキーは無事だぞ」

鼓膜を破りそうなほどの大声が聞こえてきた。

「……和音さん？」

「おうっ、みんなの和音さんだぞーっ」

テンションが最高潮に上がっている和音さんの声が電話越しに聞こえるが、そのうしろで部長が必死に宥めようとしている声が聞こえていた。

第三校舎一階、元特訓部部室前　。

携帯で場所を聞いてやって来たが、そこにいたのは俺の想像通りの人だった。

「……マツクルさん」

縄に縛られて床に座るマツクルさんこと、松本先輩は俺達を睨み付けて怒りを露にしていた。

その顔は中川先輩が言っているように、あの佐々木研究所で見たお人好しそうな顔ではなく、鬼と見紛うばかりの憤怒の表情であった。

「まったく、何を考えてるんだよ」

こちらにも怒りが収まらない様子の人が一人、腰に手を当てて傲慢の胸を揺らしていた。

しかし、松本先輩はただ俺達を睨むだけで口を開く事はなく、それが更に和音さんの怒りを増長させているのは明らかだった。

松本先輩の前に立つ和音さんと部長から少し離れた場所で、俺はその様子を見ながら探しに行こうとしていた人を介抱していた。

どうやら、俺の考えていた最悪の結果は免れたようだが、これはこれで予想外と言うべきだろう。

「ママツキーさん、大丈夫ですか？」

「んっ……大丈夫さね。まだ目がチカチカしているけど、問題はな
いよ」

廊下の壁に寄り掛かって少し荒い呼吸を整えようとしているママツキーさんの顔は青白く、目は空ろでどこを見ているのか分からない状態だった。

ママツキーさんもまさかの人からこんな目に遭わされて、どうしているのか分からないのが本心だろう。

「トモ兄ちゃん、買ってきたよ」

「先輩、タオルですっ」

そこに息を切らせてコハルがペットボトルのスポーツドリンクを抱え、律子ちゃんは手にタオルとバケツを持ってやってきた。

そのスポーツドリンクを皆に配るように促し、俺はママツキーさんの分を受け取り

「ママツキーさん、飲めますか？」

キャップを開けてママツキーさんに手渡した。

律子ちゃんは心配に眉を寄せ、「大丈夫さね」と元気のない声で応えるママツキーさんにバケツの水で濡らしたタオルで目元を冷やしていた。

目の周りが赤くなってただれているように見えるが、本人は手を振って大丈夫と繰り返し返すばかり。

「……くくつ」

そんなママツキーさんを心配していると、不意に聞こえた低い笑い声に俺はそちらを向いた。

「あはははっ、傑作だ」

「何がおかしいんだよっ」

俺達を見上げる瞳には敵意がなく、口元は冷笑を浮かべて嘲笑う。

それに一気に怒りが頂点に達した様子の和音さんが松本先輩に掴み掛かるうとして、部長が慌てて羽交い絞めにしていた。

……別人だな。

何があつたのかは知らないが松本先輩の鋭い目がママツキーさんを射抜いていく。

「所詮は女……俺には敵わないって事だっ」

「お前っ いい加減にしろよ!」

部長の腕を振り解いて松本先輩の胸倉を掴み上げる和音さんの怒声が響く。

「ぐっ お、俺は天才なんだ……くくつ、俺に出来ない事はないんだよ」

勝ち誇った松本先輩の笑い声が廊下に響き、和音さんは怒りに顔を紅潮させ

「松本っ」

拳を硬く握って振り上げていた。

部長も止める間もなく、松本先輩は目を見開き、驚きと共に唇を噛み締めていた。

だが、その拳は振り下ろされる事はなく

「そこからは俺の仕事だ」

突然、俺の背後から現れたがっしりとした太い腕に掴まれていた。

「……中川」

「殴れば一緒に来てもらう事になるぞ」

振り返ると、そこには渋い顔をして俺達を見下ろす中川先輩が立っていた。

「たくちゃん、どうしてここに？」

「ハニーが走って行くのが見えたので、追いかけてきたのさっ」

和音さんの腕を離し、人を食い殺しそうな凶悪なスマイル（本人は爽やかだと思っているだろう）で部長に親指を立てる中川先輩に、コハルは身体を震わせて嫌悪感を露にしていた。

どうしてこの緊張感の中でこうもアホな事が出来るのか不思議で仕方がないが、何やら俺の足を引っ張る感触に下を向くと、ママツキーさんが俺を見上げていた。

「……トモキン」

「大丈夫ですか？ 無理はしないでください」

「やっぱり、私の思った通りだったさね。でも、何か辛い……よ」

目を伏せて小さく呟くママツキーさんが何を言っているのか一瞬分からなかった。だが、ママツキーさんが前に言っていた事を思い出し、それが繋がっていった。

ママツキーさんが言っていた『目星がついている』と言った人物

それは松本先輩の事だったのだらう。

考えてみれば、ママツキーさんの発明品を簡単に手に入れたり、改良出来るのは身近にいてそれなりの知識がある人物しか考えられないわけだ。

だが、そう考えると一つだけ謎が残る。

中庭で律子ちゃんをさらおうとしたクロフク達は、一本松を囲むフェンスに取り付けられたママツキーさんの発明品だった物質変換投影装置『ミラージュ』を弄っていた。もし、あれを松本先輩が持ち出したものとすれば、松本先輩はクロフク達と繋がっている可能性があるわけだ。

それはママツキーさん自身も薄々は感ずいていたのかも知れないがどこかで信じたくなっただらう、その顔はシヨックで憔悴しき

っていた。

「今は何も考えない方がいいですよ」

「……そうさね」

小さく頷いたママツキーさんは笑みを浮かべてペットボトルに口を付け

「……まずいさね、これ」

眉を寄せて文句を言っていた。

それに苦笑して大きく息を吐き出した俺は、どことなく胸の中を占めていた不安が少しだけ減ったように感じていた。

第三九話：腐敗した世の中に正義は……。

週明けの月曜日。

学校は平和な内に終わりを告げ、放課後への扉を開けるチャイムが辺りに鳴り響いてからすでに二〇分ほど。

静寂に包まれた場所で椅子に浅く腰掛け、背もたれに身体を預けた俺は風紀委員会作成の調書に目を通していた。

「……で、お前がやったんだな」

「はい、申し訳ありません　って、違うだろっ」

俺の隣で刑事コントをしている部長と中川先輩はどこから持ってきたのか、扮装まで本格的だった。

「ノリが悪いな、たくちゃん。そこは『家にはお腹を空かせた一人の子供が』って言わないと」

「野球でチーム対戦出来るぞ、それ。しかし……ハニーとならそれくらいは、ぐふふっ」

気持ち悪い笑いをしている中川先輩を呆れた顔で見ている部長は「ご愁傷様」と手を合わせてお辞儀をしていた。意味が分からずに不思議そうな顔をしている中川先輩の背後には般若も真つ青の顔をしたコハルが金属バットを持って……以下、倫理上の観点により省略します。

「で、ともちゃん。どう？　それ」

「まあ、何と言うか……読んでみたら分かりますよ」

横から俺の持っている調書を覗き込んだ部長に手渡し、背伸びを一つ。

部長が読み出した横で盗み見るようにうしろから覗いているコハルも、部長と同じような顔をして次第に険しい表情になっていた。

ちなみに中川先輩は金属バットで背中を突付かれて悶絶してしました。さすがに気持ち悪かったので説明は省かせてもらったけど、床に寝転ぶ中川先輩が「もっと」などと口走っているのは、部長の

二の舞を見ているようで嫌だった。

風紀委員活動報告書。

部長に手渡ししたのは中川先輩が持つて来た提出前の活動報告で、三枚の書面で構成されている。

前半部分は風紀委員の活動内容で土曜日の白銀狼隊の活動内容に、クロフクを捕まえた経緯が細かく記されていた。そして、問題は二枚目の『違反者調書』と記された書類であった。

そこには松本先輩が何故あの凶行に至ったのかが詳細に記されていたが、その内容はとてもママツキーさんには見せられるものではなかった。

『機械工学研究開発応援部』に一年の頃から在籍していた松本先輩は一年の頃は部内で天才と称されるほど発明好きの人だったらしい。しかし、そんな松本先輩が二年になったある日、ママツキーさんがひょっこりと現れたのだ。

ママツキーさんは電脳革命クラブに在籍しながら興味のある部活に顔を出してはちょっかいを出す変わり者で、機械工学研究開発応援部では奇抜な発明を繰り返していたが部内での評価（主に部長）は一気に上がっていた。

そんな我が物顔で部の名前まで変えてしまったママツキーさんを松本先輩は快く思っていなかったようで、その不満がここにきて爆発。

今回の凶行へと彼を走らせたわけだ。

確かにママツキーさんのやる事には常識では計り知れないものがある。容姿から真面目な性格が窺える松本先輩だから、ママツキーさんの奇行に我慢の限界を迎えたのかも知れない。

しかし、これにどちらが悪いとか言いきれない部分があるので、胸の中はスッキリとしないものがある。

「しかし、松本があそこまで追いつめていたとは」

「そうですね。自分の居場所を奪われ、尚且つ権限を失いつつあつ

たわけですから、あの凶行も領けます」

複雑な表情を浮かべて俺の顔を見る和音さんは珈琲カップの淵を指でなぞり、小さくため息を吐いていた。

真っ先に調書に目を通した和音さんが俺に渡してくれたわけで、俺が読んでいた間は声一つ発する事はなく、そんな空気に耐えられなくなつて部長は中川先輩を巻き込んでコントを始めたわけだ。

「松本は停学一週間に夏休みの補習が一〇日……か。さすがにママツキーには見せられるものじゃないよな」

「そうですね。暫くは黙っていた方がいいでしょう」

「しかし、クロフクの停学一週間だけって短くないか？」

「それは俺に言われも知りませんよ。先生達の判断ですから、直接聞いてください」

俺と和音さんは互いの顔を見合わせて小さく頷いてため息をこぼしていた。

暫くして調書を読み終わつたらしい部長は和音さんと同じように複雑な顔をして頭を抱え、中川先輩は俺達を見て苦笑しつつも調書を回収していた。

いつの間に復活したのか謎だが、顔がにやけて怖いのですけど。

「さて、これからどうしようか？ 何かある人、手を上げて」

「それを考えるのが部長の役目だろ。と言いたいところだけど、今日は何もする気が起きない」

俺達を見渡して聞いてきた部長だったが、グツタリとやる気なくテーブルに突つ伏した和音さんに、「確かにねえ」と背もたれに身体を預けて同意していた。

……ブサイクだな。

やる気のない顔は誰もブサイクになるのだろう。とても学園一の色男と言われる顔ではないが、確かに緊張の糸が切れてしまつてやる気がなくなるのも頷ける。

しかし、肝心な事は何一つ解決していない事を忘れていけない。

松本先輩の一件は俺達が調べている事とは関係がなく、まだ肝心の人物は捕まっていないのだから。

「ママツキーの見舞いにでも……いや、なんでもない」

いきなり起き上がった俺達を見渡した和音さんだったが、俺達の顔を見てまたテーブルに顔を伏せていた。

土曜日の一件が衝撃的だったのだらう、日曜日を開けた今日も元気がなく、真っ直ぐに家へ帰ってしまった。心配ではあったが俺達全員で押しかけても迷惑になるだろうと言う事で、代表で律子ちゃんに行ってもらったわけだ。

「それよりも、職員室で何か見つけたのだろ？ ああ騒ぎで見れないから見せてくれないか」

「ああ、そう言えば忘れていた。私も見てないんだった」

中川先輩の声に思い出したように起き上がった和音さんは俺を見ていた。コハルも「私も見てない」と続き、皆で俺を見るので

「それなら部長に預けてますよ」

と、部長を指さすと、三人は部長に顔を向けていた。

しかし、部長は不思議そうな顔をして

「あつ……そうだった」

思い出したように手を叩いて椅子を立ち上がった。

そのまま、部室の隅に置かれた椅子の上に無造作に置かれた白い物体を漁り、「あつた」と声を上げた部長の手には俺が見つけた封筒が握られていた。

もしかしてアレは『スガタミエナクール』なのか？ シワが寄って見るも無残な状態だが、中身が精密機械なので大丈夫なのだろうかと心配になってくる。

が、その前に色々と注意しないといけないだらう。

「部長、それは俺達の命を左右するかも知れない代物なのですよ。分かってますか？」

「ご、ごめんって……ともちゃん、怒らないでよお」

涙目で俺を見る部長は女走りで近寄ってきて俺の足元に女座りで

滑り込み、しがみ付いてきたがその姿はとても気持ち悪かった。

だが、そんな事をされても同情の余地などまったくない。もし、この場に風紀委員や先生に乗り込まれて部室内を調べられて、あの封筒と写真を見つけられたら否定のしようがなかったはずだ。

「一人で退学になるのなら構いませんけど、不注意で俺達を巻き込まないでください」

「お、脅さないでよ」

本気で泣きそうな部長はおいといて、これは本当に脅してはないのだ。

本来なら証拠を残さずに立ち去る予定だったのが色々狂ってしまい、結果として物色した痕跡をそのまま残してしまった。あれでは誰かがいたというのはすぐにバレてしまうわけだが、週が明けて今日学園に来たがとりわけ大騒ぎをしている様子はなく、いつもと変わりがなかった。

「そこまで心配しなくて、大丈夫だぞ」

「ふえ……そ、そうなの？ たくちゃん」

涙目ですがって来る部長を迷惑そうに追い払う中川先輩は

「ああっ、来るな！ たく……… 電腦革命クラブには怪我人もいるので配慮するように風紀委員や先生達には伝えているから、何か特別な事がない限り大丈夫だって」

俺達を見渡して親指を立て、爽やかに微笑んでいた。

「た、たくちゃんっ」

「だーっ、抱きつくな！ キスをしようとするなっ」

「だくちゃん大好きだよ」

気色悪い男二人の声が響く部室で俺は頭を抱え、和音さんとコハルは呆れて項垂れていた。

それから暫くの間、変なコントをしていた問題児二人（部長と中川先輩）を成敗し、写真と封筒の中身を見ていた。

「これって……………冗談、だろ」

「……………酷いよ、これ」

和音さんとコハルは唇を震わせ、それ以上は喋る事も出来ずに身体も震わせていた。大人しくなった部長と中川先輩もさすがに衝撃的な内容に目を丸くして手が震えていた。

俺が見つけた封筒の中には全部で四枚の書類が入っていた。それは誓約書が二枚と診断書が一枚、そして退学届けだった。

内容は部活動中の事故については一切口外しない代わりに、それなりの生活保障を約束するというもので、紙面の一番下に捺印があった。

その名前が、あの陸上部コーチをしていた体育教師なのだ。

名前を教えてもらって始めて知ったが、文面からすぐに葵さんの事故に関する事だとすぐに分かった。そして、和音さんは衝撃を受けながらも俺に小さく頷き、部長が「こいつだよ」と、教えてくれたので間違いはないだろう。

しかし、問題はそこにあらず、他の場所にあるのだ。

体育教師と連名で下に記されているのは学園長　と、同じ苗字の知らない名前だった。

それが何を意味するのか、ここにいる全員には分かったようで、それが更なる衝撃となって襲ってきているのだ。

「この名前って……………学園長の家族かな？」

「普通に考えれば、学園長の息子って事になるでしょうね。あの乗用車に乗っていたのが学園長の息子であれば、色々と辻褄が合う気がします」

部長は持っている紙を握り潰すように拳を握りしめ、和音さんはただ一点を見つめて呆然としていた。

「学園長の息子……。そうか　だから、田乃中が見た事があるって言ったのか」

中川先輩に部長は「確かに」と頷き、俺も心の中で頷いていた。副生徒会長はあれでも金持ちのご令嬢なので色々な知り合いがいっても不思議はないから、学園長の家族と会っている可能性があるわけだ。

「しかし、これで学園が必死になって隠したがったのか、分かった気がするよ……くそっ」

部長は苦虫を噛み潰したような顔でテーブルに拳を叩き付け、言葉を吐き捨てる。その気持ちは分かるから誰も声を掛けられずに下を向くばかり。

そして、もう一枚には事故の事を口外しないように脅迫紛いの文面が綴られたもので、震えた文字で名前が記されていた。その名前には誰も和音さんや部長も見覚えがないと言っていたが、これは陸上部のマネジャーだろうと推測出来る。

何故ならその誓約書を書いてから数週間後に精神的な病気を患ったと診断書を提出して退学しているのだ。それが何を意味するのは言わずと知れたところで、相当悩み苦しんだのだろう。

……腐ってるよな。

この封筒は裏取引があつた事を教えてくれる重要な証拠だ。

自分の息子が起こした人身事故を揉み消し、そしてその場にいた体育教師にはそれなりの職を与えてこの学園から追い出し、マネジャーだった女子生徒には精神を病んで退学。

これで全ては終わったかのように思えた。

しかし、それは特訓部の出現により、また目覚めてしまった。あの『一〇二〇事件』は事件の真実を知るために起こした事ではないか？

そう考えれば全てが繋がっていく気がしていた。俺の思い込みかも知れないが、そう考えるのが自然な気がする。
でも。

真実を知る事が辛い結果を招かないか、それが心配だった。

今分かりうる全ての真実をトゥルーに伝えたなら、それから起こるであろう出来事が容易に想像出来る。それは起こしてはならない事であり、この真実を伝えるべきなのか迷うところである。

「だが、これで特訓部が納得してくれるか、問題だな」

「あれ、特訓部って捕まったんじゃないの？」

中川先輩は顎に手を当てて思案顔で、その横で不思議そうな顔をしている部長に

「あいつ等は模倣犯だったんだ」

苦々しく言葉を吐き出していた。

「……模倣犯？」

「ああ。最近学園を賑わせている特訓部に憧れて、自分達もやってみたいと思っただけ。で、あの救済当日に先生が少ないのを知っていたから実行したというわけだ。……ったく、こっちにしてみれば迷惑なだけの話だ」

部長は頷きながら「迷惑な話だね、それ」と呟き、中川先輩は頭を抱えてため息を吐いていた。

しかし、それで処分の内容に合点がいった。

本物という言い方はおかしいが去年の事を考えれば、たった一週間だけの停学とは考えられない。まあ、そこは偽物という事であれば納得も出来ると言うものだ。

「では、律子ちゃんを誘拐しようとしたのは……」

「ああ、あいつ等が素直に認めたよ」

律子ちゃんを誘拐未遂したのもその模倣犯集団で、校舎から出ようとしたときに覆面をしてなかったらしく、素顔を見られたと勘違いをして捕まえたらしい。しかし、捕まえたはいいがどうしていいのか分からずに中庭に置いて逃げたのが真実なのだと中川先輩は教

えてくれた。

「それはまた迷惑な話ですね。それではママツキーさんの発明品を盗んだのも同じ人達ですか？」

「いや、それが違うらしいんだ」

「そうですか。そうなるよ、松本……先輩、ですか」

「ああ、何も話そうとはしないが間違いないだろう。まったく何をやってんだよ、あいつは」

面倒臭そうに頭をかく中川先輩は大きく息を吐き、呆れたような表情を浮かべていた。

確かに松本先輩の凶行を考えれば一番素直に頷ける事ではあるが、本人は口を開こうとしないので真実は闇の中である。

「本当に迷惑なのはそこからだ。『俺達はただ遊んでいただけで風紀委員に捕まえられた』って言い出してな。現在、そいつ等を捕まえた白銀狼隊との間で話し合いが行なわれている」

「中川先輩は行かなくていいんですか？」

「白銀狼隊の不祥事は隊長である永山の責任であり、今回の件は先生からの勅命だ。俺の管理しないところで起こった事に出て行く理由もなかる」

「確かにそうですけど、副委員長が処分されたら、中川先輩も危ないですか？」

「……やっぱり、そう思う？ 伏峰のお兄様」

途端に不安そうな顔をして俺や部長を見比べる中川先輩に俺と部長は小さく頷いていく。

「まあ、その話はどうでもいいからこれからどうする？」

「ちょ どうでもいいとか言うなよ、翔」

以外と冷たい一面を覗かせた部長にすがり付く中川先輩という図は新鮮だが、本当にどうでもいい事なので中川先輩には悪いが現状は無視する方向でいこう。

「あ、あの……」

そんなところに控えめに声が聞こえてきたのでそちらを向くと

「……律子ちゃん？」

部室の入り口に律子ちゃんが立っていた。

「りっちゃん、まきちゃんに何かあったの？」

「い、いえ……東山先輩がもう大丈夫だからって言うので」

申し訳なそうに部室に入って来た律子ちゃんは、両手で何かを大事そうに抱えていた。

「律子ちゃん、それは……？」

「あ、えっと……東山先輩が『全部壊せたからトモキンに渡してさね』って言うてました」

そう言っただけの前に歩いてきた律子ちゃんが差し出したのは小さなパソコンと一枚のメモリカードだった。

受け取ってみると、それは前に使った電腦革命クラブの秘密兵器と言っていたあの小型パソコンで、メモリカードの方はママッキーさんに預けていた例のビデオが入っていたカードである。

「これを俺に……？」

「はい。渡せば分かるって言うてましたけど」

「そう。ママッキーさんの様子は？」

「今は元気に発明を始めました。『いつまでも落ち込んでられないさね』って言うてましたから」

苦笑する律子ちゃんに俺は「ご苦労様」と伝え、少し考えたが律子ちゃんの言っていた意味を理解して俺はパソコンの電源を入れ、起動するのを待っていた。しかし、周囲には何の事なのか分かっていない人達が不思議そうにパソコンの画面を覗き、首を傾げていた。
……うつつうつつい。

熊と色男が邪魔なので無性に成敗したい気持ちを抑えながら、俺はパソコンのカードスロットにメモリカードを差し込み、表示されたフォルダにマウスのカーソルを合わせてクリックした。

「……………これは」

そこに表示されたのは『写真』のフォルダに収められていた複数の写真。

「とめちゃん、これって」

二人の人物が対峙していがみ合っているような写真が小さな画面いっぱいに表示され、部長は俺の肩を掴んで息を飲んでいた。

その写真は、杖を片手にした女子生徒とジャージ姿の男性だった。

第四〇話：痛みと思い。

写真を見つめる部長と中川先輩、それに和音さんは言葉を失って
呆然としていた。

葵さんと体育教師が対峙して写っている写真は全部で五枚あり、
一連の動きが連続する一コマ漫画みたいに見えていた。

「これって……ねえ、トモ兄ちゃん」

俺の腕を掴んで揺するコハルが言いたい事は何か分かる。

写真は遠くの空は薄暗く染まり、どちらも半袖を着ているので時
期は夏　そして、かなり遅い時間帯だと予想が出来る。

フェンス近くで顔がはつきりと分らないが、杖を片手に立って
いる女子生徒とジャージ姿の男性。

その二人が何かを言われて腕を掴まれた女子生徒が嫌がる素振り
をしている写真の次は、ジャージ姿の男性が怒りに任せて叩いたの
か、頬を押さえている写真だった。

この写真が葵さんとあの体育教師である事はもう誰もが気づいて
いる事で、更にこの写真の注目するべきところはファイル名と日時
にあった。

写真のファイル名はデジカメで撮ったときのまま、日時と時間が
そのまま表示されており、それは葵さんが階段から落ちた日と一致
している。

七月一六日。

その日付が何を意味するのかは誰もが知るところで、この写真が
真実を語っている。

「あいつが……あいつが、葵を………くそっ」

滾る怒りに声を荒げる和音さんは立ち上がって、荒く乱れた息を
そのままに部室を駆け出していこうとした。

「駄目だよ、かずちゃんっ」

「は、離せっ　海藤、離せよ！」

しかし、それは部長によって阻まれていた。

自分の腕を掴む部長に怒りをぶつける和音さんだったが、真っ直ぐに見つめ返す部長の瞳に言葉を詰まらせて俯いてしまった。

「かずちゃんの気持ちは分かるよ。だけど……そんな事しても、葵ちゃんは喜びはしない」

「分かった風な口を聞くな！」

部長の腕を振り払って飛び出した和音さんの声が部室内に響く。

「翔、何してんだっ」

「え……あつ、かずちゃん！」

和音さんの瞳に光っていた雫が宙を舞い、呆けたように突っ立っていた部長に中川先輩の激が飛び、慌てて部室を飛び出して追いかけていった。

静かになった部室で俺はパソコンと睨めっこをしていた。

中川先輩は二人が出て行ったあとに呼び出しを受けて生徒会室へ行き、コハルと律子ちゃんは部長と和音さんを探しに出て行ってしまった。

一応は二人を止めたのだが「心配だから」と俺の言う事を聞かずに飛び出していき、現在俺は部室に一人きりである。

……大丈夫だろうか？

部長は心配ないだろうけど和音さんの様子に気になる。これ以上、余計なものを知ってしまったら和音さんが壊れてしまわないか、それが心配なのだ。

本当は俺が探しに行けばよかったのだが、コハルと律子ちゃんが出て行ってしまった以上、誰かがここに残っていないと帰って来た部長と和音さんが余計な心配をしてしまうだろうから。

それに一人になったので、これまでの事を整理して考えようと思っていたのだが

「……参ったな、これは」

正直、頭が混乱し過ぎて眩暈を覚えていた。

『動画』のフォルダに入っていたビデオの映像と『写真』のフォルダに入っていた写真を見て、最後に残されたフォルダをクリックして開いてみたが、それが今俺の頭を混乱させていた。

それはメモリカード内にある『音声』のフォルダに入っていた音声ファイルである。

ICレコーダーで録音したものらしく、テープ特有の走行ノイズはなかった。しかし、あまり性能がいいものではないようで雑音が入って多少聞き取り難い感がある。しかし、何度か聞いているうちにその声は俺の知っている人物の声だと思い出した。

そして、何故この人がこの内容を話しているのかを俺は知りたかった。

『何故、白浜を階段から突き落としたんですか？』

声を荒げながら誰かに詰め寄っているのが分かるが、この人はこんな声を出す人ではない。

いつも笑みを絶やさない気さくな人で、怒ったところなんて見た事もなかった。その人がこれほどまでに鬼気迫るものを感じさせる声を出すなんて。

「……福田、部長。何故、あなたが」

そう思うしかなかった。

それ以外の言葉を俺は思い浮かばなかった。

『先生が昨日、屋上で白浜といるのを俺は見てました。そこで何があつたんですか？』

福田部長の声が吹き抜けていく風にかき消されるように紛れていく。

会話の内容から察するにこれは写真に写っていた先生と葵さんの

事を言っているのだろう。なので、その次の日　葵さんが階段から落ちた翌日と言う事になる。

……んっ？　まさか。

俺は急いでフォルダをクリックし、写真を表示させたパソコンを持って廊下に出ていた。

「……………やはり、そうか」

そして、それは事実となった。

この写真は福田部長が撮ったものだ。それもこの電腦革命クラブの部室前から撮った写真で間違いない。

少し斜め上を向いたレンズが写し出している写真の景色は、二年ほどが経過しているはずなのに俺の目には変わりなく映っていた。

偶然か、それとも……。

『先生は何を隠しているですか？　教えてください。それに……夏合宿で白浜に何が遭ったのかを知っているのは、先生と一緒にいたマネージャーの』

パソコンのスピーカーから鋭い福田部長の声に、動揺して怯んだ声が聞こえてくる。

福田部長も葵さんの事を調べていたようだが、俺達が苦勞して調べた事をすでに知っているようだ。やはり学年が同じというのは証人が多くてそれだけ有利と言う事か。

しかし、何故調べる必要があるのだろうか？

それを俺が今更知る事は出来ないが一つだけ確信が持てるのは、福田部長は葵さんの事を知っているという事実だけである。

話の内容から、友人か、それ以上の関係ではない限り、あの温厚な福田部長がここまで声を荒げる事はないだろうと思う。

『でも、マネージャーの……………は、学園を辞めてま……………。これは……達が、何かしたからじゃ……………ですかっ？』

風が強くなっただのか、所々の声が掠れている。

葵さんが階段を落ちたときならマネージャーだった女子生徒は学園を退学しているので事情を聞くのは無理だろう。

……いや、待てよ。

それなら、あのビデオカメラの映像はどうしてここにあるのか？何故、福田部長が撮った写真と肉声を録音したものがこのメモリカードに収められているのか？

分かってくるのにつれて、別の部分で分からない事が増えてくる。本当に頭が痛い事ばかりだ。

『ただ気をつけてください。あいつは何をするか分からないので……覚悟しておいた方がいいですよ』

その言葉を最後に声は途切れ、再生は終わっていた。
所要時間一〇分弱のやり取り。

その中に込められた福田部長の怒りや悲しみが痛いほど伝わってきて、どれほどの痛みが身体を襲っていたのかは俺には分からない。

「……ヤア、伏峰君」

不意に聞こえた声が俺の背中に突き刺さり、振り返ると

「コンナトコロデ、一人何ヲシテイルノカナ？」

赤い瞳で真っ直ぐに見つめてくる覆面、トウルーがいた。

前と同じく耳障りで神経を逆撫でしていく声に苛立ちを覚えつつ、不要に近づけない距離の間合いをとって用心しなければいけない。

「それはこちらの台詞ですよ。あなたこそ、何をしているのですか？」

「ソウ言ワナイデクレヨ。私モ偽者ガ現レテ、イイ迷惑ヲシテイルノダカラ」

「……そんな事を言うためにここに来たのですか？」

「イヤ、違ウ。今日八君二用ガアツテ来タノダヨ」

ずっと一步踏み出したトゥルーに合わせて俺も一步下がるが、如何せん四階の角に近い場所にある部室なので袋のネズミである。だが、そんな俺を威嚇するようにトゥルーは懷に右手を入れたまま、不気味な氣配を漂わせて近づいてくる。

その手に何を持っているのか分からない。

殺気ではない。

しかし、それに近い肌を焼くような痛みが走り抜け、危うくパソコンを落としそうになってしまった。

「君達ガ職員室二入ツタノハ知ツテイル。ソレニ……彼女、解析出来タノダロウ？ 手二入レタモノヲ全テ渡シテモラオウカ」

ゆっくりと左手を差し出すトゥルーは視線を俺の持っているパソコンへ一度移し、また俺の顔を真っ直ぐに見つめていた。

俺達が職員室に入った事まで知っているとは、本当にどこで見ているのか分からないものだ。それにしても『彼女』とは誰の事を言っているのだ？ 検討が付かない内に不用意な発言はこちら側の不利を招くだけ。

「何の事ですか？」

「トボケナクテモイイ。私ハ全テヲ知ツテイルノダカラ、素直ニ渡シテモラオウカ」

その声に多少の苛立ちを隠し、俺を威嚇するように語氣を強めるトゥルーの視線は俺の手元に注がれていた。

目的は俺の持っているパソコン。ではなく、そのパソコンの中に入っているメモ리카ードだと思う。先ほどの言葉で『解析』という言葉が出てきたがその言葉が一致するもので今俺が持っているのはメモ리카ードだけである。何故トゥルーがメモ리카ードの事を知っているのかが分からないが、あまりにもタイミングがよすぎると思う。

そもそも、このメモ리카ードを知っているのは限られた人物だけであり、元々は生徒会長に送られてきたものであつて。

「……そうか。これを生徒会長に送りつけたのは、あなたですね」

元を正せば、送り主がいるという事だ。

「ククッ、ソウダ。コノ私が送ッタモノ……ダカラ、ソレハ私ノモノナノダヨ」

顔を覆ってノイズが耳障りな笑い声を響かせ、トゥルーは嘲笑う。
「彼女ノ家カラ、アノ子ガココニ持ッテ来タダロ。ソレヲ渡シテモラオウカ」

そう言って左手を差し出すトゥルーは楽しそうに笑い声を上げる。
その笑い声を聞きつけて俄かに人の気配が始めたが、部室から少し顔を出したただけですぐに扉を閉じて鍵を掛ける音が連続して響いていた。

随分とつれない人達だなと思いつつ、今はそんな事を気にしている場合でない。

今の話から分かった事 それは『彼女』と言うのがママツキーさんだという事実だ。そして、それをずつと見ていた口振りで話すトゥルーが言う『あの子』 律子ちゃんまでが狙われていたのかと思うと、さすがに心臓に悪いものがある。

「彼女達に傷を負わせるような事があれば……さすがに許しませんよ」

「私ニモ、プライドハアルカラネ。余計ナ争イハ好マナイト言ッタハズダ」

「そうでしたね。なら、何故ママツキーさんを……東山さんを見張るような真似をしたのですか？」

「彼女ナラ、アノメモリカードヲ解析出来ルダロウト、思ッテイタダガッ」

楽しそうに語るトゥルーだったが、急に語気を荒げ

「マサカ、アノ男ガ邪魔ヲスルトハ思ワナカッタ……解読モ出来ナカッタノニ、余計ナ真似ヲシテクレタモノダ」

拳を握りしめ、苛立ちを露にしていた。

「あの男……邪魔って まさか、松本先輩まで」

「ククッ、アイツモ最初ハ嫌ガッテイタガ、『出来ナイノ力？』ト

聞クト表情ヲ一変サセテ向キニナツテ……結局、解析八出来ナカタガネ。使エナイ男ダツタヨ、マツタク」

肩を震わせて笑うトゥルーの不気味な声が木霊する。

まさか、松本先輩までトゥルーと関わっていたとは。どこでどんな風になっているのか、何もかもが信じられない事ばかりだ。

「真実を知るために俺達を利用して……。そうか　部長を陥れるような写真を風紀委員会に送りつけたのもあなたですね」

あのメモリカードはトゥルーが送ったものでも、パスワードが掛かったフォルダだけのメモリーカードでは生徒会長もお手上げだろう。

そこに部長が女子の下着にまみれてアホ面全開のスクランダラスな動画が一緒に入っていたら、まずは風紀委員、そして俺達の元へとやってくるのは分かりきっている。そして、部長や和音さんの性格からパスワードの掛かったフォルダを意地でも開けようとするだろう。

まさにトゥルーの思うツボであり、結果的にはママツキーさんの元へ行き、無事に中身が日の目を見る事になったわけだ。

「ククツ……サア、ドウダロウ」

とぼけているが間違いないようだ。

トゥルーにはメモリカードに入っていたフォルダのパスワードは分からなかったのだろう。そこで生徒会長へ送りつけ、部長のスクランダル動画を一緒にして俺達の元へ来るようにしたと言うわけか。「マア、ソナモノハドウデモイイ。ソレヨリモ、早くソレヲ返セ」嫌です。『はい、そうですか』と、素直に返すわけにはいかないですね」

「……何？」

明らかに俺を威嚇するように一歩詰めてきたトゥルーは懐から右

手を抜き、腕をだらりと垂らしていた。

「脅し……ですか？」

「イヤ、脅シデハナイノハ君ガ一番知ッテイルダロ」

だらりと垂れた右手に握られていたのは、鈍く輝きを放っている刃渡りの長いサバイバルナイフ。

「それで、和音さんを切りつけたのですか？」

「フフッ……考エレバ分カル事ダロ？ サア、早く寄越セッ」

ナイフの切っ先を俺に向け、刃を水平にして苛立ちを隠さずに怪しく笑みを浮かべるトゥルー。

覆面で唯一表情が分かるのが目だけというのは、表情が読み難くて困るものだ。しかし、刃を水平にするのはある意味、本気なのだろう。

あれなら肋骨の間をすり抜けて心臓を一突き出来るから。

素直にメモリーカードを渡してしまえば、それで終わりになる。

確かに平穏な日常が帰ってくるだろうけど、謎を残したままにしておくのは俺の気が済まないのだ。

「あなたはこれが何かを知っているのですか？」

「……知ッテイル」

「いや、知らないはずですよ。中に何が入っているか分からないから、俺達に開かせたのではないのですか？」

「君二八関係ナイ事ダ」

「では、これをくれた方に開き方を教えてもらいたいのではないですか」

急に口を閉ざしたトゥルーは少しだけ顔を逸らし

「……ソレハ、隊長ノ意思ダ」

震えるナイフを持ち直して、手を下ろしていた。

「そうですか。このメモリーカードは、福田部長
福田高志先輩
にもらったものではないのですか？」

「アノ人ハ関係ナイ」

そう言い切ったトゥルーだが、これで確信が持てた。

福田部長は特訓部隊長を知っていた。

先ほどの音声ファイルで福田部長が言っていた『あいつ』とは特訓部隊長の事だろう。それは目の前にいるトゥルーが『隊長ノ意思ダ』と言った事から、このメモリカードが特訓部隊長からトゥルーに渡ったものだと言論が成り立つ。だが、元の持ち主だと思われる福田部長から特訓部隊長にどういう経緯で渡ったのかは定かではないが、福田部長が一〇二〇事件に関わっていたのは事実である。

福田部長と特訓部隊長、そしてトゥルー。

この三人は過去に何らかの関係がある人達なのだろう。俺などが踏み入れてはいけないような深い繋がりがあるように思える。

「そうですか。でも、これは俺達に任せてはもらえないですか」

「……ドウイウ意味ダ？」

しかし、俺もここで引くわけにはいかない。

不信任を露にして赤い瞳で睨みつけるトゥルーに負けじと俺も真っ直ぐに見つめ返し

「俺達の手で決着をつけます」

キッパリと言い切った。

「……決着、ダト？」

「ええ。あなたが望む結末が訪れるかは分かりませんが、全てを白日の下に曝します」

訝しげな声を出して俺を睨み付けていたトゥルーだったが、顔を逸らしてノイズが窓ガラスを揺らすほどの笑い声を上げ始めた。

「ハハハッ、ヤッパリ君ハ楽シイ事ヲ言ウナ。シカシ、ソコカラハ私ノ役目ダ……君ニハ関係ナイ」

「私達は関係あるんだよ」

突然聞こえてきた声にトゥルーは振り返り、俺はその声が聞こえた方に目を向けた。

「オヤ、アナタデシタカ」

そこに立っていたのは和音さんと部長だった。

「また会ったな、覆面野郎。この腕の傷、きっちり落とし前つけさ

せてもらうちからなっ」

「駄目だって、かずちゃんっ あいつ、ナイフ持ってるんだよ！」
切りつけられた腕をかざし、鋭い目付きでトゥルーを睨みつける
和音さんが前に出ようとすると腕一本で制し、守るように身構える
部長の目は恐ろしいほどに鋭くトゥルーを見据えていた。

だが、トゥルーは別段慌てる様子もなく、俺の方を振り返り
「ソレヲ渡セ。真実ハ私ガ暴キ、全テヲ白日ノ下ニ曝スノダッ」

ナイフの切っ先を俺に向けて一喝していた。

「智樹っ」

「大丈夫ですよ。刺すのならとくに刺されてますから」

俺と和音さんのやり取りをまったく気にした様子もないトゥルー
は左手を差し出し、寄越せと無言の圧力を掛けてくる。

「渡せば、あなたは何をするつもりですか？」

「……シレタ事ヲ。真実ヲ最後マデ追求シ、断罪スル」

「それは去年の悲劇を繰り返すと言う事ですか？ それなら、これ
を渡す事は出来ません」

堂々巡りを繰り返すのは分かっているが、トゥルーは真実を暴露
するために去年と同じ事を繰り返そうとしている。

それを分かっている素直に渡すほど俺は人でなしではない。

「あなたにもしもの事があれば、悲しむ人がいるはずです」

「……覚悟ノ上ダ。サア、渡セ……早くッ」

ナイフを振り回し、取り乱していくトゥルーの赤い瞳が揺れているように見える。

……動揺している？

予想外の行動を見せたトゥルーに俺も驚いているが、やはりこの
トゥルーを動かしているのは真実を知りたい気持ちだけではない、
もっと別のものがあるように思える。

荒く乱れたノイズ交じりの息を吐き、静寂に包まれた廊下でナイ
フを振り廻していたトゥルーだったが、不意にその腕を力なく垂ら
してナイフを落としていた。

「ククッ……負ケタヨ」

耳を突き抜ける金属音が廊下を走り抜け、何もかもが静かに時を止めてしまったように見えた。

「伏峰君……君八私ノ予想以上二働キヲ見セタ。シカシ、ソレ八私二八扱エナイモノダツタヨウダ」

顔を覆って天井を仰ぐトゥルーの姿は必死にもがき苦しんだ哀れな道化師のようで、居た堪れない気持ちが入み上げてきていた。

「君八真実ヲ手二入レテクレタ。ダガッ」

一際大きな声を上げ、懷に手を入れたトゥルーは

「私モ己ガ信念ヲ曲ゲルツモリハナイッ」

高笑いを堪えるように懷から手を抜き出して振り上げ、一気に振り下ろしていた。

「うわ　眩しっ」

「きゃっ」

刹那、辺りは真っ白な閃光と破裂音に包まれ、視覚と聴覚が奪われていた。

部長と和音さんの声が聞こえているが耳鳴りが残り、真っ白な世界ではどこにいるのか分からない。その中で響くトゥルーのノイズが混じった笑い声が一瞬消えたと思いきや、いきなり俺の持っているパソコンを引っ張られていた。

突然の事に力が入らなかつた俺は、すり抜けるように手から離れていくパソコンを掴もうと手を伸ばしたところで、熱い痛みが指先から身体中へと走り抜けていった。

暫くして閃光が収まり、徐々に視界と聴覚が戻ってきた。

俺の目に身構えたままの部長とその腕を掴んで同じく身構えている和音さんが映り、二人にも俺が見えたのだろう。

こちらへ駆け寄ってくるがその足が途中で止まる。

「ともちゃん……そ、それ」

部長は俺の顔ではなく、それより下　腕の先を目を丸くして見つめていた。

「ちよつと、油断しましたね……っ」

「智樹っ」

和音さんの声が耳に、廊下に、響いていく。

俺の腕　手の甲から流れる赤い雫が床に落ちる音が、ぽたり、ぽたりと、やけに耳に着いていた。

第四一話：真実への渴望

一夜明けて放課後。

部室のテーブルを電腦革命クラブ一同と部外者二名で囲み、皆の視線は俺に集中していた。

……怖いですね。

特に和音さんとコハルの目は野獣と言っても過言ではないほどに鋭くて何も言えず、部長と律子ちゃんは困り果てた顔で俺にエールを送っていた。

副生徒会長は部長の方を向いて何を考えているのは分からないが、ママッキーさんは相変わらずノートパソコンと睨めっこをしていた。ママッキーさんは今朝あったときは普段と変わらない顔で挨拶してきたので”もう大丈夫なんだろう”と思ったが、さすがにあれだけの事があったあとだけに、その心中は察するに余りある。でも、ママッキーさんはそれに負ける事なく、こうして前に進んでいるわけだ。

何かあれば俺達が支えてあげればいい。俺達も誰かに支えてもらっているわけだから。

で、今はそんな支えを裏切った背徳行為について尋問を受けている俺なのです……怖いです、きついです。

「で、智樹はあいつの事を知っていたのだな？」

「ええ、まあ……そうですね」

和音さんの言う『あいつ』とはトゥルーの事である。

「なんで黙っていったんだよ！」

「すいません。色々とありまして、話をするのを忘れていました」
などと言って納得してくれるほど和音さんは甘くない。

怒り心頭のように冷静な思考は残っているらしく

「ちょっと前、明らかに様子がおかしいときがあつたよな？」

鬼すら射殺せそうな目で俺を睨みつけてきた。

その距離、わずか五センチほど。

しかし、あまりにも近過ぎて寄り目になっている和音さんの顔がおかしくて思わず笑いそうになってしまったが、俺も多分寄り目になっているだろうからおあいこである。

「ったく……一人で勝手な事するなよ」

「はい、すいません」

ここは素直に謝っておくのが得策だろう。

「まあ、その辺でいいじゃないの。ともちゃんだって反省しているわけだし、一応は怪我人なんだからさ」

「そうそう。伏峰のお兄様は怪我人なんだぞ」

そこに場の空気を読めない二人の応援団が現れたが、和音さんの顔色が徐々に変わっていく。

「ほう……言いたい事はそれだけか？」

悪魔降臨。

以下、音声のみでお楽しみください。

「やつ、かずちゃん、止め　ぎゃああつ」

「お、おいっ、俺は何も　ぐああつ」

……。

……。

哀れ、二人は仲良く天に召される寸前まで追い込まれましたと、さ。

お終い、お終い。

ではなく、倒れた部長に駆け寄る喜劇のヒロイン　いや、悲劇のヒロイン気取りの副生徒会長が、和音さんを睨み上げて歩み寄っていた。

「ちよつと、いくらなんでもやり過ぎでしょっ」

「うるさいっ」

「きーっ、この乳デカ女は」

「やるか、馬鹿。こっちはイライラしてんだよっ」

で、副生徒会長と和音さんが口喧嘩を始めてしまった。

和音さんの苛立ちは分かるので止めるべきなのだろうけど、床に座り込んで顔をしかめている部長と中川先輩が”気にするな”と目配せをしてきたので、とりあえず俺は何も言わない事にした。

皆、和音さんの気持ちを分かっている。

誰かが傷付けば、こう言う結果になれば、悲しむ事を分かっているのに……俺は学習能力がないらしい。

「トモ兄ちゃん、本当に大丈夫なの？」

そんな二人の様子を呆れつつ、申し訳なく眺めていた俺の制服を引つ張られる感触に振り向くと、コハルが俺の手をじっと見つめて眉を寄せていた。

左手に巻かれた包帯が怪我の酷さを物語るが、大した怪我ではないのだ。

確かに廊下に点々と流れ落ちる赤い雫の量が多くてさすがに慌てたが、保健室で傷の手当てをして思ったより傷が深くなかったのは安心した。

俺の傷を手当てしている間、和音さんと部長は無言で、コハルと律子ちゃんはオロオロ、風紀委員を引き連れてやって来た中川先輩の事情聴取を受け、副生徒会長までやって来て保健室は大騒ぎ。

最終的には保険医に皆してお説教され、散々な放課後を味わってしまった。

「本当に心配したんだからね。まったく……人を子ども扱いしておいて、自分だつて子供みたいだよ」

「そうだな。申し訳ない」

確かにコハルを子ども扱いしていた俺が、一人で黙っていたわけだから何も言えない。

「せ、先輩……」

「んっ？」

コハルに説教されている俺の前に静かに置かれたカップ。その手は震え、見上げていくと、今にも泣き出しそうな律子ちゃんが生立っていた。

「大丈夫だから、そんな顔はしないで」

「うっ……せ、先輩」

しかし、言って逆効果。

微妙な均衡を保っていた律子ちゃんの心を俺の一言はいとも簡単に壊してしまつたらしく、溢れ出した雫が幾筋も頬を伝い落ちていく。

「こらっ、智樹！ 何、律子を泣かしてんだよっ」

「……すいません」

そこに慌てた様子で副生徒会長を振り払って律子ちゃんを抱きしめた和音さんが、俺を見下ろして悪魔の瞳を輝かせてお説教を始めた。

さすがにこれは反論も出来ず、それから暫くの間律子ちゃんを落ち着かせながら、俺は和音さんの説教を受けて続けていた。

皆でテーブルを囲み、律子ちゃんを慰めながら俺の左に陣取る和音さんに説教される事、三〇分。

「分かったか、智樹」

「はい、分かりました」

分かつてなくても分かりましたと言つてしまいたいなる和音さんの説教がやっと終わり、律子ちゃんも泣き止んでいた。

「二度と律子ちゃんを泣かすんじゃないぞ」

ぐすつと鼻を鳴らす律子ちゃんの頭を優しく撫でる和音さんは「ほら、もう泣かないの」とお姉さんみたいでいいなと思いつながら見ていたら、「あんっ？」と、ガラの悪いお兄ちゃんみたいな声を掛けられ、副生徒会長に笑われてしまった。

他にも部長と中川先輩は笑いを堪えているのか、心配しているの

か、分からない微妙な顔を俺に向けて”が、ん、ば、れ”と口パクで応援してくれていたが逆にうつとうしいだけだった。

「で、ともちゃん」

「なんですか？」

「いや、どこで知り合ったのかなって思っただけ。あつ、知り合っただけ。言い方はおかしいかな」

そんな俺達のやり取りを見ていた部長が不思議そうに声に掛けてきたので、屋上で出会ったときの事、話した内容を一から全て聞かせる事にした。

昨日は話をするどころの騒ぎではなく、今日は今日で和音さんの説教が今まで延々と続いていたわけで正直なところ疲れて喋るのも面倒になっている。

が、そんな事を言えば更なる説教が待っていそう、頑張っただけです。

「……そんな事があつたんだ」

「ええ、突然の事でしたから驚きました」

「でも、まさか僕のあの写真がこんな事に関わっていたなんて驚きだよ」

「それは俺も驚きでした。あの頃から俺達は目を付けられていたわけですからね」

頬に手を当てて考え始めた部長の横で、副生徒会長は呆けた顔をしていた。

「トウル、か。随分とふざけた名前をつけたもんだな」

「確かにそうですね。でも、あの目は本気です……どんな手段を使っただけ、真実を手に入れようとする目です」

中川先輩には言葉だけで伝えているだけなので頷くだけだが、和音さんは俺の言っている意味を身を持って体験しているわけで、切りつけられた腕を押さえて俯いていた。

「しかし、二代目だとは……な」

中川先輩の呟きに「そうだね」と部長が相槌を打ち

「そうですね。顔は分かりませんから本人の言う事を信じればですけど」

俺も続いていた。

「だけど、葵ちゃんや福田先輩を知っているなんて……誰なんだろう」

「そうだな。危険な人物だけに早めに捕まえたいが、正体や居場所が分からないからな」

部長と中川先輩は顔を見合わせてため息を吐き、思案顔。

俺の感じた事を話してもいいが、やはり不確定要素が多過ぎて憶測になってしまう。しかし、憶測でもその考えは否定するにはあまりにも状況証拠と言えるものが多く、完全に否定する根拠が足りなかった。

まったく違う別人が出て来れば否定も出来るが、今の状況ではトウルと葵さんがかなり親しい関係であると言つのを否定出来ない。葵さんの髪の毛の事、執拗なまでの真実への執着。

それは赤の他人ではほぼ考えられないほどの執着心であり、何かしらの関係者でないとありえないほどの私怨を、俺は左手を眺めながら感じていた。

……この傷は真実への渴望。

そう思うのは俺だけだろうか。必死なまでに真実を求め、全てを明らかにさせようとしているトウル。

やっている事は決して誉められる事ではないが、ここまで関わってしまった俺にはその気持ちは痛いほど伝わってくる。

出来れば真実を教えてあげたいと思う気持ちと、これ以上被害を出してはいけないと思う気持ちが入り混じり、胸が締め付けられるように痛かった。

「あーっ、分からない事ばかりで頭が痛いっ」

で、壊れてしまった和音さんは頭をかきむしって今にも暴れそうになり、泣き止んだばかりの律子ちゃんが右往左往をして必死に止めていた。

「話は大体分かったが、これからどうするんだ？ メモリカードも奪われてしまったわけだし、向こうが何をするのか分からないぞ」「確かに近い内に何かをするとは思いますが、すぐには行動に移さないと思います」

「何故そう言えるのだ？」

「あのメモリーカードには入っていたのは、葵さんが階段から落ちた日に何があつたのかを教えてくれる状況証拠のようなものです。

それに当の本人はもういないので、言い逃れはいくらでも出来ます」俺の言わんとする事が分からない様子の中川先輩に説明するのはもう一度映像と写真を見せるのが一番なのだが、もうあのメモリーカードがないわけでそれは叶わない。

「あのメモリーカードがあれば……」

「それなら、ここにあるさね」

突然の声に誰もが振り向き、声の主を見つめていた。

そこには今まで一言も発する事もなく、ノートパソコンを弄っていたママツキーさんが誇らしげに手に何かを持っていた。

「ママツキーさん……それって」

その手に持っていたのは間違いなく、あのメモリーカードだった。

「あのメモリーカードは同じメーカーのメモリーカードに中身をコピーしたもののさね」

「でも、何故そんなものを……？」

得意げに手に持っているメモリーカードを誇示して胸を逸らすママツキーさんは

「誰かに見張られているのはずっと感じていたから、用心のためにコピーを作って特別な仕掛けをしてやったさね」

更にとんでもない事を言い出した。

「仕掛け……？」

「名付けて『ワンロックメモリークラッシャー作戦』さね。私のある友人との共同作業……くけけっ」

「意味が分かりません」

ふふんつと鼻を鳴らすママツキーさんはメモリーカードをパソコンにセットし、俺を一瞥して呆れたような顔をして首を横に振っていた。

ちよつとその顔にムカつきつつ待っていると、わざとらしく咳払いをしてママツキーさんは話し始めた。

「要するに、一緒に渡したあのノートパソコン以外で起動させると中身が消失するように設定しているのさね。それに、一度でもファイルをクリックしたら二回目は開かないように自動的にロックが掛かるように設定してやったさ……ふふっ」

「……つまり、あのメモリーカードは何も見れないって事ですか？」

「そうさね。今頃悔しがっているかもねえ」

肩を揺らしてあくどい笑い声を上げるママツキーさんを誰も相手にはせず、互いに顔を見合わせていた。

「で、メモリーカードの確認はするさね？ 準備は出来てるよ」

「ええ、お願いします」

口で説明するよりも手っ取り早い方法は見てもらう事なので俺は頷き、ママツキーさんは鼻歌を歌いながらパソコンの画面を向いていた。

誰の口からも言葉はない。

これを初めて聞いたときの俺と同じリアクションで、和音さんと部長は複雑な顔をし、中川先輩はため息を吐いて頭を振っていた。

「参ったな……これ」

部長が自嘲気味な笑いを浮かべて顔を押さえ、副生徒会長は心配そうに部長を見つめていた。

「福田先輩が葵を知っていた……？ そんな事、一度も口にした事

なんて」

和音さんは驚きを隠せずに拳を握り、瞳は憤りに揺れていた。

「そうですね。でも、今はその事を話し合っている暇はありません」
「確かにこれは状況証拠であって決定的な証拠とは言えない。しかし、これはかなり危険な内容である事は確かだ」

中川先輩にはどうやら俺の考えている事が分かったようだが、そうなるところで悠長に話をしている時間が無い。

俺達が心配しているのはトゥールの暴走である。

ママツキーさんの話が本当であれば、あのメモリーカードのフォルダは全て俺が一度開けている。なので、トゥールが開こうと思っても開けないのだ。

すでに一夜が明けているのだから、中身の確認は済んでいるはず。何をやっても見れないものを前にして普通の人間ならどうするだろうか？

結果はほぼ誰もが怒りに駆られるだろう。しかし、そうすると非常にまずい相手なのだ。

「……そうか。それは確かにやばい」

「うん。このままじゃ、他の生徒にも被害が及ぶ可能性があるよ」

部長と和音さんにも俺達の考えている事が伝わったようで、副生徒会長は

「そうですね。至急、生徒会と風紀委員会で合同会議を開き、今後の対策を練らないとまずいですわ」

立ち上がって部室を出て行った。

「そうだな。じゃあ、俺達はこれで失礼する。何かあれば携帯に連絡をくれ」

「分かったよ。たくちゃん、無理はしないように」

中川先輩は部長に「心配するな」と口角を上げて微笑み、副生徒会長のあとを追って部室を出て行った。

残された俺達はこれからの事を話し合うべきなのだが、何から手

をつけていいのかわからなかった。

「僕達も何かしないと危ないと思うんだけど……どうしたらいいかな？」

「どうしたらって、そんな事分かるわけないだろ」

泣き言を言う部長を一瞥し、苛立ちを隠せない和音さんは吐き捨てる。

「ど、どうしたらいいのですか？」

「落ち着きなさいって、もうっ」

律子ちゃんを落ち着かせようとしているコハルも動揺が隠せないように表情が硬く、ここにいる皆の頭が混乱しているのは明白だった。

「ぶっちゃけ、公表しちゃえばいいさね」

そんな俺達に呑気な声で言い放つ人がいた。

誰もが意味が分からずにその呑気な人 ママツキーさんを見つめているが、ママツキーさんはパソコンの画面から目を離さず、俺達を見ようとしめない。

「公表って、どうするんだよ？」

「そつだよ」

和音さんと部長は困惑してママツキーさんに詰め寄るが、当の本人は至って普通にパソコンのキーボードを叩き、クルリとこちらに画面を向けていた。

「ここって、ナコナコの家が実権握っていたよね？」

パソコンの画面を指さし、不適な笑みを浮かべて俺達を見渡すママツキーさん。

……そうか。

俺はその画面を見ながらママツキーさんが言いたい事が分かった。「テレビ……か？」

和音さんは目を丸くして驚きながらも、「そうか」と小さく頷い

て考え始め、部長も最初は意味が分からないと言った顔をして驚いていたが、こちらも分かった様子で「ああっ」と手を叩いていた。パソコンの画面に表示されているもの それは民放テレビ局のホームページで、人気番組の次回予告や名物アナウンサーが司会をしているバラエティ番組のデモ動画が流れてとても賑やかである。で、何故テレビなのかと言うと、その民放テレビ局の株を過半数を取得し、事実上の実権を握っているのがあの副生徒会長のお爺様なのだ。

「つまり、テレビで全てを暴露するって事か？」

「そういう事でしょね」

和音さんにコクコクと何度も頷くママツキーさんは俺にも頷き、パソコンを自分の方に手繰り寄せていた。

「しかし、そんな事が可能……だが、あれをテレビで流すのは」
目を伏せる和音さんが何を考えているのかは俺にも分かる。

テレビで公開するというのはあのビデオの映像も放送するという事だ。学園名なども出てくれば誰の事が分かる人はたくさんいるだろう。

「そこは現代の科学技術は進歩しているさね。それにナコナコなら事情は分かっているから問題ないでしょ」

「ナコナコって……華子に頼むのかよ」

これ見よがしに眉をしかめる和音さんは本気で嫌そうで、軽く舌打ちまでする始末。

「ですが、これが一番平和的な解決法ですよ」

和音さんの気持ちは分かる。

しかし、ここで事実を明らかにしないと根本からの解決にはならない。

「それって、どういう意味？」

不思議そうに俺の顔を見つめるコハルは首を傾げ、隣にいる律子ちゃんも頷いて同意していた。

トウルーがもしあのメモリカードを見ていたのなら、真実を暴露

すると言つて必ず学園で騒動を起こそうとするのは明白だろう。

だが、メモリカードには仕掛けをされて見れなかった。

そうなればまた他の手立てを考えて俺達の元へ来るだろう。そのときはもう手段など選ばずに強行策に出る可能性が高いはずだ。

「確かに可能性は高いね。そうなる前にこちらでも手を打たないといけないわけ……か」

「ええ、だからこそママツキーさんの提案は分かりやすくて一番効果的だと思いますよ」

部長は静かに頷いて携帯を取り出したところで、突然俺の携帯が鳴り始めた。

静かな部室に突然異質な音が流れれば誰だって驚くだろう。皆が一斉に俺を向き、俺はズボンのポケットから携帯を取り出してディスプレイを確認してみると、そこには中川先輩の名前が表示されていた。

「はい、もしもし」

『伏峰か？ 俺だ、中川だ』

何やら慌てたような中川先輩の声が受話口から聞こえ

『今すぐ、あのメモリカードと書類を持ってそこから逃げる。風紀一掃が強制執行された』

それだけを告げて電話は慌しく切れていた。

「どうしたんだ、智樹」

和音さんが不思議そうに首を斜めに傾げ、コハルや律子ちゃんもキョトンとした顔をしていた。部長も電話を持ったまま固まっており、「田乃中さんに繋がらないんだけど」とママツキーさんにばかり、ママツキーさんは知らん顔でノートパソコンの方を向いていた。だが、そんな悠長な事を言っている場合ではなかった。

「皆、急いでここから避難してください。白銀狼隊が来ます」

「え？ ちょ どういう意味だよ」

驚いて椅子からずり落ちそうになった和音さんの声をかき消すように、廊下の向こうから次々と悲鳴と怒声、それに罵声が混じり、

廊下はおろか校舎内が騒々しくなっていた。

第四二話：最後の切り札

朝から学園の中は騒然としていた。

昨日から始まった白銀狼隊による強制抜き打ち調査『風紀一掃』
によって、いくつかの部活動は不祥事が発覚して活動停止に追い込まれていた。

強制抜き打ち調査『風紀一掃』

学園内で風紀が著しく乱れたときに発動し、一気に駆逐しようとする風紀委員の実力行使である。

この『風紀一掃』は総勢百余名いる風紀委員達が全員参加し、調査には白銀狼隊一人に男子と女子の風紀委員が数名ずつ補佐として付いて調査していき、その調査実行中は校舎からの出入りには許可が必要となり、ゴミを捨てるのにも風紀委員のチェックを受けてからでないといけないと言う徹底ぶり。

そのグループを指揮するのは白銀狼隊の隊員で、総指揮を取るのは白銀狼隊を選任した者と言われている。

本来は風紀委員長が総指揮を取るのだが、今回の白銀狼隊は副委員長である永山先輩が選任者であり、その権限は委員長の中川先輩にはないという異常事態が起こった。

なので、中川先輩は完全に蚊帳の外。

一度発令すると、学園の風紀を乱す恐れがあるもの全てを取り締まり対象とし、先生達も例外ではない。そのため、先生達が更にピリピリとした空気になると思ったが、今日も至って普通で以前の職員室出入り禁止のときには見せなかった余裕のようなものを感じていた。

で、今回は何を探しているのかと言えば、救済措置のときに現れた職員室荒しを捕まえるべく、動き出したのだと中川先輩が教えて

くれたのが昨日の電話だった。

「……異常なし、次」

鋭い目で俺達を睨むように見つめる永山先輩はうしろに立つ男子、女子の両風紀委員に指示を出し、部室内にあるもの全てを調べていた。

現在、俺達は部室内を抜き打ち調査されている最中だった。

壁際に立たされ、まるで囚人のような扱いに、右から部長、和音さん、俺、律子ちゃん、コハルの順に並ぶ顔を見渡してみると、誰の顔にも不満の色はありありと表れていた。ちなみにママツキーさんは佐々木研究所で色々と指示を出しているのでこちらは不在である。

しかし、何百とある部活動を調査するのは一日やそこらで終わるはずがない。ましてや、二日目ともなればやましい事がある部活は隠してしまうのが普通だろうけど、そこは白銀狼隊も馬鹿ではない。色々な手を使って風紀を乱している部活動を摘発していた。

だが、そこは風紀委員と言われる集団に属するものであり、自らが生徒達に風紀を示す存在であるので礼節を重んじる紳士的な態度で、例年は特別大きな騒ぎなど起きないのだが、今回は特別酷い有り様で校舎内はパニック状態。

あちらこちらの部室から悲喜交々（ひきこもこも）な人間模様が垣間見える会話が飛び交っている状況となっていた。

「昨日、ここに来たときはもぬけの殻だったが……何も隠してはいないだろうな？」

「別に何も隠しじゃないよ」

「ふっ……まあ、いい。お前達が嘘を吐いて暴けばいいだけのこと」
永山先輩は和音さんを一瞥し、嘲笑を浮かべて男子風紀委員に「念入りに調べろ」と次々と指示を出していた。

その様子に見る間に顔を真っ赤にした和音さんは”あっかんべー”と舌を出して中指を立てていたが、こちらに永山先輩が振り返っ

た瞬間、すぐに知らぬ顔をしていた。

「おいっ、こいつ等の所持品検査をしろ」

「ちょ　なんで私達がつ」

「拒否すれば、白銀狼活動規則三項の『職務遂行妨害』と見なし、部活動の全面禁止を命ずる」

有無を言わせない永山先輩に歯を食いしばって異議を唱える和音さんを制した部長が一步前に出る。

「僕達は何も隠し事はしてないよ。もし、何も出て来なかったらどうするつもり？」

「……そんな事は関係ない。これは仕事であり、我等に与えられた責務なのだ」

部長の相手をするのは面倒だと言わんばかりに切り捨て、一年生らしき男子の風紀委員は俺の前に立って申し訳なさそうに頭を下げていく。同じく、女子の風紀委員は和音さんの前に立っているのだが蛇に睨まれた蛙のように怯えて震えながらも任務遂行のために恐る恐る手を伸ばしては引つ込めていた。

「お前達、早くしろっ。まったく……これくらいの職務も満足に果たせぬとは情けないヤツ等だ」

苦々しく吐き捨てる永山先輩に怯えるように頭を下げる風紀委員の二人がかわいそうで仕方ないが、余計な口を挟むのは得策ではない。

が、それを我慢出来そうにない人がいるわけで

「お前、いい加減にしろよっ」

拳を握りしめて振り上げた和音さんが、永山先輩に向かって駆け出そうと一歩を踏み出してした。

俺もさすがにまずい状況になるのは目に見えていたので止めようとしたが、俺の前に立っている男子風紀委員に邪魔される形となり、出足が遅れた。

だが

「駄目だよ、かずちゃんっ」

俺よりも先に動いた人物がいた。

喚き散らす和音さんを抱き留める部長の声が響き渡り、怒りに囚われていた和音さんの顔にも少しだけ冷静さが戻ってきていた。

「おや、随分と物騒な人ですね」

「くっ　すかしてんじゃないわよ！」

だが、永山先輩は和音さんを睨むでもなく、怪しく笑みを浮かべて一瞥し

「逆らえば停学……いや、退学にしますよ」

容赦ない一言を浴びせていた。

手に余る権力を有する人間はその大き過ぎる力の前に飲み込まれ、正常な思考を失っていく。それは目の前にいる永山先輩からも感じられ、狂気に支配されてしまった異常者のような瞳をしていた。

「永山、そんな権限は風紀委員にはないぞっ」

そんな異常者然とした永山先輩を一喝する声に俺達は、声がした方を向いた。

「……委員長、どうかしましたか？」

「どうかしましたかじゃねえよ。お前達がやり過ぎなんで忠告に来たんだ」

部室の扉に手を掛けて眉を吊り上げてこちらを　いや、永山先輩を睨みつけるようにして中に入っていたのは中川先輩だった。

巨体を揺すり、永山先輩の前に立った中川先輩の鋭い眼光に風紀委員の二人は恐怖に駆られて部室を飛び出して行ってしまった。

「やり過ぎだ、と？　中川……我等がしている事は風紀を守り、正す事だ。それを乱すような輩には正義の鉄槌が必要なのはお前だつて分かっているだろ」

「それは風紀を守る者として、公平に持つべき信念だと思っている。しかし、風紀委員会と生徒会に白銀狼隊に関する苦情が、今日だけでも一〇件以上きているのも事実だ」

「私は己の信念で動いているのだ。私のやる事に口を挟んでくるなっ」

敵意を剥き出しにしたような永山先輩に呆れた様子の中川先輩は悲しそうに首を振っていく。

「まあ、そっちは俺が何とか収めたが　白銀狼隊と数名の生徒が今現在揉め事を起こして先生達が止めに入っているらしいぞ」

「ちっ……何をしているのだ、あいつ等は」

「それを止めるのも白銀狼隊の選任者としての役目だと思うのだが？」

苦虫を噛み潰したように眉をしかめ、言葉を吐き捨てる俺達を睨みつけて部室を早足で出て行った。

「すまん。最近のあいつはどうも様子がおかしくて、俺も対応に困っているのだ」

「気にしないでいいよ。それより、忙しいんじゃないの？」

申し訳なさそうに頭を下げる中川先輩に苦笑しながら手をヒラヒラと振っている部長は、和音さんを落ち着かせようとしていた。

「かずちゃん、落ち着いたかな？」

「もう大丈夫だよ。悪いな……迷惑かけて」

珍しく愁傷な和音さんに「気にしないでよ」と笑みをこぼす部長は

「じゃあ、お茶にしようか」

お気楽な声で手を叩いていた。

コハルと律子ちゃんが買ってきてくれた缶珈琲を一口飲み、力を抜くように息を吐いていく。

「入り口はまだ封鎖中だった？」

「うん。でも、理由を言ったら『ごめんね』って通してくれたよ。とても人のよさそうな先輩だった」

プルトップを開けて缶に口を付けていくコハルに、同意にするように頷く律子ちゃんも缶を開けていた。

まだ白銀狼隊がいるのは分かっていたが、様子が気になったので見に行こうとしたら、コハルと律子ちゃんの二人が行くと言い出したが反対していたが、結果的には押し切られて了承した。

……最近、甘いかな。

そんな事を思いながら二人から結果を聞いていたが、かなり不穏な空気が流れているようだった。

「入り口にいる風紀委員は話が分かるようですね」

「まあ、白銀狼隊は永山を支持している連中だけで構成されているかな。他の風紀委員は皆真面目でいいヤツばかりなんだよ」

缶珈琲を煽っていき、一気に喉を潤していく中川先輩は長く息を吐き、天井を見上げていた。

「そう言えば、白銀狼隊を動かしているのは先生達なんだよね？」

「ああ。指示を出しているのは教頭だが、実質的な指示を出しているのはその上……学園長っぽいんだよな」

顔をしかめて話す中川先輩の手から金属の潰れるような音が響き、テーブルに叩きつける。その缶は中川先輩に苛立ちを表すかのように見事な手形を付けてへこんでいた。

「形振り構わず、犯人探し……ですか」

「そうだな。だけど、こつちにしてみれば返って助かった気がするよ」

ふつつと息を吐き、和音さんは缶をゴミ箱に投げた。きれいな弧を描きながら飛んでいく缶はゴミ箱の淵に当たり、一度跳ね上がって床に落ちて転がっていくのを見て「ちっ、入らなかったか」と舌打ちをして立ち上がった。

「助かったって、何が？」

「何がって、私は昨日何を話していたんだよ」

「……ああ、そっか」

ゴミ箱へ歩いていく和音さんを目で追っていた部長は納得した様子で手を叩き、和音さんは「馬鹿だろ、お前」と呆れたように呟いて缶を拾い上げて捨てていた。

「確かに今の状況でトゥルーが何かしらの行動を起こす事は、人目につく危険性があるのでしないだろうね」

そこに同じく納得したように頷くコハルが俺に”そうでしょ？”と目で訴えてきていたが

「で、でも……大人しくしてるのかな？」

心配性な律子ちゃんはそれをことごとく否定していた。

「そんなの私に聞かれても分からないわよ」

「で、でも、何をするか分からない人なんだから、油断したら危険だよ」

「ああつ、もう！ 律子は心配し過ぎなのよ。トモ兄ちゃん、どう思う？」

律子ちゃんの『でもでも』攻撃に頭をかきながら俺に助けを求めてきたコハルは困った顔全開だった。

「まあ、律子ちゃんの言っている事は分かるよ。でも、二回も遭った事がある俺から言わせてもらえば、かなり用心深い性格だと思うからこの騒ぎが収まった頃が危ないだろうね」

「それは言えているかもな」

静かに頷いて同意する和音さんに部長も頷き、中川先輩もそれに続く。

どうやら年長組は俺と同じ考えらしく、和音さんは律子ちゃんの頭を撫でながら「大丈夫だから」と何度も諭すように声を掛けていた。

「やつぱり、ここにいたのね。探したわよ、ゴリラッ」

ちよつといい感じの心温まるドラマを見ているような気持ちを感じていたところに、盛大に部室の扉が開き、全てをぶち壊す声が響き渡っていく。

「誰がゴリラじゃ　って、田中か」

「田中じゃないわよ！ 田乃中よっ」

大股で中川先輩へと近づいていく副生徒会長は無言で、中川

先輩の襟首を掴み上げ

「白銀狼隊をどうにかしてちょうだい！ さつきから生徒会室に苦情が殺到して、生徒会長が逃げちゃったのよっ」

完全八つ当たりを繰り広げていた。

……また、逃げたんだ。

多分、誰の顔を見てもそれを考えているのはすぐに分かった。

「それは、まあ……すまん」

「すまんじゃないわよ。いいから委員長なら何とかなさいっ」

「それを出来ないのを知っていて言ってるだろ、田中」

「た、の、な、か、よっ。ったく、面倒な規則作って……いつその事、生徒会で委員会規則を改定しちゃおうかしらね」

呆れながら話す中川先輩にとんでもない事を言っ腕組みをする副生徒会長に、またしても誰もが同じ顔をして見合わせていた。

「何しに来たんだよ、華子」

「だから生徒会長を　　って、ここで言っても仕方ないわね」

和音さんに突っ掛かっていこうとした副生徒会長だったが、肩を落として椅子に腰掛けていた。

……居座る気満々だね、この人。

テーブルに肘を付く副生徒会長の顔には疲れの色が見え隠れしており、この騒ぎの大きさを物語っている。

「それで、例のブツは大丈夫なんでしょうね」

「例のブツって、お前が言つと怪しさ爆発だな」

「うっさいわね、ゴリラ」

こめかみを引くつかせて唾を飛ばす副生徒会長。そして、その唾を顔面に受ける中川先輩。副生徒会長はかなり機嫌が悪いようで、額に漫画みたいな青筋が本当に浮かんでいた。

「あるから心配なくていいわよ。それより、華子に頼みたい事があるんだけど」

「……何よ、頼みって」

訝しげな表情で和音さんを見つめる副生徒会長だったが、次第に

気持ちが悪いものを見るような顔つきに変わっていた。それに敏感な反応を見せた和音さんの表情が変わっていくのが目に見えて分かる。なんで普通に会話しているだけで喧嘩になるのか教えて欲しいね。「副生徒会長に頼みと言うのは、例のブツをテレビで公開して欲しいのです」

「……はっ？」

和音さんと一触即発といった感じだった副生徒会長は、驚きを通り抜けて間抜けな顔を俺に向けていた。

「トウルーを大人しくさせるにはこれしかないんだよ。何より、このままじゃ葵ちゃんがかわいそう過ぎるでしょっ」

「……翔、様」

間抜けそうな顔を一变させ、一瞬悲しげに表情を曇らせた副生徒会長は部長から顔を逸らし

「分かりました。お爺様に相談してみますわ」

携帯を取り出して電話を掛けていた。

部長の顔も真剣そのものの、和音さんの顔も心中穏やかではないのは分かる。誰も口を開かない中、副生徒会長の話が進んでいた。

第四三話：青く澄んだ空の下を……（完）

風紀一掃から数日が過ぎ、今日は一学期の終業式。

「……なんか、大変だったね」

「そうですね」

隣で窓枠に手を付いて外を眺める部長は限りなく脱力した声で呟いていた。

部室の前、廊下で外を見ながら黄昏には時間的まだ早い、感慨深げな気持ちになってしまふのは仕方ない。

何が大変だったのか　それを一言で表すのは中々難しいが、本当に大変だった。

まずは副生徒会長に依頼したテレビ放送の件は予想外にあつさりと決まってしまう、翌日にはテレビで放映されていた。

その結果、その日の昼過ぎには他のテレビ局までやってくる始末で、先生達は右往左往。学園長は事実隠蔽の責任問題を追及されているが全てを否定している。しかし、それも時間の問題ですぐに辞任へ追い込まれるだろう。

そして、あのビデオに写っていたのはやはり学園長の息子だった。無論、あのビデオ映像があるので警察も黙って見ているわけにはいかずに出て来たようだが、どんな取り調べをしているのはまったくの謎である。

「で、結局は葵ちゃんに怪我を負わせたのが学園長の息子だったのは分かったけど、階段から落としたはずの先生口を開かないから分からないままだね」

「そうですね。全てを公開したのどこかスッキリとしない感じがします」

苦笑いを浮かべる部長は「そうだね」と呟き、振り返って窓ガラ

スに身体を預ける。

テレビの力と言うのは恐ろしいもので、あの体育教師はすぐに見つかった。しかし、当の体育教師は何も語らずに口を閉ざしたまま、屋上で葵さんと一緒に写っていた写真については「関係ない」と語気を荒げて取材に行ったテレビ局とかなりもめたようで、そちらも傷害などの問題になっていた。

そして、必然的に事件として扱われるようになったこの問題は、体育教師が学園長に息子の事故を隠蔽する変わりに賄賂を要求したのかと言う疑惑に注目が向くようになっていた。それが隠蔽された事件の根底にあるのは誰の目にも明白なものだろう。

だが、それを追求するには時間が足りないのか、証拠が不十分なのか、真実は分かるまでにはまだ掛かりそうである。

更に不思議な事にテレビ放映がされてから数日が経った現在、トウルーが俺達の前に姿を現す事はなかった。

姿を現さないのは真実を知る事が出来たからなのかはさておき、時を同じくして白銀狼隊が突然の解散となったのは驚いた。そして職員室への出入りも以前と同じように自由となった事には驚きを覚えた。まるで、もう隠すものはないから勝手に入って来い、と言わんばかりの開き直りにも見えるが、これで何もかもが終わったと思えば気が楽になると言うものだ。

まあ、何にしても面倒事が一気に片付いたのは嬉しい事であるが、何かかもが一変のなくなると人間と言うのは逆に不安を覚えるものだ。

「葵ちゃんは……僕達がした事どう思ってるのかな」

その声は誰に聞かせると言うわけでもなく、独り言のように呟く部長の顔は複雑な表情を浮かべていた。

「おーいつ、変態智樹」

そんな考察をしているとうしろから俺達を呼ぶ声に振り返ると、飄々とした顔の和音さんが小脇に律子ちゃんを抱えて立っていた。

「和音さん、『変態』と『智樹』の間は開けてください。それでは俺が変態みたいですよ」

「まあ、気にするな。それよりも、男二人で何やってんだよ？」

俺からの苦情を完全に無視して横に立っている律子ちゃんの頬を突付く和音さんは不思議そうに俺達を見比べていた。

「別に何もしてないよ。ただ話をしていただけだから」

と、頷く部長に俺も同意して頷く。

「そつか。んじゃ、今日は何するんだ？」

「……別に」

「あ、そつ。んじゃ 律子で遊ぼつと」

素っ気ない返事をし、手をヒラヒラと振って部室に入っていく和音さんの脇で、俺達に助けを求め来る律子ちゃんに”頑張れ”と気持ちを含めて手を振ると、泣きそうな顔をしていた。

「かずちゃんもやっぱり辛いんだろうけど……ねえ」

部室の中から律子ちゃんの悲鳴と和音さんの歡喜に満ちた声が聞こえて来る中、俺と部長は廊下で苦笑していた。

和音さんの複雑な心中は俺や部長も分かっているつもりで、律子ちゃんだって分かっているからこそ自分の身を捧げているのだろう。

天晴れ、ナイチンゲール精神。

「助けてーっ、先輩！」

まあ、そんなわけがあるはずもないか。

「助けに行きますか」

「だね。りっちゃんの貞操が、パンチでピンポンパンだよ」

意味が分からない事を言って部室へと走りこんで行った部長の気合の入った声が響いたかと思えば

「きゃあ、止めてーっ」

途端に乙女のような悲鳴に変わっていた。

……何しているんだか。

微妙に痛む頭を押さえ、俺も部室へと入ろうとしたところで不意に制服を引つ張られる感触に振り返ったが、そこには人の姿はなかった。しかし、まだ制服は誰かに引つ張られているような感触があり、俺は困惑の度合いを増していた。

新手的ミステリーかと思いたかったがあまりにもアホらしくなったので

「何をやっているのか聞いていいですか？」

足元にしゃがむ張本人に聞いてみた。

「ヘーロヘーロ」

が、その張本人は能天気な顔で俺を見上げ、ピースをしながら立ち上がった。

「今日は一学期最後の部活さね。とりあえずは顔を出してシヨウポンを弄って帰ろうかと」

「そうですか。部長なら中にいますよ」

「さっきから一部始終を見てたから知ってるさね」

呑気な声で手を振って部室の中に入っていくママツキーさんは、

「スケベシヨウポン、エロエロー、エロエロー」と、妙な歌を一人で輪唱のように口ずさんでいた。

ママツキーさんも松本先輩との一件で元気をなくしていたときもあったが、今は前よりも元気になっている感じがある。ちょっと無理をしている感もあるが、無茶をしているわけではないし、心の奥に出来た傷は本人の頑張りでしか癒せないものである。

「さすがに皆浮かれてるようだが、夏休みに不祥事だけは起こすなよ」

不意に聞こえた声に振り返ると、熊が大きな口を開けて笑っていた。

「中川先輩、風紀委員会はいいいのですか？」

「永山が一人で騒いでいたが無視して終わらせた。まったく、あいつもしつこいんだよね……はあ」

「大変そうですね」

「白銀狼隊があいつを変えてしまったみたいだな……面倒な事になったよ」

本当に嫌気がさしたという顔で頂垂れる中川先輩はため息を吐き、今にも座り込んでしまいそうだった。

永山先輩は白銀狼隊に固執している部分があり、突然の解散には納得いつていない様子で風紀委員会を二つに別けて騒動になっている。

しかし、言い方を返れば永山先輩はいい様に先生に使われた被害者なのかも知れないが、あまりに見苦しいと同情の余地がなくなってしまう。

「あら、あなた達何をしているの？」

「トモ兄ちゃん、何して　　げっ、熊がいる」

そこに不思議そうに眉をしかめる副生徒会長と、明らかに面倒なヤツに出会ったという顔をしたコハルがやってきた。

「ハニー、会いに来てくれたんだねっ」

「違う！」

「はべりゃっ」

熊さんは嬉しそうに頬を綻ばせてコハルに近づいていたが、見事にあしらわれて廻し蹴りを喰らっていた。

特に集まる用事もないのに、全員集合して……暇人ばかりだな。

部室の中、ぐったりとした律子ちゃんがママツキーさんによつて介抱されていたが、見る限りでは遊ばれている。

部長は副生徒会長から言い寄られ、中川先輩をうつとうしそうにあしらっているコハルは俺に助けを求めてくるが、とりあえず放置

する事にした。

「智樹、ジューズ買って来て」

「外は暑いから嫌ですよ」

「夏だから暑いのは当たり前だろ。ほら、若いんだから行って来い」

「若いって……一つしか変わらないじゃないですか」

いきなり俺を指さして傍若無人な事を言い出す和音さんに閉口しつつ、賑やかで騒々しい周囲に付いていけずにどうしようかと悩んでいると

「トモ兄ちゃん、私も買って来て」

傍若無人二号が現れた。

「いや、こう見えても俺は怪我人だ」

「怪我って、もう治ったんでしょ？」

と、左手に巻かれた包帯を指さすコハルだが、怪我が治った人間が包帯をしていると思うのか？

「伏峰、翔様の分と私の分もよろしくお願いしますわ」

「トモキン、私とリッコの分もよろしく」

そこに傍若無人三号と四号まで現れ、俺の話を聞いてくれる人はここには誰もいないと確信した。

部長と中川先輩の二人は哀れな子羊を見るような目を向けているが、それでも怪我が治りかけで微妙に痒くて堪らないのだ。これがギブスだったら……考えただけでも嫌だ。

「分かりました」

「ありがとね。んじゃ、私は」

「買いに行ってきますが、注文は一切受け付けません。俺の独断と偏見で買って来ますので、そのつもりでいてください」

和音さんが何かを言おうとしていたが有無を言わず立ち上がった。

誰もが俺の顔を見上げ、困った顔をして互いの顔を見合わせていたが後の祭りである。まあ、ほとんど怪我は治ったので問題はないけど、少しは人を敬おうという気持ちを持って欲しいものだ。

で、文句を言いつつ、着いたのは自販機の前。

「よし……これとこれがいいだろう」

自販機の前で目星を付けていたジュースを買い、ビニール袋に詰めていく。

この時期に『熱い』と描かれたボタンがある自販機は我が国ではここくらいだろう。しかし、『HOT』ではなく『熱い』という表記に何の意味があるのかは疑問ではあるが、この時期に買う人は完全に罰ゲームである。

「……おや、新製品が入ったみたいだね」

三段ある中で上の二段は『冷たい』になっているが、一番下段は全て『熱い』になっている自販機の中で一際異彩を放つジュースを発見をした。

イカ墨入り微炭酸飲料

『イカスゼッタースパークینگ』

ネーミングセンスは誰かさんにそっくりな気がするけど、とりあえず面白そうなので買って行こう。

インパクトはおしるこ粒あん餅入り（飲み難さナンバーワン）と世界の青汁とゴーヤのミックス原液ジュース（意味不明な原材料でリバーズ率ナンバーワン）に負けないが、この学園は何でも取り入れる好奇心旺盛なところだが……このジュースは売れるのか心配である。

さて、適当に買ったジュースが詰まったビニール袋を持ち、校舎へと入ったところで

「わっ とつと」

歩いてきた人とぶつかってしまった。

「あっ、すいません。大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫ですよ……って、伏峰君？」

ぶつかった人はいつものように小動物じみた印象を受ける動きで辺りを窺って落ち着きがない生徒会長だった。

「どうしたんですか？ 副生徒会長なら部室にいますよ」

「そ、そっか……」

「また逃げ出したんですか？」

「い、いや、そうじゃなくて……何て言うのかな、条件反射？」

額に浮かんだ汗をハンカチで拭い、落ち着きを取り戻した生徒会長は苦笑しているが、まるでパブロフの犬みたいだ。

「それでは何をしているのですか？」

「校舎の見回りだよ。今日で一学期は最後だし、異常がないか見て廻らないとね」

真面目な生徒会長らしいなと思ってしまいが、副生徒会長と風紀委員長は……すでに夏休みモードに突入してやる気はゼロだし、こう言うのは一人でやった方が早いのかも知れない。

「大変ですね」

「そうでもないよ。伏峰君達がやった事に比べたら……ね」

額を汗を拭っていたハンカチの裾から覗く生徒会長の瞳は、夏の暑い空気が肌に纏わり付いているのに背中に悪寒が走り抜けるほどの寒気を感じるものだった。

「どう言う意味ですか？」

「いや……最近はテレビが面白くてね。毎日朝のニュースを見るのが日課になりつつあるよ」

言葉の端々に感じる冷たく突き刺さるような語気の強さ。

普段の生徒会長からは感じるはずのない力強さに圧倒され、言葉を失っている

「だって、あんな事するの伏峰君達しかいないでしょ」

柔らかい笑みを浮かべて生徒会長は微笑んでいた。

その微笑にどんな意味があるのかは分からないが、生徒会長が言いたい事は分かっているつもりだ。

「何故、そう思うのですか？」

あのテレビに流れたビデオや写真、書類などの出所は一切公表されていない。それはプライバシーを守ると言う観点からであり、面倒事に巻き込まれないようにするためである。

だが、それを生徒会長が知るはずもないのだ。

あのメモリカードの映像も見せる暇がなかったと言うか、見せられる内容ではなかったのを見せていない。なのにテレビを見ただけで俺達だと判断する確固たる証拠など何もないはずだが。

「何となくですよ。伏峰君達ならやりそうな事ですから」

素っ気ない返事に言葉が出なかったが口調は笑っていた。

「僕も色々とは気にはなっていたから、知る事が出来て嬉しかったけど……」

が、生徒会長の目は真剣で口調とは裏腹の威圧感を与えてくる。何を知りたかったのかは分からないが、今の生徒会長からはどこか異質なものを感じている。

その異質さはつい最近も感じたものなのだが

「それじゃ、僕は失礼するよ。姉さんのお見舞いに行かなくちゃいけないからね」

目の前の人とは結びつくものが何もない。

「生徒会長、お姉さんがいるんですか？」

「うん。ずっと入院してたんだけど、昨日の夜に目を覚ましたんだ」

「そうなんですか。それでは急いだ方がいいですね」

「だね。まだ無理は出来ないけど、やっと話が出来るようになったから……嬉しくて」

生徒会長の瞳に浮かぶ雫が一筋流れ落ちていく。

手の甲で少し乱暴に拭いながら「それじゃ」と軽く手を上げてうしろを振り返った生徒会長は

「伏峰君……手、ごめんね。彼女にも謝っておいてよ」

俺の耳に届くがどうかという小さな呟きを残して駆け出していた。

そのうしろ姿を見つめながら意味も分からずに呆然としていた俺の耳に

「智樹、智樹っ」

名前を連呼する聞きなれた声が聞こえてきた。

声の方を向くと、そこには息を切らして階段を駆け下りて来ていた和音さんが

「ぴにやつ」

奇妙な鳴き声（？）を上げて転げ落ちてきた。

「……大丈夫ですか？」

「だ……大丈夫」

俺に向かつてヒラヒラと手を振る和音さんだが、逆さまで大股開きは勘弁して欲しい。そして、出来れば足を閉じて起き上がって欲しいものである。

「で、何をそんなに慌てていたのですか？」

「あつ、そ　そうだよ、そうなんだよっ」

慌てた様子で起き上がった和音さんは珍しく落ち着きをなくし、これまた奇矯な踊りを披露していた。

揺れる胸に翻るスカート。間違いなく誘惑のダンスなんだけど、和音さんの頭は混乱しているのようで自分でも何をしているのか分かってないようだ。

そんな和音さんをどうやって止めようかと思案していると、上の方から賑やかな声が聞こえてきた。何事かと先ほどと同じように声の方を向くと、部長を先頭に部室で待っているはずの一団の姿があった。

が

「あつ、いた。かずちゃ、あわっ」

慌てて階段を駆け下りてきた部長が落ち

「翔様大丈夫で　へにやつ」

その部長の背中に飛び膝蹴りを決める副生徒会長が落ちてきた。

「トモ兄ちゃん、一大ジューズ　じゃなかった、一大ニューズッ」
「ふぎやつ」

「いだっ　ちよつと誰が踏んで、ひぎやつ」

そんな二人を踏みつけて俺の前にやって来たコハルは息を切らせ、少し遅れて律子ちゃんが廊下に寝そべる二人を踏みながら「ごめんなさい」と謝りつつ、俺の前に立っていた。一緒に来たママッキーさんは何も語らずに俺に向かってピースをしているだけ。

しかし、コハルも律子ちゃんも興奮し過ぎているのか、息が続かないのか、喋る事が出来ずに俺の顔を見上げて口をパクパク。まるで餌を欲しがる小鳥のようだが、一体何があったのだろうか？

「おいおい、大丈夫かよ。ったく……賑やかな連中だね」

そこに一人遅れて現れた中川先輩は呆れた顔で俺の方へ近づき

「白浜葵が目を覚ましたらしい」

親指を立てて笑みを浮かべていた。

「あつ、ちよ　私が言おうと思ったのに、熊っ」

そこに変な踊りをしていた和音さんがやって来て中川先輩の胸倉を掴み上げていたが、顔は本気で起こっていない。

「……葵さんが目を覚ましたのですか？」

「そうなんだよ。昨日の夜に目を覚ましたらしくて、今は少しだけと話が出来るようになったんだって」

嬉しさを噛み締めて口元は終始笑みを浮かべ、目には薄っすらと涙が溢れそうになっていた。本当に嬉しくてたまらないという気持ち溢れている和音さんに中川先輩も無下にあしらえず困り果てていたが、顔は笑っていた。

誰もが嬉しいのが分かる。

いつの間にか起き上がった部長と副生徒会長が中川先輩の横で頷

き、コハルと律子ちゃんも言葉にならない様子で頷いていた。

「そう……ですか」

「なんだよ、嬉しくないのか？」

「いえ、あまりの事に驚いてしまっただけ」

不満そうに口を尖らす和音さんへ適当に返事をし、俺は先ほどの生徒会長との会話を思い出していた。

……そういう事か。

俺の考えは否定されるどころか肯定されてしまったか。しかし、まだ分からない事も残っているが、そこからは本人達に語ってもらうしか真実を知る事は出来ないだろう。

「で……それを伝えるために皆で来たのですか？」

「智樹、こう言うときはもう少し喜べよっ」

「すいません。こう言う性分なもので」

そう言うのと呆れたように誰からともなくため息が漏れ聞こえ、俺も苦笑していた。

「んじゃ、部室に戻ってお祝いしよう」

「たまにはいい事言うな、変態」

部長と和音さんの掛け合いに

「ちょ　翔様は変態ではありませんわよっ」

副生徒会長が噛み付き、賑やかなバトルがまた始まっていた。

相変わらずの展開で先が読めるのだが、副生徒会長と和音さんは我先にと階段を駆け上がっていき、姿が消えていた。

そのうしろを部長と中川先輩が付いていき、律子ちゃんとママツキーさんが遅れて階段を上っていた。

「トモ兄ちゃん、私達も行こうよ。あつ、それよりジュースは？」

「ん？　ああ、ほら」

俺は持っていたビニール袋をコハルに渡し、それを受け取ったコハルは中を少し見て「げっ」と小さな声を上げて俺に抗議の視線を

向けていたが相手にしないと諦めたように駆け出していつてしまった。

一気に騒がしくなって、また一気に静かになって、慌しく過ぎていく時間は戻る事はない。

真実を知る事が出来たのか、どうかなんて俺には分からない。求める真実は人それぞれ違うものだから。

「……これでよかったんだよな」

誰に問い掛けるわけでもなく、紡がれた言葉は宙に溶けて消えていく。

「トモ兄ちゃん、トモ兄ちゃん！」

少し現実を忘れて思考の世界へと旅立っていた俺の耳に、騒がしい声が聞こえてきた。

「桜井先輩が変態と馬鹿会長を巻き込んで大暴れして大変なんだよっ」

「先輩、急いでくださいっ」

先を行ったはずのコハルと律子ちゃんが戻ってきて階段の中ほどで俺を一生懸命に手招きをしていた。

「はいはい」

二人の言葉を暗示するかの如く、遠くから悲鳴と怒声が聞こえていた。

遠くから聞こえる蝉の鳴き声、窓から差し込む暑い熱気を含んだ風が身体を撫でていく。

「さて……行くとしますか」

窓から見上げた空は軽やかな気持ちを表すように青く澄み渡り
。

心地よい空気を吸い込んで背伸びをし、どうやってこの馬鹿騒ぎ
を鎮めるべきかを思案しながら一歩踏み出した。

第四三話：青く澄んだ空の下を……（完）（後書き）

終わった……ふうつ。

完結までに一年近くかかってしまいましたが、色々大変な一年でした。

結局最後までグダグダ（トリックハウスの答え合わせやその他諸々）で終わった感がありますが、この作品は真面目に続編を考えております。

ただ、いつになるかはまったくの未定ですけど（苦笑）でも、この一年でかなり思い入れが強い作品になったのは事実ですので、続編は頑張っていきたいです。

次ではもう少しだけ、変態部長をかつこよく書いてあげたい気がしますし……（一応は学園一の色男なので、ははっ）

では、最後まで読んでいただいた皆様に感謝の気持ちを送りつつ、また会う日までさようなら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0689e/>

放課後 倶楽部

2011年2月2日01時25分発行